

八尾市・東大阪市

池島・福万寺遺跡 14

(福万寺Ⅱ期地区09-1調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2012年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

八尾市・東大阪市

池島・福万寺遺跡 14

(福万寺Ⅱ期地区09-1調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

序 文

いまや全国的に知られるようになった池島・福万寺遺跡ですが、昭和47年に府立池島高等学校（現みどり清朋高等学校）敷地内で実施された調査が、そのさきがけとなるものでした。

恩智川治水緑地の建設に伴う調査は、昭和56年の大阪府教育委員会による試掘調査が始まります。財団法人大阪府文化財センター（現 公益財団法人大阪府文化財センター）による発掘調査が始まったのは平成元年からで、それからもすでに20年以上が経過しました。

この間、きわめて広範囲にわたって池島・福万寺遺跡の発掘調査が行われました。特筆されるのは広さだけではありません。河内平野は古来より堆積活動が活発な地域であったため、下方に掘り進めることで、順次、より古い時期の生活痕跡をたどることができます。その結果、当遺跡の調査成果を通じて、縄文時代の終わりごろから現代にいたるまで、少なくとも3000年近くにわたる人々の生活や活動の痕跡をたどることが可能となりました。

水稲耕作開始前の環境、日本農業の黎明期である弥生時代の水稲耕作の様相、古代律令制度の実相を示す条里型地割、中世以降の河内平野の農耕を特徴づける島畑を伴う農耕、近世以降の商品経済の発展とあまって、河内の特産品として日本中で知られた良質な木綿生産へいたる農業のあゆみを、土地利用の変遷を含めて実証的に検証できるようになりました。

加えて河内平野における農耕の歴史は、度重なる洪水災害との闘いの歴史でもあったことが、発掘調査から明確にとらえられます。人々は自然災害をどのように乗り越えてきたのか、それは今後も繰り返し問い直される課題といえるでしょう。

他方、縄文時代終わり頃の墓地や弥生時代初めごろの集落の発見、古墳時代集落の様相が明らかになることで、集落景観についても考えることができるようになりつつあります。

これまでの調査で蓄積された成果を再検証し、総合的に分析する作業はむしろこれからといえるかもしれませぬ。その過程で明らかになった成果につきましては、今後も積極的に情報発信していきたいと考えております。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました、大阪府都市整備部河川室、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元関係者の皆様には深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に一層のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

平成24年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市池島・同八尾市福万寺町に計画された恩智川治水緑地建設に伴う、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区（09－1）調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その11）」事業として委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。事業契約期間は平成21年6月1日～平成23年6月30日までで、引き続き遺物整理を「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ遺物整理（その2）」として委託を受け、平成23年7月1日～平成24年9月28日まで実施し、本書の刊行を行った。
3. 発掘調査、整理作業は以下の体制で実施した。

〔発掘調査〕

平成21年度

調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査グループ長 寺川史郎、主幹兼主査（池島総括） 小野久隆、副主査 若林幸子、技師 塚本浩司（7月～）、専門調査員 藤田憲司（8月～）

平成22年度

調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 江浦 洋、主幹（調整総括） 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、主幹（池島・福万寺総括） 金光正裕、副主査 若林幸子、技師 塚本浩司、専門調査員 藤田憲司

平成23年度

調査課長 江浦 洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、主査（池島・福万寺総括） 森屋美佐子、副主査 若林幸子、専門調査員 藤田憲司

〔整理作業〕

平成23年度

調査課長 江浦 洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、主査（池島・福万寺総括） 森屋美佐子、副主査 若林幸子

平成24年度

調査部長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査（池島総括） 森屋美佐子、副主査 若林幸子

4. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また遺物写真については、調査グループ主査 片山彰一、調査員 久禮孝志が担当した。また木製品の樹種同定・保存処理は、調査課主査 山口誠治が担当した。
5. 発掘調査、整理の実施にあたっては、大阪府寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会、池島町自治会、福万寺町自治会の皆様のご協力を得るとともに、下記の方々にご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表します。
小倉哲也氏（公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所）、藤井淳弘氏・吉田野乃氏（八尾市教育委員会生涯学習部文化財課）、十河良和氏（堺市文化観光部文化財課）

6. 調査にあたっては、委託分析として、以下の自然科学分析を実施した。

植物珪酸体・花粉・珪藻分析

古環境研究所

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

7. 動物遺体については山崎 健氏（奈良文化財研究所）に同定と原稿執筆の労をとっていただいた。その内容は第4章第2節に掲載している。
8. 本書の執筆・編集は、主に若林が行った。

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第VI座標系に準拠する。座標単位はすべてmである。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は6°50′西、真北は0°13′東に偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺物調査基本マニュアル【暫定版】』2003および『遺物調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・在団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、調査区・遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後遺構の種類を標記した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として平面図を500分の1、個別平面図を20分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。また遺物実測図の縮尺は3分の1を基本とし、打製石器は原寸で、古銭は3分の2を用い、平面形の大きいものに関しては、必要に応じて他の縮尺を用いた。
また須恵器に関しては断面を黒く塗りつぶして、土師器や磁器・陶器と区別している。また石器の剥離痕のうち、欠損によって生じたものも、黒く塗りつぶして区別している。
8. 遺物実測図において各遺物に付されている番号は、写真図版・遺物観察表とも一致する。
9. 本書で報告した出土遺物の点数は土器・石器を対象とし、接合するものや、出土状況からみて確実に同一の個体であると判断されるもの以外は、機械的に破片数を数えて割り出した。ただし数ミリ以下で、内面もしくは外面の器壁が欠損しているものは、数に含めていない。木製品は杭を除き、人為的に整形されていると判断したものに関してはすべて実測し、図面を掲載した。
10. 本書を作成するにあたり、大阪府教育委員会および大阪府文化財センターが刊行した、池島・福万寺遺跡の既往調査報告書を参照したが、そのほかに使用した主な参考文献については「第5章 まとめ」の最後に記した。
11. 図4は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「大阪東南部」（平成10年3月1日発行）、「信貴山」（平成10年11月1日発行）を使用し、大阪府地図情報システムの文化財地図埋蔵文化財を参照して作成した。

目次

序言

例言

凡例

第1章 調査にいたる経過と調査の方法

第1節 調査にいたる経過…………… 1

第2節 調査の方法…………… 2

第2章 地理的・歴史的環境…………… 5

第3章 調査成果

第1節 層序…………… 9

第2節 遺構・遺物…………… 14

第3節 移動式竈…………… 124

第4章 自然科学分析

第1節 福万寺Ⅱ期地区(09-1)調査区における植物珪酸体・花粉・珪藻分析…………… 126

第2節 池島・福万寺遺跡から出土した動物遺存体…………… 143

第3節 放射性炭素年代測定…………… 145

第5章 まとめ…………… 148

挿図目次

図1 調査区位置図…………… 2	…………… 21
図2 調査区地区割り基準…………… 3	図12 第2-3面〔第2-3b層上面〕検出、第2-3層下面遺構断面図…………… 22
図3 調査区地区割り…………… 3	図13 第1層～第2-2層出土遺物実測図〔1～10：第1層、11：攪乱、12・13：第2-1層、14～17：第2-2層〕…………… 23
図4 周辺の遺跡…………… 6	図14 第3-1面平面図…………… 25
図5 第1面平面図…………… 15	図15 第3-1b面平面図…………… 26
図6 第1面検出遺構断面図…………… 16	図16 第3-2面平面図…………… 27
図7 第2-1面平面図…………… 17	図17 第3-1面検出〔第2-2層下面〕遺構・第3-1b面検出〔第3-1層下面〕遺構・第3-2面検出遺構断面図…………… 28
図8 第2-2面平面図…………… 18	
図9 第2-2面検出〔第2-1層下面〕遺構断面図…………… 19	
図10 第2-3面〔第2-3b層上面〕平面図…………… 20	
図11 第2-3面〔第2-3b層上面〕平面図(部分)	

図18	第3-3面平面図	29	52
図19	第3-1b~第3-4層・側溝(第3-2層~第7層)出土遺物実測図〔18・19:第3-1b層、20~25:第3-2層、26:第3-2・3層、27:第3-3層、28・29:第3-3・4層、30~32:101島島、33~36:第3-2~第7層〕	31	
図20	第4-1面平面図	33	
図21	第4-2面平面図	34	
図22	第4-1~第4-2層出土遺物実測図〔37:第4層、38~40:第4-1層、41:第4-1面、42~49:第4-1・2層、51~56:第4-2層〕	35	
図23	第5面平面図	37	
図24	113島島・119島島・第5面・第5層出土遺物実測図〔57:第5層最上部、58:第5面、59・60:119島島、61:113島島、62~69:第5層〕	38	
図25	第6面平面図	40	
図26	第6面検出〔第5層下面〕遺構断面図	41	
図27	第6面・第6層出土遺物実測図〔70:第6面、71・72:第6層〕	41	
図28	第7-1面平面図	42	
図29	第7-1面検出〔第6層下面〕遺構断面図	43	
図30	第7-3面〔第7-3b層上面〕平面図	45	
図31	第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図	46	
図32	第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図	47	
図33	第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図	48	
図34	第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図	49	
図35	第7-3面(第7-3b層上面)検出、第7-3層下面遺構断面図	50	
図36	153溝・第7-1層~第7-3b層出土遺物実測図〔73~77:第7層、78~81:第7-1・2層、82~84:第7-2層、85・86:153溝、87・88:第7-3層、89~100:第7-3b層〕		
図37	第7-3b層・側溝(第7~第10層)出土遺物実測図〔101~105:第7-3b層、106~111:第7~10層〕	53	
図38	第8面平面図	54	
図39	第8b面平面図	56	
図40	第8b面検出〔第8層下面〕遺構断面図	57	
図41	第8面・第8層・第8b層・側溝(第8層~第10-1層)出土遺物実測図〔112~122:第8層、123:第8~10-1層〕	58	
図42	第9-1面306流路出土遺物実測図	59	
図43	第9-1面平面図	60	
図44	第9-1面検出杭平面・立面図	61	
第45	第9-2面平面図	62	
図46	第9-2面検出〔第9-1層下面〕遺構断面図	63	
図47	第9-3面平面図	64	
図48	第9-3面検出〔第9-2層下面〕遺構断面図	65	
図49	第9-4面平面図	66	
図50	第9-4面〔第9-3層下面〕遺構断面図	67	
図51	第9-4面検出329土坑平面図・杭立面図	67	
図52	第9-4面検出323流路内(第9-3b層)遺物出土状況	68	
図53	第9-4面329土坑・第10面336ピット・第9-1層~第9-4層出土遺物実測図〔141・142:第9-1層、143:第9-2層、143~150:第9-3層、151~153:329土坑、154~157:第9-4層、158・159:336ピット、160:第9-4層、161:第9層、162~165:第9-3~第11-2層〕	69	
図54	第9-3面検出323流路(第9-2b層)・第9-4面検出323流路(第9-3b層)出土遺物実測図〔166~179:第9-3面検出323流路、180~187:第9-4面検出323流路〕	70	
図55	第9-4面検出323流路(第9-3b層)出土遺物実測図	71	
図56	第9-4面検出323流路(第9-3b層)・第10面337ピット出土遺物実測図〔209:337ピット、		

	それ以外は323流路].....	72		92
図57	第9-1層遺物出土状況図.....	72	図79	364流路・365水路・366水路・367堰・368水路・369水路出土遺物実測図〔279：第11-2面検出367堰、280：第11-2面検出369水路上部、281：第11-2面検出366水路、282：第11-2面368水路、283・284：第11-3面364流路、285~287：第11-3面365水路、288：第11-3面366水路、289：第11-2面364流路もしくは366水路〕.....	94
図58	第10面検出〔第9-4層下面〕335土坑・337ピット、第9-4面検出336ピット遺構平面・断面図、第9-4層遺物出土状況図.....	73	図80	第10b層~第11-1層・第11-2層・第11-3層・側溝（第11-1~第12層・第10b層~第11-3層）出土遺物実測図〔290・291：第10b層~第11-1層、292・293：第11-2層、294：第11-3層、295：第10b~11-3層、296~298：第11-3層、299：第11-1~12層〕.....	95
図59	第10面平面図.....	74	図81	第12面平面図.....	96
図60	第10面遺物出土状況図、第10b面検出遺構(349ピット・342流路)遺物出土状況図.....	75	図82	第12面等高線図.....	97
図61	第10層・第10b面遺物出土状況図、第10b面検出339ピット遺物出土状況図.....	76	図83	第12面検出〔第11-3層下面〕遺構断面図.....	98
図62	第10b面平面図.....	77	図84	第12面検出〔第11-3層下面〕遺構断面図.....	99
図63	第10b面検出〔第10層下面〕遺構断面図.....	78	図85	第12b面平面図.....	100
図64	第10b面検出〔第10層下面〕遺構断面図.....	79	図86	第12b面検出〔第12層下面〕遺構断面図.....	101
図65	第10b面・第10b層遺物出土状況図(下段はすべて第10b層出土).....	79	図87	第12b面検出〔第12層下面〕遺構断面図.....	102
図66	第10b面349ピット・第10面・第10層出土遺物実測図〔210・211：第10面、212~218・220~222：第10層、219：349ピット〕.....	80	図88	464流路・第12層・第12b層出土遺物実測図〔300：第12層、301・303：第12層以下、302・304~306：第12b層〕.....	103
図67	第10b面検出342流路内（第10層）出土遺物実測図.....	81	図89	第12層・第12b層出土遺物実測図〔307：第12層、308~310：第12b層〕.....	104
図68	第10b面検出342流路内（第10層）出土遺物実測図.....	82	図90	第12b層・第13面遺物出土状況図.....	105
図69	第10b面検出345土坑・第10b層、第10層下~第10b層出土遺物実測図〔255~257・265~267：第10b層、258~264：第10b面〕.....	83	図91	第13面平面図.....	106
図70	370溝・第10b層・側溝（第10層~第11-1層・第10~第11-3層）出土遺物実測図〔268~273：第10b層、274：第10~11-1層、275・276：370溝、277：第10~11-3層、278：第10層以下〕.....	84	図92	第13面等高線図.....	107
図71	第10b層出土埴輪実測図.....	85	図93	第13層遺物出土状況図（図99-313出土状況は1/10、それ以外は1/20）.....	108
図72	第11-2面平面図.....	86	図94	第13層遺物出土状況図.....	109
図73	第11-2面検出367堰平面・立面図、369水路遺物出土状況図.....	87	図95	第13層遺物出土状況図.....	110
図74	第11-2面等高線図.....	88	図96	第13b面平面図.....	111
図75	第11-2面水田配水概念図.....	89	図97	第13b面検出〔第13層下面〕遺構断面図.....	112
図76	第11-2面検出遺構断面図.....	90	図98	第13b面検出〔第13層下面〕遺構断面図.....	113
図77	第11-3面平面図.....	91	図99	第13面・第13層出土遺物実測図〔311：第13面、312~317：第13層〕.....	115
図78	第11-3面検出〔第11-2層下面〕遺構断面図				

図100 第13面・第13層出土遺物実測図〔318：第13面、319：第13層〕……………116	図109 移動式竈実測図……………124
図101 第13層出土遺物実測図……………117	図110 移動式竈実測図……………125
図102 第13層出土遺物実測図……………118	図111 分析資料採取地点……………127
図103 第13層、第13面466・467大畦畔・470畦畔出土遺物実測図〔334・335・342：第13層、336～340：467大畦畔内、341：470畦畔内、343：466大畦畔内〕……………119	図112 池島・福万寺遺跡（09-1）遺跡調査区東壁における植物珪酸体分析結果……………130
図104 第13b面476土坑・477溝・478溝・489土坑・519溝、第13b層出土遺物実測図〔344・351：519溝、345・352：489土坑、346～348：477溝、349・350：第13b層、353：476土坑、354・355：478溝〕……………120	図113 池島・福万寺遺跡（09-1）：Y1トレンチ東壁における植物珪酸体分析結果……………130
図105 第13b層出土遺物……………121	図114 池島・福万寺遺跡（09-1）：調査区東壁における花粉分析結果……………133
図106 第14-1面検出流痕断面図……………121	図115 池島・福万寺遺跡（09-1）：Y1トレンチ東壁における花粉分析結果……………133
図107 第14-1面平面図……………122	図116 池島・福万寺遺跡（09-1）：調査区東壁における主要珪藻分析結果……………136
図108 第14-2面平面図……………123	図117 池島・福万寺遺跡（09-1）：Y1トレンチ東壁における珪藻分析結果……………136
	図118 暦年較正結果……………147

付図

X = -150, 140ライン土層断面図、Y = -34, 600ライン土層断面図

表目次

表1 周辺遺跡一覧（図4に対応）……………7	結果……………135
表2 池島・福万寺遺跡（09-1）における植物珪酸体分析結果……………129	表5 同定動物遺存体資料一覧……………144
表3 池島・福万寺遺跡（09-1）における花粉分析結果……………132	表6 測定資料および処理……………145
表4 池島・福万寺遺跡（09-1）における珪藻分析	表7 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……………146
	表8～表20 遺物観察表……………154～179
	表21 樹種同定表……………178～179

写真目次

写真1 池島・福万寺遺跡（09-1）の植物珪酸体（プラントオパール）……………140	写真2 池島・福万寺遺跡（09-1）の花粉・胞子……………141
	写真3 池島・福万寺遺跡（09-1）の珪藻……………142

写真図版目次

図版1

1. X = -150, 140ライン土層断面 現代耕作土～2層 (Y = -34, 600付近、南から)
2. X = -150, 140ライン土層断面 第1b層～第3-1層 (Y = -34, 600付近、南から)
3. X = -150, 120ライン土層断面 第3-2層～第7b層 (Y = -34, 600付近、南から)
4. Y = -34, 600ライン土層断面 第8層～第11-2層 (X = -150, 140付近、西から)
5. X = -150, 140ライン土層断面 第10b層～第13層 (Y = -34, 600付近、南から)
6. X = -150, 140ライン土層断面 346流路部分 (南西から)
7. Y = -34, 580ライン土層断面 第13層～第14層 (X = -150, 120付近、西から)

図版2

1. 第2-1面 全景 (西区、南から)
2. 第2-1面 14島畠 (西区、南から)
3. 第2-1面 13島畠 (西区、南から)
4. 第2-1面 12島畠 (西区、南から)
5. 第2-1面 11島畠 (西区、南から)

図版3

1. 第2-1面 全景 (東区、南から)
2. 第2-3b面 全景 (西区、南から)

図版4

1. 第3-1面 全景 (西区、南から)
2. 第3-1面 66流路 (西区、南から)

図版5

1. 第3-2面 全景 (西区、南から)
2. 第3-2面 全景 (東区、南から)

図版6

1. 第3-3面 全景 (東区、南から)
2. 第3-3面 101島畠 (東区、南から)
3. 第3-3面 105島畠 (西区、南から)
4. 第3-3面 106島畠 (西区、南から)
5. 第4-1面 銅銭検出状況 (西区、北西から)

図版7

1. 第4-1面 全景 (西区、南から)
2. 第4-1面 全景 (東区、南から)

図版8

1. 第4-2面 全景 (西区、南から)
2. 第4-2面 113島畠 (西区、南から)
3. 第4-2面 112島畠 (西区、南から)
4. 第4-2面 117島畠全景 (東区、南から)
5. 第4-2面 117島畠 (東区、南から)

図版9

1. 第5面 全景 (西区、南から)
2. 第5面 全景 (東区、南から)
3. 第5面 鉄器出土状況 (東区、西から)
4. 第5面 122島畠 (西区、南から)
5. 第5面 521島畠・123畦畔 (西区、南から)

図版10

1. 第6面 全景 (東区、南から)
2. 第7-1面 全景 (西区、南から)

図版11

1. 第7-3面 全景 (西区、南から)
2. 第7-3面 全景 (東区、北東から)
3. 第7-3面 遺構半掘状況 (東区、東から)
4. 第7-3面 遺構半掘状況 (西区、北西から)
5. 第7-3面 遺構検出状況 (西区、北西から)

図版12

1. 第8面 全景 (東区、南から)
2. 第8面 全景 (西区、南から)

図版13

1. 第8b面 全景 (東区、南から)
2. 第9-1面 全景 (東区、南から)

図版14

1. 第9-1面 銅製帯金具出土状況 (東区、北から)
2. 第9-3面 全景 (東区、南から)
3. 第9-3面 323流路遺物出土状況 (東区、北から)
4. 第9-3面 323流路遺物出土状況 (東区、東から)
5. 第9-3層 (323流路内) 獣骨出土状況 (東区、東から)

6. 第9-3層 (323流路内) 獣骨出土状況 (東区、北から)

7. 第9-4面 全景 (東区、南から)

8. 第9-4層 須恵器出土状況 (西区、北西から)

図版15

1. 第10b面 全景 (東区、南から)

2. 第10面 336ピット検出状況 (西区、南から)

3. 第10面 337ピット検出状況 (西区、北東から)

4. 第10b面 340土坑 (西区、北東から)

5. 第10b面 342流路 (西区、南から)

図版16

1. 第11-2面 全景 (西区、南から)

2. 第11-2面 全景 (東区、南から)

図版17

1. 第11-2面 365水路 (東区、南から)

2. 第11-2面 364流路・366水路 (東区、南東から)

3. 第11-2面 全景 (東区、東から)

4. 第11-2面 365水路への水口 (東区、南から)

5. 第11-2面 367堰 (東区、南から)

6. 第11-2面 367堰 (東区、北から)

7. 第11-2面 368水路・364水路 (東区、西から)

8. 第11-2面 369水路遺物出土状況 (西区、南東から)

図版18

1. 第11-3面 全景 (東区、南から)

2. 第11-3面 368水路 (東区、北から)

図版19

1. 第12b面 全景 (西区、南から)

2. 第12b面 454溝 (西区、西から)

3. 第12b面 446土坑 (西区、北から)

4. 第12b面 447落ち込み (西区、東から)

5. 第12b面 463落ち込み (東区、南から)

図版20

1. 第13面 全景 (西区、南から)

2. 第13面 全景 (西区、西から)

3. 第13面 全景 (東区、東から)

4. 第13面 467大畦畔内遺物出土状況 (東区、西から)

5. 第13面 466大畦畔内遺物出土状況 (西区、西から)

図版21

1. 第13b面 全景 (東区、南から)

2. 第13a面 全景 (東区、東から)

3. 第13a層 遺物出土状況 (東区、北西から)

4. 第13a層 石斧出土状況 (東区、南から)

5. 第13a層 石斧柄出土状況 (東区、西から)

図版22

1. 第14-1面 全景 (東区、南より)

2. 第14-2面 全景 (東区、南より)

図版23

第1層～第7-3b層出土遺物

図版24

第7-3b層～第8層・306流路出土遺物

図版25

306流路・第9-3層出土遺物

図版26

323流路・336ピット・第9-4層出土遺物

図版27

323流路・337ピット・第10面出土遺物

図版28

342流路・第10層・第10b面・第10b層出土遺物

図版29

364流路・365水路・第10層～第12b層出土遺物

図版30

第13面・第13層出土遺物

図版31

第13層出土遺物 (367大畦畔内出土遺物含む)

図版32

476土坑・477溝・478溝・第13b層出土遺物

図版33～35

石器

図版36

木器・焼土塊

図版37

木器

図版38

金属器

第1章 調査に至る経過と調査の方法

第1節 調査に至る経過

淀川、大和川、生駒山地、上町台地に囲まれた河内平野一帯は、おおむね低平地に当たる上に、地形的に条件付けられた排水不良の問題を抱えていたため、しばしば甚大な洪水被害に直面してきた。宝永元（1704）年の大和川付け替え工事は、その解決にむけて歴史的に大きな決断がなされた例として知られるところである。しかしその付け替え工事によっても、排水不良の問題が根本的に解決したわけではなく、その後も洪水の被害と、それに対する取り組みは続いた。

1960年代以降になると、宅地化に伴う一帯の治水機能の縮小や、工業用水としての地下水のくみ上げによる地盤沈下等、急激な人口流入と環境の変化に伴って、新たな問題が浮上することとなった。昭和47年に発生し、甚大な被害をもたらした大東水害を契機に、大阪府は河川改修事業の抜本的な見直しを図り、寝屋川流域総合治水対策事業として河道改修、貯留施設、放流施設の建設に着手することとなった。本事業が依拠する恩智川治水緑地は、大阪府寝屋川水系改修工営所が進めてきたもので、豪雨時に河川の水位が急激に高くなった際、水を一時的に貯めて水位調整を行うための貯留施設である。普段は公園として利用されることを目的としており、「多目的遊水池」と位置づけられる。この恩智川治水緑地は、北流する恩智川を挟んで東側の池島地区、西側の福万寺地区からなり、総面積は40.2haにおよぶ。両地区における建設計画はそれぞれⅠ期・Ⅱ期にわたった。

当遺跡の発掘調査は、昭和47年に府立池島高等学校（現 みどり清朋高等学校）敷地内で実施されたものを嚆矢とする。治水緑地建設に伴う調査としては、昭和56・57（1981・1982）年に大阪府教育委員会によって試掘調査が行われ、昭和59（1984）年度には大阪府教育委員会によって福万寺Ⅰ期地区の調査が開始された。平成元（1989）年以降は、財団法人大阪文化財センター（平成7年より財団法人大阪府文化財調査研究センター、平成14年度より財団法人大阪府文化財センターを経て、現：公益財団法人大阪府文化財センター）が調査を担当し、平成7（1995）年に福万寺Ⅰ期地区の調査は終了した。一方、池島Ⅰ期地区の調査は平成6（1994）から平成14（2002）年度にわたって行われた。

福万寺Ⅰ期地区は平成14（2002）年度に、池島Ⅰ期地区は平成19（2007）年度に発掘調査報告書を刊行し、Ⅱ期地区の発掘調査に関しては調査が終了した後、逐次発掘調査報告書を作成・刊行している。これまでの発掘調査で蓄積された膨大な成果は、広範な面積にわたって通史的に農業や土地利用の変遷を知ることができるものとなっており、全国的にみても貴重な成果と認められている。

Ⅰ期地区における発掘調査終了後も、財団法人大阪府文化財センターによる発掘調査は継続し、平成15（2003）年度から福万寺Ⅱ期地区の池床部の調査が行われている。なおⅠ期地区では福万寺地区で平成7（1995）年、池島地区で平成14（2002）年に公園整備が完了し、運動広場や水鳥が飛来する散策コースとして、平素は多くの市民に利用されている。

ここで報告する池島・福万寺Ⅱ期地区09-1調査区における発掘調査は、福万寺Ⅱ期地区の南西付近に位置する。大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、平成21（2009）年7月9日より平成23（2011）年5月31日まで、現地調査を実施した。最終調査面積は3826㎡である。

第2節 調査の方法

本調査地の池島・福万寺遺跡09-1（図1）は八尾市福万寺町6丁目地先に所在し、福万寺Ⅱ期地区の南西部分に位置する。当センターでは従来、大阪府下の全調査域を統一した基準で区画できるよう、世界測地系に基づく平面直角座標系第6系を基準とした第Ⅰ～Ⅵ区画までの6段階の地区割りを設定している。今回の調査では、このうちの第Ⅰ～Ⅵ区画までを用いた（図2・3）。

主要遺構面はヘリコプターによる航空測量を実施し、その他の遺構面は平板測量により平面図を作成した。航空測量による遺構全体図の作成は、過去の調査履歴を考慮しつつ7面を選定し、50分の1縮尺で図化を行った。また個別の遺構や遺物の検出状況の実測図は、適当な縮尺を選んで手測りで行った。土層断面図は基本的に20分の1縮尺で行った。

4級基準点は08-1調査の際に設置された3級基準点を基準に設置し、それらをもとに調査地内に基準杭を設定した。航空測量や手測りでの実測図の作成は、それらの基準杭をもとに行った。出土遺物は層ごとに、前述の基準杭で示される10メートル四方を単位とした地区ごとに取り上げ、日付を明示して登録番号を付し

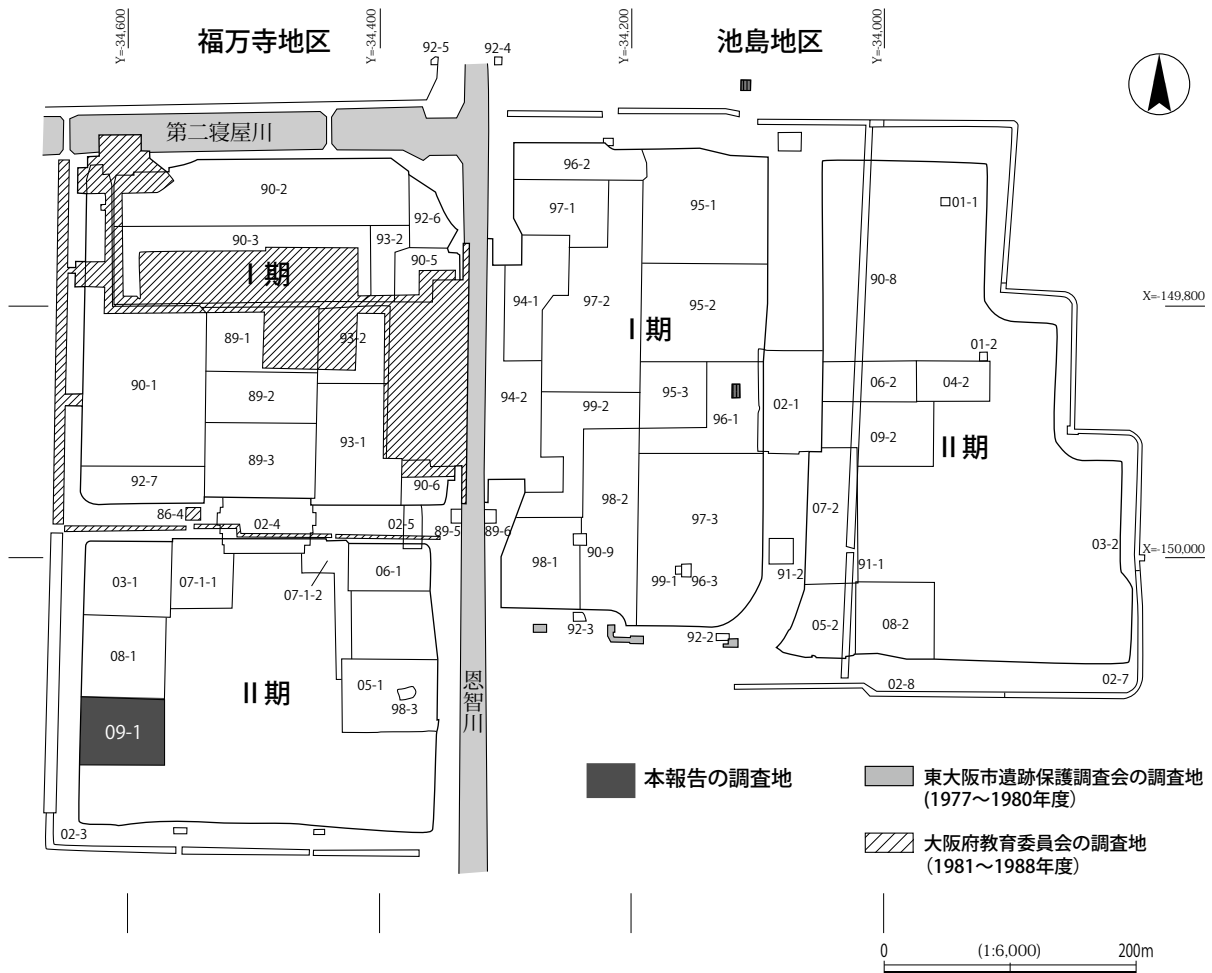


図1 調査区位置図

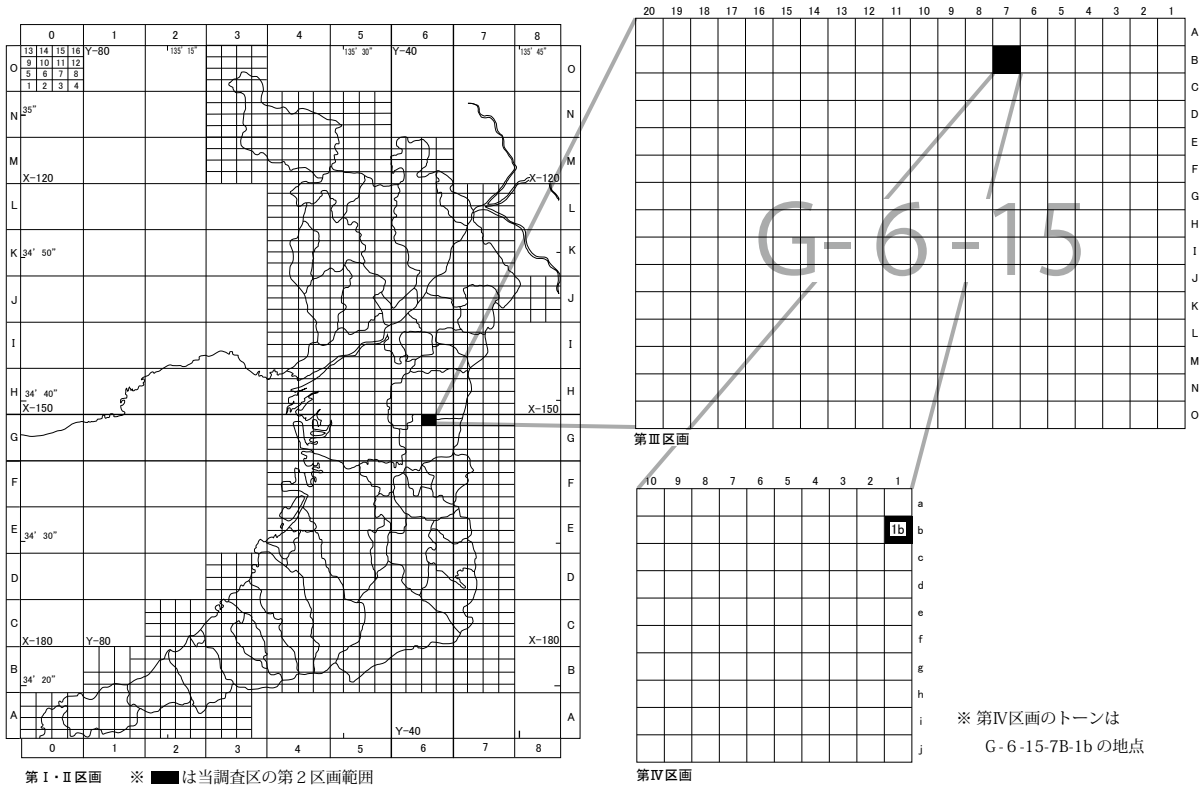


図 2 調査区地区割り基準

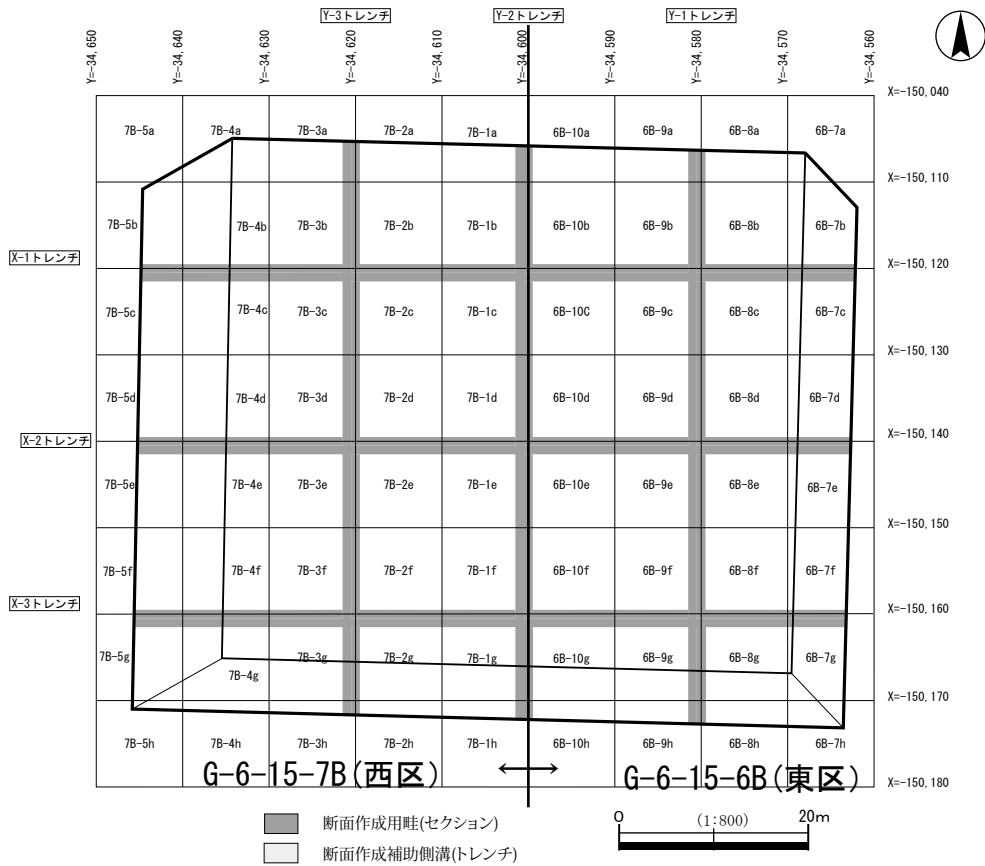


図 3 調査区地区割り

た。また調査期間中に現場詰所にて、遺物洗浄・注記作業等の基礎的な整理作業を並行して行った。

調査は盛土・表土を機械で除去した後、座標軸に沿ってほぼ20m間隔で東西・南北に人力掘削で2m幅の土層観察トレンチを設けた。このトレンチ掘削により、第1層の調査を行った。その後、第1b層の機械掘削を行い、第2層以下を人力掘削により発掘調査した。第2面以下の調査においても、順次同じ位置でトレンチを下方に掘削し、Xラインに沿うトレンチの場合は北側の壁を、Yラインに沿うトレンチの場合は東側の壁を対象に、土層断面実測を行った。この土層観察用断面の位置は、過去の調査で設定された土層観察用断面の位置と連続するもので、最終的には遺跡全体をカバーする地層断面図を作成することができる。なお当調査区ではY=-34.600ラインを境にその東側を東区、西側を西区と分割および呼称し、作業の工程上、調査や航空測量の撮影は基本的にこの単位で交互に行った。

水準測量の際に用いた標高はT.P.値（東京湾平均海面）で、北は全て座標北を示す。土層断面や遺構などの写真は、35mmカメラ（白黒・カラーリバーサル）およびデジタルカメラを用いて、調査担当者が撮影した。調査区の全景写真や、特に重要なカットは6×7カメラ（白黒・カラーリバーサル）にて撮影し、その一部を本報告書の写真図版に用いた。全景写真は調査区の南側に設置した8段の写真足場から撮影した。

遺構名の記載方法は基本的に「遺構番号（アラビア数字）－遺構種類」とした。たとえば遺構番号が100番の遺構が土坑であった場合は、遺構名称を100土坑とした。

調査は平成23（2011）年5月31日に完了した。最終調査面積は3826㎡である。発掘調査期間中、および発掘調査終了後は随時大阪府教育委員会による立会を受けた。

図面台帳、遺物登録台帳、写真台帳は、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して作成した。遺物は洗浄・注記後、接合・石膏復元を行い、重要もしくは図化可能なものを選別し、実測図を作成した。本稿で掲載した遺物のトレース図版は、その実測図をもとに作成したものである。実測対象遺物のうちの一部は、写真担当の職員が撮影し、本報告書に掲載した。最終的に遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外とに分類して収納した。なお掲載遺物は基本的に報告書記載の遺物番号順に収納している。

第2章 地理的・歴史的環境

池島・福万寺遺跡は、東大阪市池島町と八尾市福万寺町・玉串町東・上之島町にまたがって所在する。ここでは周辺の地理的環境を概観しながら、池島・福万寺遺跡に内在する歴史的脈絡を、周辺の遺跡の動向をからめて把握したい(図4)。

現況における池島・福万寺遺跡の立地は、生駒山地から西に派生した扇状地と、旧大和川水系である玉串川の天井川化に伴って発達した自然堤防に挟まれた、後背湿地である。遺跡のほぼ中央を恩智川が、条里型地割に沿って北流する。遺跡全体の規模は東西1.2km、南北約1.7km、総面積は130haにおよぶ。なお今回の調査地は、井上正雄氏によれば河内国河内郡字走十五ノ坪の位置に相当する。

当遺跡における古環境復元は、T.P.-10m前後の深度にまで達する立坑掘削時の断面観察などを通じ、縄文時代後期以前の時期においても、具体的に把握できるようになってきている。現時点では観察箇所が限られていることもあり、見解が相違する部分もあるが、大きく見て次のような環境の変遷をとらえることができる(秋山・朝田・別所・趙・金原・井上ほか2000)。

旧石器時代には沼沢地が広がる環境だったが、縄文時代に入り気候が温暖化すると海進により河内平野が河内湾と呼ばれる内海になり、当調査区一帯も海底に沈んだことが海成層の存在により明確となった。そのような状況は、縄文時代早期末から中期にかけての時期にみられたようだ。縄文時代後期には内海の範囲が徐々に縮小し、調査地一帯は陸域となる。ただこの時期に、河内平野中央部にはなお河内潟と呼ばれる汽水域が広がっていた。河内潟は縄文晩期の海水準低下によりさらに範囲が縮小し、晩期末までには淡水化して河内湖とよばれる湖へ変化するにいったとみられる。その名残は新開池・深野池として近世初めまで残存し、新田開発に伴って姿を消した後も、なお地名として残る。

縄文時代後期以降、調査地一帯が陸地として安定してからは、生駒山地から流下する河川のもたらす堆積物によって形成される扇状地の発達や、旧大和川の分流がもたらした氾濫・破堤堆積物によって引き起こされる地形変化が連動して、その時々々の景観が形作られたとみられる〔特に中世以降は、流路の付け替えや天井川化により、玉串川や恩智川の堆積作用が活発化し、当概域の集落景観に大きな影響を与えたことがうかがえる〕。

縄文時代から弥生時代にかけての集落分布は、前述した河内湾から河内潟を経て、河内湖へいたる地理的変遷と密接な関係を示す。河内湾が占めていた縄文時代早期末から中期にかけての時期には、河内湾の東岸に位置する鬼虎川遺跡や、南岸に位置する讃良川遺跡などで、当時の人々の生活痕跡を認めることができる。内海が干潟へと姿を変える縄文時代中期末から後期にかけての時期には、池島Ⅰ期地区でも遺物が出土している他、当遺跡東方の扇状地上において、段上遺跡・縄手遺跡・馬場川遺跡が形成される。縄文時代晩期には、河内湖周辺の低地に遺跡が増加する。それが当時の人々の生業にも密接に関わる現象であったことは、河内湖南東岸付近にみられる小規模貝塚からもうかがえる。周辺では鬼塚遺跡・縄手遺跡・鬼虎川遺跡・水走遺跡等が認められるのに加え、池島Ⅱ期地区においても当概期の墓域・居住域が検出されている。それらの遺跡には、縄文晩期の突帯文土器と弥生時代前期の土器が、共伴して出土する場合がみられることから、弥生文化の成立とその背景を考える際の検討材料とされることも多い。

弥生時代に入ると、平野部での遺跡の分布がさらに活発化する。これは農耕技術を伴う弥生文化の進展に伴い、水田造成に適した低地が居住域として積極的に選ばれた結果とみられる。当遺跡においても池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区04-2調査区で墓域が検出された他、08-2調査区では建物跡などが検出されている。水田跡に関してみればこれまでの調査で、弥生時代前期中葉以降、中期を経て後期に至るまでの間に7つの時期のもの

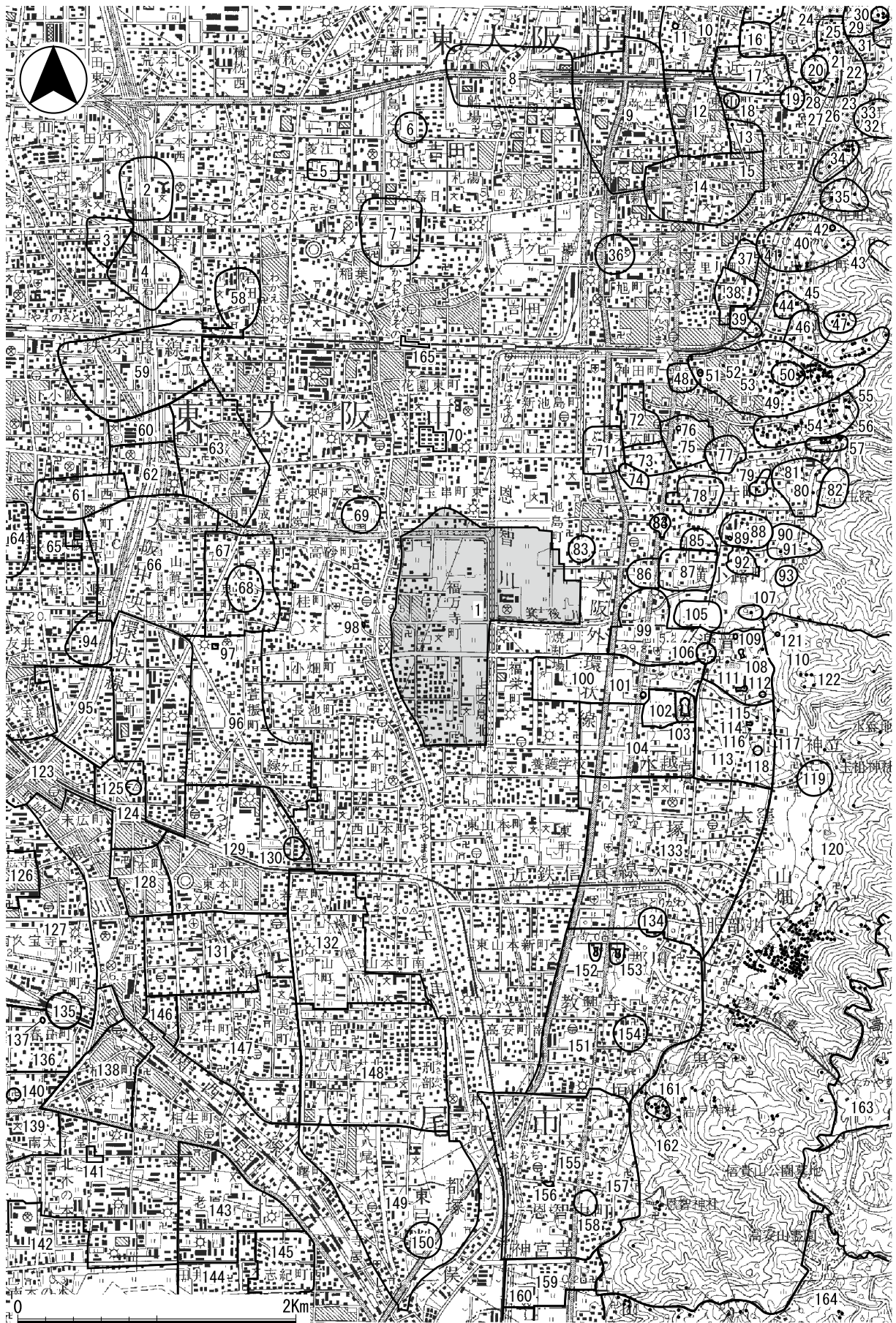


図4 周辺の遺跡

のが墨重して検出されている。これらを詳細にみると、水田面が調査域を広範囲にわたって覆う時期だけでなく、部分的に展開する時期もあったとみられる。平野部でみると、前期前葉から中葉には山賀遺跡、若江北遺跡、志紀遺跡、大竹西遺跡などが知られるが、それらの多くは中期に入ると集落の位置が移動するか、廃絶するとみられ、中期には鬼虎川遺跡、亀井遺跡、瓜生堂遺跡、恩智遺跡などの拠点集落が展開する。この時期には情報や物資の流通システムも発達したことが類推されており、前述した拠点集落はそれにも大きく関わったとみられている。弥生後期にいたると平野部における拠点集落の多くは分散・移動するのに加え、生駒山西麓の扇状地周辺においても小規模な集落が数多くみられるようになる。池島・福万寺遺跡では、現在までのところ弥生時代後期の居住域が明確にとらえられておらず、当遺跡がそのような集落動向とどのように関連付けられるかは今後の検討課題である。

当遺跡では古墳時代前期の遺構群や後期の居住域が検出されており、当概期の居住域が弥生時代後期の洪水堆積によって形成された、自然堤防上や微高地上に形成されたことがわかるのに加え、微高地の周辺部で水田や畠作が行われたことも把握できる。当遺跡の西側では、旧長瀬川の自然堤防上に位置する中田遺跡群などの古墳時代初頭から前期の集落が知られている。また古墳時代中期から後期には、大竹西遺跡や西ノ口遺跡で掘立柱建物や区画溝等が検出されている。

一方、この時期を特徴づける墳墓や古墳では、前期後半から中期にかけて、向山古墳・西の山古墳・花岡山

表1 周辺遺跡一覧（図4に対応）

1 池島・福万寺遺跡	34 みかん山古墳群	67 西郡遺跡	100 大竹西遺跡	133 水越遺跡
2 新家遺跡	35 豊浦谷古墳群	68 西郡廃寺	101 鏡塚古墳	134 高麗寺跡
3 意岐部遺跡	36 鶴立遺跡	69 玉串遺跡	102 心合寺跡	135 洪川廃寺
4 西岩田遺跡	37 狐塚遺跡	70 花園遺跡	103 心合寺山古墳	136 跡部遺跡
5 菱江寺跡	38 皿池遺跡	71 北島池遺跡	104 太田川遺跡	137 跡部銅鐸出土地
6 吉田遺跡	39 河内寺跡	72 五合田遺跡	105 西の口遺跡	138 植松遺跡
7 稲葉遺跡	40 出雲井遺跡群	73 段上遺跡	106 楽音寺跡	139 太子堂遺跡
8 水走遺跡	41 松本塚古墳	74 下六万寺遺跡	107 萩山古墳	140 勝軍寺跡
9 鬼虎川遺跡	42 丸山古墳	75 縄手遺跡	108 大光寺山遺跡	141 植松南遺跡
10 植附遺跡	43 神津嶽祭祀遺跡	76 えの木塚古墳	109 禿山古墳	142 木の本遺跡
11 塚山古墳	44 水走氏館跡	77 上六万寺遺跡	110 西ノ山古墳	143 老原遺跡
12 西ノ辻遺跡	45 五条古墳	78 船山遺跡	111 花岡山古墳	144 田井中遺跡
13 額田寺跡	46 客坊山遺跡群	79 桜井古墳群	112 花岡山遺跡	145 志紀遺跡
14 鬼塚遺跡	47 五条山古墳群	80 岩滝山遺跡	113 大竹遺跡	146 菴華寺跡
15 日向古墳	48 市尻遺跡	81 二本松古墳	114 向山1号墳	147 矢作遺跡
16 法通寺遺跡	49 山畑古墳群	82 往生院金堂跡	115 向山2号墳	148 中田遺跡
17 神並遺跡	50 山畑遺跡	83 池島東遺跡	116 向山瓦窯跡	149 東弓削遺跡
18 舩古墳群	51 瓢箪山古墳	84 コモ田遺跡	117 双子塚古墳	150 弓削寺跡
19 若宮古墳群	52 成山古墳	85 北屋敷遺跡	118 愛宕塚古墳	151 郡川遺跡
20 正興寺山遺跡	53 馬ハギ塚古墳	86 西代遺跡	119 蘭光寺跡	152 郡川西塚古墳
21 神並古墳群	54 花草山古墳群	87 馬場川遺跡	120 高安古墳群	153 郡川東塚古墳
22 神並古墳群1号墳	55 経塚古墳	88 半堂遺跡	121 核山古墳	154 教興寺跡
23 神並古墳群2号墳	56 鉢伏古墳	89 大賀世古墳	122 中谷山古墳	155 恩智遺跡
24 神並古墳群18号墳	57 五里山古墳群	90 浄土寺谷古墳群	123 佐堂遺跡	156 恩智弥生時代遺跡
25 神並古墳群9号墳	58 岩田遺跡	91 常光寺古墳	124 宮町遺跡	157 恩智銅鐸出土地
26 神並古墳群8号墳	59 瓜生堂遺跡	92 貝花遺跡	125 穴太廃寺	158 恩智城跡
27 神並古墳群4号墳	60 巨摩廃寺遺跡	93 浄土寺跡	126 久宝寺寺内町	159 神宮寺遺跡
28 夫婦塚古墳	61 上小阪遺跡	94 友井東遺跡	127 久宝寺遺跡	160 大泉郡条里遺跡
29 千手寺山遺跡	62 若江北遺跡	95 美園遺跡	128 八尾寺内町	161 岩戸古墳群
30 箸尾古墳群	63 若江遺跡	96 萱振遺跡	129 東郷遺跡	162 信貴苑内古墳
31 辻子谷古墳群	64 小若江遺跡	97 萱振1号墳	130 東郷廃寺	163 高安城跡
32 額田山古墳群	65 新上小阪遺跡	98 山本町北遺跡	131 成法寺遺跡	164 平尾山古墳群
33 つば塚古墳	66 山賀遺跡	99 楽音寺遺跡	132 小阪合遺跡	165 花屋敷遺跡

古墳・心合寺山古墳・郡川東塚古墳・郡川西塚古墳・鏡塚古墳などの首長級の墳墓が、継続的に造営されたこと、後期には生駒山西麓の斜面に、群集墳が多数築かれたことが知られる。今回の調査では古墳時代の包含層から埴輪片を検出している。既往の調査でも少量の埴輪片が出土していることから、当遺跡に近接して、現時点では知られていない古墳が存在する可能性がある。

当遺跡は現在まで、条里型地割が良好に残ることで知られており、池島・福万寺遺跡の調査開始段階においても、条里型地割の坪境の変遷をとらえることこそが、調査の眼目の一つとみなされていた。これまでの発掘調査を通じ、現行の条里型地割と一致する方形区画は10世紀頃までさかのぼることが明らかとなった一方、飛鳥・奈良時代に遡る条里型地割の存在も類推されていた（江浦1992）。今回の調査に先立ち、当調査区の北側に隣接する08-1調査区において、8世紀中頃に自然流路を方形区画の縁辺に沿うように、人工的に付け替えたことが明らかとなり、それが最初期段階の条里のあり方を具体的に示すものとして注目された（駒井・岡本2011）。今回の調査区でもその流路の南側の延長部分を検出し、ゆるやかに蛇行しながら南北方向を指向していた流路が、直線的な南北方向の水路に形作られていく経緯をとらえることができた。なお08-1調査区で検出された、古代前半の条里型地割の施工に伴うとみられる流路の変更をみると、東西方向に振り換えられる流路の位置は、古代後半以降の条里型地割の地境の位置と合致するが、南北方向の流路の位置に関してみると位置が異なる。また当調査区では10世紀前半代の遺物がほとんど検出されなかった。これらのことから、古代前半から後半へ、条里型地割が直線的に継承されたわけではない可能性が高いと考える。

平安時代において、当遺跡一帯は荘園「玉櫛荘」の範囲に該当する。「玉櫛荘」は当初、摂関家の所領だったが、1137（保延3）年に宇治平等院の建立の際に寄進され、以降室町時代にかけて平等院領となった。10世紀中頃にさかのぼる条里型地割は、荘園開発が進展する時期にあたることから、これに起因するものではないかとの指摘がなされている（江浦1992）。

古代後葉から近世にかけては、下の層から上の層に向けて、重複を含みながらも順次出土遺物の時期が追え、空白となる期間は見いだせなかった。したがって度重なる洪水の被害はあったものの、当慨地域において大規模かつ長期間にわたって耕作地が放棄されるような状況はみられなかったと考えられる。その背景として旧大和川水系を利用した水利施設の整備が進んだことや、河内と大和を結ぶ街道に近接する地理的要因など、当該地域が居住・生産空間としてめぐる要素を多く含んでいたことがあげられよう。同様に中世から戦国時代にかけて、当慨地域に影響力をもったとみられる有力氏族や守護大名、戦国大名の名前や、それを推測させる地名が列挙されているが、当慨地域で農作業に携わっていた人々が、実際にどのような形で支配・集約されていたかを具体的に検討するには、まだ判断材料に乏しいと言わざるを得ない。したがってその実相を知るのは今後の課題といえるだろう。

1704（宝永元）年の大和川の付け替え工事は、河内平野をしばしば襲った洪水被害を抑えるために行われたが、一方で新大和川以北の地域に慢性的な水不足をもたらすことにもなった。ただそれに伴い、旧大和川流路の新田開発で耕地面積が拡大したこと、綿が水はけのよい土壌を好むこと、商品経済の進展と河内が大阪や京都などの消費地に近いこと等が要因となって、河内平野における綿栽培が活発になっていく。近世以降になると、当遺跡でも井戸の検出数が飛躍的に増えるが、これは前述の水不足と、7～8月の開花期に綿が水を多く必要とすること等があいまって生じた現象かもしれない。

第3章 調査成果

第1節 層序 (付図)

第1章第2節でのべたように、池島・福万寺遺跡の調査では従来、東西方向・南北方向に20m間隔で土層観察用トレンチを設け、土層断面実測を行っている。当調査区でも基本的にその方法に則ったが、そのうち最下層まで観察が可能なX=-150,120・-150,140・-150,160とY=-34,580・-34,600・-34,620のラインに沿って、土層観察用断面の写真撮影と実測を行った。

土層の堆積状況や土質・土色は、土層観察用断面によって異なる部分が認められたが、大きく見ると調査区の東半分と西半分とで堆積状況に違いが認められた。ここでは、作成した土層断面実測図を全て図示すると、かえって煩雑になり理解しにくいと思われることから、当調査区の地形の変化がとらえやすいX=-150,140と、Y=-34,600の土層断面図をもとに、基本層序について述べることにしたい。

池島・福万寺遺跡の調査では従来、古土壌層をa層、その母材となった水成堆積層をb層と呼称している。本来、古土壌層の上面を遺構面として検出した場合はa面、古土壌層の下面で、その母材となった水成層の上面を検出した場合にはb面とするべきだが、当報告書では遺構面の記述に際して、基本的に「a」の記号は省略した。また仮に第X層においてa層の累積があるため、それが細分される場合は、第X-1層、第X-2層のように枝番号をふって表示した。

なお層序を把握する上での観察点の詳細に関しては、井上(2002・2011)を参照されたい。

第1層 (層厚0.3m弱) 近世末から近代の地層である。表土層を掘削すると、ほぼ調査区全域で第1層を確認することができた。細砂～細礫混砂質シルト(2.5Y3/1黒褐色)層である。

この耕作土層のもととなった第1b層は、逆級化するシルト～細砂の水成堆積層であることから、河川の越流によってもたらされた、氾濫堆積物層ととらえられる。第1b層は後世の耕作活動に伴って攪乱され、耕作土層に混入していったとみられる。調査区西半分を中心として部分的に残存するのが認められた第1b層は、耕作による攪乱がおよばなかった部分ととらえられる。層厚は0.1m前後と薄く、それ以外の部分では足跡や土坑の埋土としてかろうじて残存するのを認めた。

第2層 (層厚0.3m強) 近世の層である。第2-1・第2-2・第2-3層の3層に細分した。

第2-1層は細砂～極粗砂混シルト(2.5Y4/1黄灰色)からなる耕作土層で、土壤化がすすむ。この層は、第2-1面で検出した島畠と島畠の間で、部分的に残存するのが認められた。第2-1層の由来となる第2-1b層は、第2-1層下面で部分的に認められる足跡の埋土に、その名残をわずかにとどめるのみだった。

第2-2層は細砂～極粗砂混砂質シルト(5BG 6/1青灰色)からなる耕作土層で、ほぼ調査区全域で認められた。第2-3層は細砂～細礫混砂質シルト(5BG4/1暗青灰色)からなる耕作土層である。第2-3a層は第2-2層形成時に攪乱されたとみられほとんど遺存せず、きわめて部分的に残存するのが認められた。したがって第2-3面として検出した面は、おおむね第2-3b層の上面に相当する。第2-3層の由来となる第2-3b層は、調査区西部にのみ遺存するシルト～中砂もしくは中砂～細礫からなる水成堆積物層(10YR8/2灰白色)で、トラフ型のラミナをなす。これは第3-1面の段階で短期間存在したとみられる66流路を、埋積した堆積物ととらえられる。第2-3b層が、南北方向の帯状に分布するのはそのためととらえられる。なお、66溝の流心から離れるにしたがって、土質は細粒化する傾向が認められた。

第3層 (層厚0.5m弱) 中世後半の地層である。第3-1・第3-2・第3-3・第3-4層の4層に細分

した。

第3-1層は主に細砂～中砂混砂質シルト（10G5/1～5B5/1緑灰色～青灰色）で、調査区東半部を中心に分布する。ところどころラミナが残存し、あまり土壌化が進んでいない状況が認められた。大規模な洪水が収束した後の、地盤が比較的不安定な段階に相当するとみられる。その土壌の起源となる第3-1b層は逆級化するシルト～中砂（10BG6/1青灰色）の水成堆積層で、調査区全域にわたって20～30cmの厚さで堆積するのが認められた。

第3-2層は細砂～粗砂混砂質シルト（5G4/1暗緑灰色）で、調査区全域に広がる。シルトブロックの混入が認められ、土壌化は弱い。第3-2層の下層において、調査区東半部を中心に、第3-2b層が広がるのを認めた。それは細砂～中砂（2.5Y5/1黄灰色）からなる氾濫堆積物層で、シルトブロックを含み、調査区の東半部で厚く、西に向かうほど薄くなり、調査区西寄りでは足跡の埋土として部分的に遺存する状況だった。

第3-3層は細～極粗砂混砂質シルト（5BG5/1青灰色）で、第3-2層形成時に攪乱されたとみられ、調査区東半部でのみ分布するのを認めた。また第3-3層の基盤となった第3-3b層は、第3-3層の下面にみられる足跡の埋土に、その名残をわずかに認めるのみだった。

第3-4層は第3-2層ないし第3-3層形成時に攪乱されたとみられ、調査区南東で部分的に極薄く残存するのみだった。

第4層（層厚0.1m強） 中世後半の地層である。第4-1・第4-2層の2層に細分した。

第4-1層は細砂～細礫混砂質シルト（7.5Y4/1灰）である。調査区のほぼ全域に分布するのが認められたが、層厚は東に向かうにつれて薄くなる傾向がある。第4-1b層は第4-1a層形成時に攪乱され、耕作土に混入したとみられ、第4-1層の下部で、きわめて薄いかもしくは足跡埋土として残存するのを部分的に認めたのみである。

第4-2層は細砂～中砂・細礫混砂質シルト（5BG4/1暗青灰色）で、シルトブロックが顕著な、あまり土壌化の進んでいない耕作土層である。その下部で部分的に、中砂～細礫（2.5Y8/2灰白色）からなる第4-2b層を認めた。島島の芯として残っている部分を除けば層厚は薄く、足跡の埋土としてかろうじて残存している部分がほとんどである。

第5層（層厚0.1m） 中世後半の地層である。

土質は細砂～粗砂混粘土質シルト（10BG4/1暗青灰色）で、上層に比べて粘性が強い。層厚は西から東へ向けて徐々に薄くなる傾向が認められ、調査区東寄りの部分では認められない部分もあった。これはおそらく第4-1層形成時に第5層が攪乱され、第4-1層に混入したためと考えられる。

第6層（層厚0.2m弱） 中世前半の地層で、細砂～中砂混粘土質シルト（7.5Y3/2オリーブ黒色）である。層厚は西へ向かうにしたがって徐々に薄くなる。また東寄りの部分では、砂の含有量が多く、粘性が低いが、西に向けて徐々に粘性が高くなる傾向が認められた。

第6層の由来となった第6b層は、南北方向に細長く残存しているのが認められた。これは第6b層を芯とする島島の、基部のみが残存したものや、第6b層の堆積以前に作られていた島島を拡張するために、第6b層を盛り付けていたものが、部分的に残存していたためと考えられる。それ以外の部分では第6b層は、第6層の形成時に攪拌され、耕作土に混入されたと見られ、第6層の下面に残された足跡の埋土として、かろうじて遺存するのが認められたにとどまる。

島島の芯として残存する部分において第6b層は、シルト～細砂（N8/灰白色）で、水平方向のラミナが認められ、砂の粒度は上方に向けて粗くなる傾向が認められた。

第7層（層厚0.6m弱） 古代後半の地層である。第7-1・第7-2・第7-3層の3層に細分した。第7

ー1層は細砂～極粗砂混粘土質シルト（5G3/1暗緑灰色）で、上層よりも暗色化する。ほぼ調査区全域に分布するのを認めた。

第7ー2層は細砂混粘土質シルト（5BG3/1暗青灰色）で、調査区西半で部分的に広がり認められた。その下層で、シルト～細砂（10BG6/1青灰色）からなり、ラミナの認められる第7ー2b層を部分的に検出した。

第7ー3層は植物遺体を多く含む、暗色化した細砂混じりの粘土質シルトである。その下層の第7ー3b層は、細砂～細礫からなる水成堆積層で、トラフ型ラミナが明瞭にみられた。第7ー3b層は調査区全域に広がり、東に向けて徐々に薄くなる傾向が認められた。第7ー3層はその堆積活動が沈静化し、湿地化した段階で溜まった泥とみられ、第7ー3b層である砂層上面がくぼむ箇所に、部分的に薄く堆積していたのが認められるにとどまった。したがって第7ー3面として検出したのは、大半が第7ー3b層上面である。

第8層（層厚0.1m強） 古代後半の地層である。細砂～粗砂混粘土質シルトで、調査区全域に広がり、西へ移行するほど粘性が強くなる傾向が認められた。

第8b層は調査区東半で南北方向に細長く分布するのが認められた。中砂～細礫で、トラフ型のラミナが顕著である。これは第9面に帰属する溝の埋土に相当する。このことから第8層は第9面の段階で存在した流路からもたらされた土砂を母材として形成されたととらえられる。

第9層（層厚0.6m） 古代前半の地層である。第9ー1・第9ー2・第9ー3・第9ー4層の4層に細分した。第9ー1～9ー3層は、第9ー4面に帰属していた流路がもたらした砂礫を含む。また第9ー3層はほぼ調査区全域にわたってみられるのに対し、第9ー1・9ー2層は西へゆくほど層厚が薄くなる傾向がみられた。

第9ー1層は調査区の西寄りの部分では遺存せず、第9ー2層は分布域がほぼ東半部に限られる。したがってそれらの層が分布していない範囲では、第8層を除去した段階で、第9ー3面を検出した。第9ー1・9ー2・9ー3層は流芯に近い箇所では砂がちで、シルトブロックを含む傾向が認められた。

第9ー4層は調査区全域に広がっており、細砂混粘土質シルトで泥がちである。第9ー1～9ー3層と比較して粘性が強い。第9ー3層との境界は地震により変形したとみられ、乱れが生じていた。

第9ー1層は細砂～礫混砂質シルト（10G5/1緑灰色）である。

第9ー2層は細砂～極粗砂混砂質シルト（5BG4/1暗青灰色）で、その下層にシルト～中砂（10BG5/1青灰色）からなる第9ー2b層が部分的に残存する。第9ー2b層にはラミナが不明瞭な部分も認められた。

第9ー3層は細砂～細礫混粘土質シルト（10BG5/1青灰色）で、土壌化は弱い。調査区東側で部分的に、シルト～粗砂（5B4/1暗青灰色）からなりラミナが顕著な第9ー3b層を認めた。

第9ー4層は細砂混粘土質シルト（10G4/1暗緑灰色）で、砂粒をほとんど含まない点で、上層とは土質が異なる。

植物珪酸体・花粉分析・珪藻分析を行ったところ、第9ー1～4層のすべてにわたって水田耕作が行われた可能性が高いことがわかった。また第9ー4層より上位では、管理の行き届いた集約的な稲作が行われたと推定された。その詳細については第4章第1節を参照されたい。

第10層（層厚0.2m強） 古墳時代の地層である。第10層は調査区全域に広がり、東半部でやや砂っぽく、西に向かうにつれて粘性が強くなる傾向を認めた。層厚は西から東へ向けて徐々に薄くなるのを認めた。土質は東部では細砂～極粗砂混シルト（10G4/1暗緑灰色）で、西へ向けて徐々に含有する砂の粒度が小さくなり、細砂混粘土質シルト（10G5/1緑灰色）となる。その下層に、シルト～細礫からなりラミナが顕著にみられる、第10b層が認められた。これは氾濫堆積物層とみられ、流心から離れるにしたがって層厚を減じ、細粒化するのを認めた。

なお第10面において、畦畔等の水田に関連する遺構は検出しなかったが、古環境分析の結果、稲作が行わ

れていたことが推定される。おそらくそれらは第9－4層の形成時に、耕作に伴って攪乱され、削平されたと考えられる。

第11層（層厚0.1m強） 弥生時代後期の地層である。第11－1・第11－2・第11－3層の3層に細分した。

第11－1層は粘土～シルト（10GY4/1暗緑灰色）に、植物遺体が極めて薄い層状に混じる土壌化の弱い層で、第10層もしくは第10b層下部との区別は必ずしも明瞭ではなかった。

第11－2層はほぼ調査区全域で認められた水田耕耕作土層で、植物遺体片を多く含む強く暗色化する細砂混粘土質シルト（5G2/1緑黒色）である。従来の調査で「第1黒色泥層」と呼称されている層である。微高地では砂っぽく、周囲と比べて土壌化が弱い傾向が認められた。第11－2面では、水田畦畔や基幹水路・堰などの遺構を、調査区のほぼ全域にわたって検出した。

第11－3層も細砂混粘土質シルト（10GY4/1暗緑灰色）で、第11－2層ほどではないがやや暗色化し、白色のシルトブロックを含む。第11－3面でも、第11－2面ほど明瞭ではないが、それに先行する畦畔の痕跡などを検出することができた。

第12層（層厚0.3m弱） 第12層は弥生時代中期後半の地層で、細砂～中砂混粘土質シルト（5G3/1暗緑灰色）である。東へ向けて徐々に含有する砂の粒度が粗くなるとともに、粘性が強まり暗色化する傾向が認められた。

従来の調査で「第2黒色泥層」と呼称される層に相当する。概して土壌化はあまり進んでいない状況で、当調査区の北側に位置する08－1調査区と同様、水田耕作の痕跡を積極的に認められる状況ではなかった。また出土遺物も少量にとどまり、概して生活痕跡が希薄だった。そのため土壌分析を行ったところ、近傍で水田が営まれていた可能性をとらえることができた。その詳細に関しては、第4章第1節を参照されたい。

第12b層は調査区西寄りではシルト～細砂（5Y4/1灰色）で、東へ向かうにつれて徐々に砂の粒度が粗くなり、シルト～粗砂へと移行する。洪水堆積層ととらえられる。

第13層（層厚1.2m強） 弥生時代前期後半から中期前葉の地層である。植物遺体を多く含み、強く暗色化した極細砂混粘土質シルト（10BG2/1青黒色）である。

従来の調査で「第3黒色泥層」と呼称される層で、これと第13b層との間に、両者の中間的な土質の層が部分的に認められた。細砂～中砂混砂質シルト（5G5/1緑灰色）で、シルトブロックを含んでおり攪乱は弱いものの土壌化し、土質が第13層に似ていたことから、これも第13層に含めてとらえることができると考えた。第12b層をもたらしした洪水にともない、標高の低い部分は浸食されたとみられ、調査区のほぼ南半部では第13層の分布を認めなかった。第13層が残存していた部分では畦畔や水路など、水田耕作に伴う遺構を検出した。畦畔は大規模なものが残存し、水田区画も第11－1面検出のものより大きくなる傾向が認められた。

第13層からは、比較的まとまった量の土器を検出した。特に畦畔の除去中に、完形の土器が検出されており、それらは畦畔を築く際に、意図的に埋め込まれたものと考えられる。

第13b層はシルト～細礫からなる水成堆積層で、植物遺体を含むラミナの水平堆積が認められる部分もあった。断続的に堆積した分厚い洪水砂である。第13b面では、第13面で検出した畦畔に先行する畦畔の痕跡とみられる遺構を検出した。

第14層（層厚0.1m以上） 弥生時代前期前半の地層と類推される。分解しない植物遺体を多く含む、強く暗色化した粘土質シルト層である。

第14－1・14－2層の2層に細分した。第14－1層は植物遺体が層状に混じり、土壌化層は認められなかった。第14－2層は細砂が混じる粘土質シルトで、分解の進まない植物遺体を多く含む。強く暗色化する細砂混じりの粘土質シルトである。

調査の掘削限界まで掘り下げた際、第14-1面および第14-2面は調査区の北東で部分的に検出されたに過ぎない。その範囲は、微高地にあっていたとみられ、それ以外の部分では、第14-1面以下はさらに標高がさがるものと考えられる。

第2節 遺構・遺物

この節では各遺構面の遺構の検出状況と、層ごとの遺物の出土状況を述べる。洪水砂を除去して検出した遺構面、つまり上面が洪水砂で覆われた遺構面で検出された遺構の場合、遺構面とそこで検出された遺構、もしくは遺構の痕跡は、同時に洪水砂で覆われたことが明らかである。それに対して遺構面を、耕作土層とみられるa層が覆っている場合、その遺構面は上層の形成時に耕作にともなう攪乱を受けたことが明らかである。a層の形成は、洪水砂や他から運び込まれた土で覆われるなどして断絶されないかぎり、継続的に進行する。したがって耕作土層の下面で検出された遺構は、その下層に帰属するものというよりは、上層の形成過程で成立したととらえられる場合が多い。遺構面平面図においても両者を区別する必要があると考え、上層の形成段階に成立したとみられる遺構は、遺構名を四角で囲って区別した。

なお実測図や写真を掲載した遺物個々の詳細に関しては、遺物観察表で記述しているのでそちらを参照されたい。ここでは実測できなかつた遺物の検出状況も含め、出土遺物の概要を述べることにしたい。

第1面（図5・図6）

江戸時代後葉から近代にかけての遺構面と考えられる。東西・南北に幅2mのトレンチを設定して1層を掘削した後、第1b層は機械掘削で除去したため、面的な調査は行っていない。ただトレンチの断面と、第2-2面を検出した段階で検出した、第1層に関係する遺構の状況から、その概要を把握することができたので、ここでまとめておきたい。なお調査区西部で、重機で掘削された、深い攪乱坑を多数検出した。

トレンチの断面でみると、高低差のないほぼ平坦な地形だったとみられる。島畠と、従来の調査で1b土坑とよばれている土坑、溝・井戸を検出した。それらの遺構は井戸を除き、ほぼ南北方向を指向する。調査区西部では2基の島畠の存在が推測された（1・4島畠）。島畠の北側の延長部分は08-1調査区においても検出されているものの、さらに09-1調査区の南側へも延長しており、それらの全長はなお不明である。第2-1面の島畠の立ち上がり部分に第1層が遺存していたことから、第1面に帰属するそれらの島畠の存在を認めることができた。それらは第1b層の堆積を契機として拡張されたものと考えられる。

第1b層で埋積される土坑（以下、1b土坑とする）は南北方向に細長く延びる長大なものと、平面形態が方形～長方形の太短いものの2者に分けられる。後者は調査区東寄りの部分に集中し、前者を切っているものがあつた。したがって南北方向に延びる細長い土坑が埋まった後に、太短い土坑が掘削されたとみられる。これらは水害復旧時の、粘土採掘を目的として掘削されたものと考えられる。土坑の深さは32土坑のような小規模なもので20cm弱と浅かったが、それより大規模なものでは40～50cmと、深いものも認められた。1b土坑には第2-1面の島畠上を掘削するものが多いが、一部は水田面を掘削する。埋土は第1b層を由来とする攪乱の進まない砂である。

5井戸は調査区西部に位置しており、分厚い洪水砂からなる第7b層まで掘り抜いた、素掘りの井戸である。21溝は平面形が不整形なのに加え、溝底に凹凸がみられたことから、畝溝の可能性があつた。

第2-1面（図7）

第1層、もしくは第1b層を除去して検出した近世の遺構面である。標高はT.P.+4.3～4.5m強で、北から南にかけてわずかに低くなる傾向が認められたものの、ほぼ平坦である。1b土坑による攪乱や、上層形成時の攪乱のため、旧地表面の遺存する範囲は限られていたものの、遺構の状況はおおよそ把握できたとみられる。

この面で検出した8基の島畠（西から11～14・26～29島畠）は、全て南北方向を指向し、北・南とも調査区外へと続く。これらの島畠の北側の延長部分は、08-1調査区での発掘調査の折にも検出されている。それによるとこれらの島畠の北端は、当調査区が該当する「走十四（ノ坪）」と、その北側の「走十五（ノ坪）」

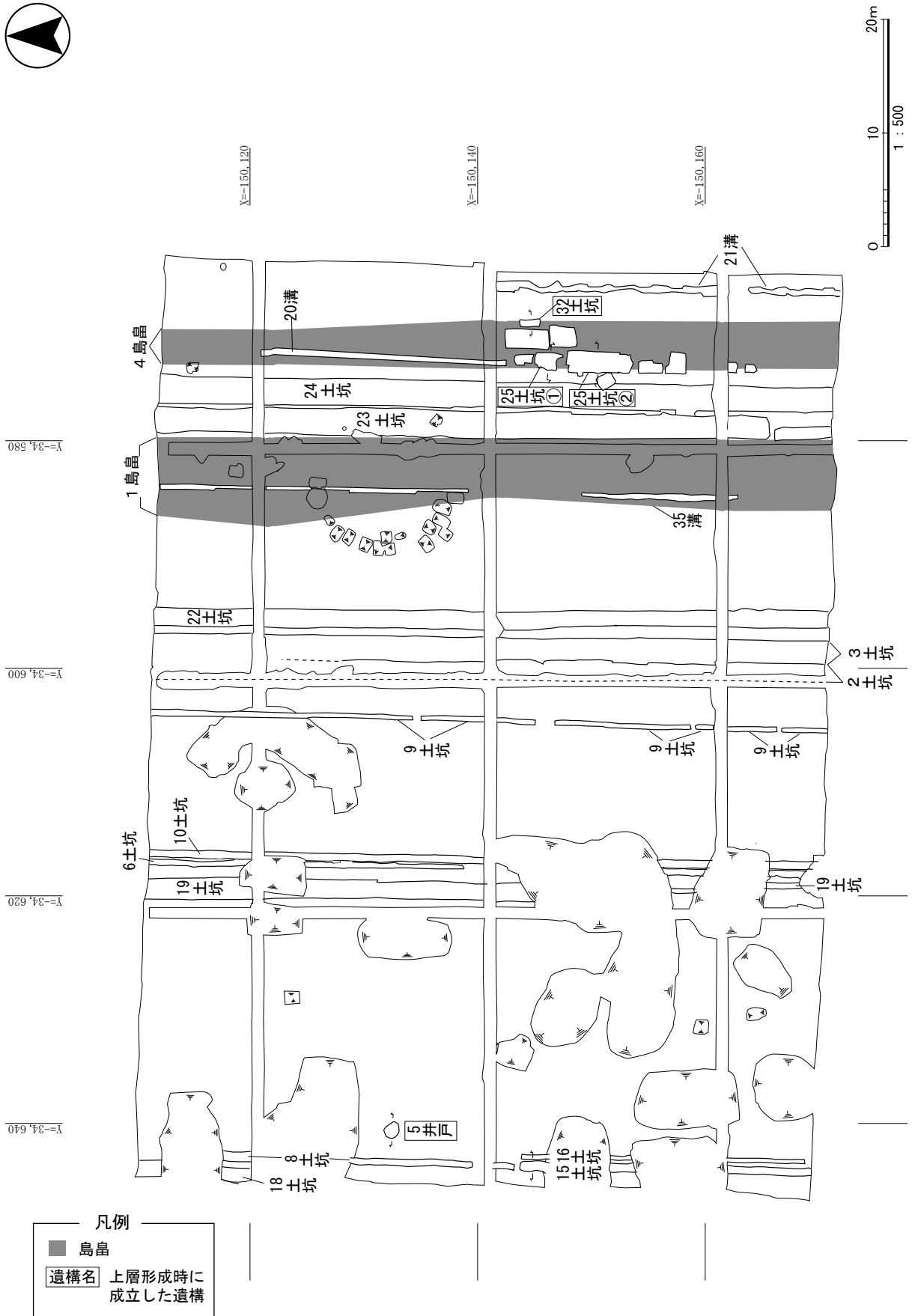


図5 第1面平面図

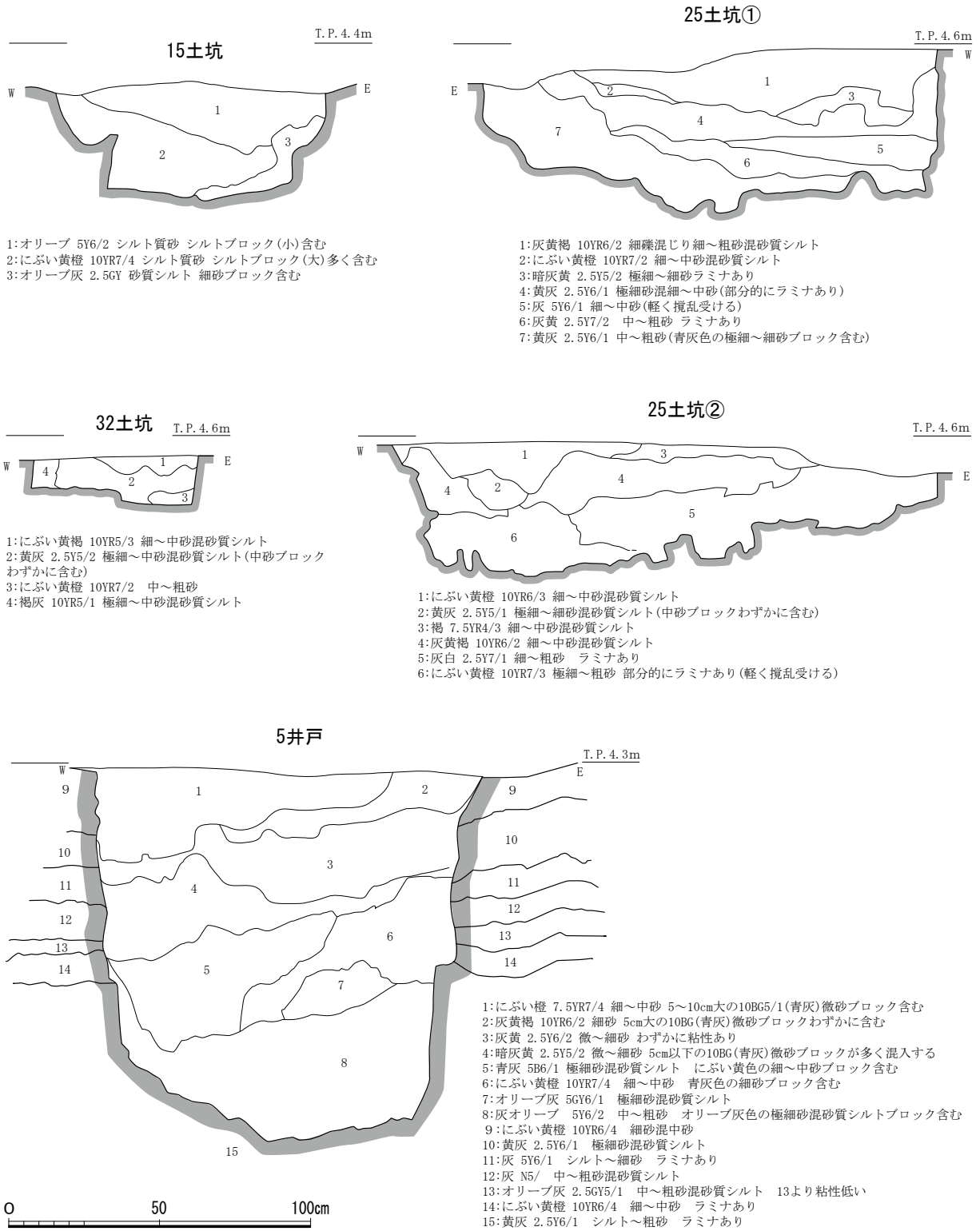


図6 第1面検出遺構断面図

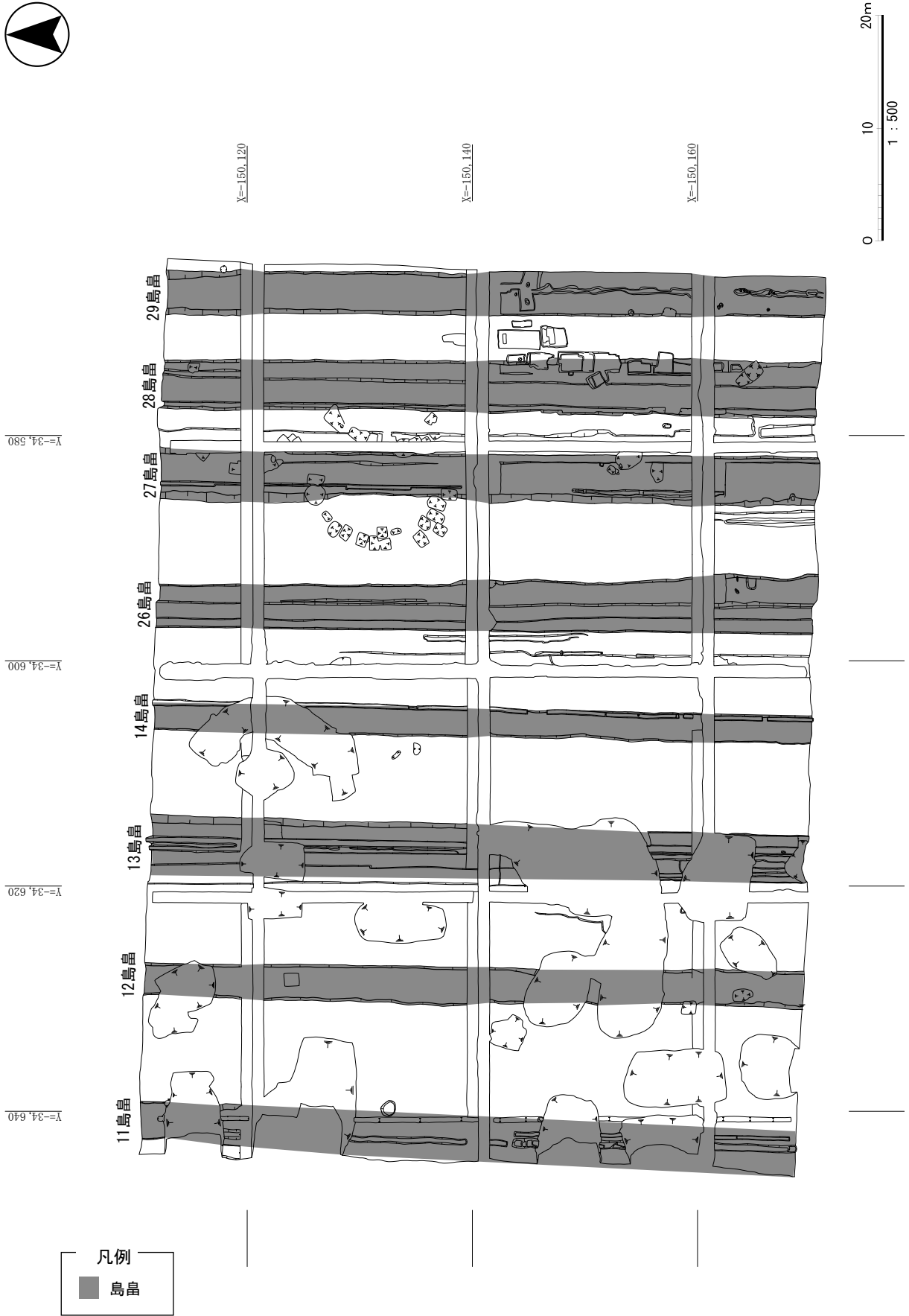


图7 第2-1面平面图

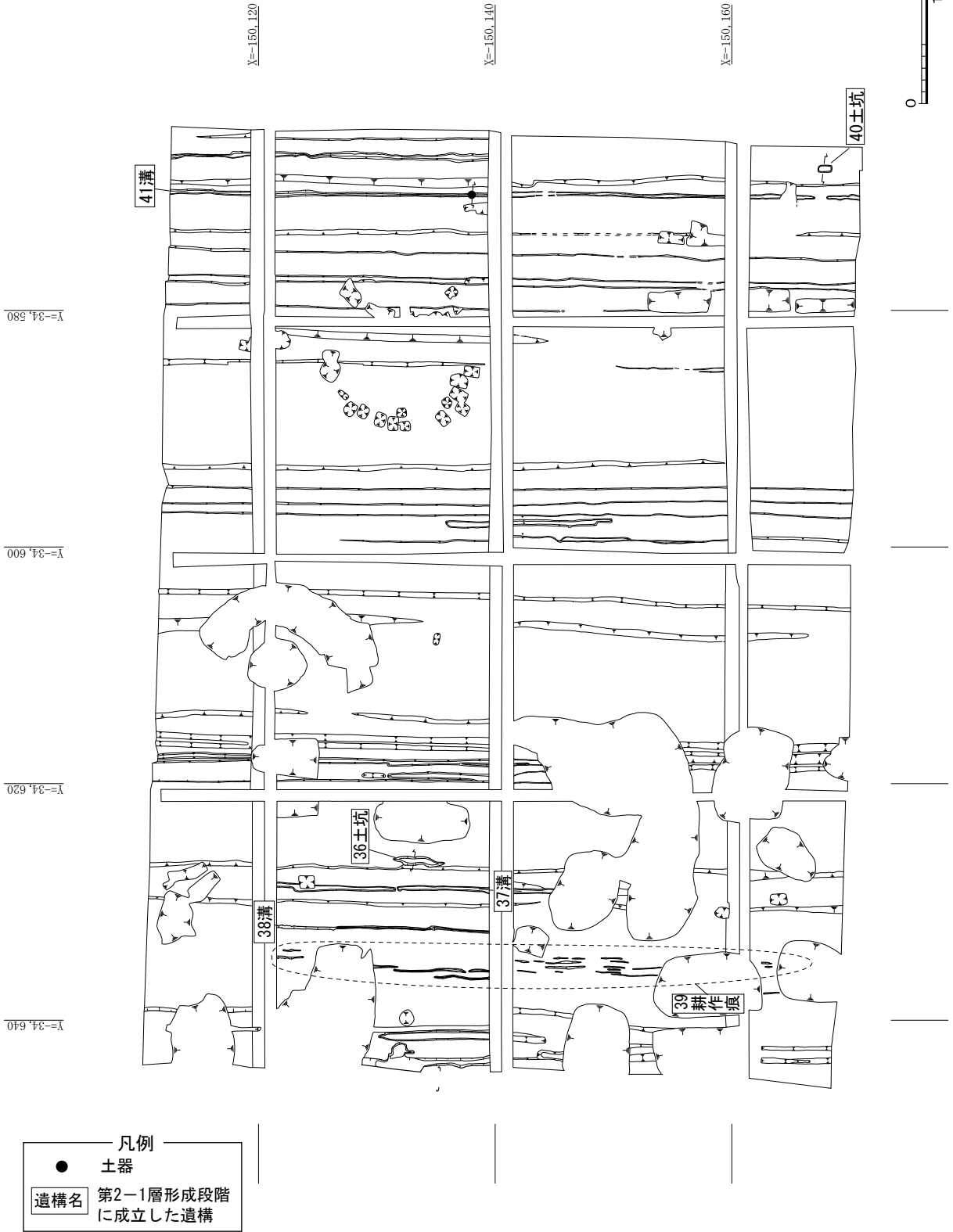


図8 第2-2面平面図

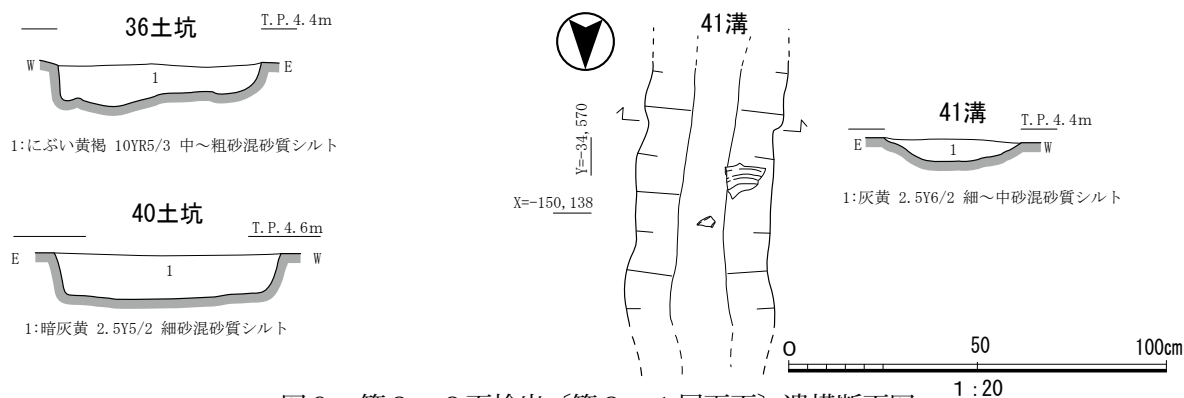


図9 第2-2面検出〔第2-1層下面〕遺構断面図

を区切る坪境畦畔の手前、2～3mのあたりまで延長していたことがわかる。

11島島を除き、他の島島はすべて地下げ型の島島である。12島島以外は、水害復旧のため上層から掘り込まれた長大な1b土坑により、一部を破壊されていた。したがって島島の横幅は、1b土坑の重ならない部分や、土層断面観察の結果から復元的に求めたが、おおむね3～5mの範囲におさまるとみられる。ただ隣接する島島との距離は3～10mと、やや粗密が認められる。島島の上部は上層の形成時に攪乱されたとみられ、周囲との比高差はおおむね10cm前後とわずかだった。

第2-2面 (図8・図9)

第2-1層を除去して検出した近世の遺構面である。標高はT.P.+4.1～4.5mで、東から西に向けて徐々に低くなる傾向が認められたが、全体的にみてほぼ平坦である。この面では土坑や、南北方向を指向する溝を検出したが、そのうち調査区西寄りの部分で検出した、細くて浅い南北方向を指向する溝状の遺構群は、耕作痕と考えられたことから39耕作痕と一括した。なお第2-2面を覆う第2-1b層の堆積がほとんど認められなかったことから、この面で検出した溝や土坑は第2-2層上面に帰属するものではなく、第2-1層の形成過程で生じた、第2-1層下面遺構ととらえられる。島島と判断できる高まりは検出しなかったが、上層において耕作が進む過程で攪乱され、第2-2面に伴う島島の盛土部分が失われてしまった可能性は否めない。

41溝の埋土から、播鉢片1点を含む、2点の陶器片を検出した。

第2-3面 (図10・図11・図12)

第2-2層を除去して検出した近世の遺構面である。a層は上層の耕作土層が形成される過程で失われたとみられ、ごく部分的にしか認められなかった。したがっておおむね第2-3b層の上面で、第2-3面を検出している。標高はT.P.+4.1～4.3m弱で、北から南にかけて徐々に低くなる傾向がある。

第2-3層の由来となった第2-3b層は、第3面で検出した66流路によって運ばれた水成堆積層で、主に調査区西寄りの箇所、幅12mの範囲で南北方向に分布する他、東寄りの部分にも、2～3mの幅で南北方向に帯状に分布する箇所を検出した。前者ではその上面で、南北方向の浅い溝や土坑を多数検出した。それらは第2-2層の形成過程で攪乱され、ほとんど依存しない第2-3層が形成される過程で成立したものととらえられる。遺構の深度は20～30cmとおおむね浅く、10cm前後のものもあった。

東寄りの部分で帯状に検出した第2-3b層からは、第2-3層上面に帰属する島島の存在がうかがえる。おそらくその島島は、耕作土も含めた盛土の大部分が上層の形成時に削平され、芯の基部がかるうじて残存したものとみられる。周囲との比高差はほとんど認められなかった。

第1層～第2層の出土遺物 (図13)

第1層を掘削中に96点の遺物が検出した。うち磁器と陶器が併せて55点と大半を占める。磁器では「くらわんか茶碗」が大半を占めるが、コバルトブルーの染料を用いて絵付けされた、19世紀以降とみられる磁器

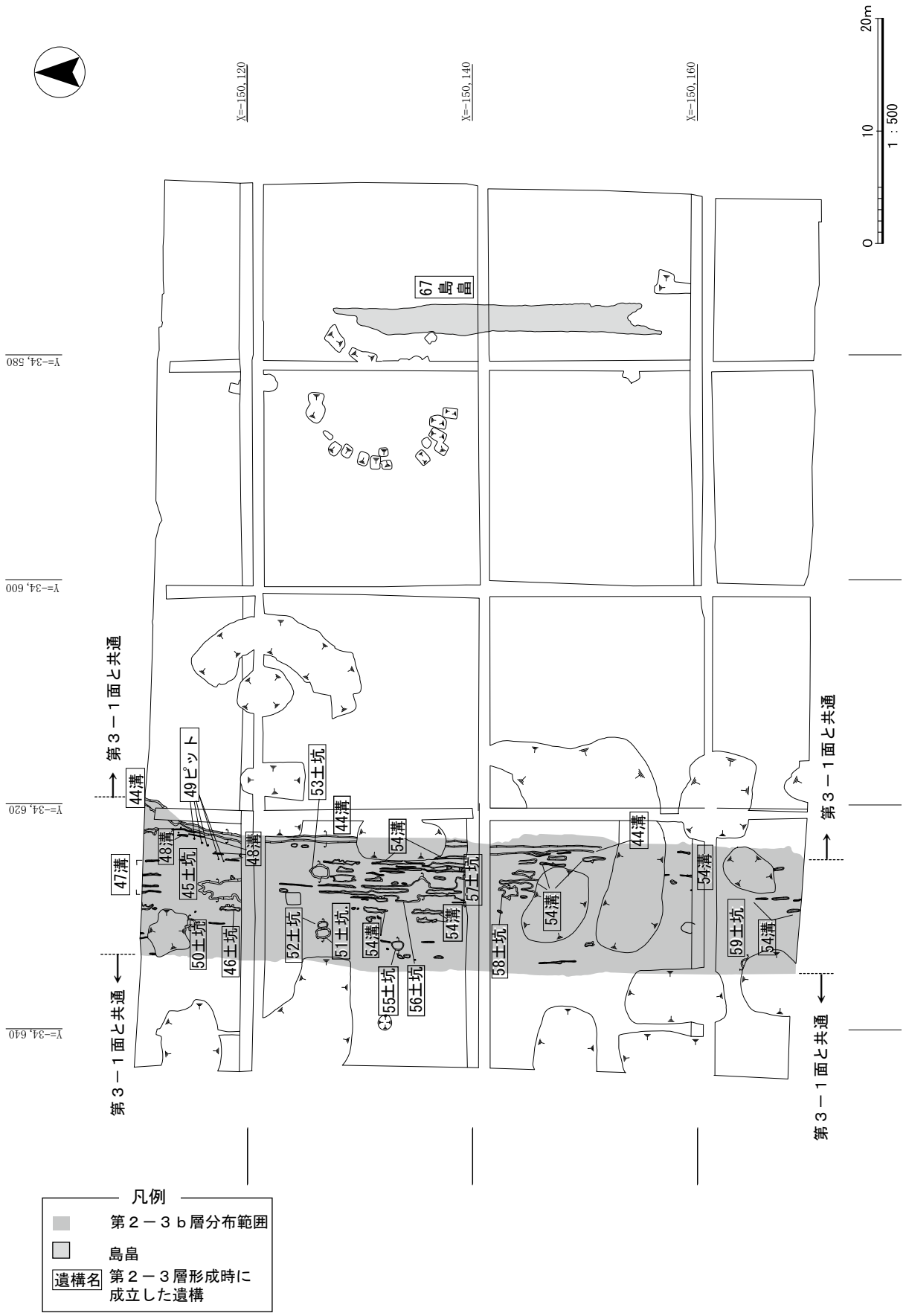


図10 第2-3面〔第2-3b層上面〕平面図

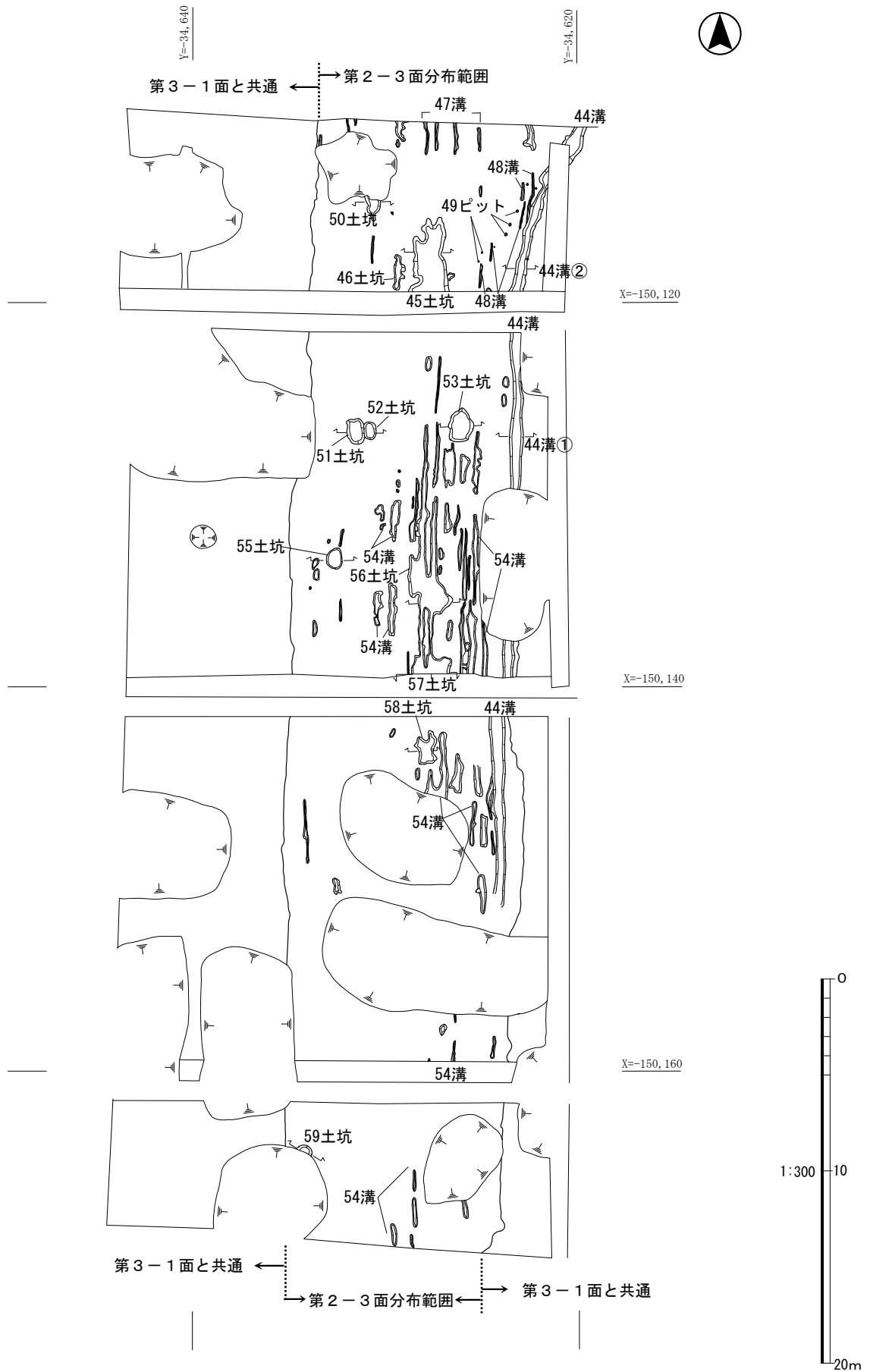


図11 第2-3面〔第2-3 b層上面〕平面図(部分)

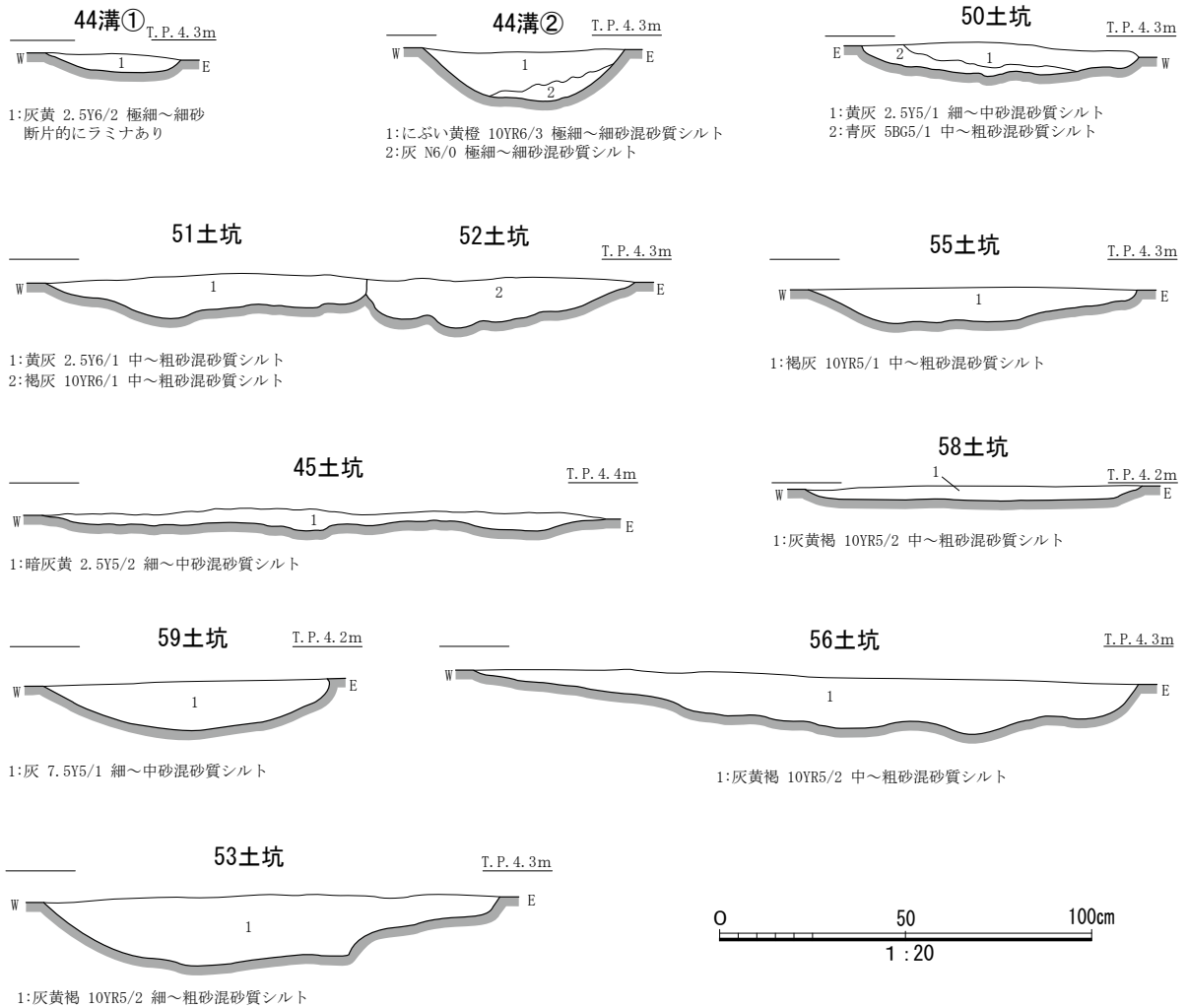


図12 第2-3面〔第2-3層上面〕検出、第2-3層下面遺構断面図

の破片も10点弱含まれる。陶器は肥前系、京焼系、備前系、美濃・瀬戸系等が含まれており、多数を占めるのは肥前系の陶器である。この他、瓦質の火鉢と土管の破片が数個体分ずつ、鍋の破片1点を含む土師質焼成土器の破片が6点、型押しの人形が1点出土した。以上の土器・土製品は、近世後半以降の時期に含まれるとみられる。その他に砥石やサヌカイトの剥片、土師器、須恵器の破片が少量含まれる。図13-1～10は第1層出土遺物である。図13-11は攪乱から採取した遺物だが、前掲遺物と同時期とみられることから、参考資料として提示した。第1b層出土遺物には、第1b層で埋まった土坑の埋土から検出した5点がある。細片のため図化できなかったが、肥前系とみられる磁器2点、備前系とみられる陶器2点、瓦1点がある。第1a層出土遺物と類似する様相で、ほとんど時期差は感じられない。

第2-1層を掘削中に16点の遺物を検出した。磁器は4点で、いずれも肥前系とみられ、18世紀のものにとらえられる。そのうち2点を図化した(図13-12・13)。陶器片は4点で、肥前系陶器とみられるものと、播鉢が各1点である。それ以外には土師質焼成土器・瓦質土器・須恵器の破片が各2点、瓦・須恵質土器の破片が各1点ある。大半が細片で時期のわかるものは少ないが、磁器には19世紀まで降るものは認められない。

第2-2層出土遺物は46点で、瓦質土器が14点と最も多いが、いずれも細片で器種を特定できたのは、瓦質の土管とみられる破片が1点のみである。それ以外の遺物では瓦が7点、陶器8点、土師器皿6点、土師質焼成土器5点、砥石(その可能性がある石片1点を含む)3点、磁器2点、須恵質土器1点がある。陶器には

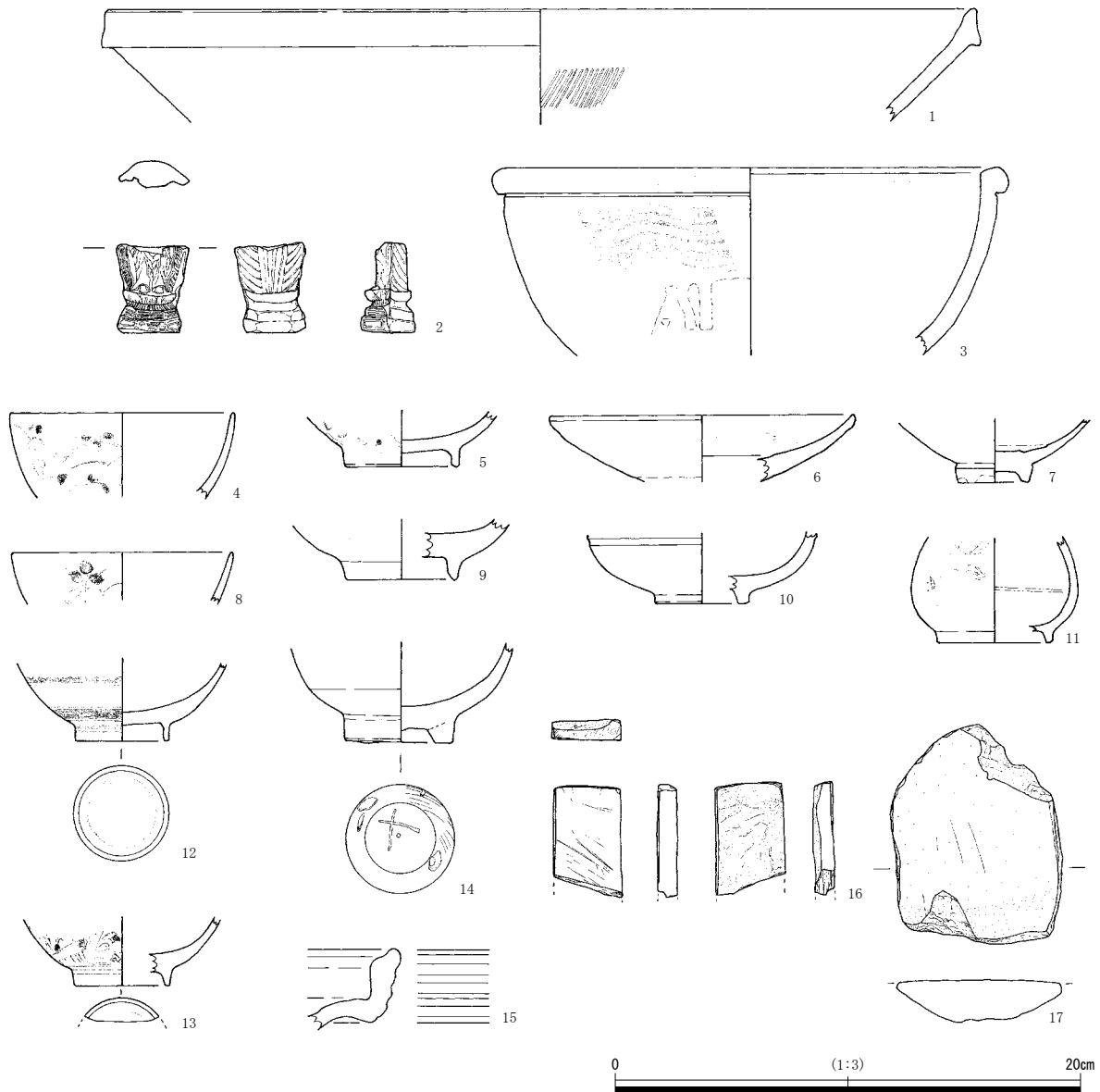


図13 第1層～第2-2層出土遺物実測図〔1～10:第1層、11:攪乱、12・13:第2-1層、14～17:第2-2層〕

備前系、美濃・瀬戸系、肥前系のものが含まれ、うち2点を図化した(図13-14・15)。磁器は、肥前系青磁と「くらわんか茶碗」が1点ずつで、いずれも18世紀代のものととらえられる。第2-1層と出土遺物の構成は近似するが、磁器の占める割合が非常に小さい点は留意される。

第2-3層出土遺物は瓦質土器3点、土師質焼成土器1点、土師器皿1点である。いずれも細片のため図化し得なかったが、瓦質土器には羽釜と風炉の口縁部が各1点含まれていた。羽釜の口縁部は、断面が「く」字状に軽く外反するもので、風炉とともに中世末から近世初頭に位置づけられるのではないかと考える。第2-3b層出土遺物は瓦質土器の破片が1点のみである。

以上、第1層から第2-3層までの遺物を概観すると、各耕作土層の形成時期はほぼ近世の範疇でとらえることができる。その一方で下層に向うにつれて、徐々に出土遺物の様相に変化も生じるのが見てとれた。第1層は江戸時代の後葉、おそらく18世紀後葉以降に形成されたとみられる。第1b層との時期差がほとんどないことから洪水砂の被覆後、あまり時間を置かずに耕作地が復旧されたとみられる。第2-1層・第2-2層は当調査区内で見える限り、おそらく18世紀以降の時期に形成されたと考えられる。第2-3層は遺物の出土点数が少ないが、明らかに上層出土遺物より時期がさかのぼる傾向がとらえられる。既往の調査成果を勘案す

ると、17世紀頃に形成された耕作土層と考える。

第3-1面 (図14・図17)

第2-3b層を除去して検出した中世後半の遺構面である。第2-3b層が認められない部分では、第2-2層を除去した段階で、第3-1面を検出した。また第3-1面検出段階で、第3-1b面以下の段階で作られた島島の頂部が露出している部分が認められた。標高はT.P.+4.0~4.4m弱で、Y2トレンチ北半部周辺で最も高く、東側・西側・北側にむけて徐々に下がる傾向がみられた。第3-1層は耕作土ととらえられるが、耕作期間が比較的短かったためか、ラミナを残すブロック土が断片的に含まれ、あまり土壌化が進んでいない状況が認められた。

調査区西部で、南北方向を指向する幅約12mの66流路を検出した他、溝・ピット・土坑や南北方向の耕作溝を検出した。それらは66流路を除くとほぼ第2-2層除去段階で検出しており、第2-2層もしくは第2-3層の下面遺構ととらえられる。また調査区北側で検出した43・42ピットは、第3-1b層の上面が露出している部分で検出していることから、第3-1層の下面遺構である可能性もある。

66流路は深さ30~40cmで、溝底は平坦である。その東肩は第3-2面の87畦畔と、西側は同89畦畔の位置とほぼ合致する。したがって66溝は、第3-2面段階の土地区画を踏襲した微地形によって、周囲よりわずかに標高が低くなっている箇所には水が流れた結果、生じた可能性も考えられる。63溝は66流路の西肩から6~7m西に離れたところを、ほぼ並行してはしるとみられるが、全体の規模は不明である。深さは10cm前後と浅い。68土坑とひとくくりにした土坑群は、南北方向に連なるようにならび、平面形は不整形で、深さもおおむね5cm以下と極めて浅い。この深度は、耕作溝と考えられる69溝や71溝とも共通しており、68土坑もおそらく耕作に伴うものか、畝溝の痕跡ととらえられる。

第3-1b面 (図15・図17)

第3-1層を除去して検出した。逆級化する細粒の、厚い洪水砂である。標高はT.P.+3.9~4.3mで、77島島とその東側に位置する溝状の落ち込みのさらに東側の部分と、調査区の東端部分で標高がT.P.+4.3m前後と、周囲に比べてやや高い。

第3-1b面検出段階で、第3-2面の島島上面が露出する箇所を複数認めた。そのうち第3-2面に帰属する85島島に関しては、第3-1b層を帯状に盛りあげた部分を認めた。これにより、85島島の北側を第3-1b層で拡張した77島島が存在したことがわかった。その東側には、これに沿って南北方向を指向する、幅5~7mの浅い落ち込みを検出した。この落ち込みは島島造成のために、土を掻き揚げた際に生じたものととらえられる。この面で検出した土坑やピット等の遺構は、主にこの部分で検出した。したがってこれらの土坑やピットは、島島造成作業に伴って副次的に生じたものである可能性もある。

第3-2面 (図16・図17)

第3-1b層を除去して検出した、中世後半の遺構面である。標高はおおむねT.P.+3.9~4.0mでほぼ平坦だが、89畦畔より西側の部分と、84畦畔・99畦畔・93島島で囲まれた水田区画は、周囲より若干標高が低く、T.P.+3.8m台である。

細粒の洪水砂(第3-1b層)に覆われていた部分もあったことから、おおむね遺構面の遺存状態は良好であった。南北方向の島島を5基(西から88・85・93・92・90島島)検出した。これらはすべて洪水砂を芯にして築かれていることから、洪水砂で覆われてしまった水田を復旧する過程で築かれ、耕作されたものと考えられる。88島島を除くと、東に位置するものほど島島の北端の位置が徐々に南にずれるのが見て取れる。

85・90・93島島は、その前身となるものが下の遺構面でも検出されたことから、度重なる洪水の被害を契機とし、すでにある島島に盛土・拡張しながら、長期間にわたって使用したものであることがわかる。また島

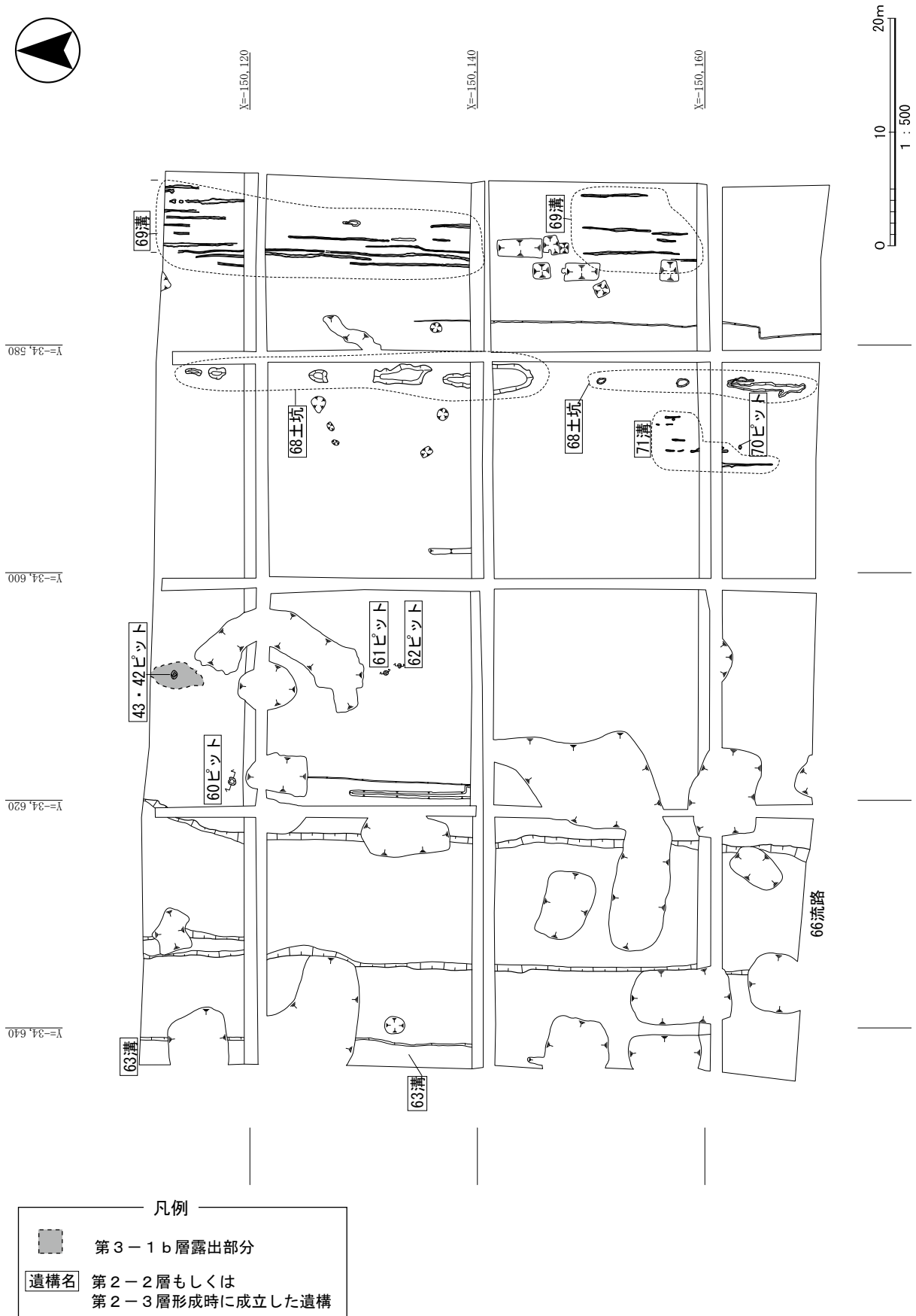


図14 第3-1面平面図

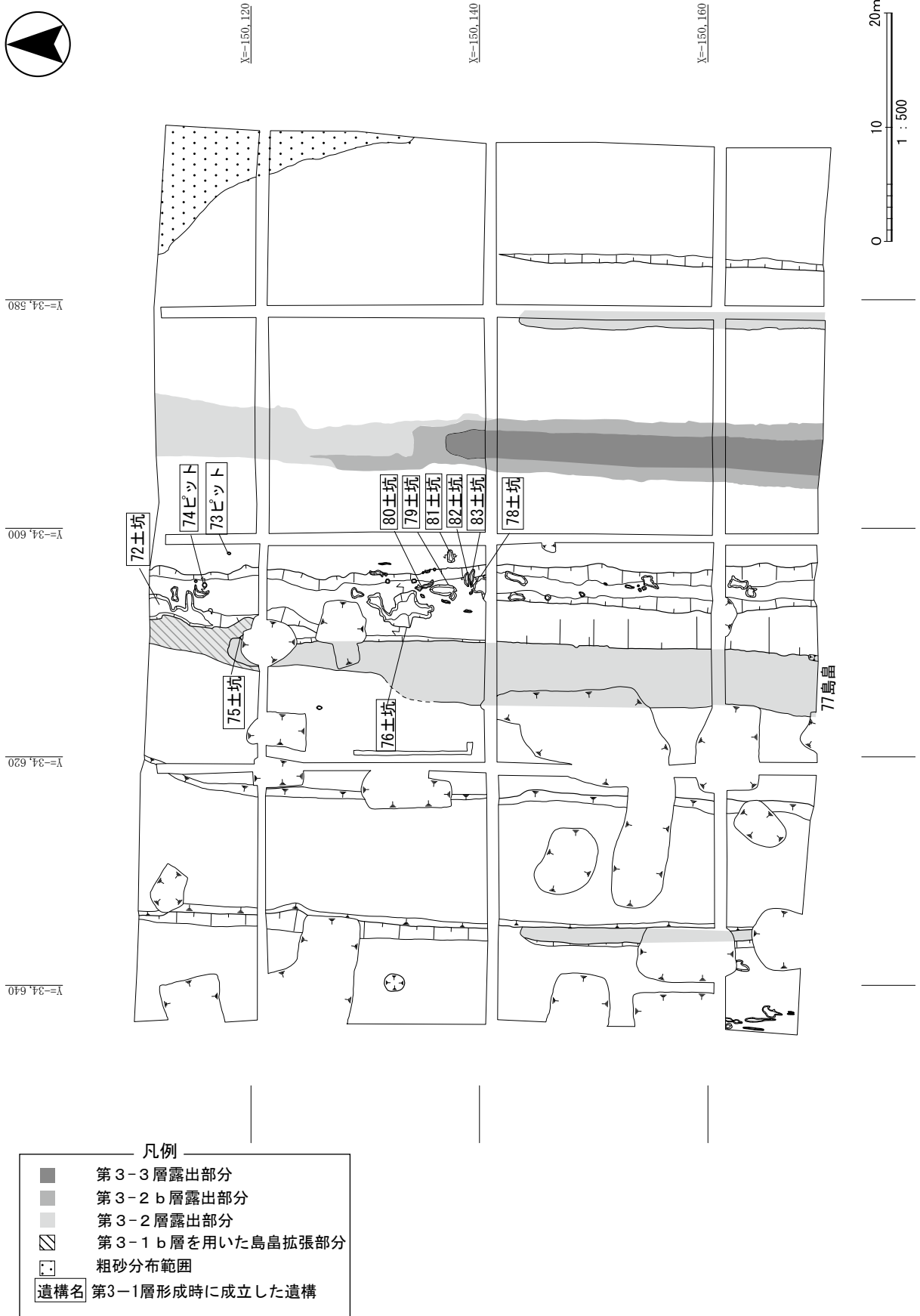


図15 第3-1 b面平面図

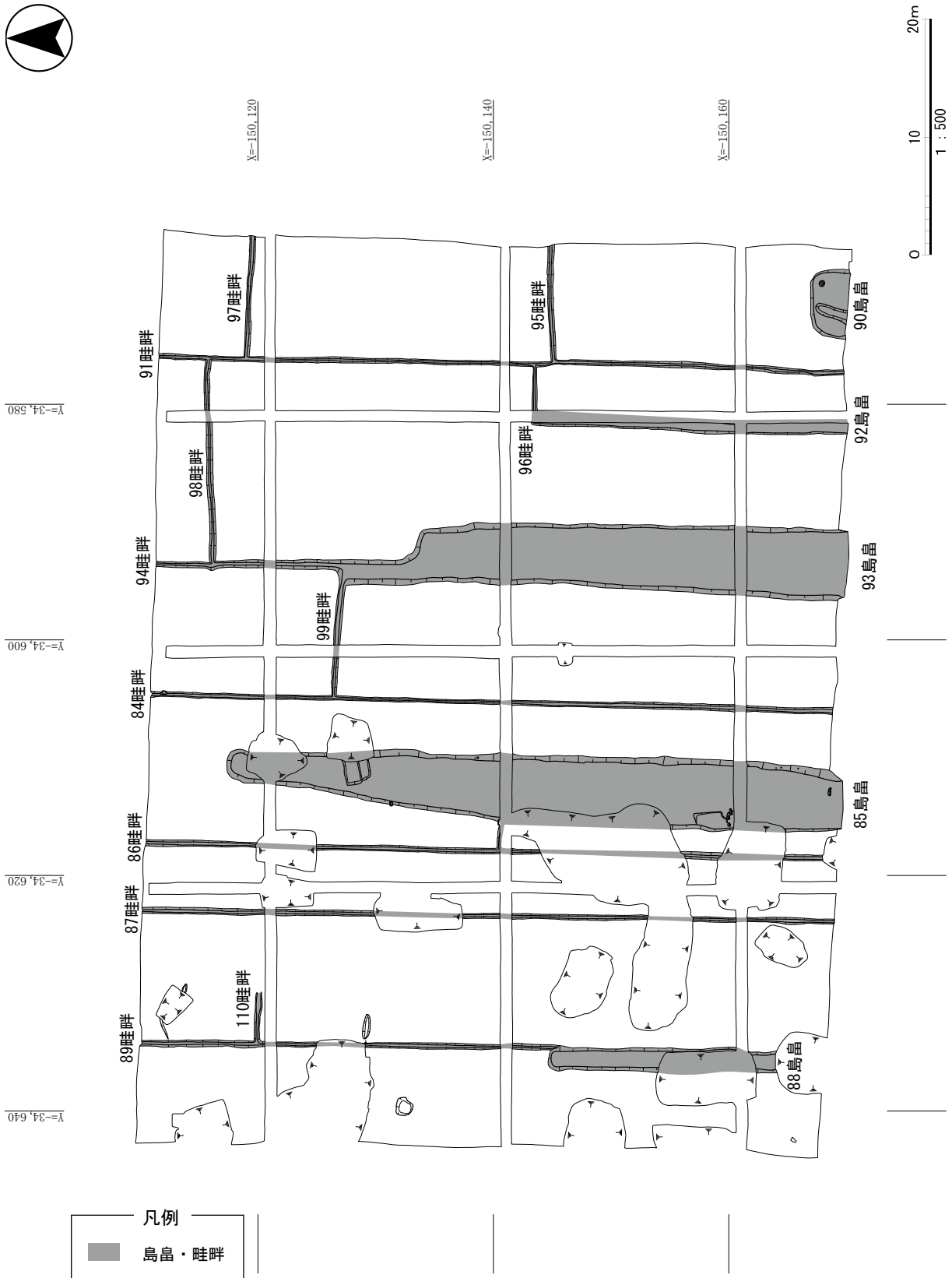


图16 第3-2面平面图

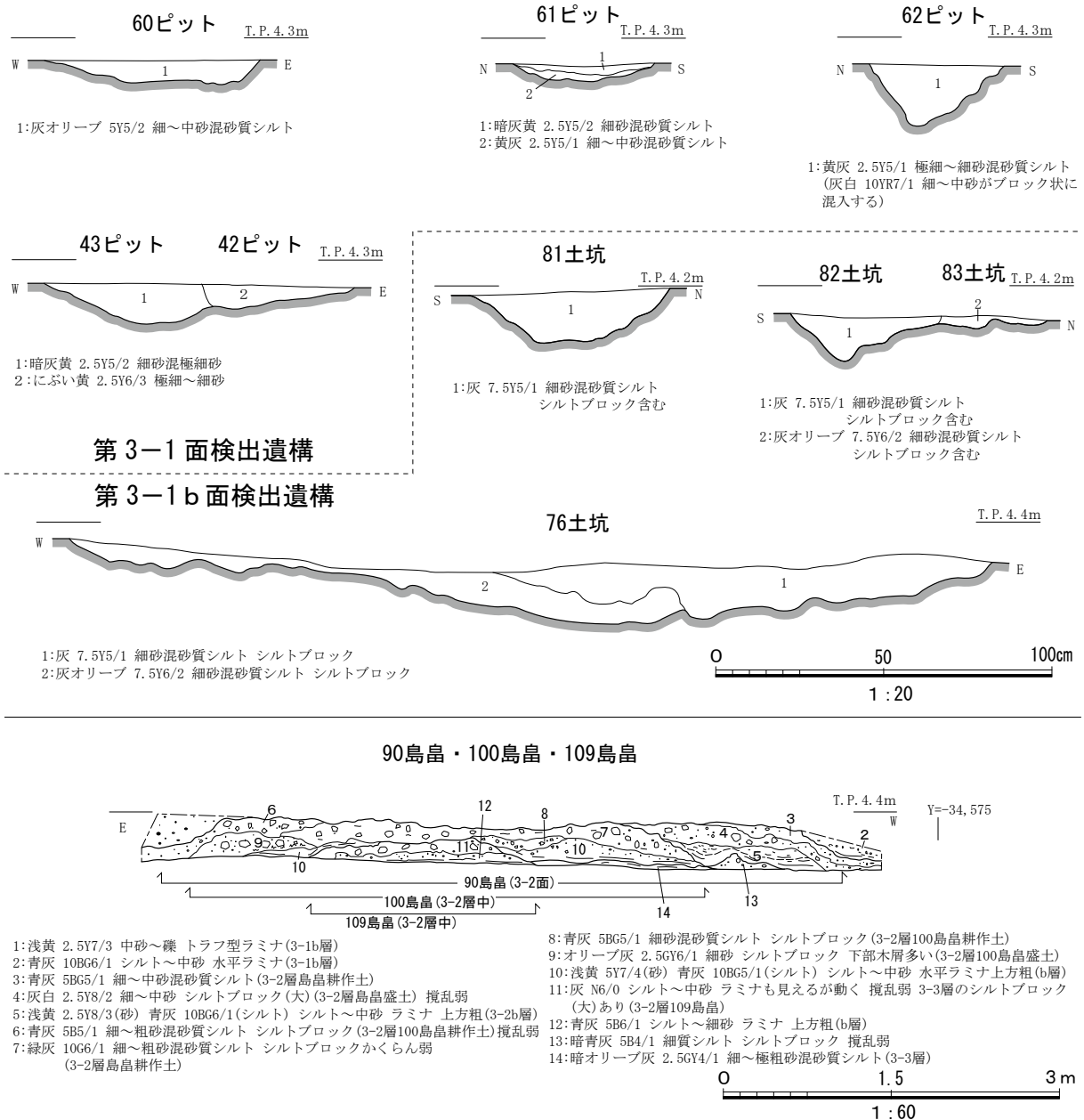


図17 第3-1面検出〔第2-2層下面〕遺構・第3-1b面検出〔第3-1層下面〕遺構・第3-2面検出遺構断面図

畠の拡張の過程を比較すると、特に調査区南東部分で、洪水砂の被覆が頻繁だった様子がうかがえた。

畦畔は島畠と同方向の、南北方向のものが地割の基準となっていたとみられ、隣り合う南北方向の畦畔をつなぐ、東西方向の畦畔は短い。93島畠の北端部には94畦畔が接続しており、両者が一体となって土地区画の役割を果たしていたとみられる。88島畠と92・93島畠も同様であるが、85島畠と90島畠はその限りではない。南北方向の畦畔の北側の延長部分は08-1調査区でも検出されている。それによると94・86・87畦畔の延長部分は、当調査区が該当する「走十四(ノ坪)」と、その北側の「走十五(ノ坪)」を区画する東西方向の坪境畦畔につながるが、それ以外の畦畔はそのやや手前で途切れる。

第3-3面(図18)

第3-2層もしくは第3-2b層を除去して検出した中世後半の遺構面である。調査区東半部では、第3-2層の下部に、薄く第3-2b層が認められたことから、旧地表面の状況を把握することができた。それに対

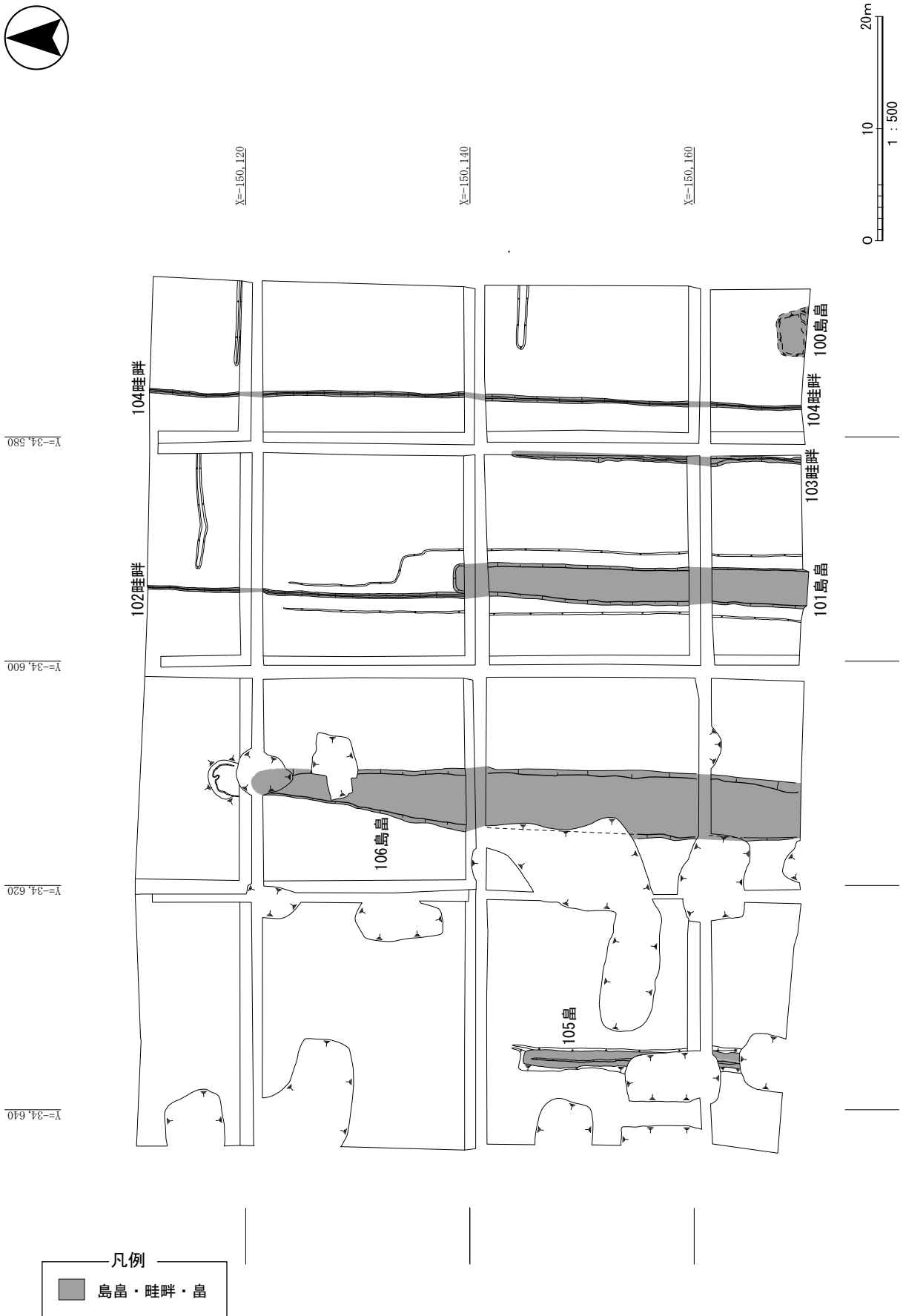


图18 第3-3面平面图

し、調査区西寄りの部分では第3-2b層が面的に認められなかったことから、上層の形成過程で旧地表面はおおむね削平されたと考えられる。ただ島島の拡張の際に盛られた土を除去した段階で、極めて部分的にはあるが旧地表面の状況を確認できた。標高はおおむねT.P.+3.7~3.9m強でほぼ平坦である。

106島島は第3-2b層を除去することで検出したものである。このことから、第3-2面で検出した島島85は、106島島を洪水砂で北側に拡張したことがわかる。第3-2面で検出した88島島の前身となる島島は、この面では存在しなかった。ただ第3-2b層を盛り上げた88島島の芯の土を除去した段階で、島の畝とみられる南北方向に軸をもつ浅い溝状の凹凸を複数認めた。それらは調査区西寄りの部分において、部分的に第3-3面の地表面が遺存していたもので、保存状態のよい畝溝と考えられたことから、それが明瞭に残存する部分を105島とした。東区で検出した101・103島島は、第3-2面で検出した93・92島島の前身となる遺構である。同様に第3-2面検出の91畦畔とほぼ同じ位置に、その前身となる104畦畔を検出した。なお、調査区の東半における東西方向に延びる畦畔状の高まりは、擬似畦畔である。

第3層の出土遺物 (図19)

第3-1層出土遺物は2点で、瓦質土器と土師器が各1点である。いずれも細片で図化し得なかったが、土師器の方は、水注に形態が似る、小型土器の破片とみられる。第3-1b層出土遺物は6点で、ほとんどが細片だったものの、うち2点を図示した(図19-18・19)。出土遺物の内訳は、図示したものも含めて瓦質土器2点、土師器2点、瓦1点である。瓦質土器は羽釜と、図を掲載した風炉が各1点出土している。土師器のうち1点は薄手で口径が小さく、粗雑なつくりの皿の破片とみられ、中世末葉の時期をさかのぼることはないとする。瓦の破片と用途不明木製品も各1点出土した。これらの遺物と、上層における遺物の出土状況とを勘案すると、第3-1層は16世紀初頭を上限、17世紀を下限とする時期に形成されたと推測することができるが、今回の調査成果のみでは、判断材料に欠ける状況である。既往の調査成果も勘案すると、当層の形成時期は16世紀後半頃を中心とする時期ではないかと考えられる。

第3-2層出土遺物は103点である。ほとんどが細片で、器種や年代のとらえられないものが大部分だったが、うち6点を図化した(図19-21~26)。図化できなかった遺物のうち、最も点数が多いのは土師器皿の破片で、40点を数える。瓦質土器は22点あり、その中には挿鉢と判断できる破片が、図化したものを含めて8点含まれていた。その他には羽釜とみられる破片も数点含まれる。須恵器の破片は9点で、うち中世須恵器とみられる破片は5点だった。いずれも東播系で、鉢が2点、甕が3点である。鍋や釜等からなる土師質焼成土器と、瓦器が各12点出土したが、図化したもの以外はいずれも細片で、器種や器形を特定できるものはなかった。陶器は4点で、備前と常滑とみられるものが含まれる。瓦の破片は3点出土した。図19-23の土師器皿は、丸底化しつつ体部を外方に直線的に立ち上げて口縁部を丸くおさめる形状から、16世紀の範疇でとらえられる可能性がある。それらの他に、第3-2面検出の88島島の盛土を掘削中に出土した瓦器片1点があり、第3-2層出土遺物と同等に扱うことができる。これは瓦器碗底部の破片で、高台をもたない時期のものであることから、14世紀後葉以降の時期のものにとらえられる。

既往の調査で第3-2層の形成時期は16世紀前半から中頃と考えられており、今回の調査成果とも矛盾しない。ただ判断材料が少ないため、今回の出土遺物のみでは、時期をその範囲まで特定することはできなかった。なお、第3-2b層においては遺物を検出できなかった。

第3-3層出土遺物は44点である。ほとんどが細片で、図化できたのは1点のみである(図19-27)。これは底部が欠損しているものの、体部が外方に直線的に立ち上がる様子や口縁端部の形状からみて、図19-23と同系統のものにとらえられる。出土遺物のうち最も点数が多かったのは、皿を主体とする土師器18点で、鍋や釜等からなる土師質焼成土器の10点がそれに次ぐ。その他に瓦器6点、瓦質土器3点、須恵器4点、陶

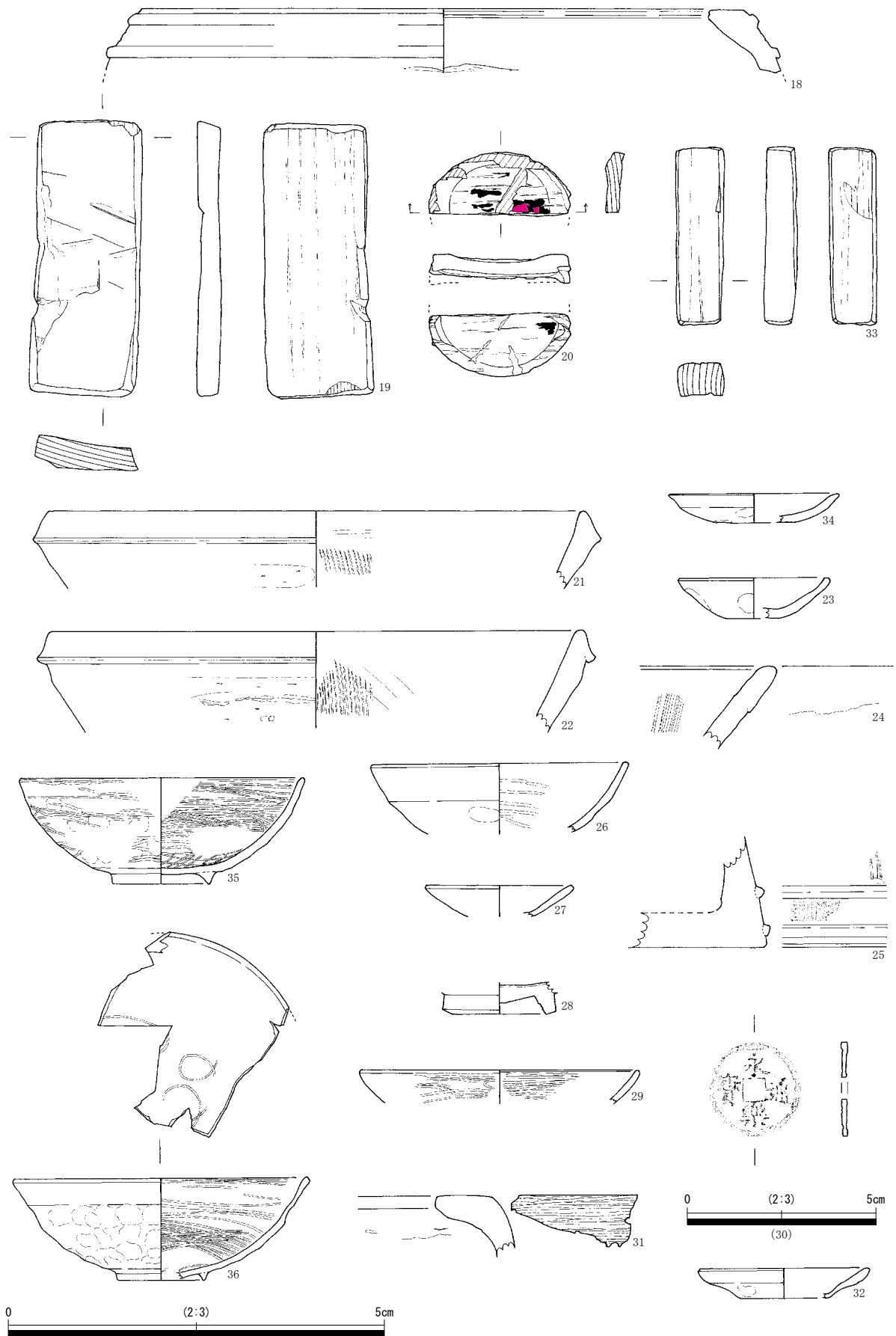


図19 第3-1b~第3-4層・側溝(第3-2層~第7層)出土遺物実測図〔18・19:第3-1b層、20~25:第3-2層、26:第3-2・3層、27:第3-3層、28・29:第3-3・4層、30~32:101島畠、33~36:第3-2~第7層〕

器2点、弥生土器1点がある。

それらの他に、第3-3面で検出した101島島の盛土を掘削中に出土した遺物（図19-30~32）、105島島の盛土出土遺物がある。これらは前者を第3-3層、後者を第3-3b層出土遺物と同等にとらえることができる。101島島の盛土出土の遺物点数は30点で、皿を主体とする土師器11点、鍋や釜等からなるとみられる土師質焼成土器9点、中世須恵器が主体の須恵器片4点、備前系の陶器片・瓦質土器・瓦器が各1点である。なお図19-32と類似する土師器皿の破片は、第3-3層出土遺物にも散見された。105島島盛土からは、瓦質土器と土師器の破片が各1点出土したが、いずれも時期の判別はできない。以上、第3-3層出土遺物を概観すると、時期は降っても15世紀後葉から16世紀初頭まででおさまる傾向が指摘できる。

第3-4層は、土層観察によりその存在を把握することはできたが、分布範囲が限られる上に層厚が薄く、第3-3層掘削時に一緒にはがれてしまう状況で、第3-4層出土遺物として検出できたものはなかった。図19に第3-3層・4層出土遺物として28・29を掲載したのはそのためである。図示したものの以外では土師器が44点と最も点数が多い。大半が皿の破片で、図19-32と同系列のものが散見された。瓦質土器は12点で、その中には片口鉢2点と羽釜4点が含まれる。瓦器碗の破片は11点で、器壁が薄くてつくりの雑なものが大半を占める。土師質焼成土器の破片も11点で、羽釜2点が含まれる。その他に青磁片4点と白磁片1点、卸目皿片1点が出土した。これらをみると第3-3層出土遺物に比べ、磁器が一定量含まれていることが指摘できるが、それ以外はほぼ類似する様相を示す。図19-33~36は、第3-2層から第7層までの深さで土層観察用トレンチを掘削中に出土した遺物で、参考資料として提示している。

第4-1面（図20）

第3-3層ないし第3-4層を除去して検出した、中世後半の遺構面である。上層形成時に攪乱されて、当時の地表面はほとんど遺存していないとみられる。標高はおおむねT.P.+3.7~3.8mでほぼ平坦だが、Y1ラインから108島島の東側にかけてと、調査区の南西隅の部分で、標高が南北方向にやや低くなる傾向を認めた。

島島を2基（107・108島島）検出した。これらは、第3-3面で検出した島島（106・101島島）の前身となるものである。これらが第3-3面以降の段階で拡張されていく過程をみると、横幅を若干広げつつ、主に北側に延長させる傾向があったことがわかる。

第4-2面（図21）

第4-1層を除去して検出した中世後半の遺構面である。Y1トレンチと117島島の間部分で、南北方向に延びる段差が認められ、その東側には第4-2層が分布しなかった。したがって第4-2面はそれより西の部分でのみ検出している。第4-2面の標高はおおむねT.P.+3.7m前後と平坦だが、111島島と117島島の間部分では、標高がT.P.+3.6m前後とわずかに低くなる傾向を認めた。

この面で検出した111・117島島は、第4-1面で検出した107・108島島の前身となるものである。また調査区西半部において、第5層あるいは第4-2b層が南北方向に帯状に露頭する状況や、その延長部が南北方向に、若干標高が高くなる状況を認めた。それらは上層が形成される過程で、盛土の大半を失った島島の、基底部がかろうじて残存したものととらえられたことから、第4-2面に存在した島島の痕跡であると推測した（西から112・113・116島島）。したがって第4-2面では、上記と合わせて計5基の島島が存在したと考えられる。そのうち最も短い111島島の全長は29m強である。第4-1面で検出した107島島は、111島島を祖形とし、その横幅を広げつつ南北方向にも拡張させて形成したことがわかる。

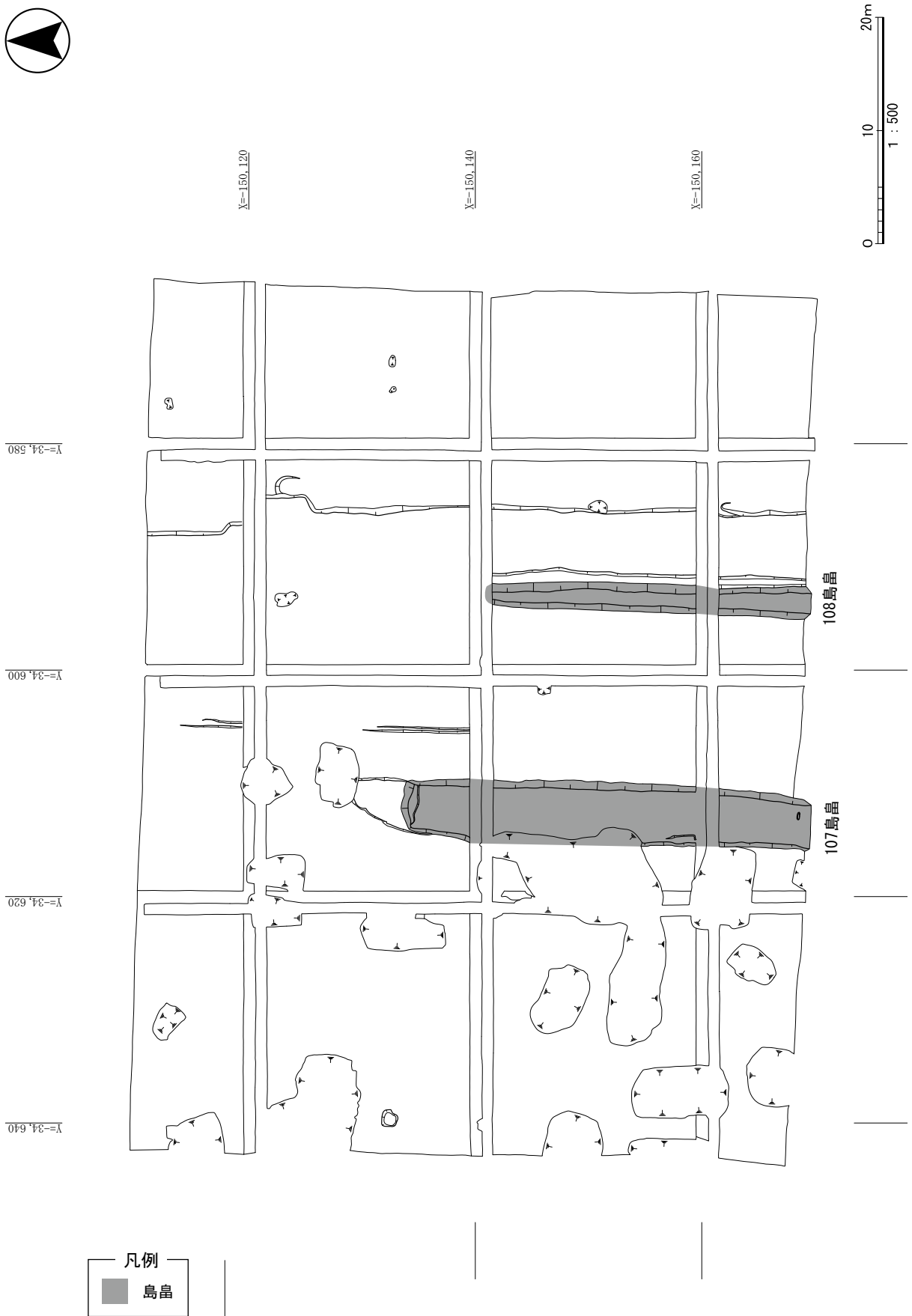


图20 第4-1面平面图

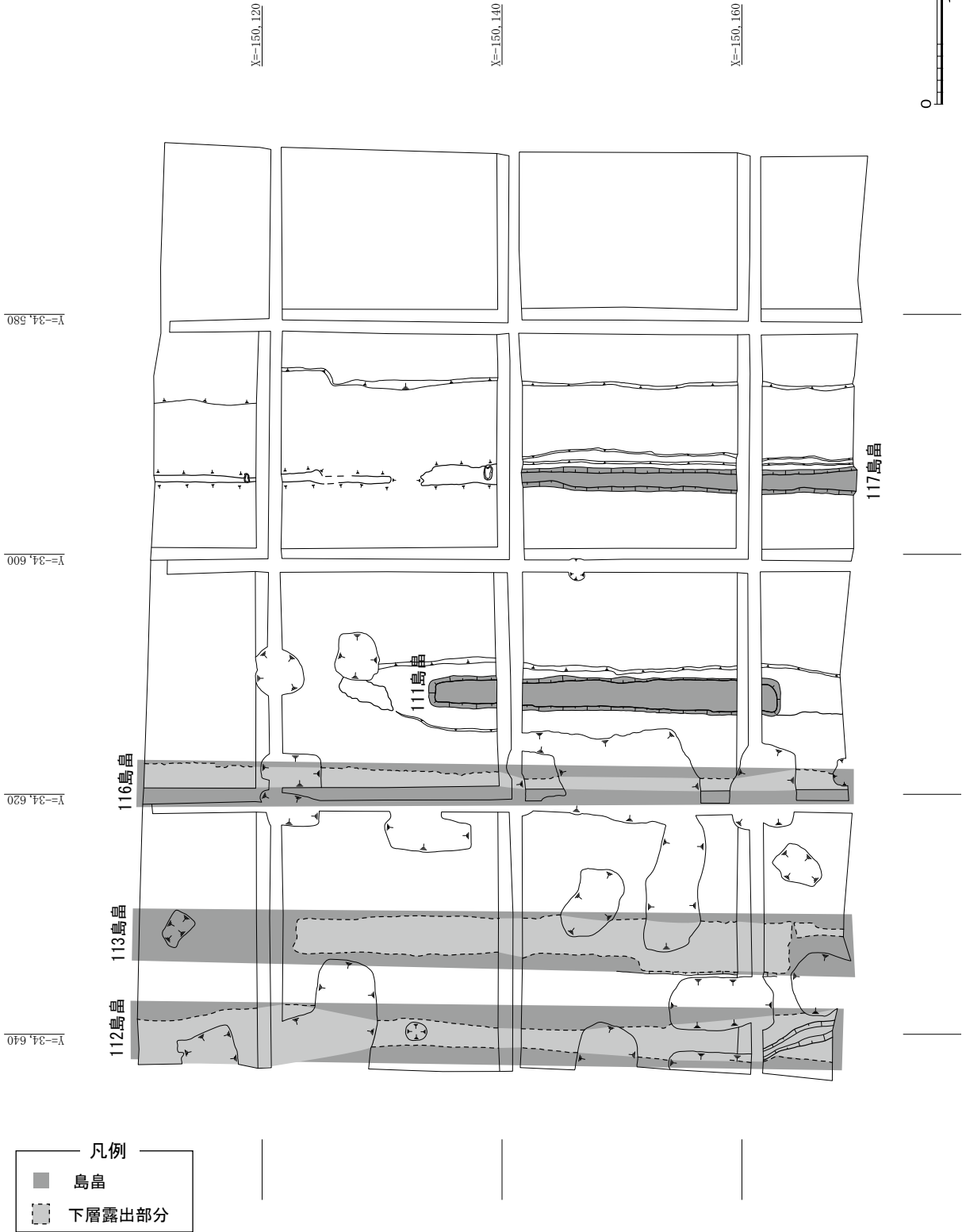


图21 第4-2面平面图

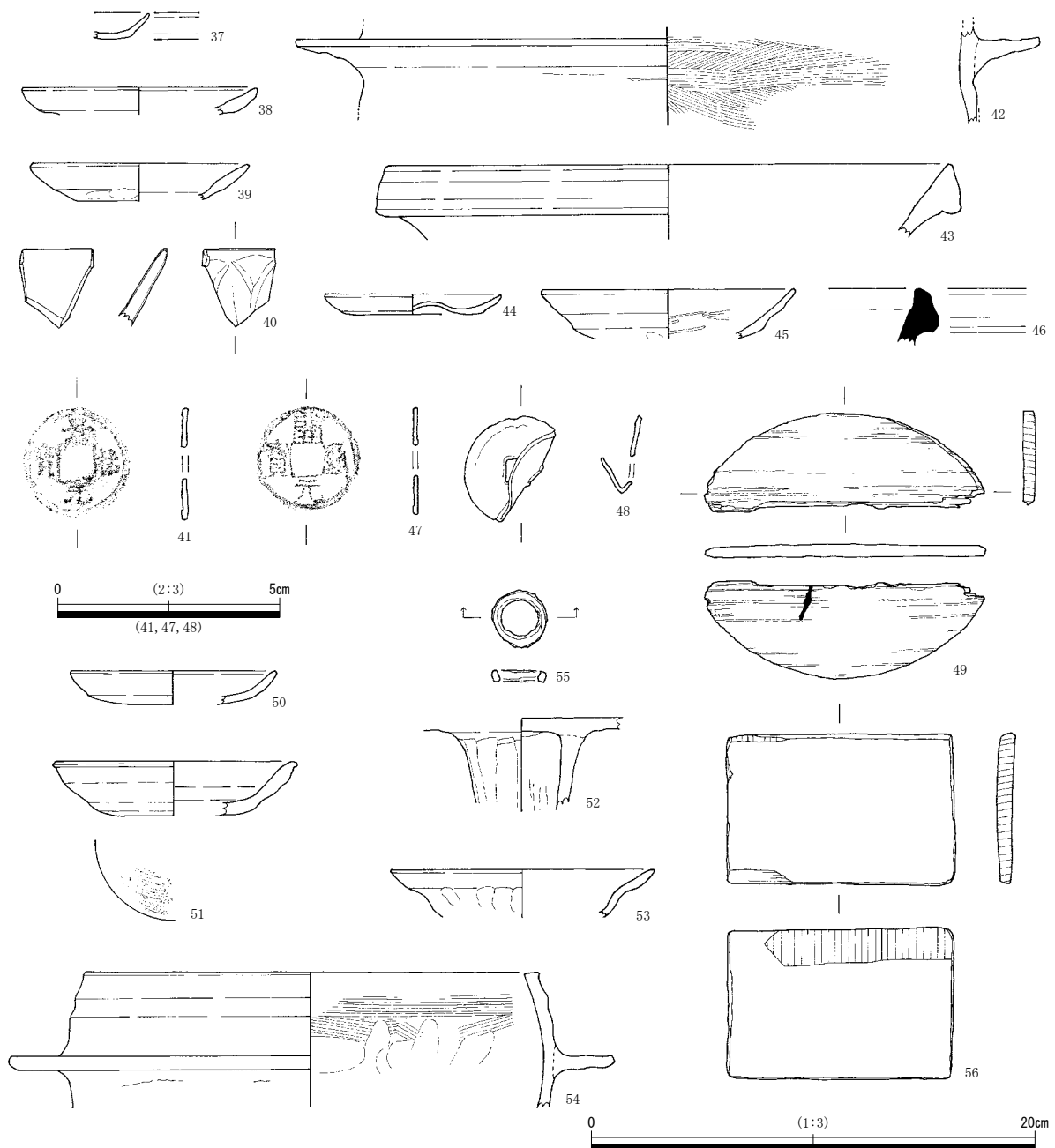


図22 第4-1～第4-2層出土遺物実測図〔37：第4層、38～40：第4-1層、41：第4-1面、42～49：第4-1・2層、51～56：第4-2層〕

第4層の出土遺物（図22）

第4-1層から、図示したもの以外に90点の遺物が出土した。皿が大半を占める、土師器が31点と最も多く、羽釜片が大部分を占めるとみられる瓦質土器13点がそれに次ぐ。土師器皿の破片には、断面の形状などから、図22-39・44と同系統とみられるものが多く含まれていた。それ以外に土師質焼成土器8点、瓦器片・陶器片各2点、須恵器1点が出土した。陶器には、常滑とみられるものと瀬戸卸目皿が、各1点認められた。後者は口縁端部が丸くおさまり、口径も小さいとみられることから、15世紀後半に位置づけられるのではな

いかと考える。第4-1面で検出した107島畠の盛土掘削中に、55点の遺物が出土した。これらも第4-1層出土遺物と同等に扱うことができる。その内訳は、おおむね皿からなるとみられる土師器が27点、羽釜と片口鉢・播鉢等からなるとみられる瓦質土器が13点、土師質焼成土器8点、中世須恵器と瓦器の破片が各6点、陶器3点、白磁の無高台の皿が1点である。陶器は瀬戸卸目皿、備前、常滑各1点からなり、卸目皿は口縁端部に面が作り出された、15世紀前葉に位置づけられるものである。

第4-2層では、図示したもの以外に187点の遺物が出土した。内訳は、おおむね皿からなるとみられる土師器が85点と最も多く、瓦器34点、土師質焼成土器31点、瓦質土器22点等がそれに次ぐ。瓦質土器はおおむね羽釜の破片と見られるが、片口鉢もしくは播鉢の破片も数個体分含まれていた。それらの他に中世須恵器9点、瓦2点、青磁片1点、陶器3点がある。陶器には瀬戸卸目皿と備前の破片が各1点含まれる。第4-2層が極薄く分布する範囲では、第4-1層を掘削中に第4-2層もはがれてしまう状況だった。第4-1・2層出土遺物として図示した、図22-42~49はそのような状況で出土した遺物である。

以上、第4層出土遺物を概観すると、時期判別の可能な遺物に関しては、15世紀までの時期におさまることがわかる。ただ第4-1層出土遺物には、15世紀後葉に含まれるものがわずかに認められることから、15世紀全般にわたる時期の遺物が含まれるのに対して、第4-2層出土遺物は15世紀中葉から前葉の時期のものからなる点で、若干の相違を認めることができる。

第5面（図23）

第4-2層を除去して検出した、中世後半の遺構面である。Y1トレンチと118畠の間に位置する、南北方向に伸びる段差の東側では第5層は分布しなかった。したがって第5面はそれより西の部分でのみ検出している。第5層の上面は、第4-2層が形成される過程でおおむね攪乱されているが、第4-2面島畠下部として残存していた第4-2b層で被覆された部分などで、旧地表面の状況を把握することができた。標高はおおむねT.P.+3.6~3.7m強で、北から南にかけてわずかに標高が低くなる傾向を認めた。

島畠（西から521・120・119島畠）と、畠の畝2か所（西から122・118畠）を検出した。それらはいずれも南北方向を指向する。島畠はいずれも、第4-2面で検出したものの前身とみられる。521島畠は、北半に盛土頂部が一段低くなる部分があり、その上面で畝が確認できた。周囲の水田との比高差は約15cmである。またその南端からは、幅の広い123畦畔が南へ延びており、島畠と畦畔の間には124水口が設けられる。119島畠の南端から南へは、121畦畔が延びる。119島畠は幅約2mと細く、幅約1.5mの121畦畔とは平面的な差はほとんど認められないが、119島畠と周囲の水田との比高差が40~50cmなのに対し、121畦畔は10cm弱と、高さに明確な差があったことから、両者を区別してとらえた。120島畠は横幅が2m前後で、調査区の北と南に向って延長する。周囲の水田との比高差は10~15cmと低いが、頂部で畝溝の痕跡とみられる遺構をわずかに検出した。

122・118畠が細長い範囲で検出されたのは、前述したように上面で検出した島畠の芯である第4-2b層に覆われていた部分にのみ、畝が残っていたからである。当初はこれ以外の範囲にも畝が広がっていたとみられるが、上層が形成される過程でその痕跡は大半が失われたと考える。

第5層の出土遺物（図24）

第5層出土遺物は図化したものの他に、415点を数える。点数は多いが、大半は土師器と瓦器の細片が占める。内訳は、皿を主体とする土師器が187点、椀を主体とする瓦器が150点、土師質焼成土器33点、瓦質土器19点、須恵器16点、陶器5点、瓦3点、火を受けて赤変した砂岩とみられる礫片2点である。第3層・第4層と比べて、瓦器の占める割合が大きくなるのに対し、瓦質土器の占める割合が小さくなっている点が留意さ

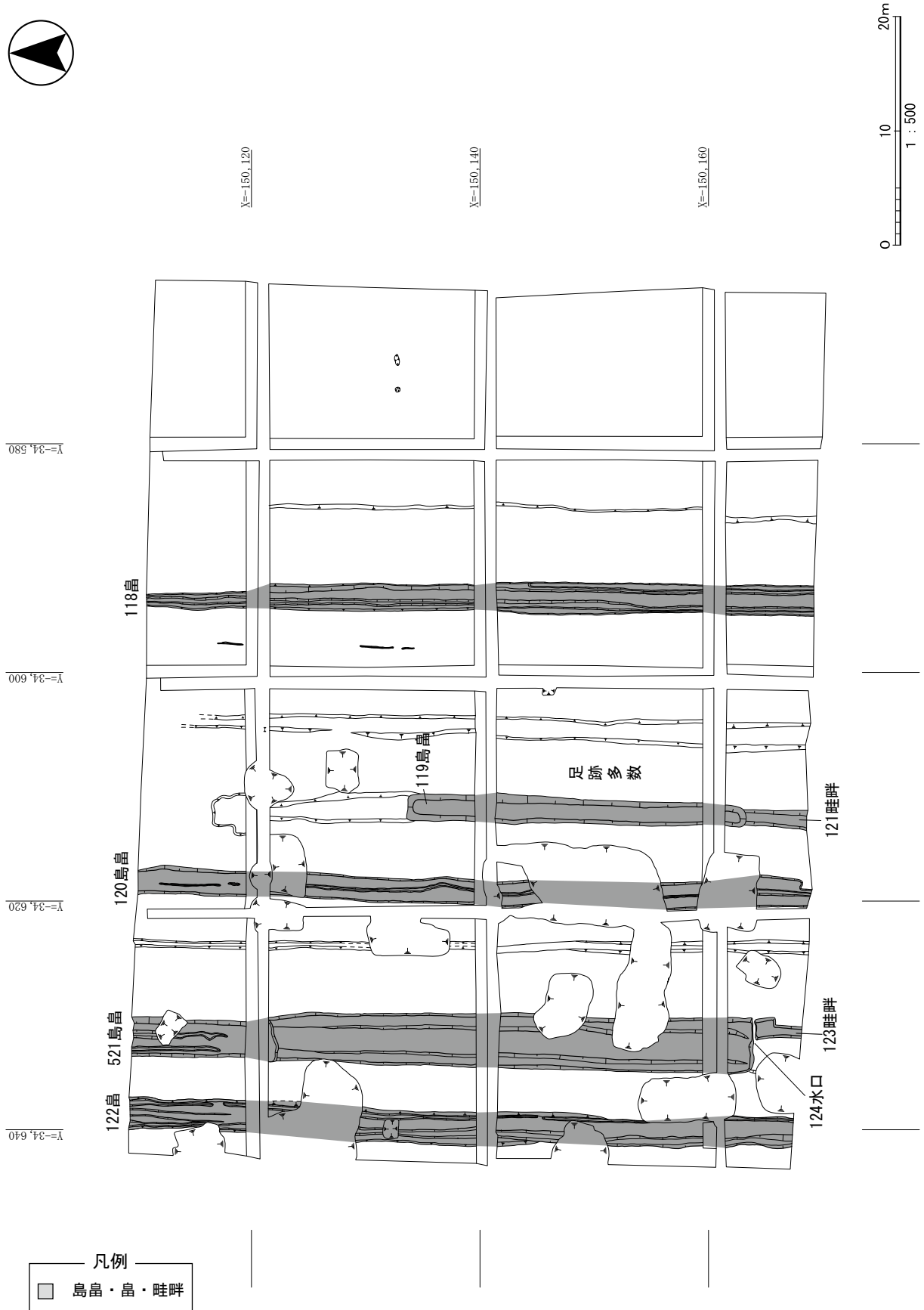


図23 第5面平面図

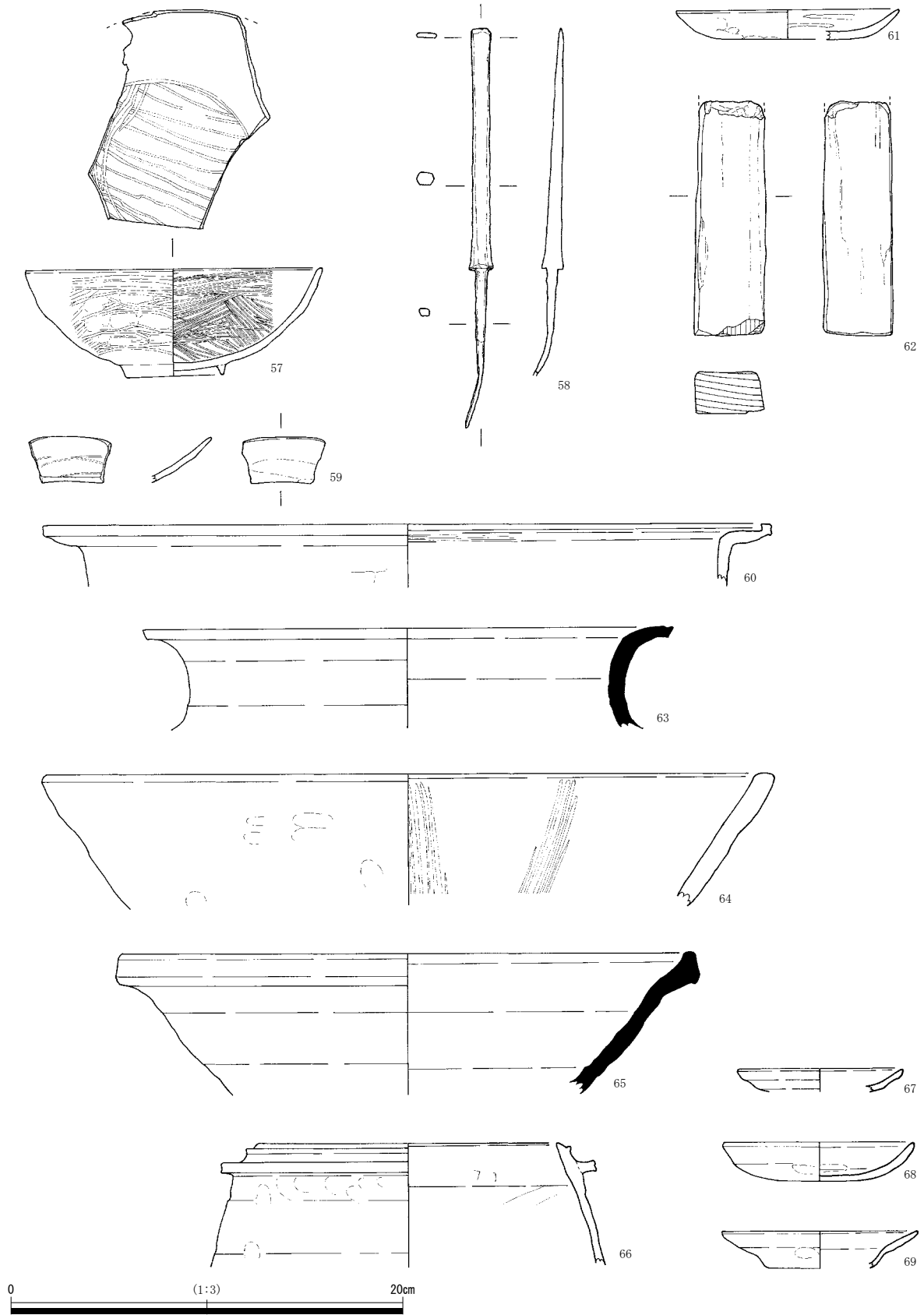


图24 113島島・119島島・第5面・第5層出土遺物実測図〔57：第5層最上部、58：第5面、59・60：119島島、61：113島島、62～69：第5層〕

れる。土師器皿には、図24-69と類似した、底部から体部の立ち上がりが明確で、体部中程で外反する薄手のものや、瓦器碗の最終形態に類似するものが散見された外、「て」字状口縁皿の最終形態と見られるもの、図24-69のように体部上半をやや肥厚させたものがわずかに含まれる。土師質焼成土器は、外面にススが付着したものが大半を占めていたことから、羽釜が主体と考える。瓦器は高台がなくなる前後の形態や、最終段階に近いとみられる、薄手でつくりの粗いものが大半を占める。瓦質土器はおおむね三足釜や甕の破片からなるとみられ、播鉢は図24-64以外には認められなかった。須恵器では中世須恵器が11点と、大半を占める。陶器には備前・常滑・瀬戸とみられるものが含まれていた。

上記の遺物以外に、第5面で検出した113島畠や119島畠の盛土掘削中にも遺物が出土した。それらも第5層出土遺物と同等に扱うことができる。113島畠盛土から瓦器2点と、土師質焼成土器・中世須恵器各1点を検出した。119島畠では、「て」字状口縁皿の最終段階のもの1点を含む土師器皿7点と、瓦器と土師質の羽釜各1点を検出した。

上層ないし下層における遺物の出土状況と照らしてみると、第5層は14世紀前半を上限とし、15世紀前半を下限とする時期に形成された耕作土層とみることができると、さらに第5層における遺物の出土状況からみると、耕作の際に下層から巻き上げられて混入したとみられる、図24-57・63のような古い時期の遺物もわずかに含まれるが、おおむね14世紀後葉から15世紀初頭の時期のものからなると考えられる。

第6面（図25・図26）

第5層を除去して検出した、中世前半の遺構面である。標高はT.P.+3.4~3.7mで、東から西に向けて徐々に標高が低くなる傾向を認めた。

この面では島畠と土坑・ピットを検出した。第6b層が帯状に露出していた部分は、第6b層を芯にした、第6面段階の島畠の基部がわずかに残存したものと考える（126・130・131・522島畠）。それらは第5層が形成される過程で盛土の大半が削平されたとみられ、わずかに残った基底部により、その存在を確認することができた。126島畠に関しては、第7面検出の133島畠の北端に、第6b層を帯状に盛った部分を認めたことから、第6b層を用いて拡張した、第6面段階の島畠ととらえた。522島畠は南側にも延長部分があったと考えられるが、かろうじて北端部分の基底部のみが残存したものと考えられる。これは第7-1面検出の134島畠と同じ位置にあることから、これに第6b層を積み足して拡張した島畠だったのではないかと考えられる。131島畠は、130島畠の北端に直行して取り付く短い島畠である。

それに対して125・127島畠は、南北方向を指向する帯状の高まりとして残存していた。これらは前述の島畠のように、第6b層を芯にして作られたものではなく、第6a層を盛り上げて作られたものと考えられる。第6面で検出された島畠にこのような2種類のものが認められる状況は、北側に隣接する08-1調査区においても報告されている。

128土坑は131島畠の上面で検出した不整形な土坑で、底部も凹凸がはげしい。埋土の上層に第6層の土が堆積していることから、第6層上面を耕作する過程で生じたものと考えられる。115ピットと114ピットはおそらく第5層の下面遺構と考えられる。

第6層の出土遺物（図27）

第6層出土遺物は図化したもの以外に217点ある。内訳は土師器86点、瓦器85点、土師質焼成土器17点、須恵器13点、瓦質土器6点、黒色土器A類4点、陶器・磁器が各2点である。土師器と瓦器の点数がほぼ同程度である点、瓦質土器に甕2点と三足釜4点が含まれるものの、鉢の類が見られない点などは、第5層出土遺物の様相と類似する。それに対して黒色土器の破片がわずかながら含まれる点、中世須恵器と判別できる破

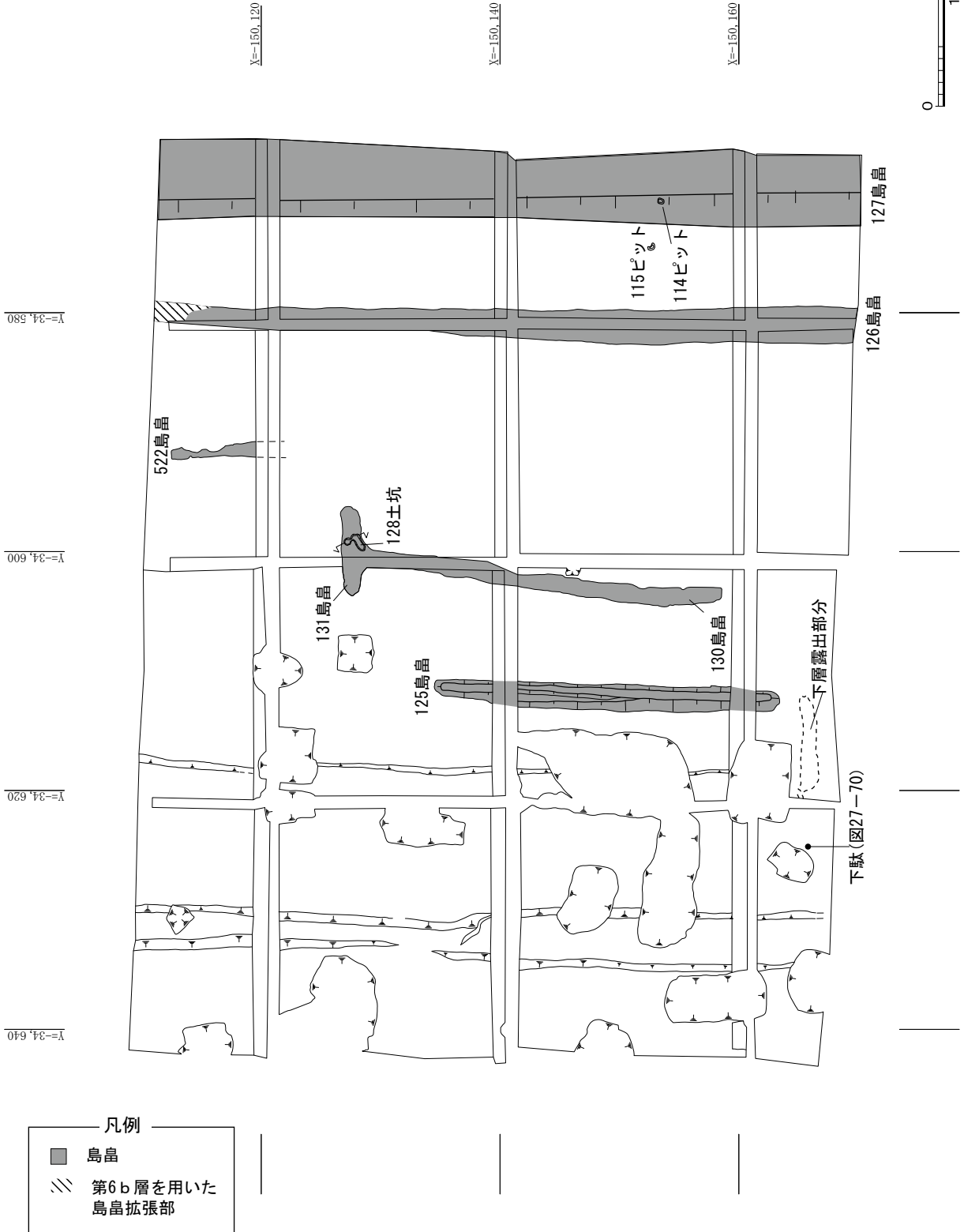


図25 第6面平面図

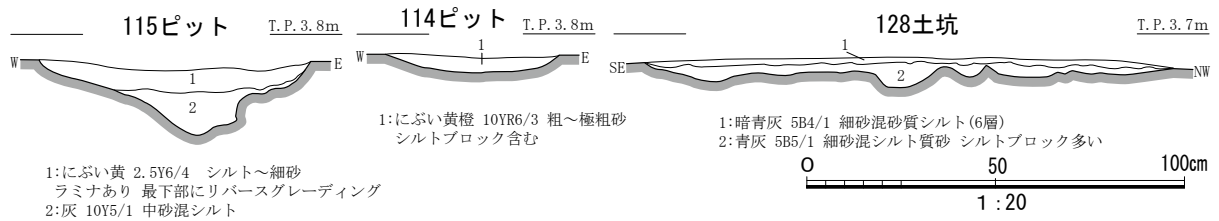


図26 第6面検出〔第5層下面〕遺構断面図

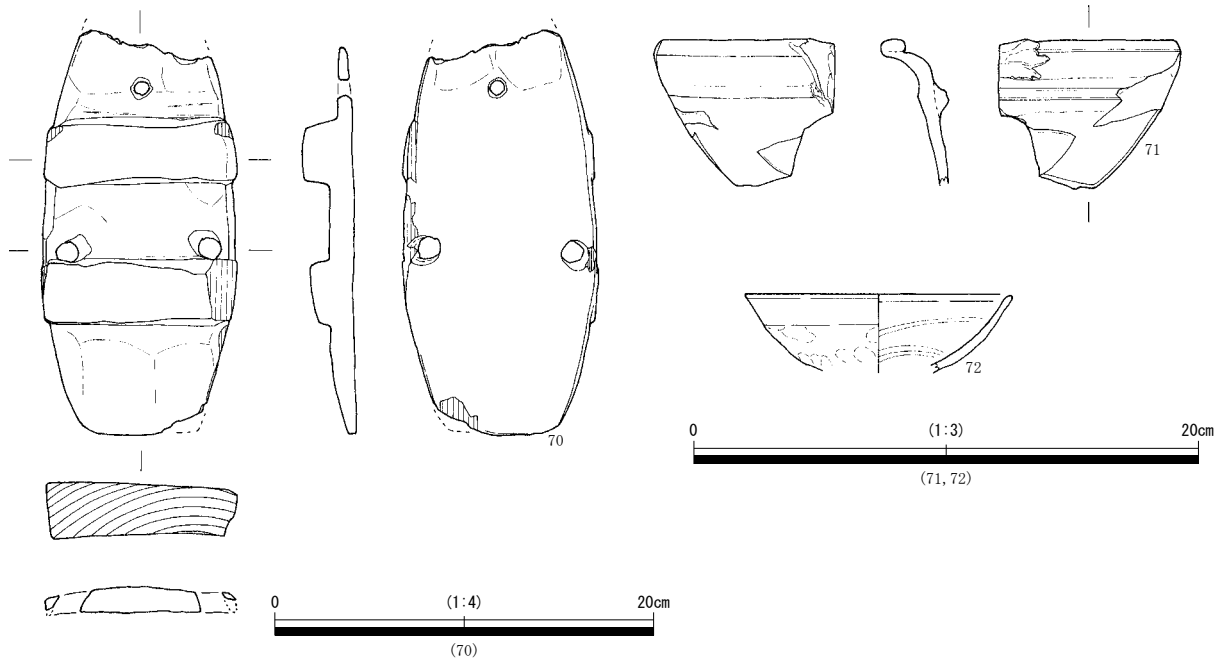


図27 第6面・第6層出土遺物実測図〔70:第6面、71・72:第6層〕

片が数点に限られる点は上層と異なる。土師器皿の破片のうち、形態が判別できるものに関してみると、図24-61のように底部から体部にかけての立ち上がりの変化がなだらかなものや、図24-67のように体部に強いヨコナデをほどこし、立ち上がりの部分に明瞭な屈曲が生じているものが大半を占め、図24-69のように体部の中程で外反するものはほとんど含まれなかった。瓦器椀は断面三角形の低い高台をもつか、もしくは高台をもたない、内面にのみまばらなミガキ調整を施すものが大半を占めるとみられるが、外面にもミガキ調整を施すものや、底部付近の破片で内外面ともにミガキあるいは暗文をもたない最終段階の瓦器も数点ずつ含まれる。

以上、第6層出土遺物を概観した結果、明らかに14世紀後葉から15世紀初頭まで時期の下がる遺物は認められず、14世紀前半までの時期におさまる傾向を指摘できる。上層および下層の遺物の出土状況と照らしても、第6層は13世紀後半を上限とし、14世紀後葉を下限とする時期に形成された可能性が高いと考えられる。第6層出土遺物の大半を占める土師器皿や瓦器椀に関してみれば、13世紀後半から14世紀前半のものが多数を占めるとみられる。

第7-1面(図28・図29)・第7-2面

第7-1面は、第6層を除去して検出した古代後半から中世前葉の遺構面である。標高はT.P.+3.4~3.5m強で、おおむね平坦だが、140島島の西側はT.P.+3.3~3.4mとやや低い。



図28 第7-1面平面図

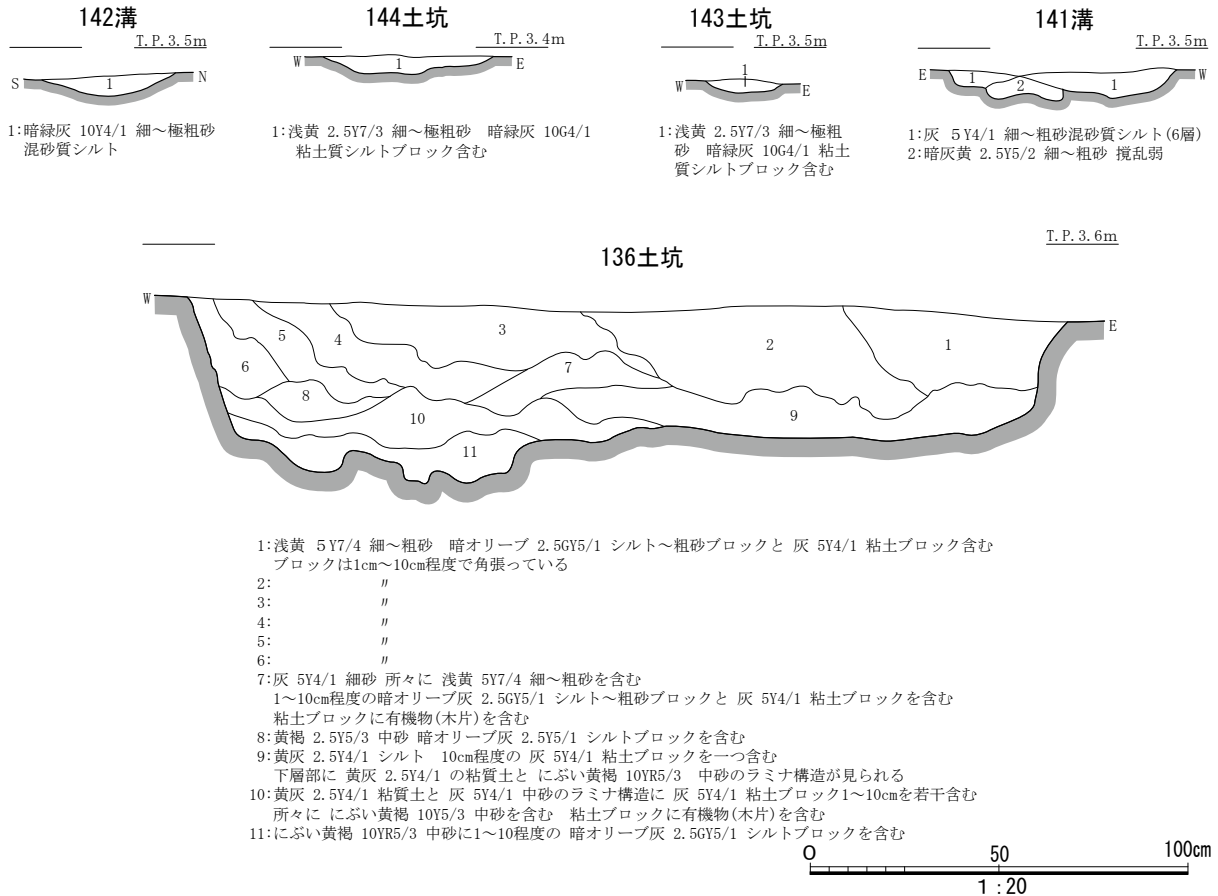


図29 第7-1面検出〔第6層下面〕遺構断面図

この面では島畠、溝、土坑、耕作痕などを検出した。第6b層を除去した段階で、耕作痕跡や足跡を検出した箇所もあるが、第6b層の分布範囲は限られており、第6層の形成過程で第7-1層の上部は大半が攪乱されたとみられる。したがってこの面で検出した溝や土坑は、基本的に第6層の形成過程で成立したものととらえられる。

132・133・134・135・137・138島畠は、第6面で検出した島畠の前身と考える。それ以外にも、南北方向を指向する140島畠、東西方向を指向する139島畠を検出した。それらの島畠は140島畠を除くと横幅が1～3mとおおむね狭い。また138島畠から東側に位置する南北方向の島畠は、おおむね9m程度の等間隔で配置されている。140島畠はその南端とみられる部分に堆積していた6層を除去した段階で、立ち上がりを検出することができたことから、島畠と判断した。その西側の裾部は明瞭に検出することができたが、東側の裾部は残存しなかったことから、南端部の立ち上がりの幅をもとに平面形を復元した。このような裾部の検出状況の差は、隣接する水田面から島畠頂部までの比高差が、西側縁と東側縁とで異なっていたために生じたと考えられる。つまり上層形成時の攪乱により、東側縁の立ち上がりは失われてしまったのに対し、それより比高差の大きい西側縁の基部は残存したと考える。135島畠と137島畠を祖形とする、第6面検出の130・131島畠は、両者が接続して「T」字形の平面形態をなすが、それが第7-1面段階にまでさかのぼるかどうかは、それらの接続部にあたる部分がY2トレンチと重なっていたため、確認できなかった。139島畠もまた、135島畠と同様に当調査区では数少ない東西方向を指向する島畠である。これは135島畠と平面形態が極めて類似することから、全長もおそらく9m程度だったと考えられる。一方、139島畠は138島畠の南側に直行させて「L」字形に配置されるが、両者は接続しない。

136土坑は134島畠を切って掘削された土坑で、平面形は隅丸方形だったとみられる。底部はほぼ平坦で、平面形態も比較的整っている。埋土には第6層に由来するとみられるブロック土が多く含まれていたことから、比較的短期間のうちに埋め戻されたものとみられる。遺物は出土しなかった。

第7-2面は、第7-1層を除去して検出した古代後半から中世初頭の遺構面である。遺構面はほぼ平坦で、遺構は検出しなかった。

第7-3面（図30～図35）

第7-2層を除去して検出した、古代後葉の遺構面である。標高はT.P.+3.1～3.4mで、北東から南西に向けてゆるやかに低くなる傾向が認められた。第7-3面では溝・土坑・ピット等、多数の遺構を検出したが、基本層序の章でも述べたように、第7-3面はおおむね第7-3b層の上面で検出しているので、これらの遺構はおおむね第7-3層の下面遺構と考えられる。

239・240溝は調査区中央部に位置し、南北方向を指向する、幅1.5mほどの溝である。この2条の溝に挟まれ、相対的に南北方向の高まりを呈する部分を、第7-3面段階の島畠ととらえた（523島畠）。523島畠の盛土は残存しないが、この位置が第7-1面における島畠の位置と重なること、239・240溝の埋土に、第7-3b層を掘削して積み上げた過程で崩落し、再堆積したとみられるブロック状の砂層が多く含まれることから勘案し、当該期の島畠と判断した。したがって239・240溝は、島畠造成に伴って掘り下げられた部分であり、盛土は第7-2層の形成過程で削平されたと考える。

この523島畠は第7-1面検出138島畠の前身であり、当調査区においては島畠の初現例である。239溝と240溝の位置関係ほど明瞭ではないが、それ以外にも151・153溝など、南北方向を指向する溝や落ち込みが存在する。これらのなかには島畠の盛土を掘りあげた際に生じたものが含まれる可能性もあるが、断定はできなかった。なお153溝から下駄が出土している。

また北西-南東方向にピットが並ぶ状況が、複数個所で検出された。それらは調査区の北よりの部分に集中する傾向が認められる。207～209ピット列と151溝との関係を見ると、溝が成立した後にピット列が成立している可能性がうかがえる。それらのピットをみると、平面形が直径30～50cm程度の円形のもものが大半を占め、中には直径が20cmに満たないものや、長軸が1mにちかい不整形なものも含まれる。ただそれらのピットや土坑の深さは、大半が10cm前後と浅い点、また埋土から遺物がほとんど出土していない点で共通する。北側の08-1調査区でも同様のピット列が多数検出されており、今回の調査区と共通する状況が報告されている。

第7層の出土遺物（図36・図37）

第7-1層から44点の遺物が出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。内訳は土師器の破片が33点、土師質焼成土器が4点、瓦器3点、須恵器3点、黒色土器A類1点である。土師器皿のうち形状がわかるものに関しては、図24-68や図36-82と同形態のものからなり、14世紀代に時期が降りそうなものは認められなかった。瓦器には外面の中ほどまでミガキを施すものが2点含まれ、それらは楠葉型と和泉型が各1点とみられる。須恵器には中世須恵器とみられる破片が1点含まれる。

第7-2層からは、図化したものの他に42点の出土遺物を検出した。内訳は土師器31点、須恵器5点、黒色土器1点、瓦器3点、土師質焼成土器の破片1点、高温を受けて発泡した、窯壁とみられる焼土塊1点である。須恵器片の中に、中世須恵器とみられる破片は認めなかった。第7-2層の堆積が薄い部分では、第7-1層を掘削している段階で、第7-2層が一緒にはがれてしまう状況だった。図36-78～81はそのような状況において出土した遺物である。第7-1・2層出土遺物は、図示したものの他に219点ある。それらの大半は極めて磨滅している。そのうち土師器が153点と過半数を占めるが、その中には古代の杯とみられる破片も

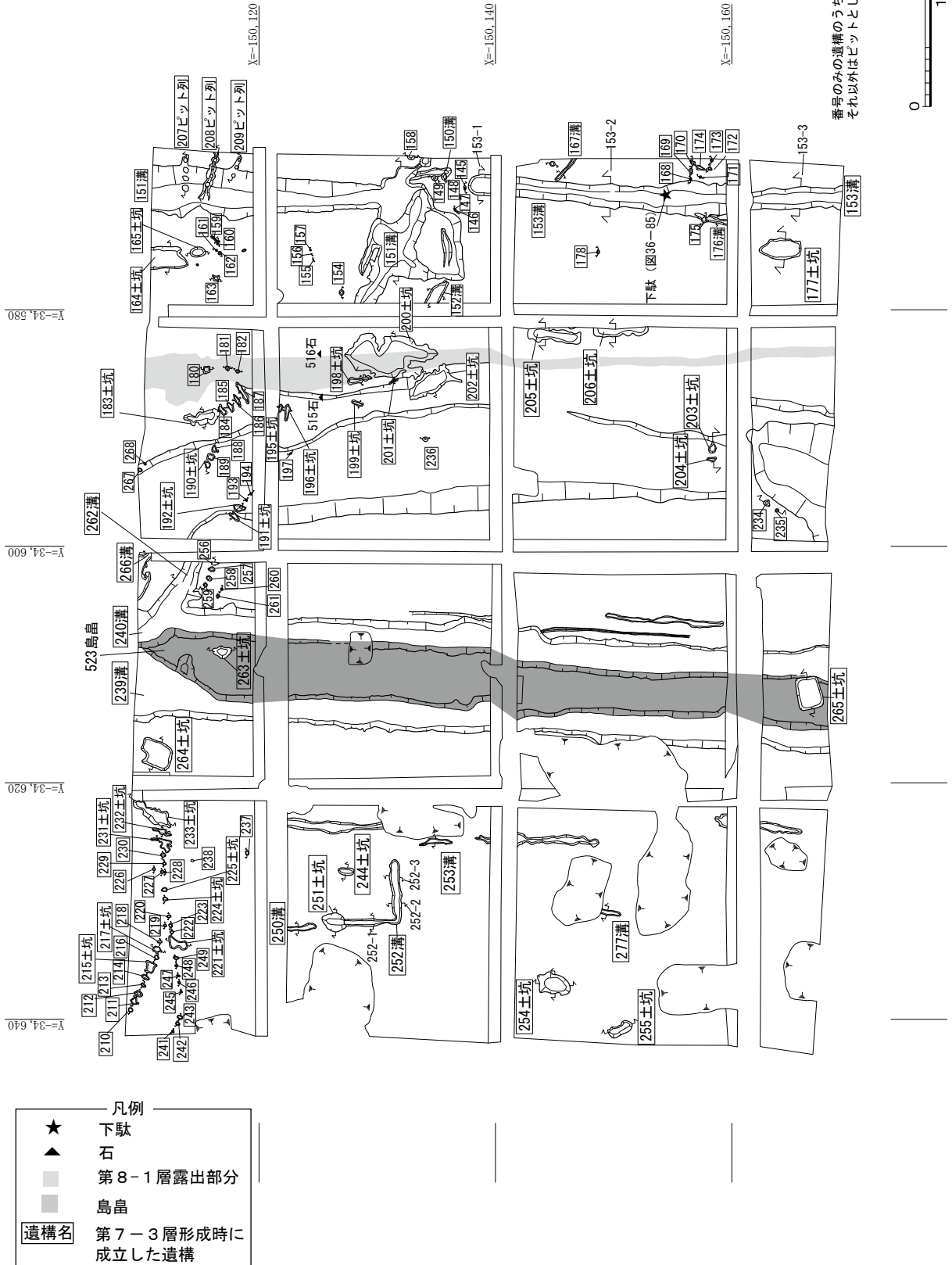


図30 第7-3面〔第7-3 b層上面〕平面図

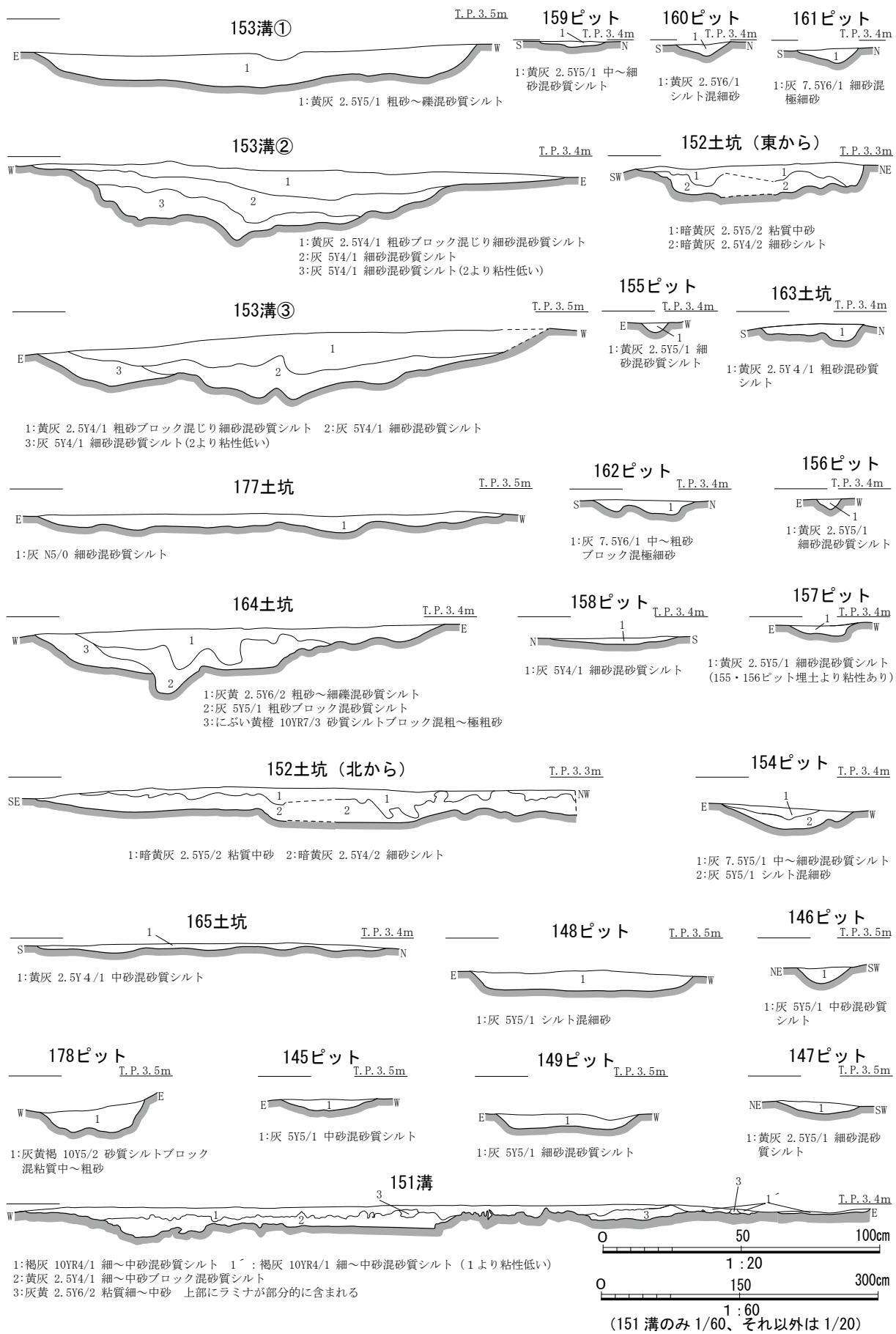


図31 第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図

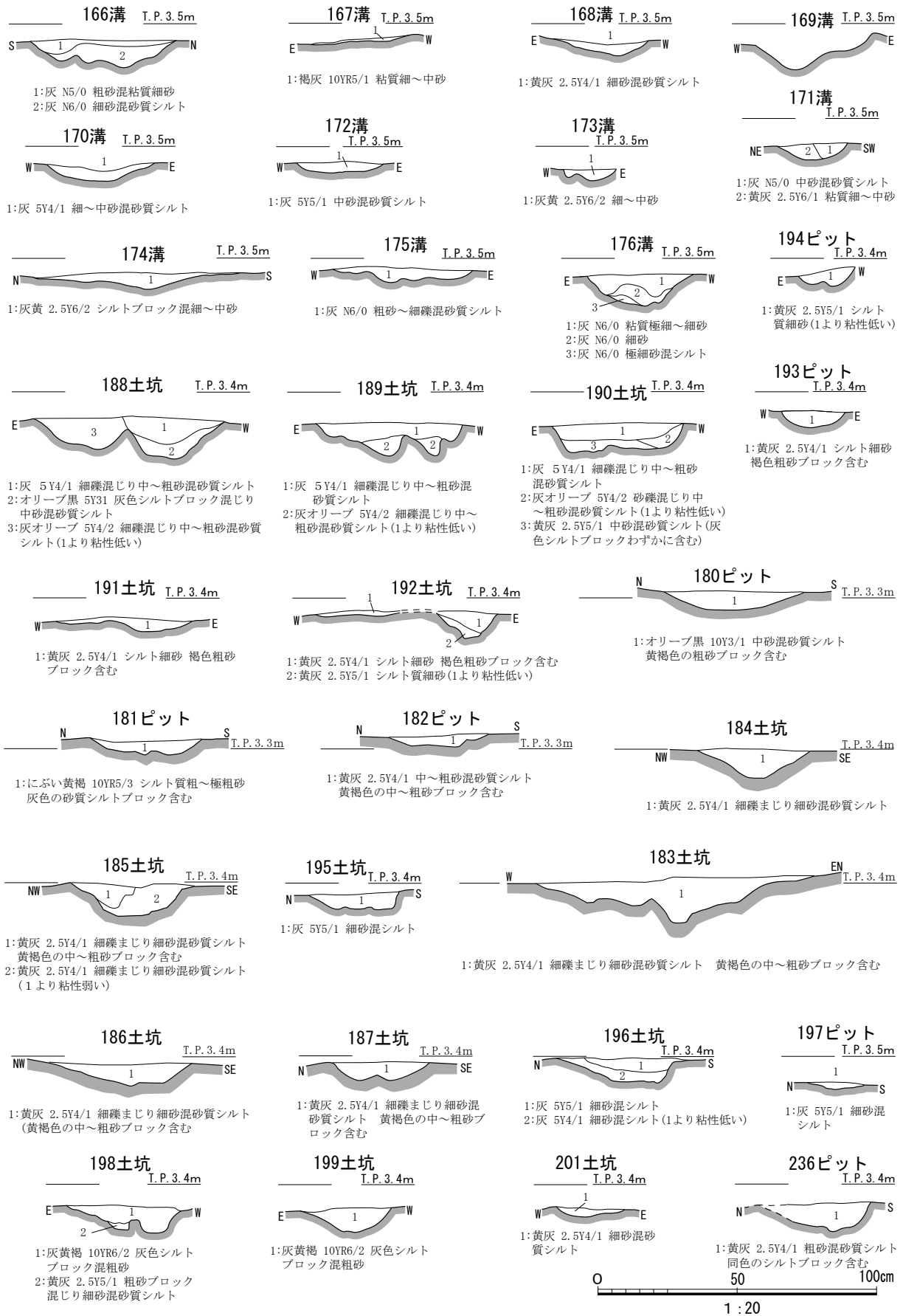
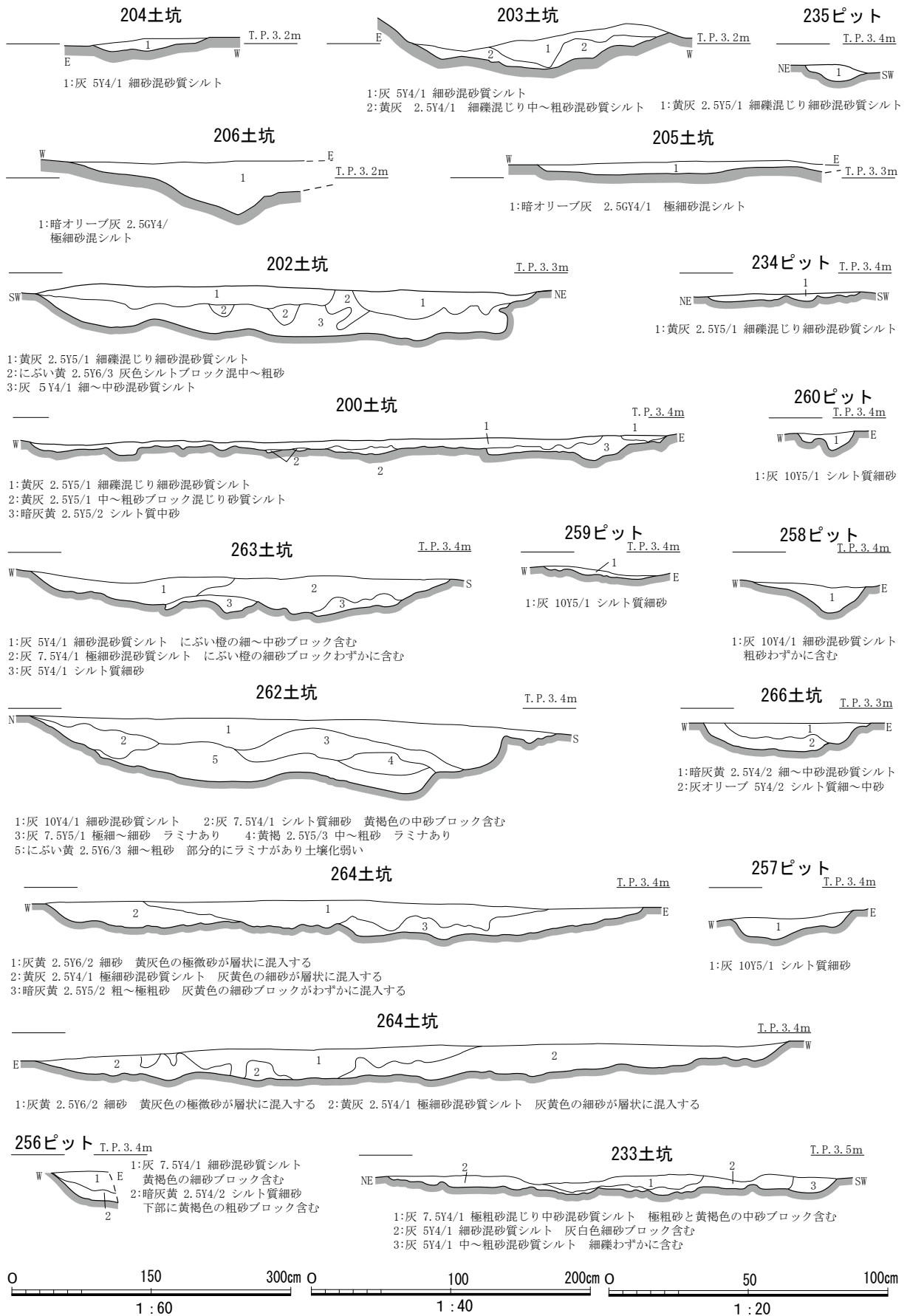


図32 第7-3面〔第7-3 b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図



200土坑は1/60、233土坑は1/40、それ以外は1/20

図33 第7-3面〔第7-3層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図

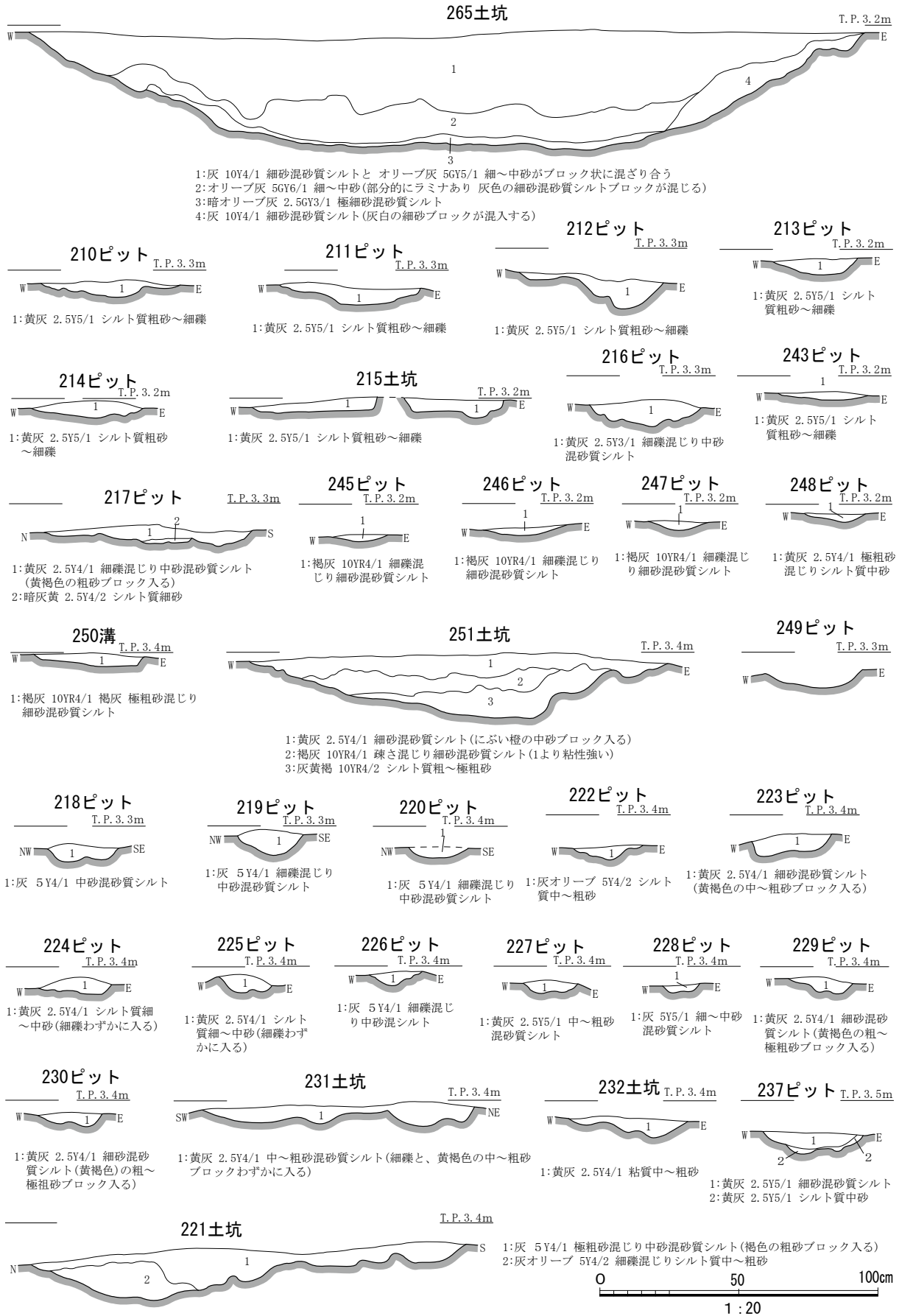


図34 第7-3面〔第7-3b層上面〕検出、第7-3層下面遺構断面図

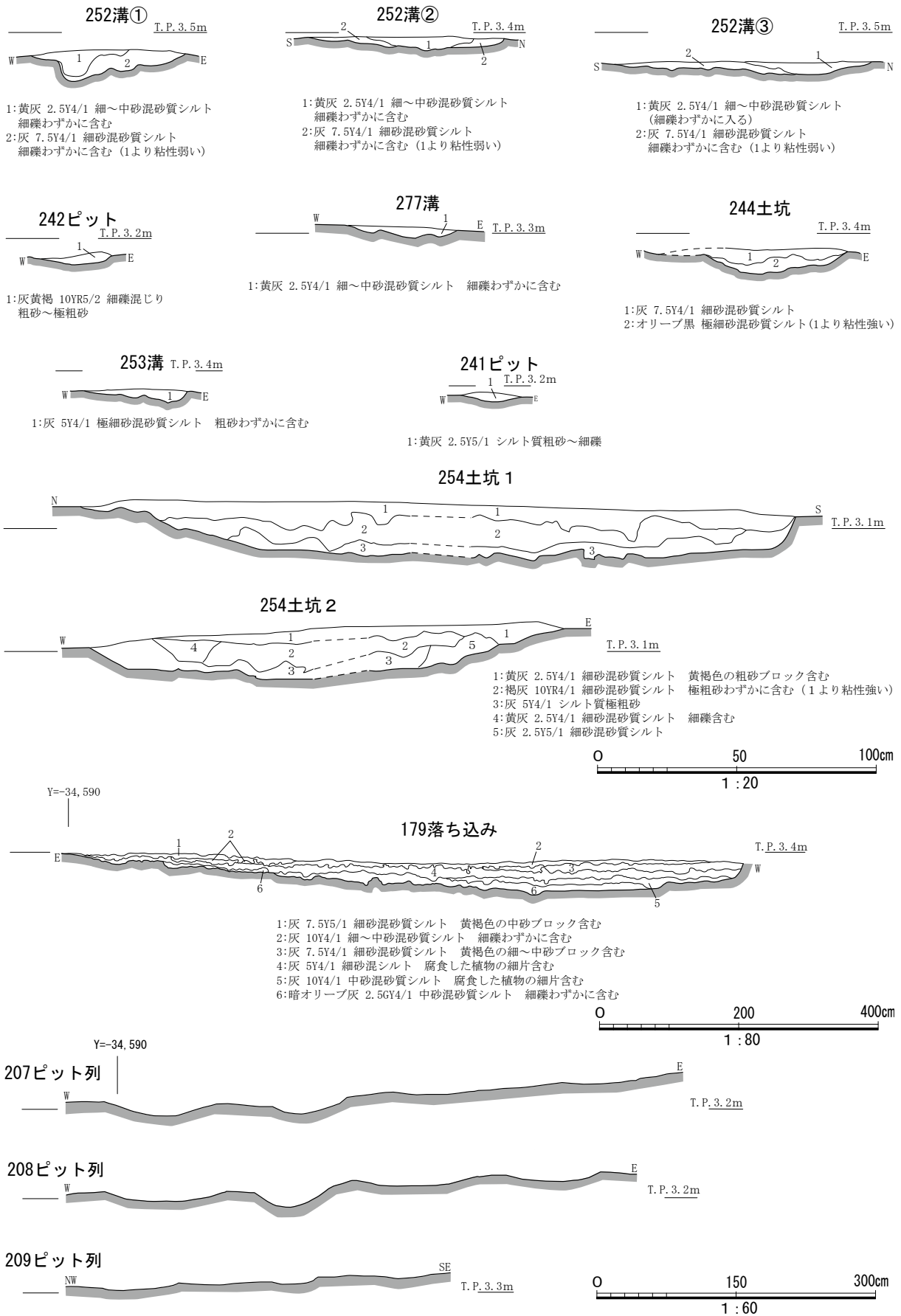


図35 第7-3面(第7-3b層上面)検出、第7-3層下面遺構断面図

多く含まれる。26点を数える瓦器のうち、外面にミガキを施した破片は12点だった。外面にミガキを施さないものに関しても、図36-79と同時期のものとみられ、それより時期の降るものは認めなかった。その他に古代以前の須恵器14点、羽釜とみられる土師質器焼成土器2点、黒色土器・高温を受けて発泡した焼土塊・瓦が各1点、弥生時代後期から庄内期にかけての時期に含まれると見られる土器の破片21がある。第7-2b層から遺物は出土しなかった。第7-1層と第7-2層は、上層と下層における遺物の出土状況から、12世紀を上限とし、14世紀を下限とする時期に形成されたととらえられる。また第7-1層・第7-2層出土遺物は13世紀のものが主体を占めるとみられる。

第7-3層出土遺物は、図示したものの他に31点あるが、いずれも著しく磨滅した細片で、図36-87以外に時期判断が可能なものはなかった。内訳は土師器22点、須恵器4点、土師質焼成土器と黒色土器A類の細片が各2点、弥生時代後期もしくは庄内期のものとみられる土器片が1点である。土師器の中には、皿・杯・小型の甕とみられるものが含まれる。

前述したように、第7-3面で検出した遺構は、おおむね第7-3b層上面で検出しており、それらは第7-3層の下面遺構と考えられる。したがってそれらの遺構埋土から出土した遺物は、第7-3層の形成期間に含まれる時期に混入したものととらえられる。ただそれらの遺構埋土出土遺物も、細片で著しく磨滅しており、時期判断のてがかりになるものはほとんどみられなかった。211ピットから土師器が5点、212ピットから土師器2点と須恵器1点、213ピットと242ピットから土師器が各1点出土した。215土坑から須恵器2点と土師器3点、弥生時代後期から庄内期に含まれると見られる土器3点が出土した。221土坑と231土坑から土師器が各4点、232土坑から土師器と弥生時代後期の土器片が各1点、233土坑からは土師器2点と弥生時代後期とみられる土器片1点が出土した。232土坑では土師器12点と須恵器・弥生時代後期から庄内期に含まれると見られる土器片が各2点、黒色土器A類1点が出土した。254土坑では土師器30点、弥生時代後期とみられる土器片と須恵器・黒色土器A類が各2点出土した。153溝では、図示したものの他に土師器4点、須恵器と黒色土器が各1点出土した。239溝からは図36-86と同形態の口縁端部片が1点出土した。

後述する第7-3b層出土遺物の検出状況と併せると、第7-3層以下では瓦器の出土点数が極めて限られ、明らかに13世紀以降に含まれる時期の遺物も認められないという点で、第7-1層・第7-2層とは出土遺物の様相に差が認められる。ちなみに図36-73~77は土層観察用断面を撤去した際に出土した遺物で、第7-1層~第7-3層の遺物を含んでいるが、その中に今回の調査で、唯一全形をうかがうことのできる黒色土器が含まれていた。これは内面のみ炭化させたものだが、形態は出現段階の瓦器の形態に類似する。以上に加えて、後述する第7-3b層出土遺物の様相も併せて考えると、第7-3層は11世後半を上限、12世紀末~13世紀前葉を下限とする時期に形成されたととらえられ、その中でも主体となる遺物の時期は12世紀だった。

第7-3b層からは比較的多量の遺物が出土したが、大半は細片で著しく磨滅している。出土遺物は、図化したものの他に1119点あり、土師器と土師質焼成の土器が併せて900点強と大半を占める。細片のため形態を特定できないものが大半を占めるが、おそらくその中には杯・皿・高杯、煮炊具等、多様な器種が含まれているとみられる。また、庄内期以前の時期とみられる土器の破片が90点強出土した。その中には弥生時代中期以前とみられる土器の破片も20点ほど含まれる。それ以外に須恵器が55点、黒色土器とみられる破片が30点弱、瓦器の可能性のある破片が10点前後、瓦1点、焼土塊3点が出土した。第7-3b層と第7-3層の出土遺物を比較して、明確な差を指摘することは難しいが、前者の方が古代前半以前の時期の遺物の含有量が多い傾向が指摘できる。後述する第8層出土の遺物の様相と併せてみると、第7-3b層は11世紀前半を上限、12世紀後葉を下限とする時期に形成されたととらえられる。さらにそのなかでも主体となる遺物の時期は12世紀前半ととらえられる。

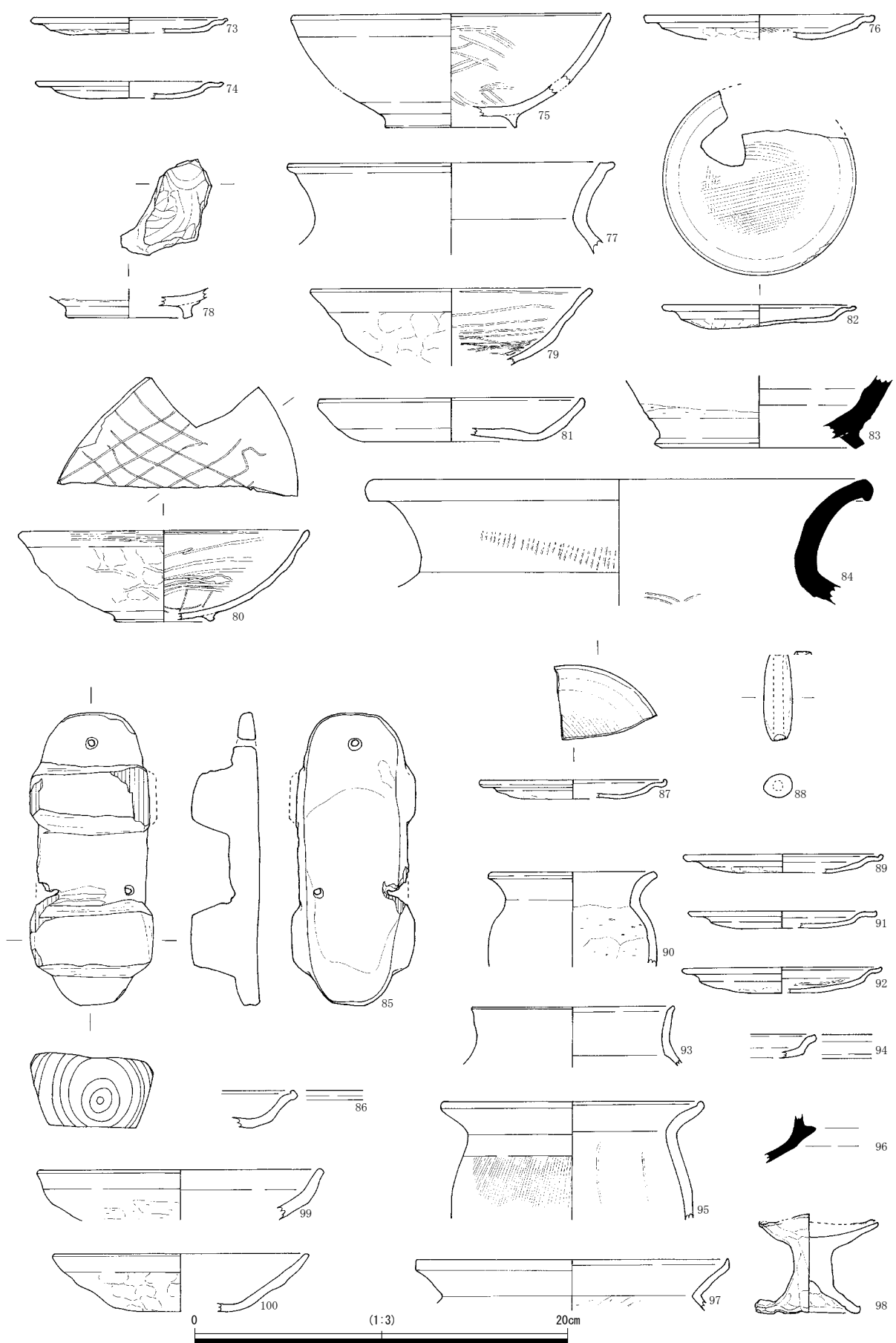


图36 153溝・第7-1層~第7-3b層出土遺物実測図 [73~77:第7層、78~81:第7-1・2層、82~84:第7-2層、85・86:153溝、87・88:第7-3層、89~100:第7-3b層]

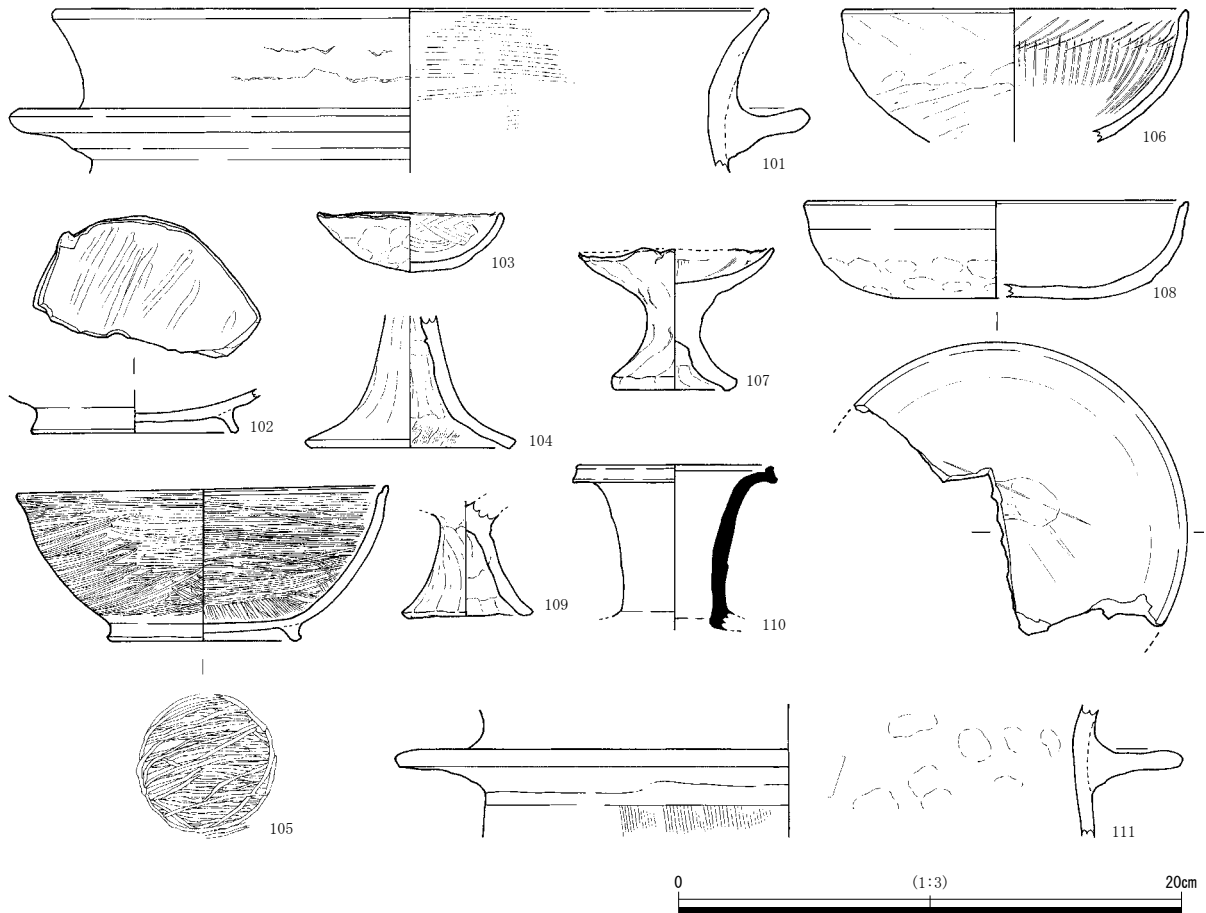


図37 第7-3b層・側溝（第7～第10層）出土遺物実測図〔101～105:第7-3b層、106～111:第7～10層〕

第8面（図38）

第7-3b層を除去して検出した、古代後葉の遺構面である。調査区西寄りの部分を中心に浸食を受けるが、第7-3b層によって厚く覆われていたため、畦畔の保存状態は良好だった。標高はT.P.+2.8～3.3mで、東から西に向けてゆるやかに低くなる傾向が認められた。

この面では水田畦畔を検出した。南北方向の地割を呈しており、同方向の畦畔を7本検出した。南北方向畦畔の間隔にはややばらつきがあるが、およそ11m前後ととらえられる。それぞれの地割りは、東西方向の畦畔でさらに区画される。東西方向の畦畔の設置状況は、270畦畔の東側と271畦畔の西側とでやや異なる。271畦畔より西側で検出した東西方向畦畔が、南北方向の畦畔に対してほぼ直行する方向で設置されているのに対し、270畦畔の東側で検出した東西方向畦畔は、南北方向畦畔の直行に対して、わずかに方向が斜めにふれる傾向が認められる。南北方向畦畔に対して、東西方向の畦畔がややななめにふれる状況は、北隣の08-1調査区で、271畦畔の延長部分に位置する南北方向畦畔の東側でも認められている。ただその西側に関しては、東側の部分に比べて東西方向畦畔の遺存状況がかなり悪いものの、残存している2条の東西方向畦畔を見る限り、調査区の東半と西半とで差はないようである。

それに対して当調査区における271畦畔の西側では、南北方向畦畔と東西方向畦畔の交差する部分やそれに接する部分に水口が設けられるのに加え、東西方向畦畔の間隔が、270畦畔の東側のそれよりも広い傾向が認められる。08-1調査区と09-1調査区とでみられる上記のような違いは、「走十四（ノ坪）」と、その北側



图38 第8面平面图

の「走十五（ノ坪）」を区画する東西方向の坪境畦畔を介して生じていると考えられる。

なお調査区東部の270畦畔は坪境の位置ではないが、特に規模が大きい。その下層は第9-1面の306流路にあたっており、それが埋没した際に生じた高まりを畦畔に利用したものであると考えられる。

第8b面（図39・図40）

第8a層を除去して検出した面で、標高はT.P.+3.1m前後である。第8b層の検出範囲は限定的で、第8面270畦畔の下部にあたり、南北方向に約3mの幅で遺存する。これは、第9-1面の306流路を埋積する洪水砂の上面でもある。したがってこの面で検出した南北方向の溝、土坑、ピットは、第8層の下面遺構ととらえられる。

溝はすべて南北方向を指向し、重なりをもつものもみられる。おおむね幅は50cmまでで、深さは10cm未満と浅く、耕起痕の可能性が考えられる。295土坑はそれらの溝を切って成立している、長軸が南北方向を指す土坑で、深さは44cmである。溝と相互に切りあい関係をもつ303ピットは、埋土に8b層がブロック状に混入しており、掘削されてから比較的短期間のうちに埋め戻されたものとみられる。第8層中からは帯鉸金具の他、いくつかの置石を確認している。

第8層出土遺物（図41・図42）

第8層出土遺物は、図化したものの他に287点ある。そのうち土師器が254点と大半を占める他、須恵器27点、黒色土器5点（A類3点・B類2点）、弥生土器とみられる破片1点がある。それらは細片で器種を特定できないものがほとんどだが、土師器には甕・小型甕・皿が各5点含まれていた他、羽釜等の大型の煮炊具とみられる土器片が6点、杯12点、壺とみられる破片1点、移動式竈とみられる破片7点を認めた。第7-3b層出土遺物の様相と似るが、第8層では瓦器片が認められないことから、12世紀代の遺物はほとんど含まれないと考える。一方、古代後半の時期の遺物に限ると、図41-119のように「手」字状口縁皿に口径と器高の大きいものが含まれる点など、上層の遺物よりも若干時期がさかのぼる様相も認められる。8世紀・9世紀代の、古代前半の時期の遺物の増加も明確化する。第8b層から図化したもの（図42-124~140）の他、354点の遺物が出土した。図42をみても明らかなように、第8b層出土遺物においては土師器が大多数を占め、とりわけ小型の甕や高杯が多数出土している点が注目される。それらはおそらく306流路で行われた祭祀行為に伴うものとみられ、306流路の北側延長部分を調査した、08-1調査区の調査の際も同様の状況がみられた。第8b層出土遺物のうち、掲載遺物以外の内訳においても、土師器は319点と大多数を占める。その中には小型の甕とみられる破片が22点、小型の高杯とみられる破片が3点含まれていた他、羽釜や大型の甕とみられる破片15点と、杯7点が認められた。土師器以外では須恵器が27点、弥生土器とみられる破片7点、焼土塊1点が出土した。

上層の第7-3b層における遺物の出土状況も勘案すると、第8層は10世紀前半を上限、11世紀後半を下限とする時期に、第8b層は10世紀前葉を上限、11世紀前半を下限とする時期に形成されたととらえられる。さらに第8層出土遺物と第8b層出土遺物を概観すると、第8層では10世紀後半から11世紀前半に位置づけられる時期の遺物のまとまりがある。それに対して第8b層出土遺物は、時期判断の基準となる食器類の出土が限られていたこともあり、やや判断の決め手にかけるが、8世紀・9世紀の時期でまとまっている印象を受ける。したがってそれら二つの層から出土した遺物を概観すると、10世紀前半代のものが欠けている印象を受ける。掲載遺物に含まれない第8b層出土遺物の中に、杯口縁部の細片でやや外反する口縁端部を上方にわずかにつまみあげ、口縁端部の断面が隅丸三角形を呈するものを1点検出した。これ以外に10世紀前半代に比定できうる遺物を認めなかったことから、第8層と第8b層の形成時期には若干の時期差がある可能性もある。

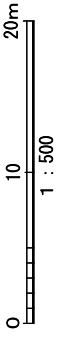
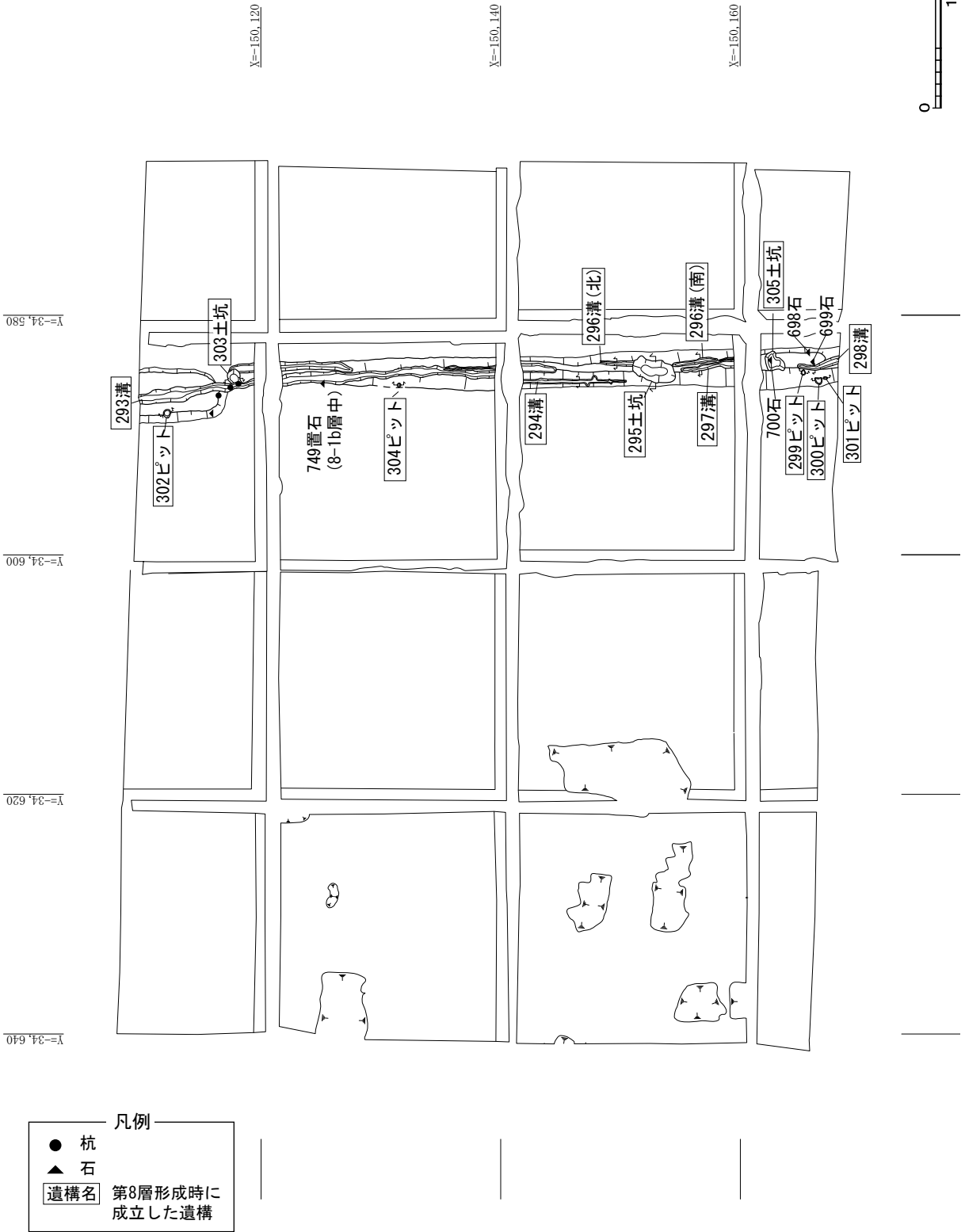


図39 第8b面平面図

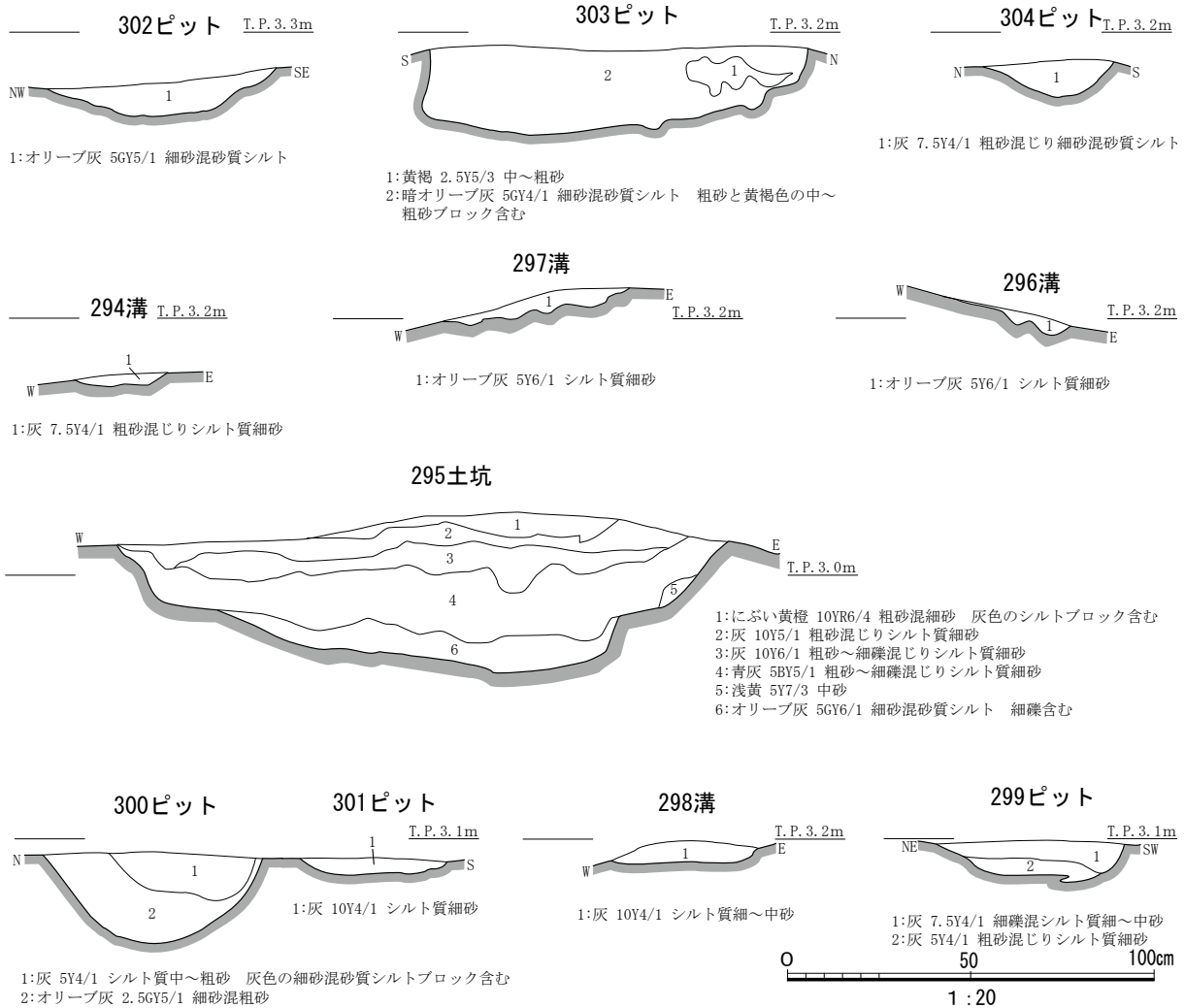


図40 第8 b面検出〔第8層下面〕遺構断面図

第9-1面 (図43・図44)

第8層もしくは第8 b層を除去して検出した、古代前半の遺構面である。標高はT.P.+2.8～3.2mで、306溝からY3トレンチまでの北半部で標高がやや高くなる傾向が認められた。

調査区東部で、ほぼ南北方向を指向する幅7mの306流路を検出した。これは下面の流路から継続する遺構で、南から北に向って溝底がゆるやかに傾斜する。溝の幅は5～6.5mで、深さは40cm前後である。流路の兩岸にあたる部分では多数の杭を検出した。ただ、杭は下面においても検出されており、厳密にそれぞれがどの段階の流路に属するかは明確にしがたい。306流路の北側の延長部分は、08-1調査区でも検出されている。それによるとと溝の西肩が、十四の坪と十五の坪の境界となっている東西方向の坪境畦畔の手前で途切れ、開放状態になっている様子がうかがえる。なお306流路を埋積した土層を第8 b層ととらえているので、そこから出土した遺物の詳細については「第8層出土遺物」の部分参照されたい。

第9-2面 (図45・図46)

第9-1層を除去して検出した古代前半の遺構面である。基本層序の章でも述べたように、第9-2層の分布域はほぼ調査区の東半部に限られる。標高はT.P.+2.8～3.2mで、ほぼ平坦である。調査区東部で検出した323流路は、第9-1面検出の306流路の前身となる溝で、南から北に向って溝底がゆるやかに傾斜するとみられる。この段階の流路の底部は、後世に浸蝕をうけたため遺存しないが、前後の遺構面での流路の検出状況

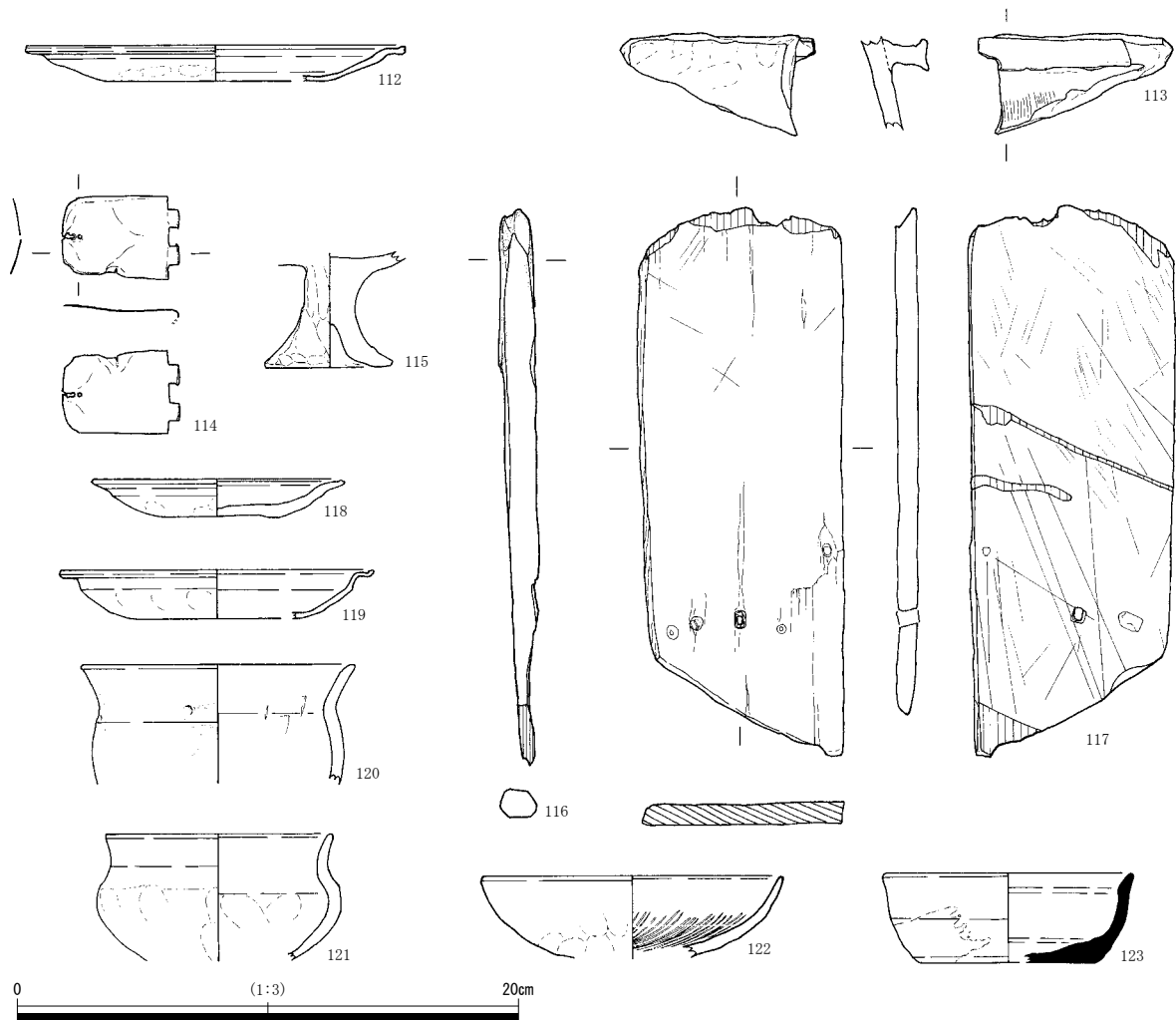


図41 第8面・第8層・第8b層・側溝（第8層～第10-1層）出土遺物実測図〔112～122：第8層、123：第8～10-1層〕

から考えて、同じ場所で流路が機能していたと考えられる。前段階の流路に比べて、この段階の流路はさらに直線的な形状へと改変されている。この溝の北側の延長部分は08-1調査区でも検出されている。それによると、十四の坪と十五の坪の境界となっている東西方向の坪境の位置で、北流していた溝が西へまっすぐ方向を変える状況がみられる。これはもともと、北西にゆるやかに方向を転じて蛇行していた流路を、X=150,093付近で、杭の打設ならびに盛土・畦畔によって流路を換えた結果と考えられている。したがってこの状況と呼応するように、当調査区でもこの段階で流路が改変されたとみられる。このことから流路の改変は、坪境部分のみならずその南側においても行われていたことがわかった。

流路西側の、調査区北半部ではピットや土坑を検出した。これらは第9-1層の形成段階に成立した遺構ととらえられる。ピットは直径が20～50cmで、深さはおおむね10～20cmである。307土坑は直径が1.8m、深さは約60cmで、遺構埋土には第9層に由来するとみられる灰色のシルトブロックが含まれていることから、比較的短時間のうちに埋め戻されたと考えられる。

第9-3面（図47・図48）

第9-2層を除去して検出した、古代前半の遺構面である。標高はT.P.+2.8～3.1m強でほぼ平坦である。

323流路の位置や形状はほとんど変わらないが、流末にあたる北側の部分が、前段階の流路に比べてやや東に振る。この流路は最終的に第9-2b層で埋積される。後の時期の流路と比較すると、この段階では元の流路の名残をとどめるものの、前の段階の流路よりは直線的になっている状況がうかがえる。この溝の北側の延

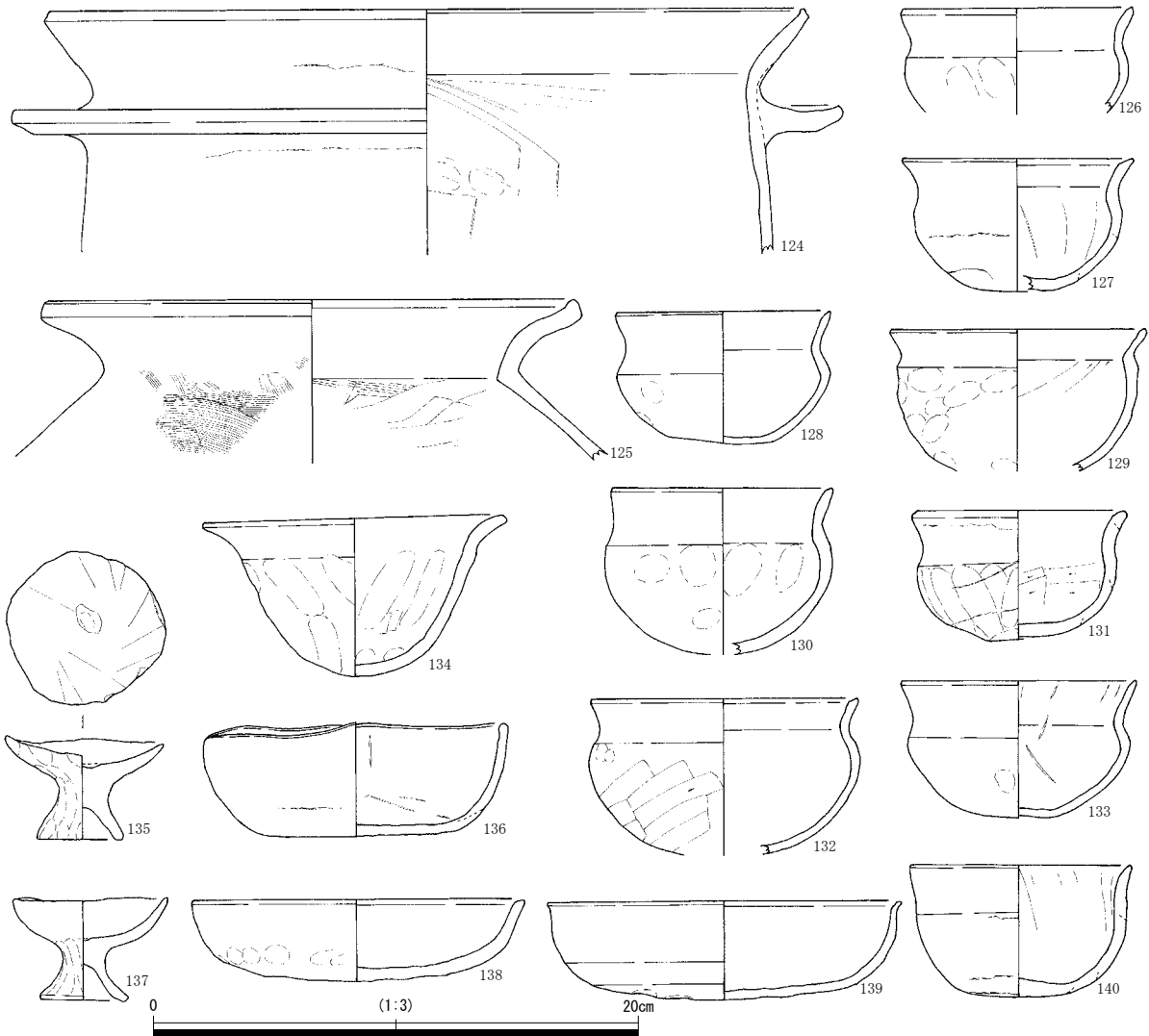


図42 第9-1面306流路出土遺物実測図

長部分が、08-1 調査区でも検出されている。それによると、北流していた溝がゆるやかに北西方向に蛇行し、加えてその方向変換点から北西に約20mはなれたところで、流路が二股に分かれる状況がみられた。

当調査区では323流路の西肩に近い部分で、調査区北半部にあたる範囲を中心にピットを検出した。それらは第9-2 b層が介在しない範囲で検出されていることから、第9-2層の下面遺構ととらえられる。ピットの直径はおおむね30~50cmの大きさで、深さ約50cmの327ピットを除くと10cm前後と浅い。

323流路の埋土から須恵器の杯身、土師器の杯・皿等が完形で出土した他、杭、馬の下顎骨や歯なども出土した。

第9-4面 (図49~図52・図58)

第9-3層を除去して検出した、古代前半の遺構面である。標高はおおむねT.P.+2.6~2.8mである。328溝が横切る調査区南東隅では、T.P.+2.9m強とやや高く、北および西側に向けてゆるやかに地盤高が低くなる。また調査区南西隅の部分ではT.P.+2.5m前後とやや低い傾向が認められた。

この面では323流路の他、溝やピット・土坑を検出した。

323流路はおおむね南北方向を指向するが、北寄りの部分でやや東に振る。この溝の北側の延長部分が、08-1 調査区でも検出されている。それによると北流していた流路がゆるやかに北西方向に蛇行するが、その方

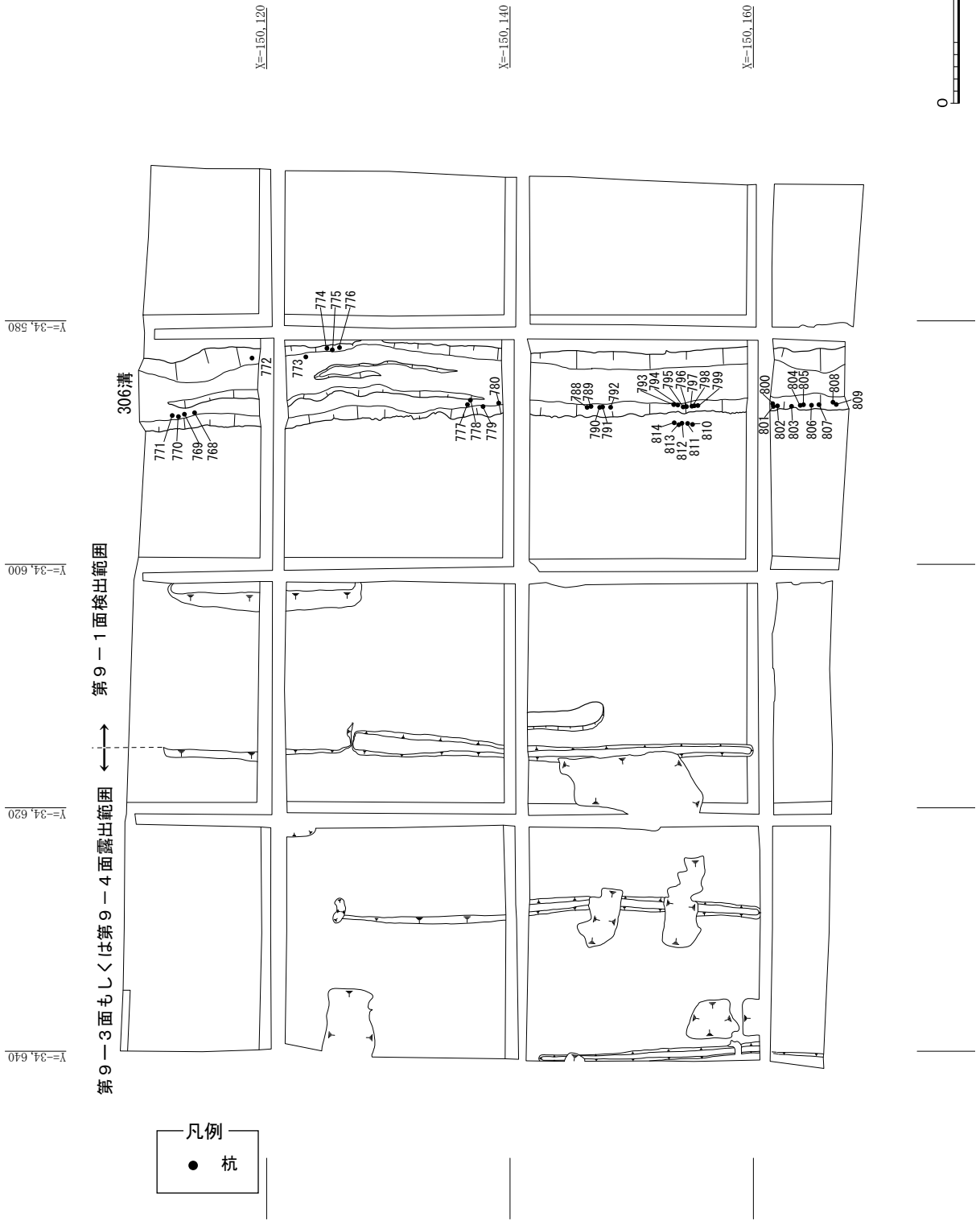


図43 第9-1面平面図

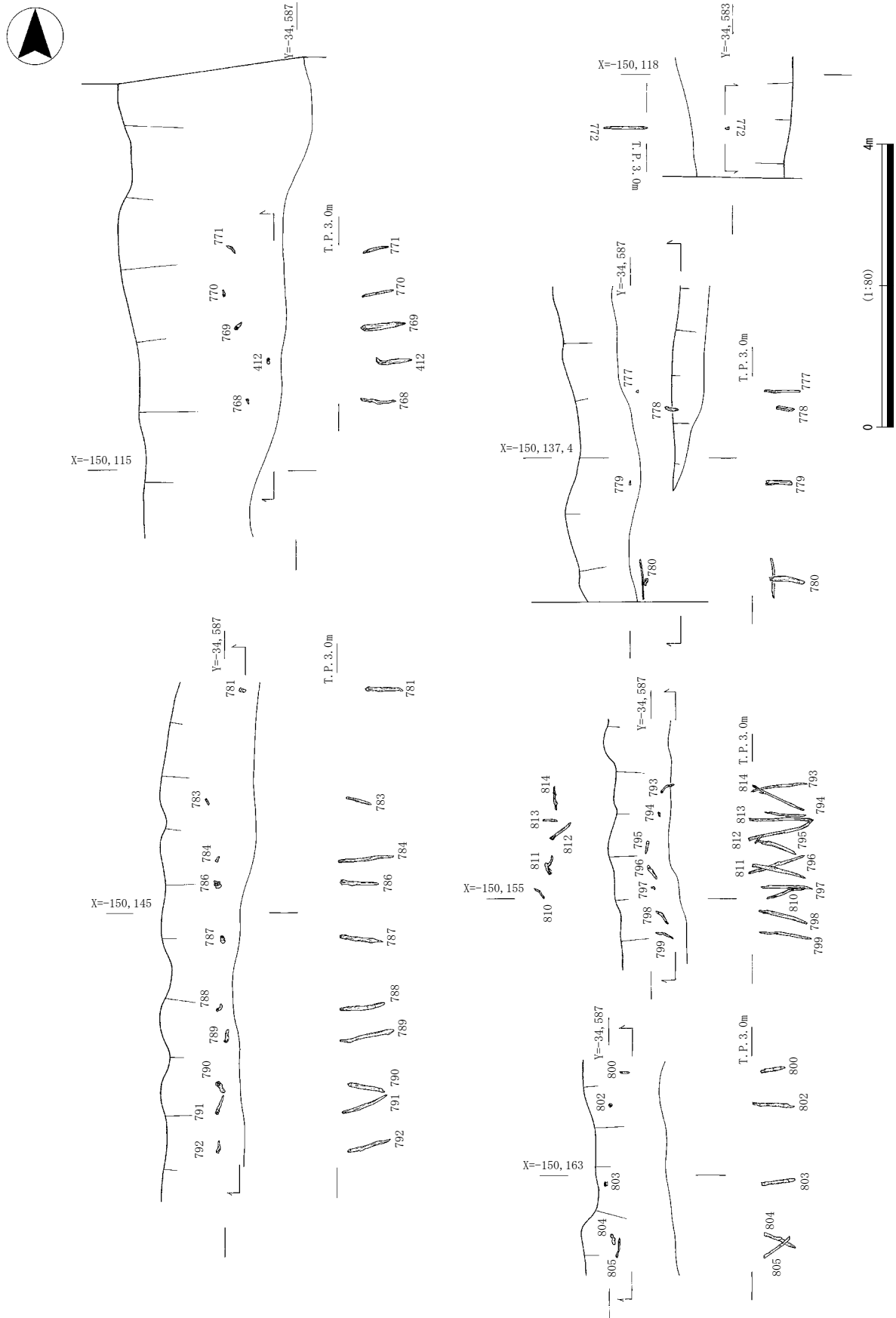


図44 第9-1面検出杭平面・立面図

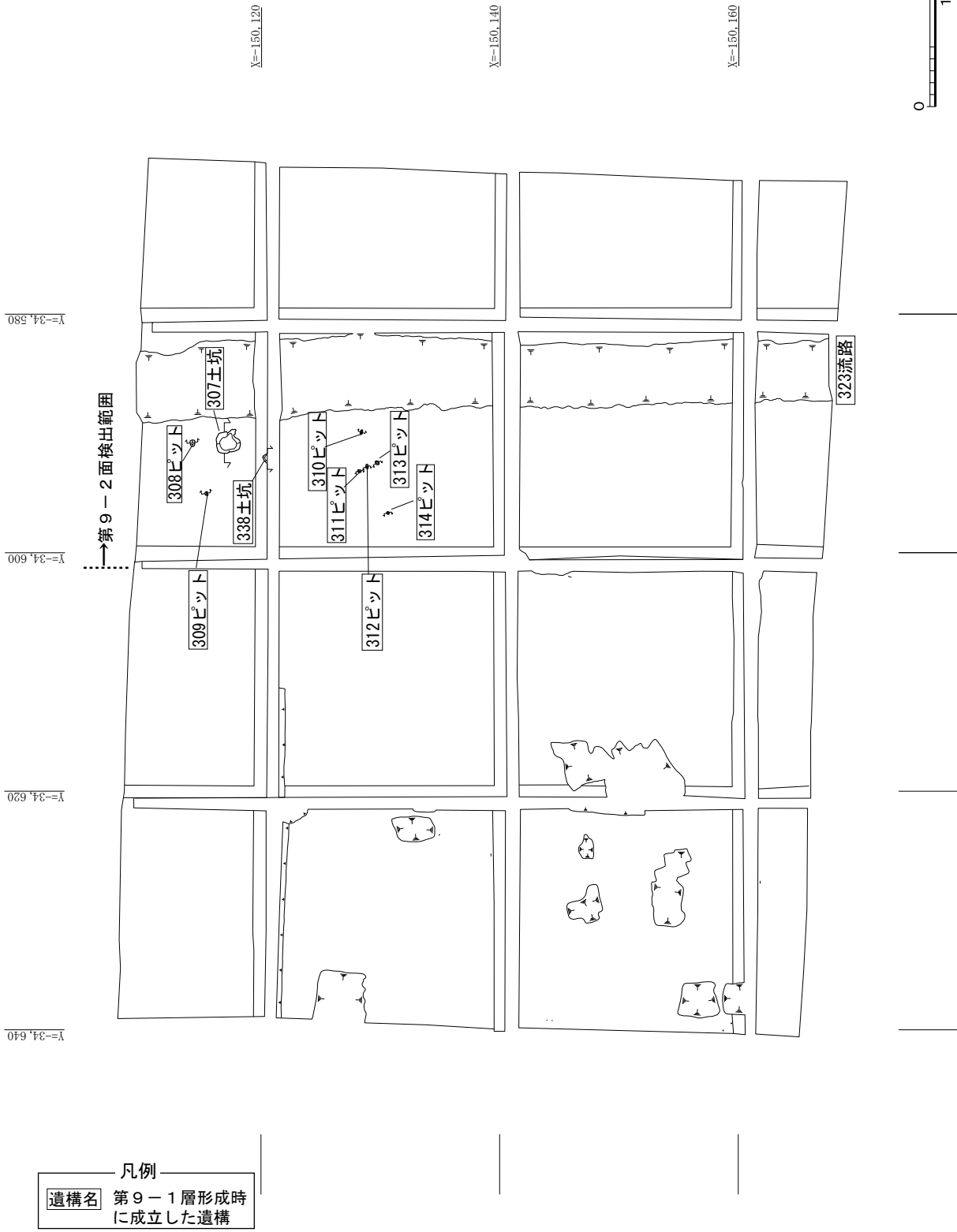


図45 第9-2面平面図

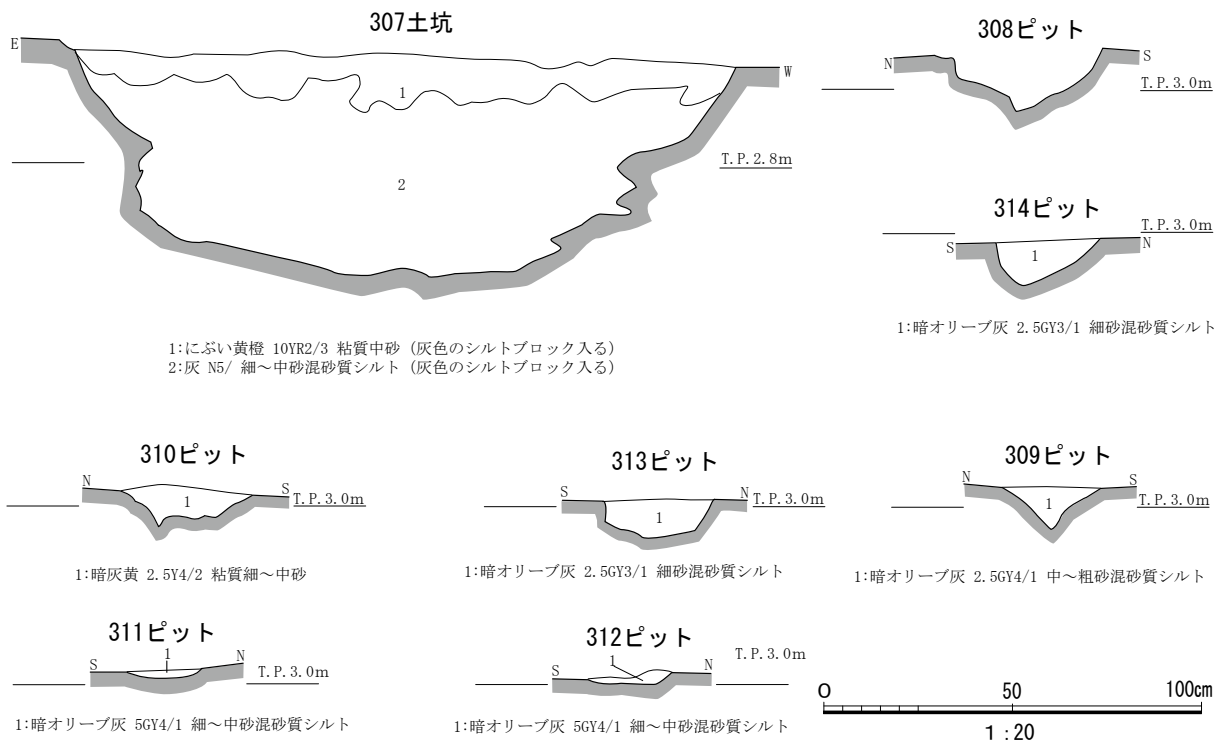


図46 第9-2面検出〔第9-1層下面〕遺構断面図

向変換点に近い箇所では流路が二股に分かれつつ、それらはほぼ平行しながらさらに隣の調査区へと続く状況がみてとれた。

328溝は南東から北西に向かって流下し、北端が323流路に合流する。ただ323流路のように、第9-3層で埋積される状況がみられなかったことから、328溝は第9-4面で検出した323流路と同時に併存したものではないと考えられる。328流路が、シルトブロック混じりの、9-3層に類似する土で埋積されていることも勘案すると323流路よりも後の、第9-3層形成段階に成立し、埋積した遺構と考えられる。

この遺構面では他にも土坑やピット、短い溝を検出したが、それらはおおむね第9-3層形成過程に成立・埋積した遺構と考えられる。ただ336ピットや315溝を検出した調査区西寄りの部分は、第9-2層・第9-3層の分布範囲からはずれており、第9-1層を除去した段階で第9-4面を検出している。したがってこれらの遺構は第9-1層形成過程に成立したととらえられる。

331溝は全長11.5m程度で、深さは10～20cm弱と浅い。第9-3層が形成される過程で上部が削平され、底部が部分的に残存した溝の可能性はある。底部は、北東から南西にかけてわずかに傾斜する。調査区東部の329土坑には、323流路肩部でみたような複数の杭が直線的に打ち込まれているが、その性格は不明である。329土坑は最深部で30cm強だが、これ以外の土坑は深さが10cm前後と極めて浅い。ピットは直径40cm前後で、深さは10～20cmである。

第9層出土遺物 (図53～図57)

第9層から出土した遺物を概観すると、古墳時代後半から古代前半の遺物が大半を占める。

第9-1層出土遺物は図化したもの以外に215点あり、古代および古墳時代の土師器の破片が、187点と大半を占める。さらに土師器のなかでは古代のものが大半を占める。それ以外に弥生土器もしくはその可能性のある破片と須恵器の破片が各12点、黒色土器片4点を検出した。土師器は、器種も判別できない細片が大半を占めるが、杯もしくは皿の破片が10点、小形の甕1点、高杯1点、煮炊具12点を認めた。杯もしくは皿のうち、口縁断面の形状や器形から8世紀前半代とみられるものは7点、8世紀後半～9世紀とみられるものが

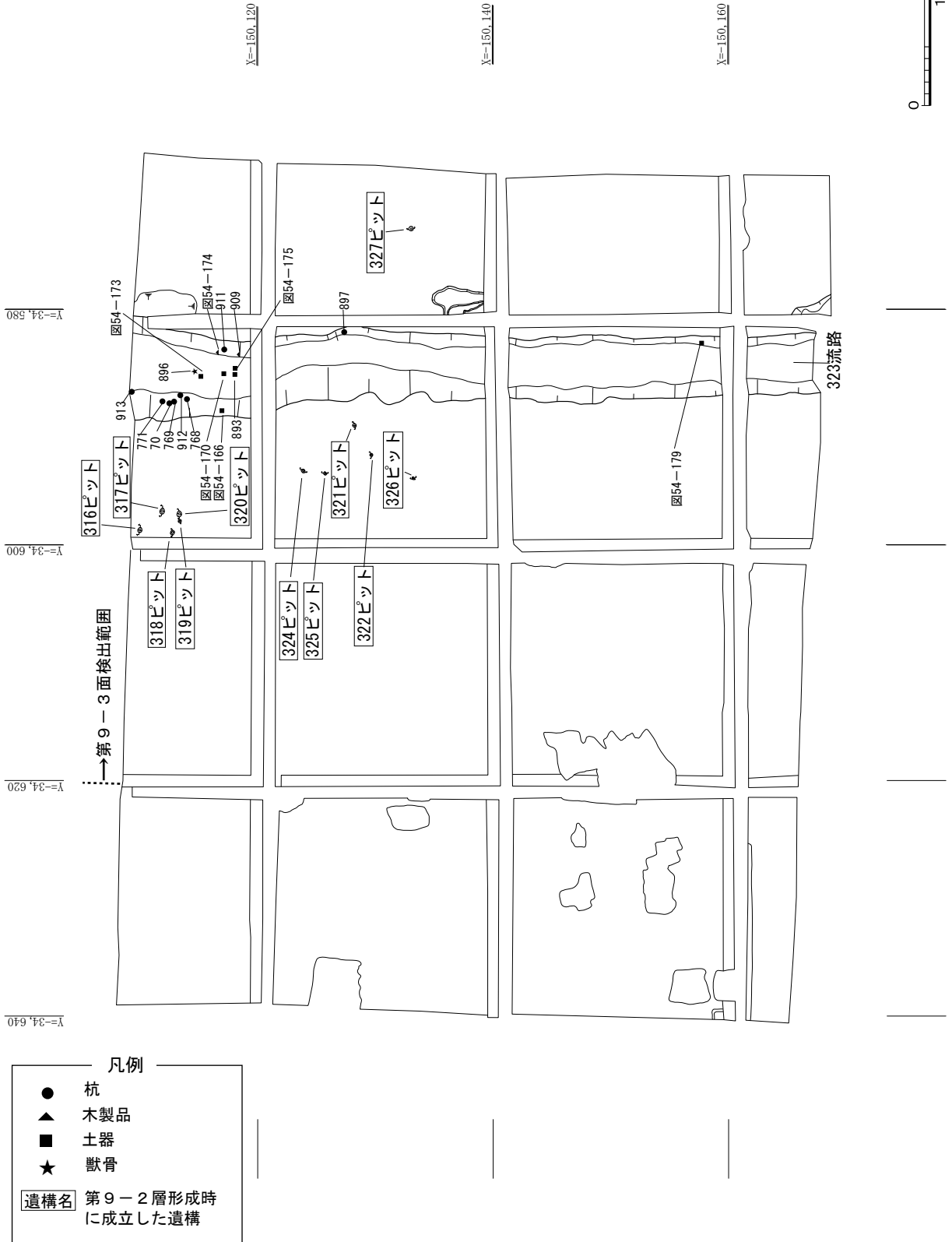


図47 第9-3面平面図

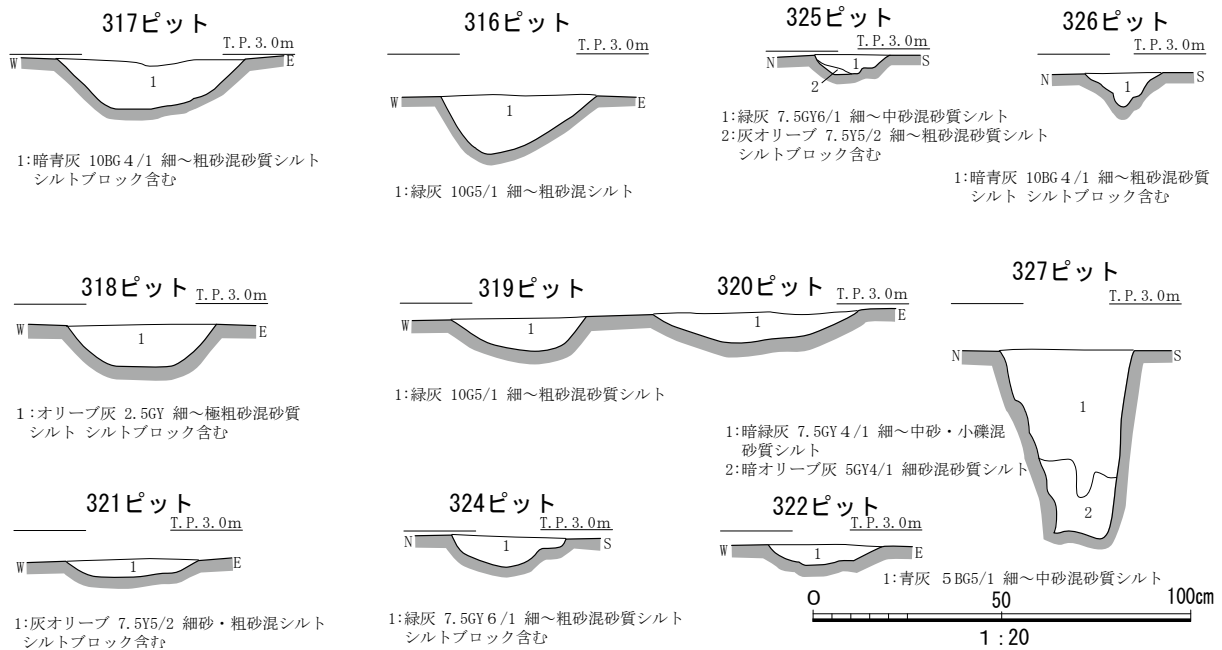


図48 第9-3面検出〔第9-2層下面〕遺構断面図

2点だった。黒色土器にはB類が1点みられたが、それ以外はA類である。

第9-1層を除去した段階で検出した遺構は、第9-1層の下面遺構と考えられる。したがってそれらの遺構埋土から出土した遺物は、第9-1層の形成期間のある時期に混入したものととらえられるので、ここで併せてとりあげたい。第9-2面で検出した遺構のうち、埋土に遺物が含まれていたのは307土坑で、土師器8点が出土した。そのうち杯の口縁部とみられる破片は、口縁端部を上方につまみあげ、断面が隅丸三角形を呈する。器形と併せて勘案すると、8世紀前半代のもつとみられる。一方、336ピットも第9-1層の形成段階に成立した遺構とみられる。埋土から9世紀代のもつとみられる完形の土師器の杯が出土した。このように第9-1層出土遺物には、8～9世紀代の遺物によるまとまりが認められつつ、古代後半の遺物も僅かに含まれる状況がみられた。

第9-2層出土遺物は、図化したもの以外に152点ある。そのうち古代および古墳時代の土師器の破片が、132点と大半を占める。さらに土師器のなかでは古代のもつとみられる。その他に須恵器18点、黒色土器A類1点、砥石の破片とみられる石片1点がある。須恵器のなかには図53-143と同形態の断面形状をもつ高台片が数点含まれていた。土師器の大半を器種判別の難しい細片が占めるが、杯もしくは皿とみられるものが9点、煮炊具とみられるものが21点、小型の甕とみられるものが4点認められた。杯もしくは皿とみられる破片のうち、口縁断面の形状などから8世紀の前半代とみられたのは4点で、それ以外は8世紀中葉から9世紀前半代のもつとみられる。第9-3面で検出された第9-2層下面遺構のうち、326ピットと316ピットから遺物が出土している。前者で土師器が12点、後者で土師器が1点出土したが、いずれも極めて細片で磨滅が著しく、帰属時期の判別はできなかった。

第9-2b層出土遺物は、図化できたもの以外に160点ある。そのうち古代および古墳時代の土師器の破片が、152点と大半を占める。さらに土師器のなかでは古代のもつとみられる。土師器は器種判別の難しい細片が大半を占めるが、煮炊具とみられるものが28点、高杯4点、杯もしくは皿とみられる破片が13点含まれるのを認めた。杯もしくは皿の破片のうち、口縁の断面形状や器形等から8世紀前半代と判別できたものは

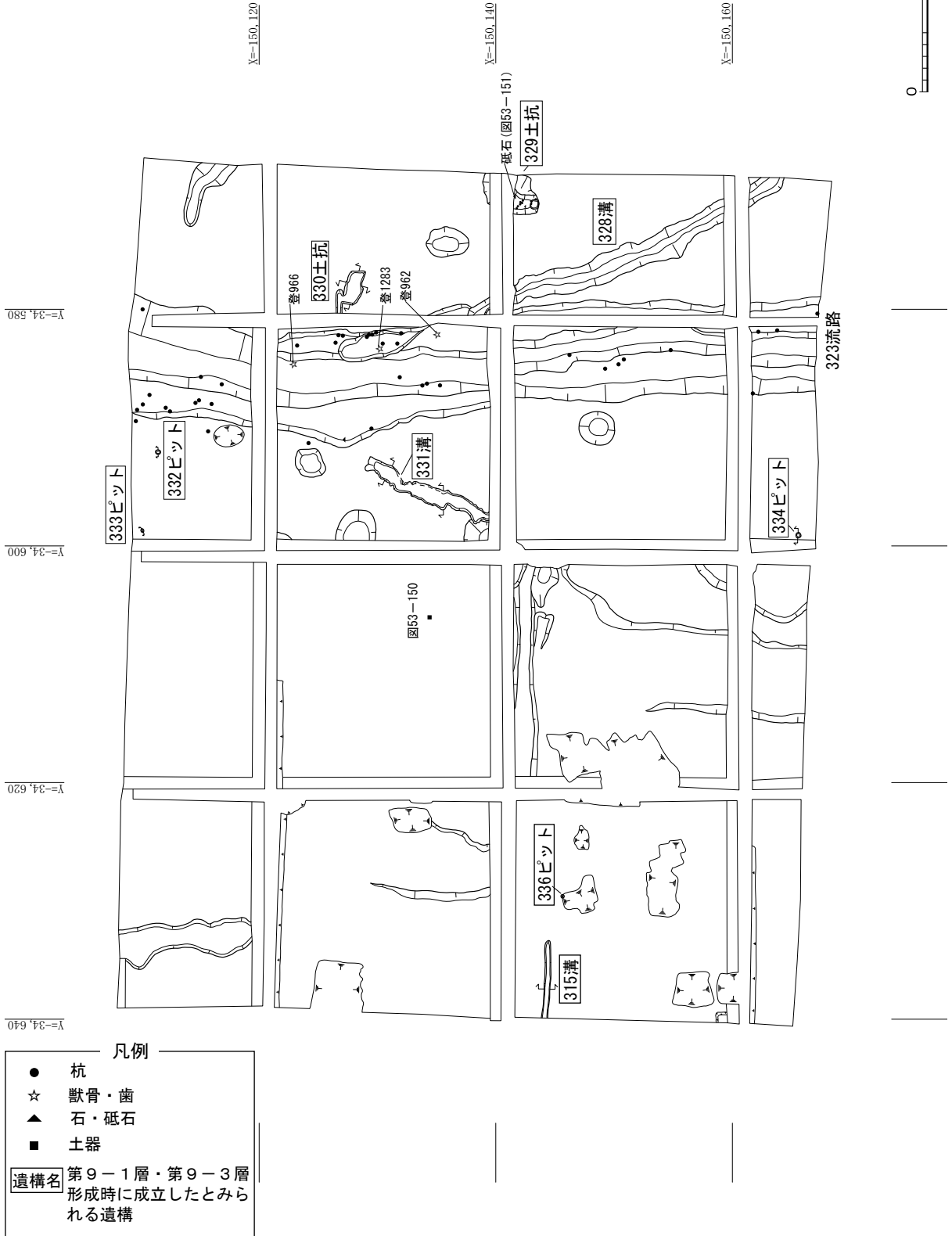


図49 第9-4面平面図

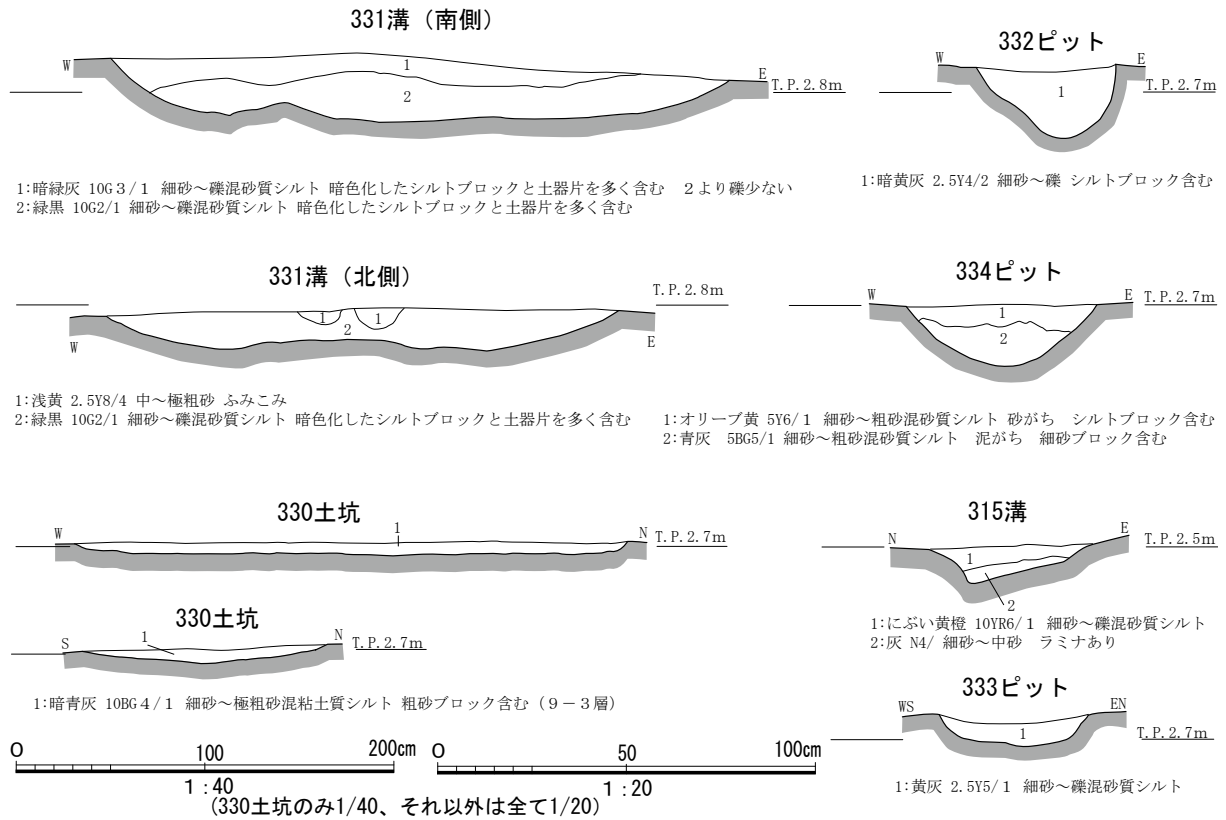


図50 第9-4面〔第9-3層下面〕遺構断面図

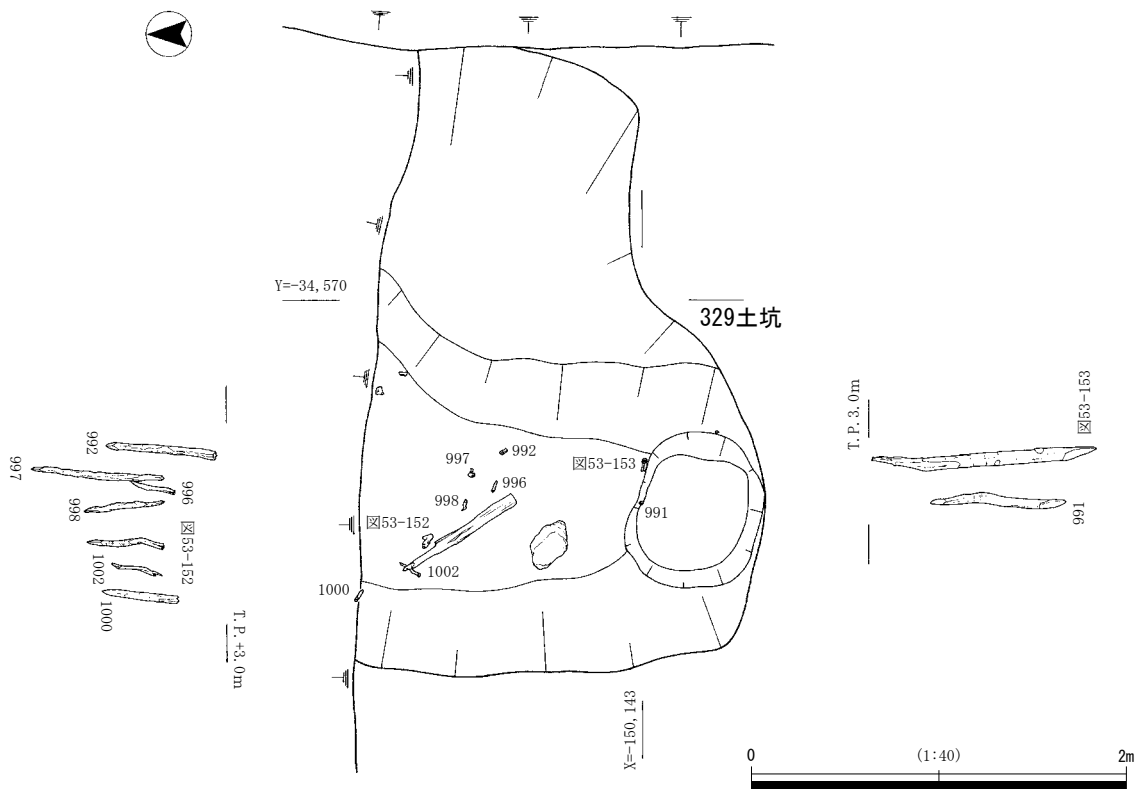


図51 第9-4面検出329土坑平面図・杭立面図

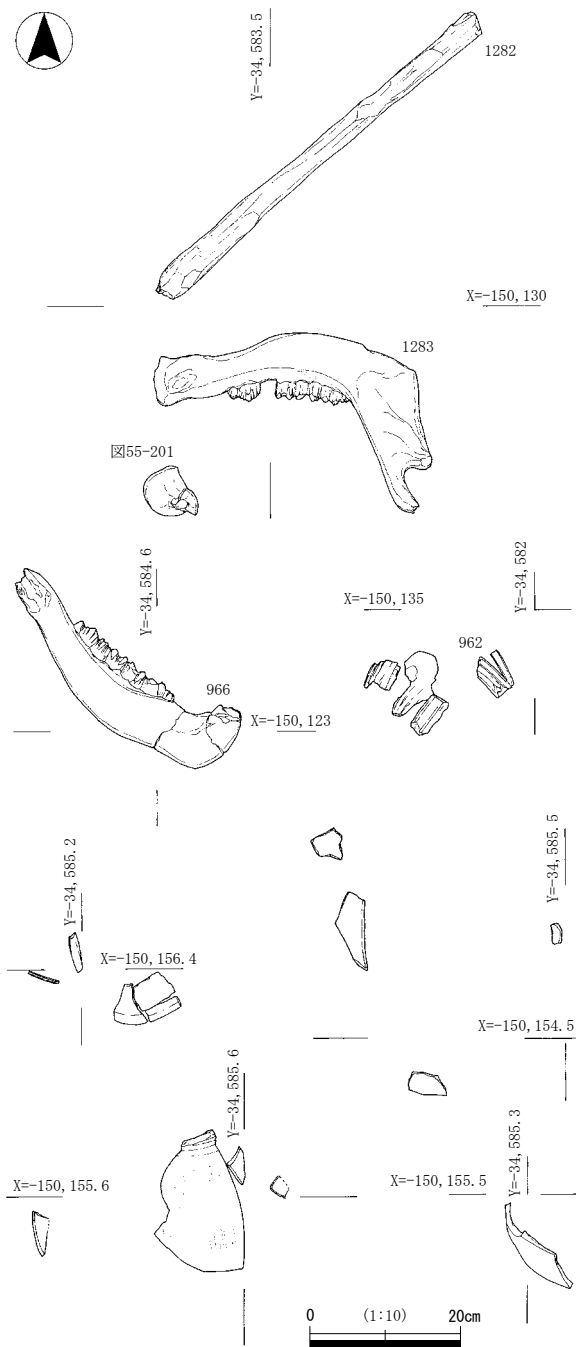


図52 第9-4面検出323流路内(第9-3b層)遺物出土状況

第9-3b層からは、実測図を掲載したものの他に723点の出土遺物を検出した。そのうち古代および古墳時代の土師器が、670点と大半を占める。土師器のなかでは古代のものが大半を占める。その他に須恵器40点、弥生土器もしくはその可能性のある破片が11点、黒釉陶器片とサヌカイト剥片各1点が認められた。土師器のうち、器種判別できたものの中では煮炊具が70点と最も多く、杯もしくは皿とみられる破片が34点、壺もしくは甕が30点、高杯25点、小型甕3点、壺とみられる破片1点と続く。杯もしくは皿のうち、8世紀前半代とみられるものが16点、7世紀代もしくはそれ以前とみられるものが5点認められた。

第9-4層出土遺物は実測図を掲載したものの他に、238点ある。そのうち古代および古墳時代の土師器の破片が、159点と大半を占める。土師器のなかでは古代のものが大半を占める。その他に須恵器51点、弥生土器もしくはその可能性のある破片28点が認められた。土師器のうち、器種判別できたものの中では煮炊具

7点、8世紀中葉から後半代とみられるものが3点だった。

第9-3層出土遺物は、図化できた遺物の他に140点ある。そのうち古代および古墳時代の土師器の破片が、127点と大半を占める。土師器のなかでは古代のものが大半を占める。その他に須恵器11点、弥生土器とみられる破片2点を認めた。土師器は器種判別が難しい細片が大半を占めるが、煮炊具18点、杯11点、高杯4点、壺もしくは甕2点、小型の甕1点を認めた。杯のうち、器形や口縁端部の形状より、7世紀後半代とみられるものが2点、8世紀前半代とみられるもの7点が認められた。

第9-4面で検出した328溝・331溝・329土坑の埋土から出土した遺物は、第9-3層の形成期間に含まれる時期に混入したものととらえられるので、ここで併せてとりあげたい。329土坑からは、実測図を掲載したものの他に69点の出土遺物があった。そのうち土師器が60点、須恵器は5点、弥生土器とみられる破片は4点だった。土師器はいずれも細片で磨滅が著しく、器種判別できるものはなかった。328溝からは104点の出土遺物があり、土師器は91点、須恵器は13点だった。土師器では煮炊具が3点、壺もしくは甕が3点、小型甕1点、杯もしくは皿とみられる破片が2点、高杯4点が認められた。331溝からは329点の出土遺物があり、そのうち土師器が325点と大半を占め、それ以外は弥生土器とみられる。出土点数は多いものの、331溝出土の土師器片はとりわけ磨滅が著しく、器種判別ができたものは少なかった。判別できたのは高杯5点、杯もしくは皿の破片が3点、煮炊具が13点、壺もしくは甕が3点である。

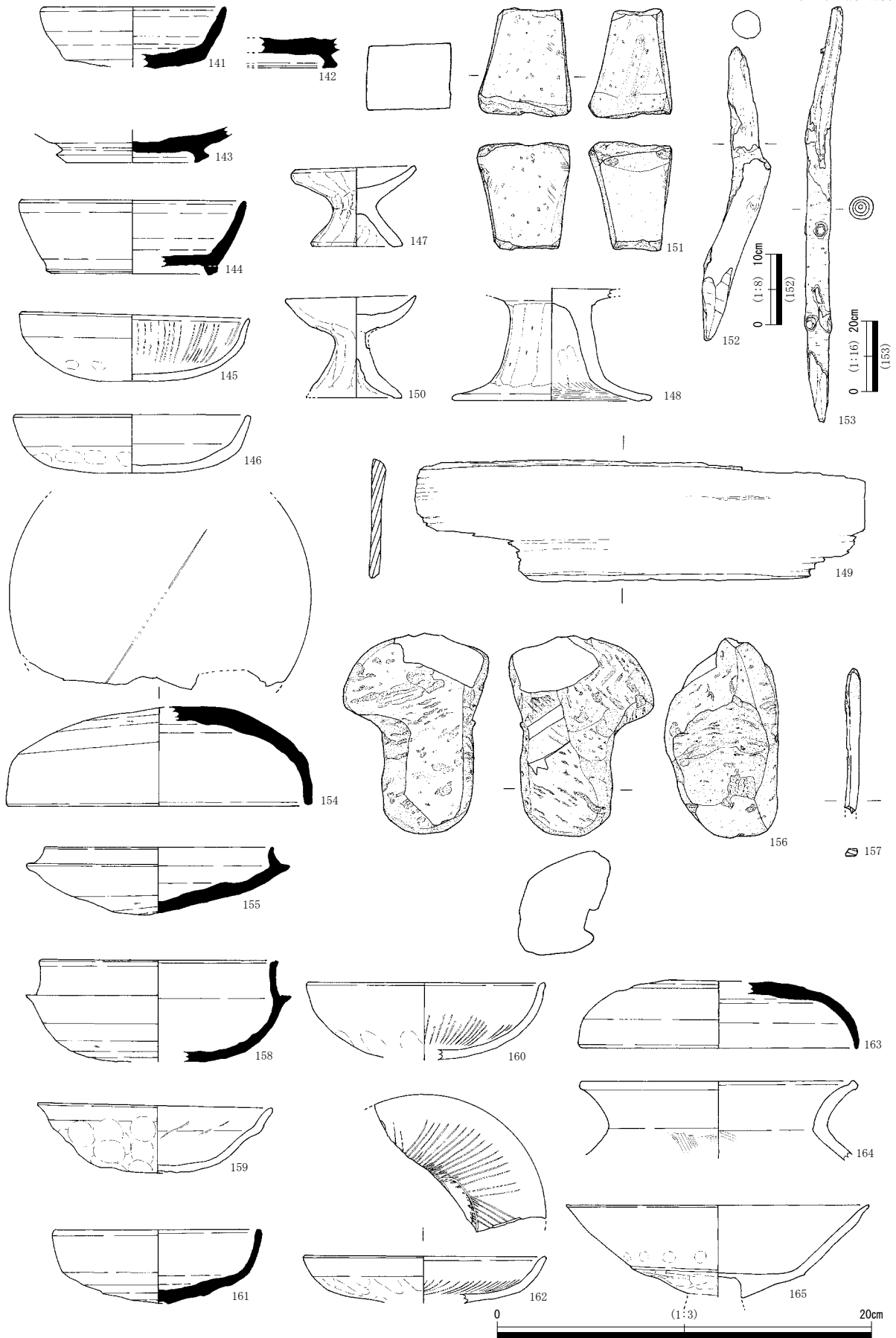


図53 第9-4面329土坑・第10面336ピット・第9-1層～第9-4層出土遺物実測図〔141・142：第9-1層、143：第9-2層、143～150：第9-3層、151～153：329土坑、154～157：第9-4層、158・159：336ピット、160：第9-4層、161：第9層、162～165：第9-3～第11-2層〕

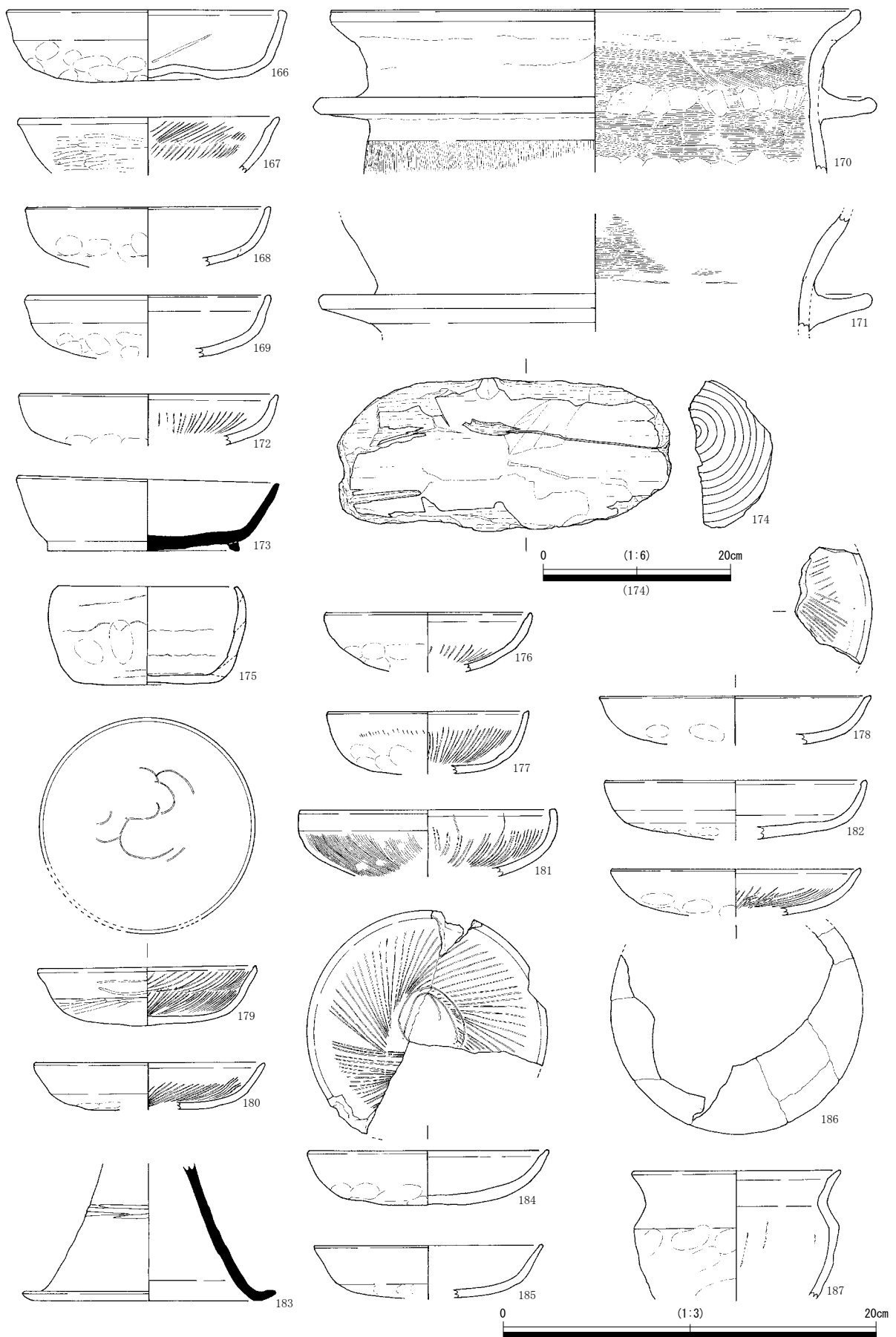


図54 第9-3面検出323流路(第9-2b層)・第9-4面検出323流路(第9-3b層)出土遺物
実測図 [166~179: 第9-3面検出323流路、180~187: 第9-4面検出323流路]

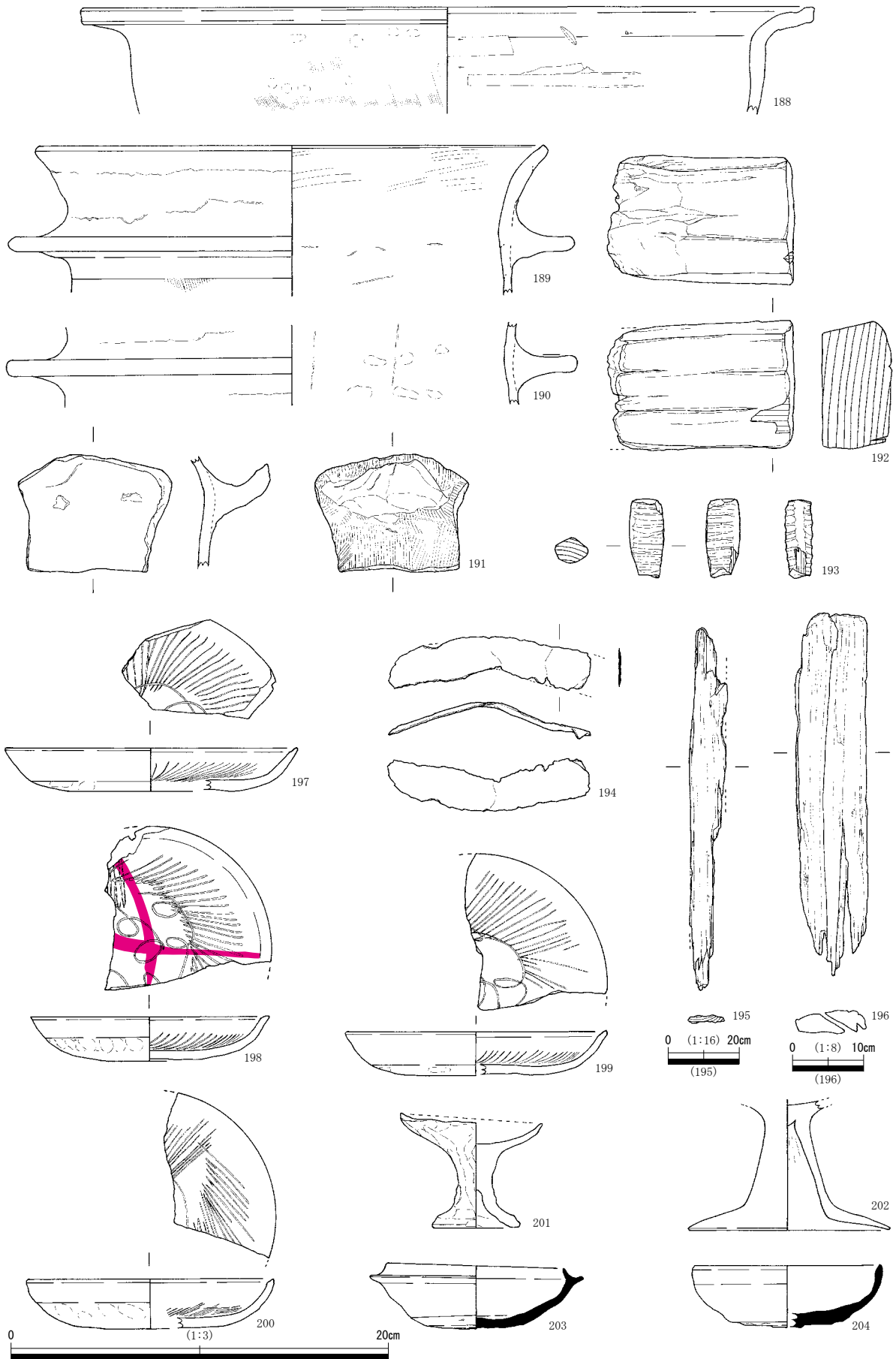


図55 第9-4面検出323流路(第9-3b層)出土遺物実測図

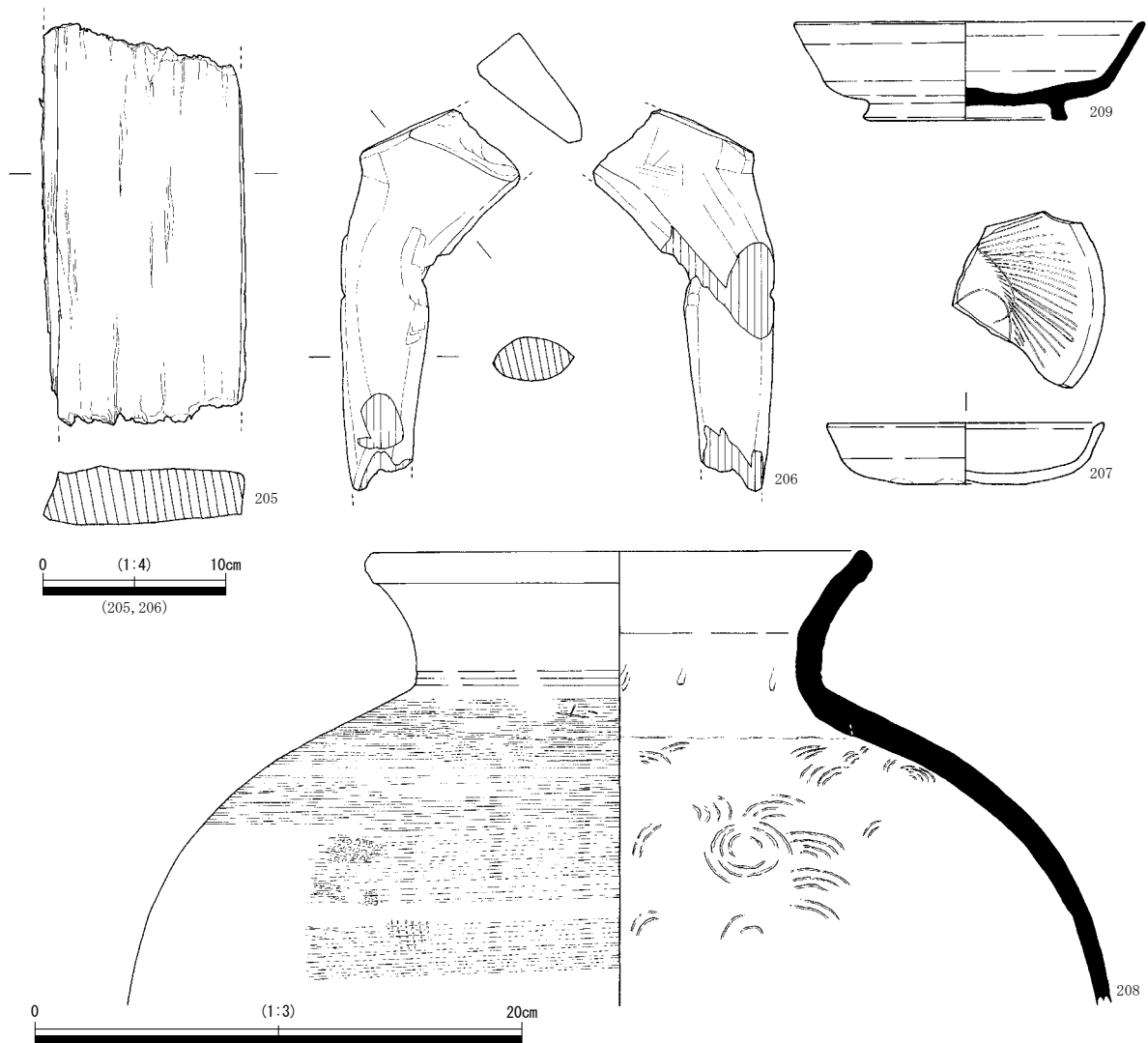


図56 第9-4面検出323流路(第9-3b層)・第10面337ピット出土遺物実測図〔209:337ピット、それ以外は323流路〕

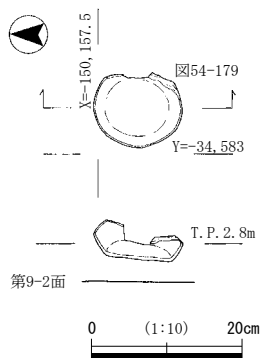


図57 第9-1層遺物出土状況図

が12点と最も多く、高杯、甕もしくは壺を各5点、杯もしくは皿の破片3点を認められた。須恵器では杯の占める割合が増加するのに加え、底部もしくは頂部に線刻を施したものが、図示したものの他に4点出土した。第10面で検出した337ピットは、第9-4層形成過程に成立した遺構と考えられる。その埋土から7世紀後半代に位置づけられる完形の須恵器坏身が出土している。

上記に加え、上層・下層における遺物の出土状況を勘案すると第9-1～第9-4層は、7世紀を上限とし、10世紀前葉を下限とする時期に形成されたことがわかる。

a層、つまり耕耕作土層における遺物の出土状況は、攪乱に伴う遺物の巻き上げや混入により、出土遺物の様相は層ごとに時期が明瞭に分かれるわけではない。ただ第9-1層に若干含まれていた黒色土器が下層ではほとんど認められなくなる点や、下層になるほど高杯や古式土師器甕とみられる器壁のきわめて薄い土師器片、7世紀以前の須恵器杯や弥生土器の含有量が多くなるという点で、徐々に古相を呈する状況がみてとれた。一方、第9-2b層、第9-3b層において耕作による攪乱の影響が少ないため、出土遺物の時期的な傾向を比較的明瞭に

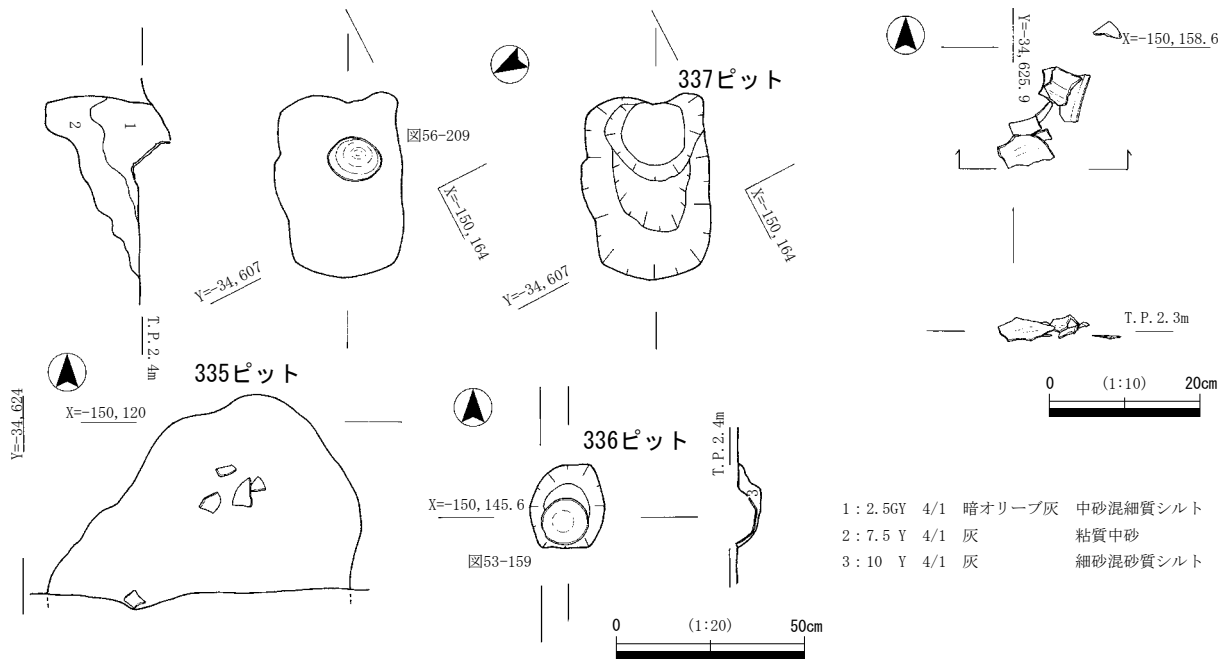


図58 第10面検出〔第9－4層下面〕335土坑・337ピット、第9－4面検出336ピット遺構平面・断面図、第9－4層遺物出土状況図

とらえることができた。それらを勘案すると、第9－1層は8世紀後半から9世紀、第9－2層は8世紀前葉～中頃、第9－3層は8世紀前半、第9－4層は7世紀から8世紀初頭の時期に耕作土が形成されたとみることができる。

第10面（図59～図61）

第9－4層を除去して検出した、古墳時代の遺構面である。調査区北西部が最も高く、やや起伏のある地形である。遺構はピット・土坑をわずかに検出した他に、上層に帰属すると考えられる杭や置き石を確認した。第10面で検出した遺構は、第9－4層の下面遺構ととらえられる。

また第10面を精査中に、完形もしくは完形に近い土器を数点検出した。

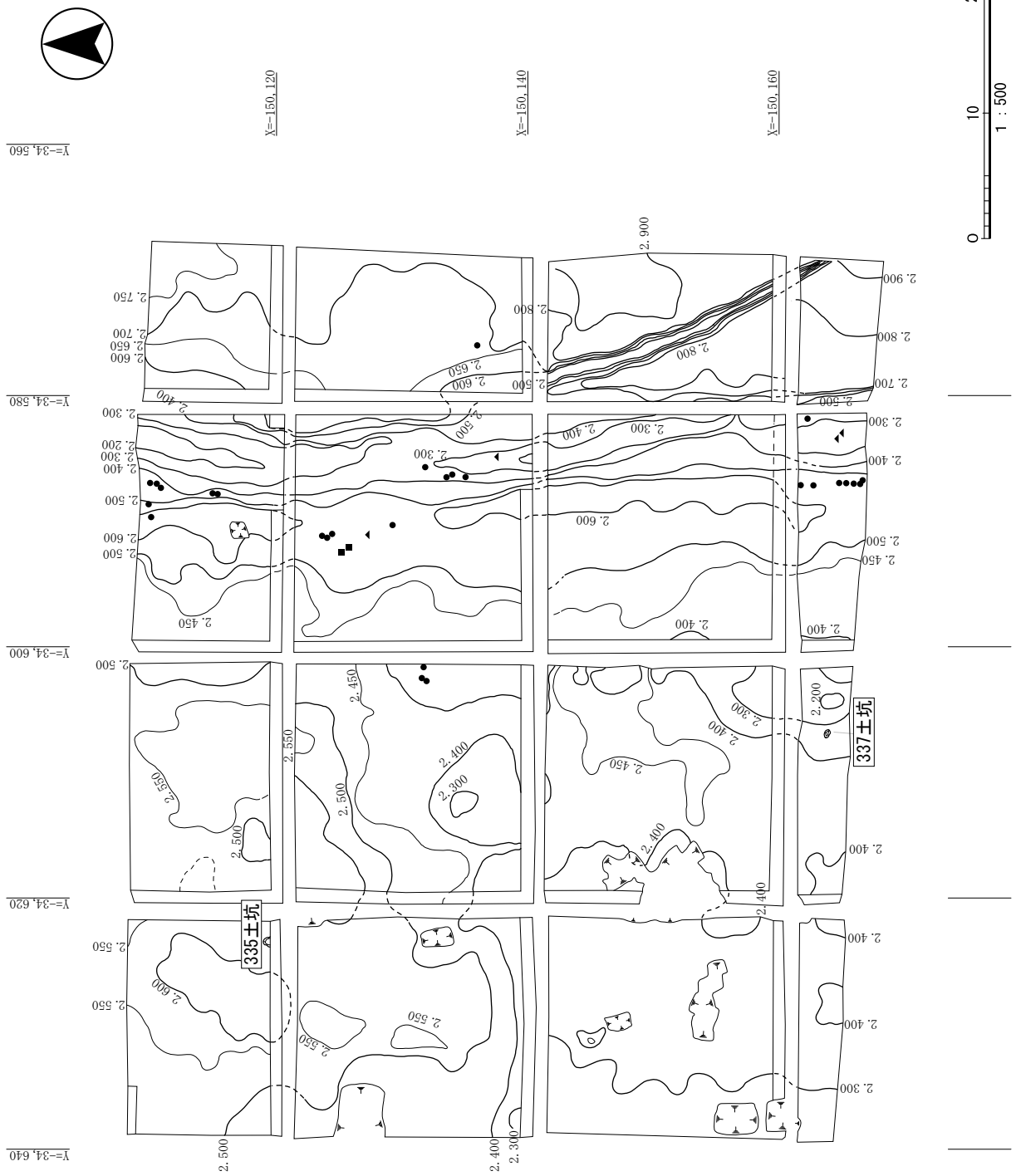
後述する、第10層形成時に成立したとみられる342流路は、この段階では完全に埋没している。

第10b面（図62～図65）

第10b面は、第10層を除去して検出した面である。標高はおおむねT.P.+2.4～2.7mで、調査区南東隅と北西部において地盤高がやや高く、調査区南西部がやや低い。

342流路は調査区中央から西部にかけて、微高地の裾をめぐるように大きく蛇行する。水は西から流路に沿って方向を転じ、南へ向けて流れていたとみられる。これは第10b層堆積後に形成された流路で、第10面段階には埋没していたと考えられる。流路の埋土下部には粗粒の砂礫が、上部にはシルトが堆積することから、人為的に管理された流路ではなく、自然のままに埋積していったと考えられる。流路の幅は屈曲部で広く、最大で10m近くあるが、それ以外ではおおむね4～5mの規模である。深さは屈曲部および、蛇行しながら南北方向を指向する部分では40～50cm程度あるが、東西方向部分は10cm前後ときわめて浅い。埋土から多数の土器の他、鋤・織機などの木製品や、鉄鎌・銅鎌等の金属製品が出土した。

この面では他に、土坑・ピットを検出している。346土坑と347土坑は、調査区北西部の微高地の西裾をとりまくように位置しており、342流路に合流していた溝の底部が残存したものである可能性が高い。もしそうであれば、元の溝は北から蛇行しながら南へ流下し、342流路へと合流していたと考えられる。それ以外の土



- | | |
|-----|-----------------|
| ● | 杭 |
| ▲ | 石 |
| ■ | 木片 |
| 遺構名 | 第9-4層形成時に成立した遺構 |
| | 標高値はT.P.+m |

図59 第10面平面図

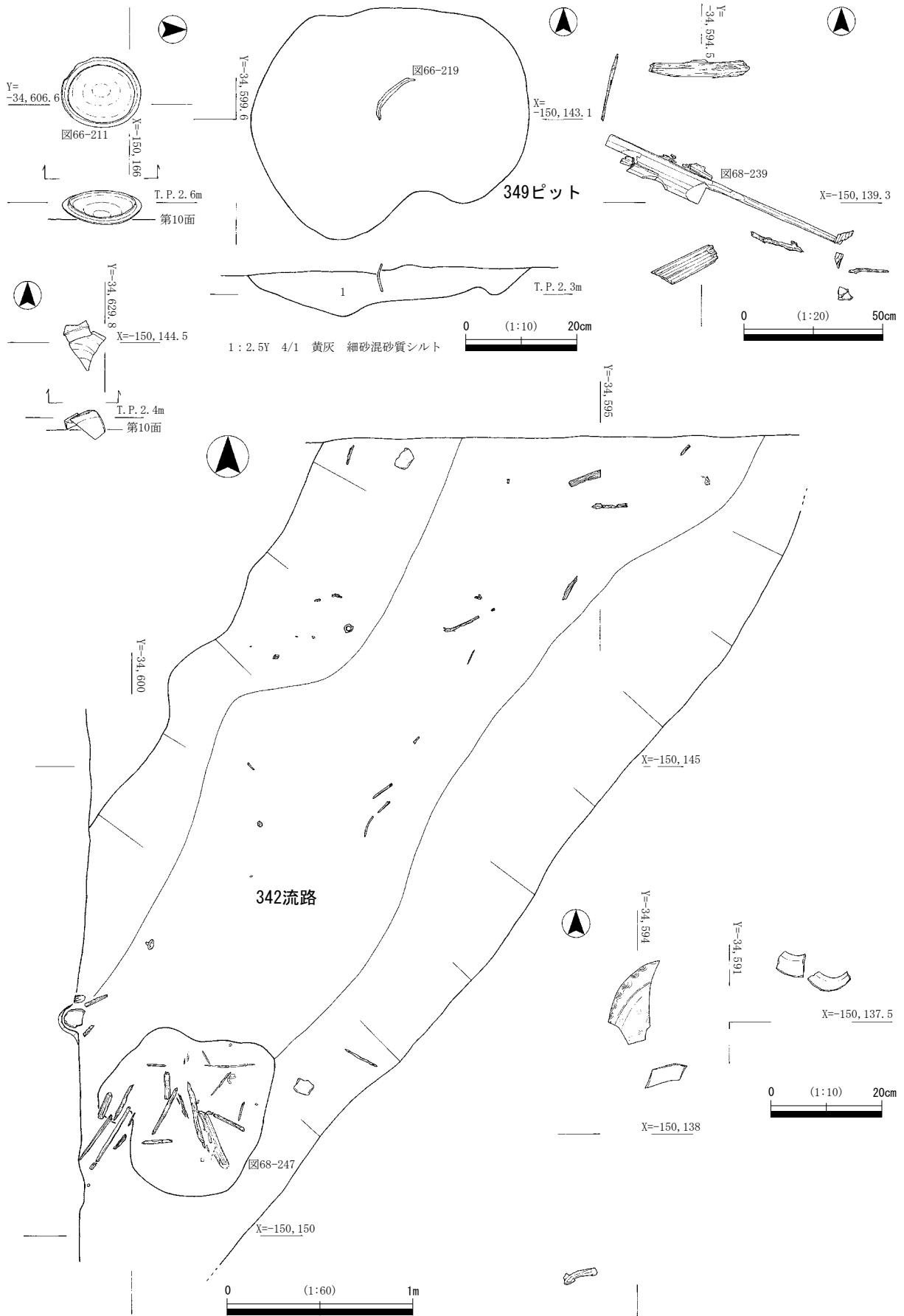


図60 第10面遺物出土状況図、第10b面検出遺構（349ピット・342流路）遺物出土状況図

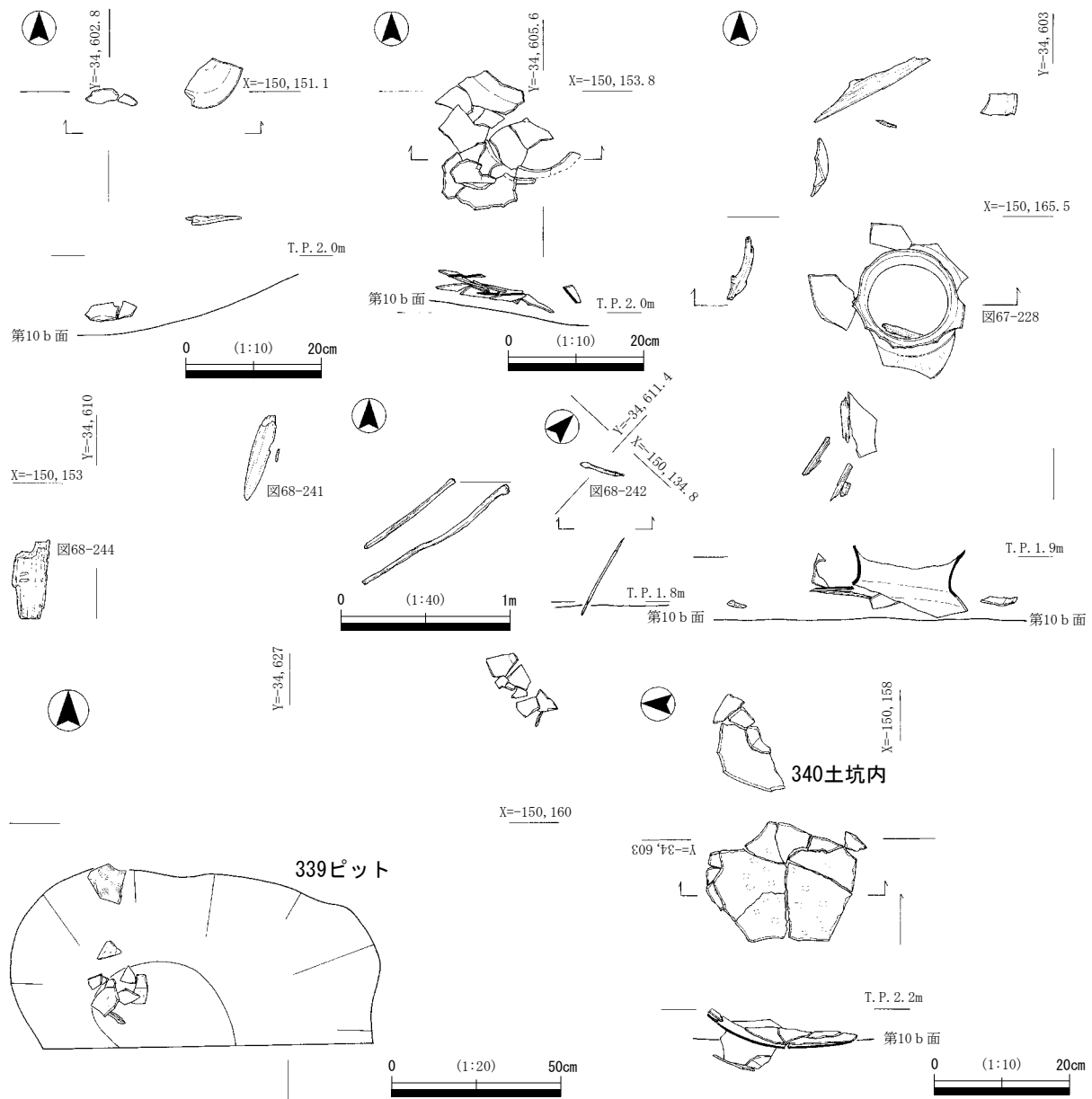


図61 第10層・第10b面遺物出土状況図、第10b面検出339ピット遺物出土状況図

坑も不整形なものが占めており、人為的に形成されたものとは考えにくい。特に342流路に近接して検出された遺構は、346・347土坑と同じく、342流路から派生する水の通り道の痕跡である可能性が考えられる。それらの深さはおおむね10cm前後と浅い。

ピットは主に調査区南東隅の微高地もしくはその周辺部で検出した。それらの直径は30cm前後で、深さは10cm弱と浅い。

第10層出土遺物 (図66～図71)

前述したように、第10面に帰属していた遺構は第9層の形成時に削平されたとみられ、検出することはできなかったものの、第10層もしくは第10b層掘削時に比較的少量の遺物が出土した。

第10層からは、図化したものの他に615点の出土遺物があった。そのうち古代もしくは古墳時代の土師器が570点と大半を占める。また土師器のなかでは古墳時代のものが大半を占めるとみられる。土師器は器種判別のできない細片が大半を占めるが、煮炊具69点、古式土師器甕とみられる破片63点、高杯36点、小型丸底

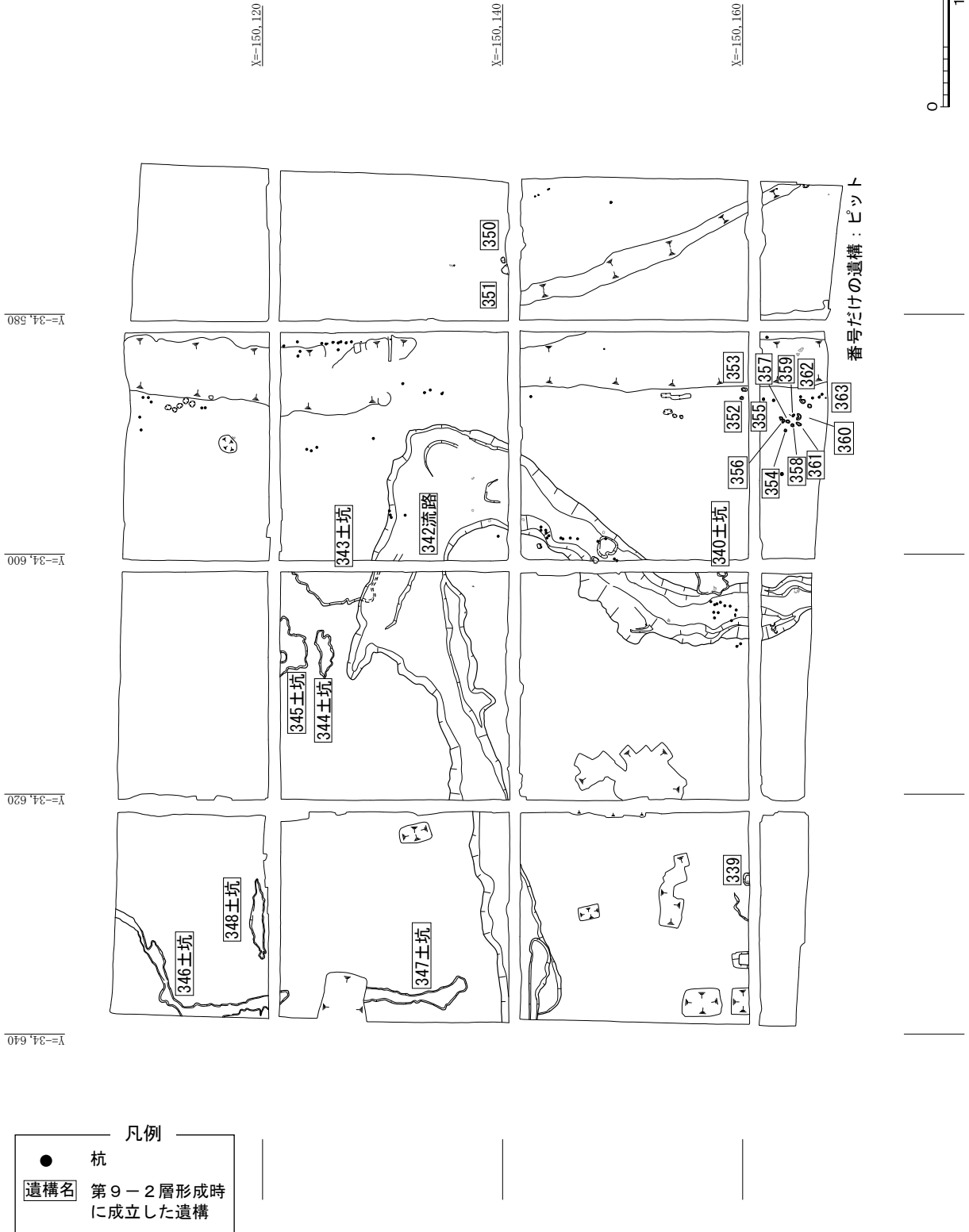


図62 第10b面平面図

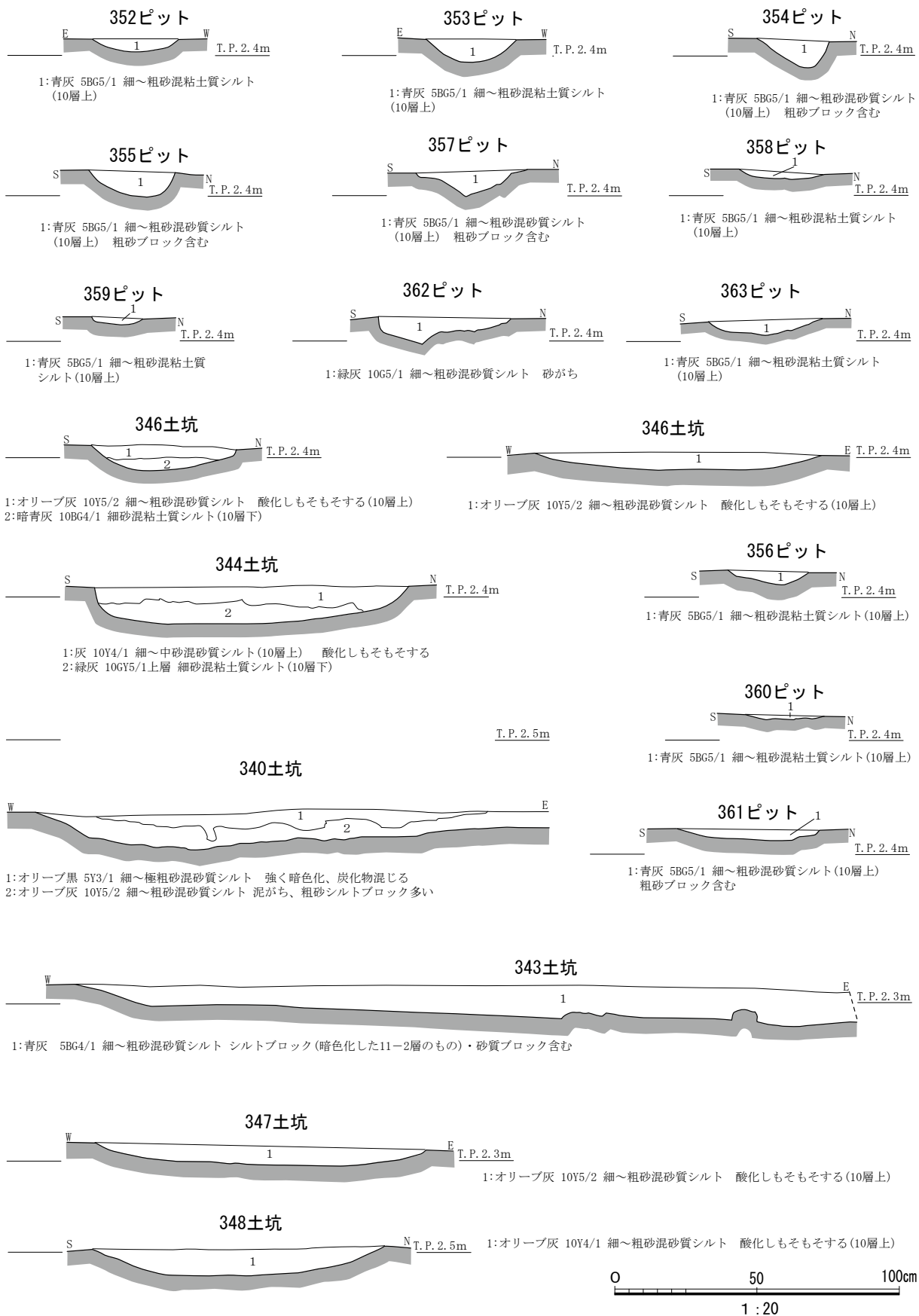


図63 第10b面検出〔第10層下面〕遺構断面図

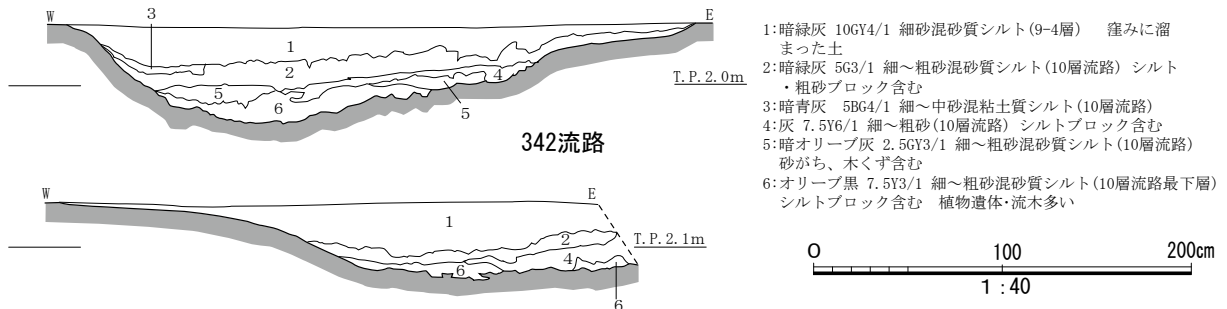


図64 第10b面検出〔第10層下面〕遺構断面図

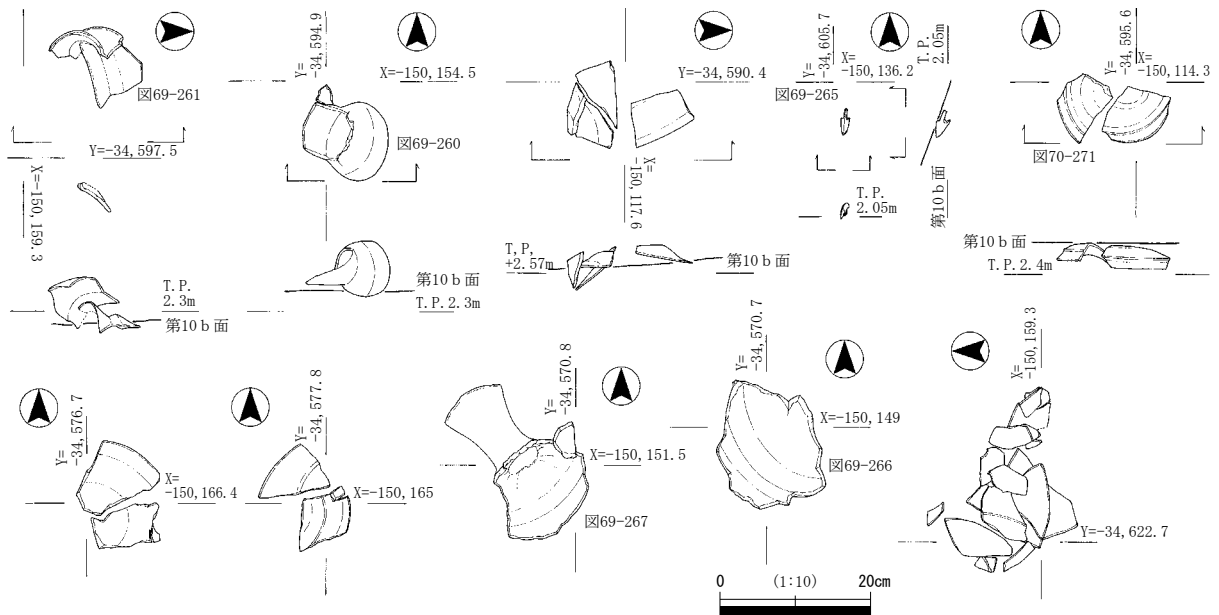


図65 第10b面・第10b層遺物出土状況図（下段はすべて第10b層出土）

壺7点、壺もしくは甕とみられる破片20点、羽釜とみられる破片と小型の高杯を各1点、杯もしくは皿6点、鉢2点、手焙形土器の可能性のある破片1点を認めた。土師器以外では、弥生土器もしくはその可能性のある破片が12点、須恵器が33点認められた。須恵器では杯身もしくは杯蓋の破片が16点含まれており、そのうち2点に直線が線刻されていた。

第10b面で検出した遺構は第10層の下面遺構ととらえられることから、その埋土中の遺物は第10層の形成期間のある時期に混入したものととらえられる。したがってそれらも、第10層出土遺物と関連付けてとらえることができるため、ここでふれたい。第10b面検出の342流路からは、図示したもの以外に少なくとも195点の遺物が出土した。そのうち土師器が173点と大半を占め、須恵器16点、弥生土器もしくはその可能性のある破片6点が続く。土師器は古墳時代のものが大半を占めるとみられ、器種判別の困難なものがほとんどだったが、煮炊具18点、古式土師器甕24点、高杯16点、甕もしくは壺とみられる破片15点、小型丸底壺とみられる破片4点、壺3点、杯もしくは皿1点、鉢とみられる破片1点を認めた。須恵器では杯身もしくは杯蓋の破片が6点含まれる。340土坑からは、128点の遺物が出土した。そのうち土師器が125点と大半を占め、須恵器2点、弥生土器の可能性のある破片1点がある。土師器の大半は古墳時代のものが占めるとみられる。器種判別の困難なものがほとんどだったが、高杯4点、壺もしくは甕の破片6点、煮炊具22点、古式土師器甕とみられる破片12点、杯もしくは皿5点、小型丸底壺とみられる破片1点を認めた。なお342流路からは、

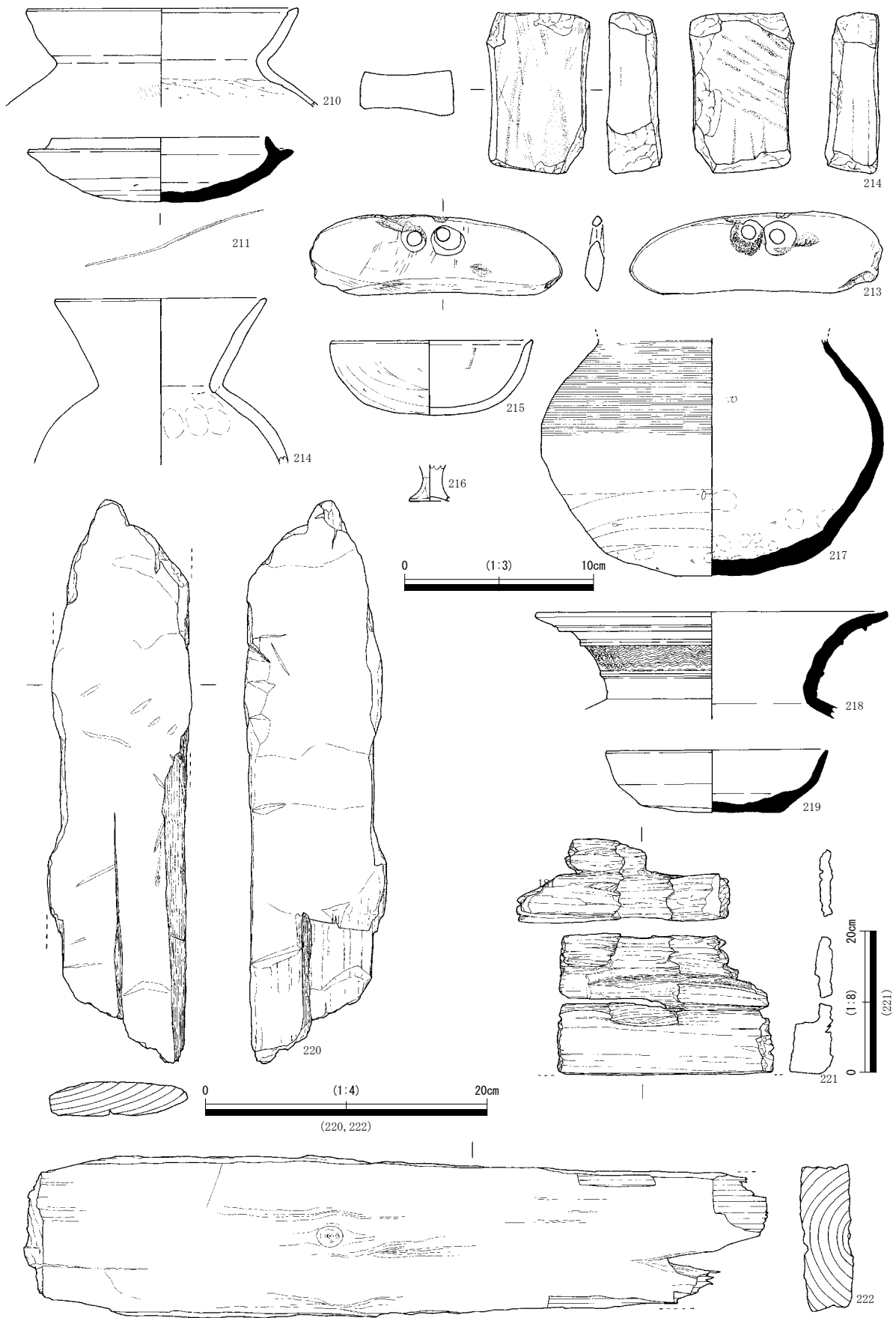


図66 第10b面349ピット・第10面・第10層出土遺物実測図〔210・211：第10面、212～218・220～222：第10層、219：349ピット〕

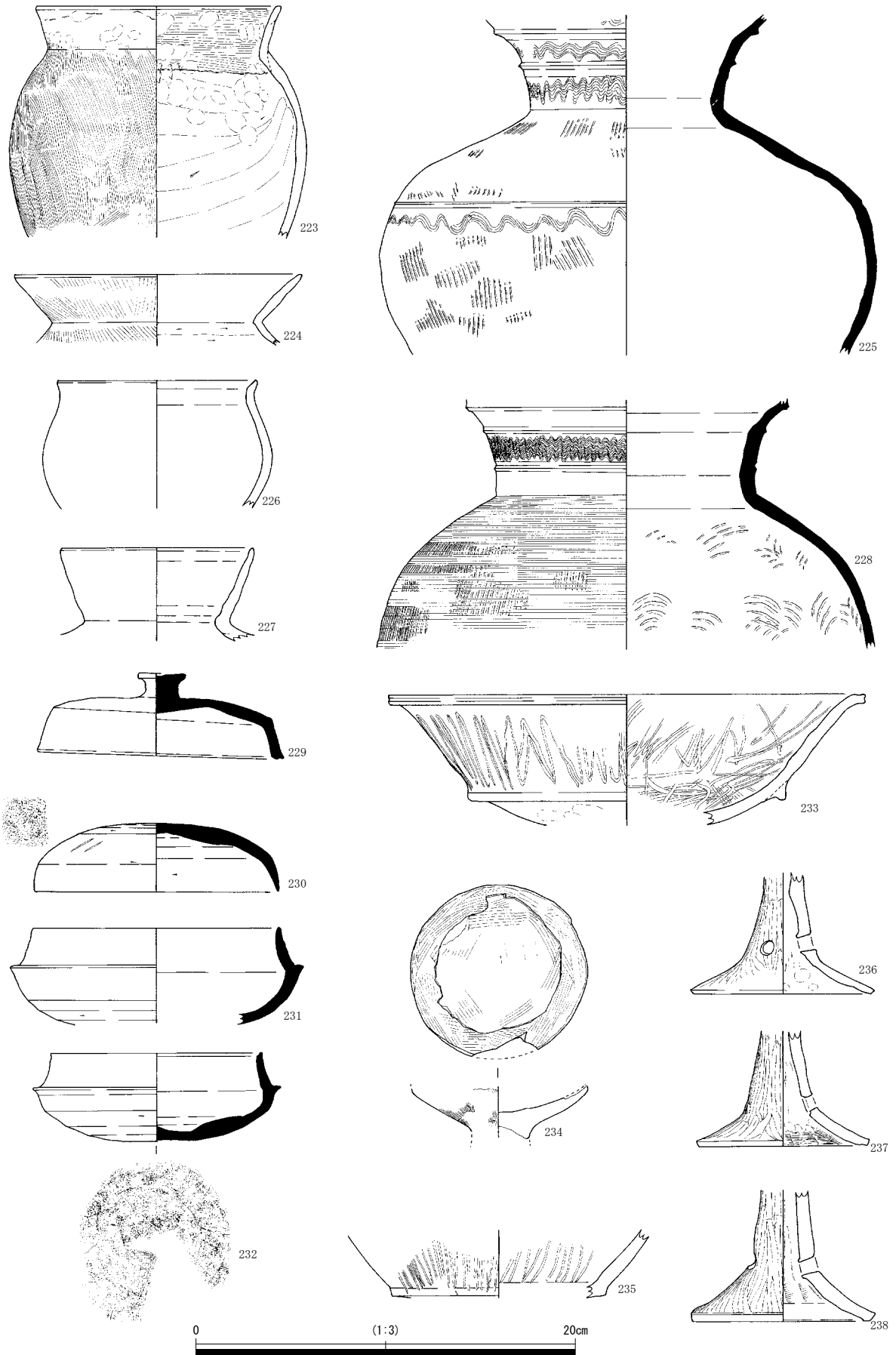


图67 第10b面検出342流路内（第10層）出土遺物実測図

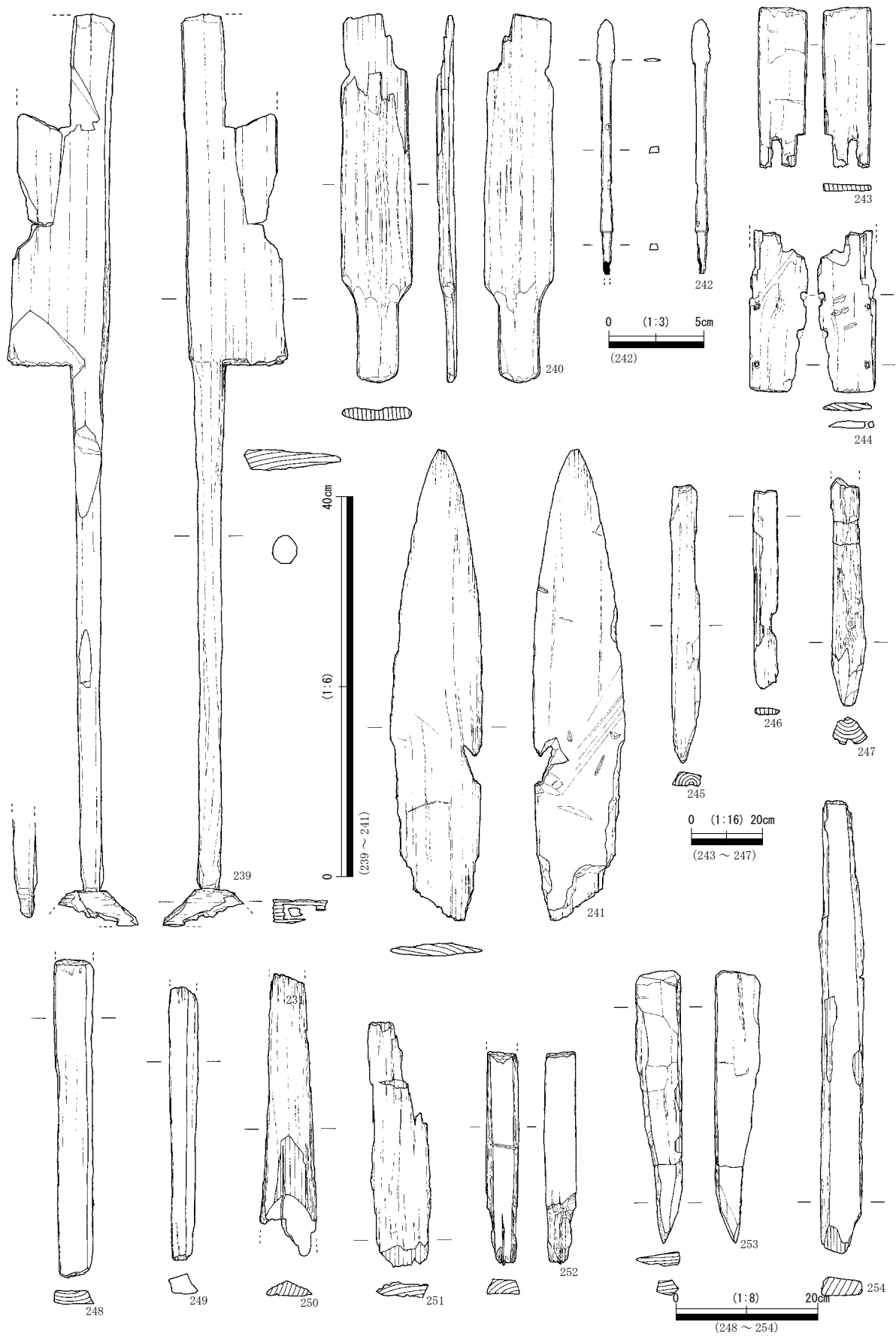


图68 第10b面検出342流路内(第10層)出土遺物実測図

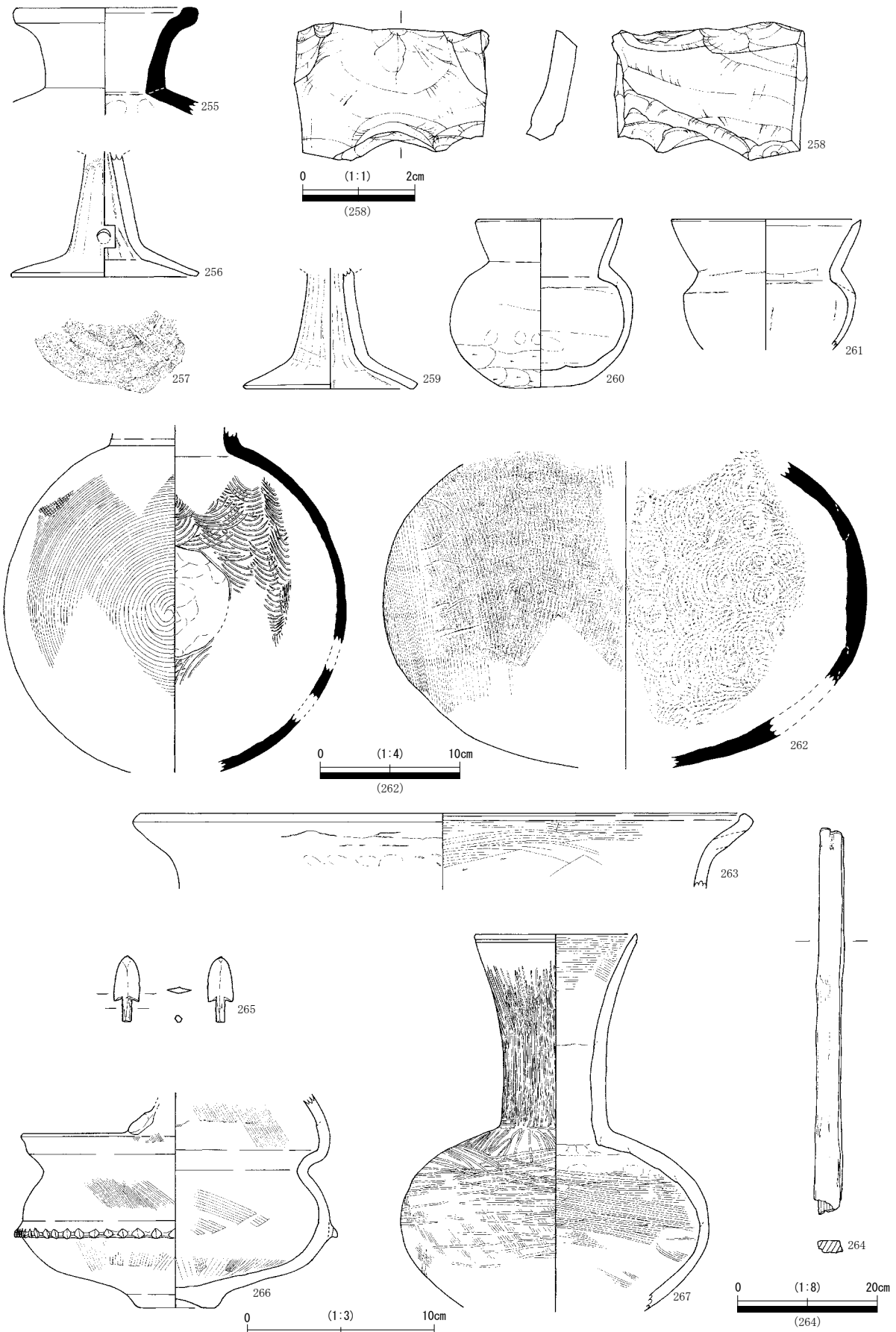


図69 第10b面検出345土坑・第10b層、第10層下～第10b層出土遺物実測図〔255～257・265～267：第10b層、258～264：第10b面〕

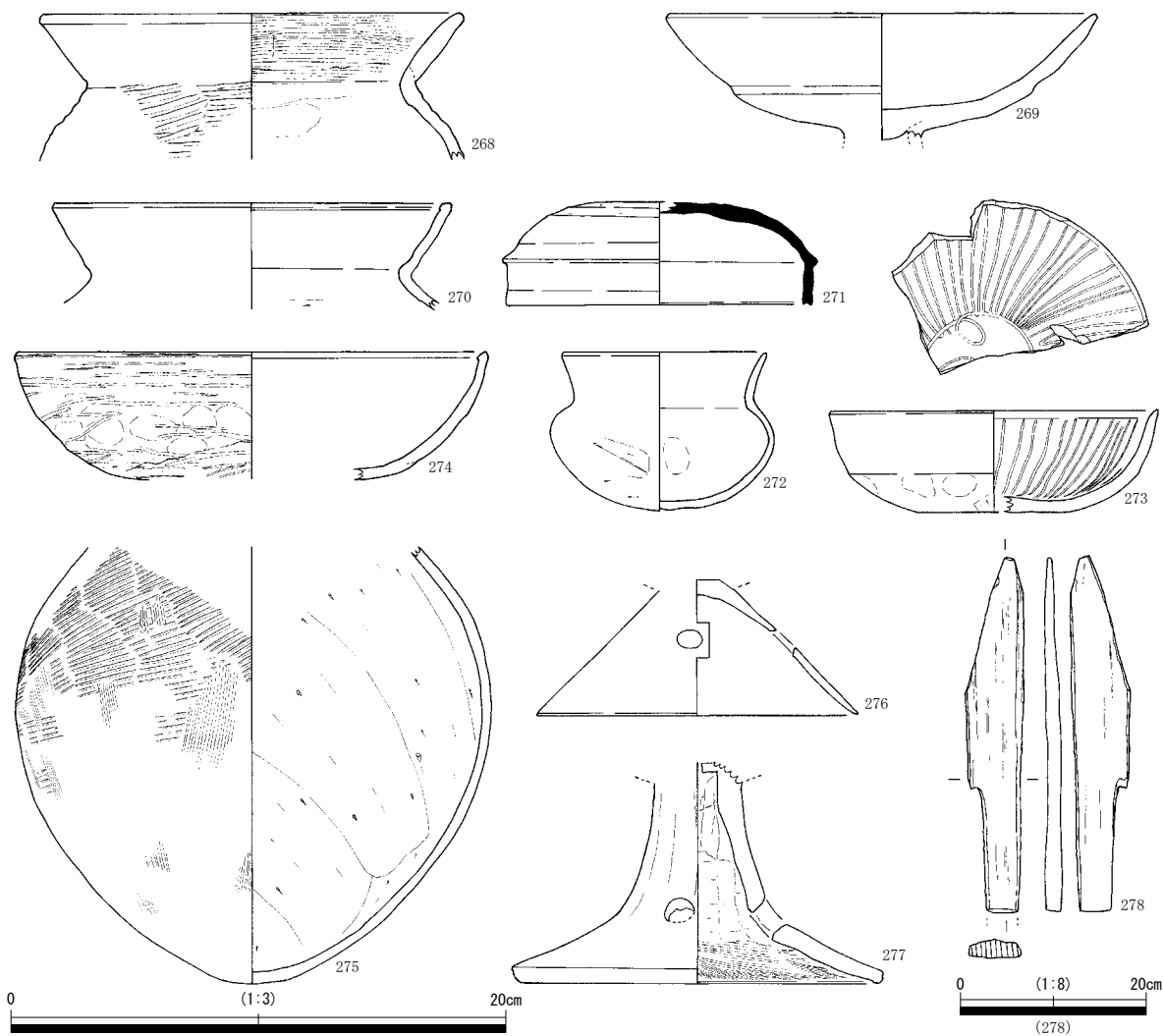


図70 370溝・第10b層・側溝（第10層～第11-1層・第10～第11-3層）出土遺物実測図〔268～273：第10b層、274：第10～11-1層、275・276：370溝、277：第10～11-3層、278：第10層以下〕

図68に示したように、土器のみならず鉄鏃や比較的多種類の木製品が出土した。339ピットからは、土師器の破片10点を検出したが、うち7点は同一個体とみられる古式土師器甕の胴部片だった。345土坑からは図69-258の他に、微細な土師器の破片1点が出土した。実測図を掲載した、第10層および第10b面検出遺構埋土出土遺物も含めて概観すると、微量に含まれる弥生時代の遺物を除けば、3世紀後葉を上限、7世紀前半を下限とする時期の遺物のまとまりをとらえることができる。

第10層の下部や第10層の層厚が薄い箇所を掘削中に、第10b層の上部も一緒にほぐれてしまう場合があったため、そのような際に出土した遺物は第10層下部から第10b層出土遺物として採取した。それらは図示したものの他に180点ある。内訳は土師器162点、須恵器10点、弥生土器とみられる破片7点である。土師器は器種判別の難しい細片が大半を占めるが、煮炊具10点、古式土師器14点、高杯10点、壺もしくは甕の破片5点、移動式竈の可能性のある破片1点がある。須恵器では、6世紀代までのものとみられる杯身ないし杯蓋が3点あり、うち一点には直線が線刻されていた。

第10b層からは、図71に掲載した埴輪が出土している。口縁端部を横方向に短く折り返すことで、タガをめぐらせたような形状を作り出している。口縁から約8センチ下がったところにタガを貼り付けるが、その部分を境にゆるやかに内湾する。したがって全体の形状は不明だが、タガの下でゆるやかにくびれる形態である

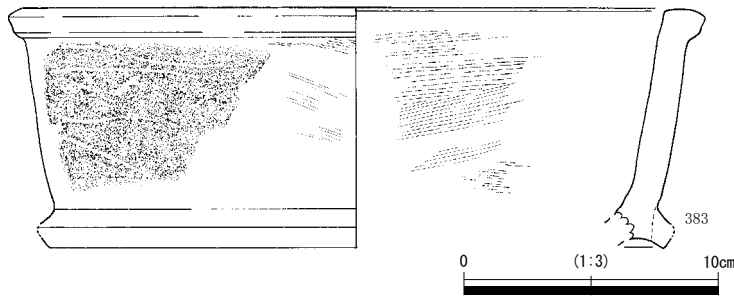


図71 第10b層出土埴輪実測図

ことは確かと考える。一方、タガの上部はほとんど広がりをもたないことから、円筒埴輪の可能性も考えられるが、池島・福万寺遺跡における既往の調査や近隣で、これに類する円筒埴輪の例を見出すことはできなかった。胎土はきめがそろって精良で、焼き締まっている。どちらかと言えば内面の調整の方が丁寧な印象で、横方向のハケメが明瞭に残る。

それに対し、外面はハケ調整の痕跡が不明瞭で、わずかに横もしくは斜め方向のハケメが認められる程度である。焼成前に付いたと見られる4本の沈線が認められるが、浅く不明瞭で、意図的に付けられたものかどうかは判然としない。

第10b層を精査している段階で出土した遺物は、図示した遺物の他に古式土師器甕の胴部と土師器の無段高杯の坏部が各2個体分と、弥生土器片3点、器種判別の難しい土師器片7点がある。

第10b層を掘削中に出土した遺物は、図示したもの以外に125点ある。その中で土師器が106点と大半を占め、弥生土器11点、須恵器8点と続く。土師器は器種判別の難しい細片が大半を占めるが、古式土師器甕16点、煮炊具と高杯が各10点、壺2点、壺もしくは甕とみられる破片を1点認めた。

図70-275・276は第11-2面で検出した370溝の埋土から出土した遺物である。370溝は遺構埋土の土質などからみて、第10b層の形成過程で生じたものにとらえられるため、第10b層出土遺物と関連付けることができる。図化した遺物の他に、壺1点を含む土師器片2点を検出した。364・366水路、365水路、368水路、369水路を検出する際に出土した遺物も、第10b層もしくは第11-1層の堆積時に混入したものととらえられるので、ここで併せてふれておきたい。364水路・366水路からは、図示した遺物以外に53点の遺物が出土した。内訳は土師器が37点、弥生土器16点である。土師器には、器種判別の難しい細片が多く含まれるが、高杯5点、古式土師器甕3点、煮炊具3点、鉢1点を認めた。図79-280~282として図示した木製品は、主に第10b層から出土したものである。365水路では土師器10点、弥生土器2点が出土した。土師器では古式土師器2点と高杯1点を認めた。

第10b層出土遺物も、3世紀後葉を上限、7世紀前半を下限とする時間の範囲でとらえられ、第10層出土遺物と同様の時間幅でとらえることができる。ただ第10層出土遺物に比べ、第10b層の方が弥生時代の遺物の占める割合が多く、その中には図69-265~267のように、完形もしくはそれに近い保存状態の良い遺物が含まれる。

第11-2面 (図72~図76)

洪水砂である第10b層・第11-1層を除去して検出した、弥生時代後期の遺構面である。まず第11-1面を精査し、第11-2面の畦畔の頂部を検出したうえで、第11-2面の検出にあたった。上面が洪水砂に覆われていたことから、旧地表面の遺存状態は良好であった。標高はおおむねT.P.+2.1~2.3mで、調査区北西部の371微高地の部分ではT.P.+2.4~2.5mだった。この微高地は、第12面検出の408流路の東側に形成されていた自然堤防に由来する。また調査区の北西隅で検出した高まりは、第12面410流路西肩の高まりに由来する。

この面では主に水路と水田を検出した。水田は水路と微高地を除く部分で、ほぼ全域にわたって検出した。

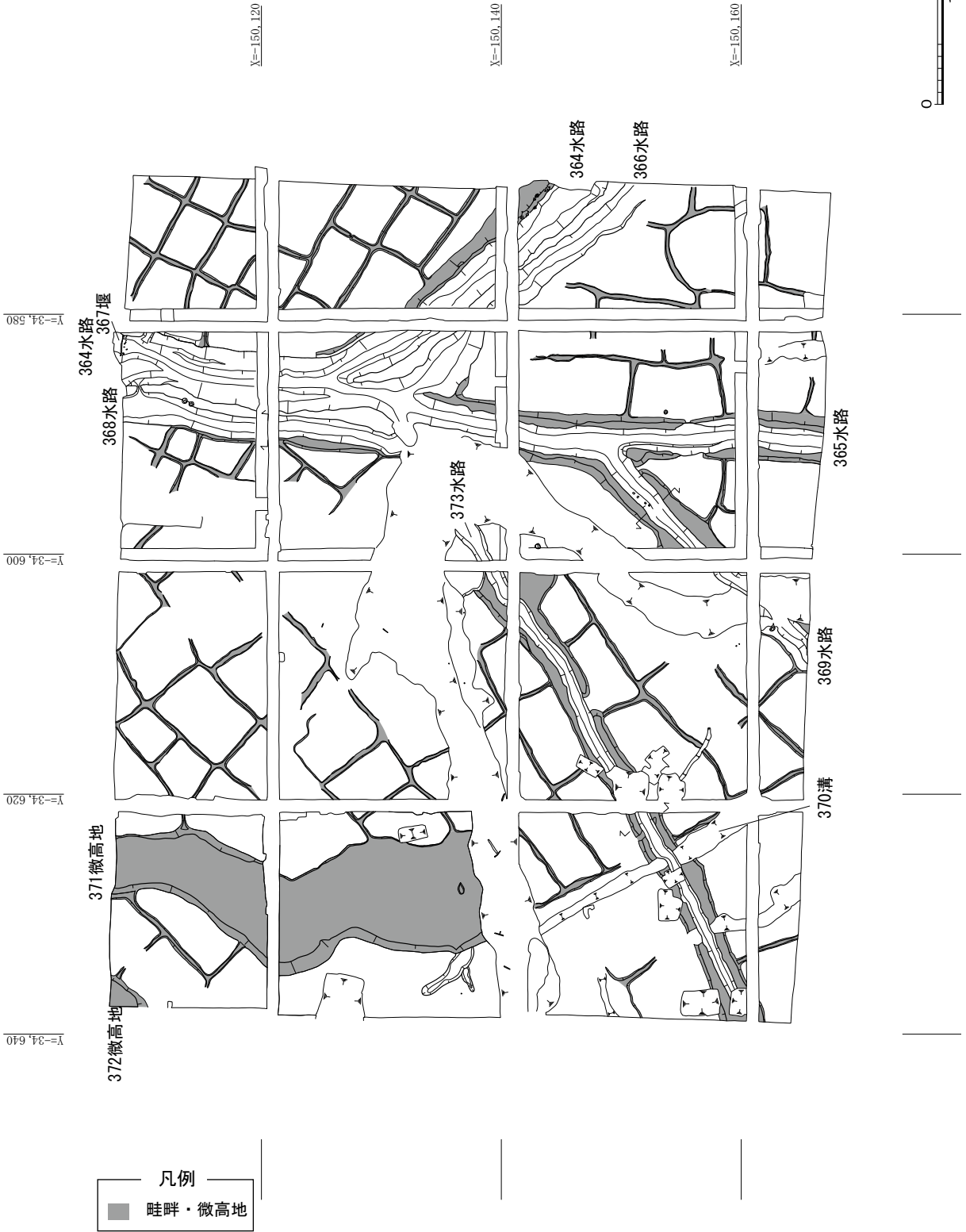


图72 第11-2面平面图

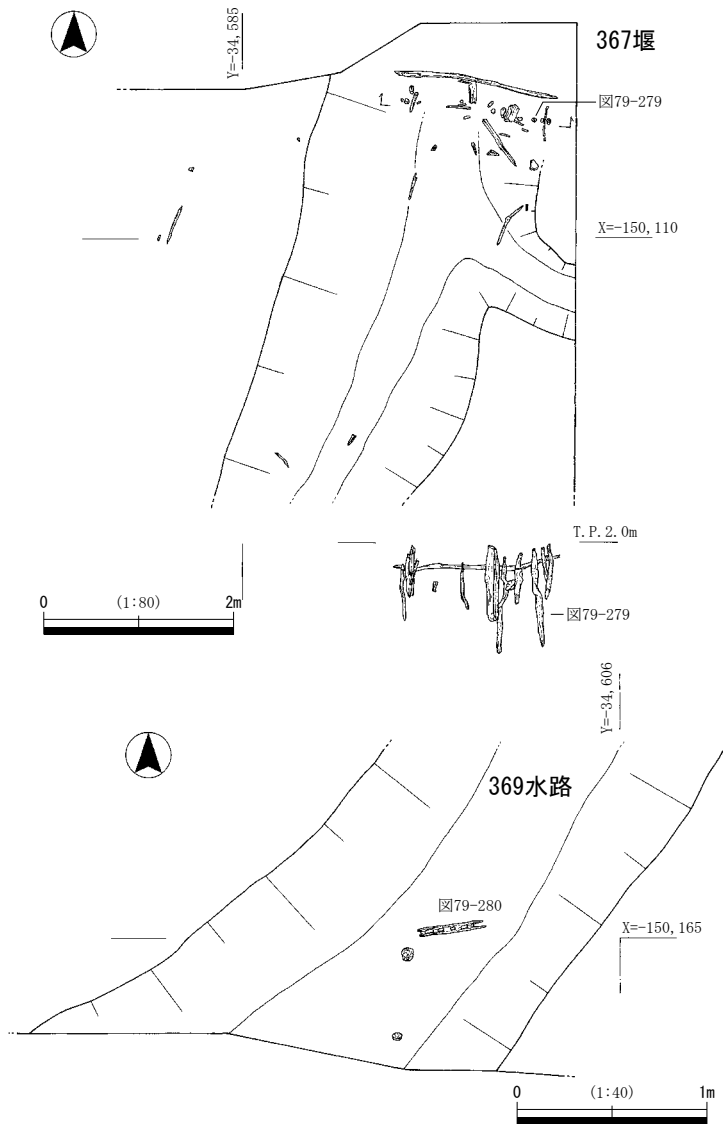


図73 第11-2面検出367堰平面・立面図、369水路遺物出土状況図

372微高地と371微高地に挟まれた、幅10m弱の細長い区画にも畦畔が設けられていたが、このスペースは第12面408流路と410流路が埋積した後に生じたものである。

調査区東部に、東から北東に向かって伸びた後、北へ方向を転ずる幅3.3mの364水路が存在する。364水路が365水路と合流して方向を転じるまでの区間を、堤防を挟んで平行するように366水路がはしる。365水路との合流部で溝幅が急激に狭くなること、第11-3面段階で検出した366水路と365水路の溝底の標高に高低差があることから推して、364水路の方が本流であることは間違いないと考える。368水路も366水路と同様に、364水路に近接して平行するが、第11-3面段階で検出した当初の溝底の形状をみると、土坑を連ねたような状況が認められる。これらのことから366水路と368水路は当初、364水路の堤を造成する際に、土取りに伴って生じたものと考えられる。ただ366水路の溝底は、南東から北西方向にゆるやかに傾斜していて、365水路との合流部に向けて水が流れるようになっていたこと、また

その部分に接して設けられていた数区画分の水田の排水のための水口が、366水路にむけて作られていたと推測されることから、水路としての機能も十分果たしていたと考える。一方、368水路は溝底に明確な傾斜はみとめられず、08-1調査区で検出された北側の延長部分も、調査区の中程で途切れていたことから、当初は水路としての機能が低かったととらえられる。ただ368水路の西側に接する水田区画の排水口は、水田面の高低からみて368水路に向けて設けられていたとみられる。368水路から364水路に向けて水口が作られているのは、368水路に溜まった水の逃げ場が必要だったからかもしれない。一方、調査区北部の364水路には簡易な堰が設けられていた。その堰の手前で364水路の西岸に作られた水口は、364水路の東側に造成された水田区画の排水のために設けられたと考えられる。

南北方向の365水路は364水路の屈曲部に、また373水路は365水路に合流するように掘削されていた。さらに365水路に合流するように、北東-南西方向の369水路も掘削された。365水路は調査区南東辺の微高地西辺を、373水路は調査区北西部を占める微高地の南辺を縁取るように通っており、それらの微高地に設けられた水田区画への給排水に使われていたと類推できる。369水路はそれらの微高地に挟まれ、相対的に標高が低くなっている部分を、縦断するように水路が設けられている。このように第11-2面で検出された水路は、



Y=34.580

Y=34.600

Y=34.620

Y=34.640



X=150.120

X=150.140

X=150.160



图74 第11-2面等高线图

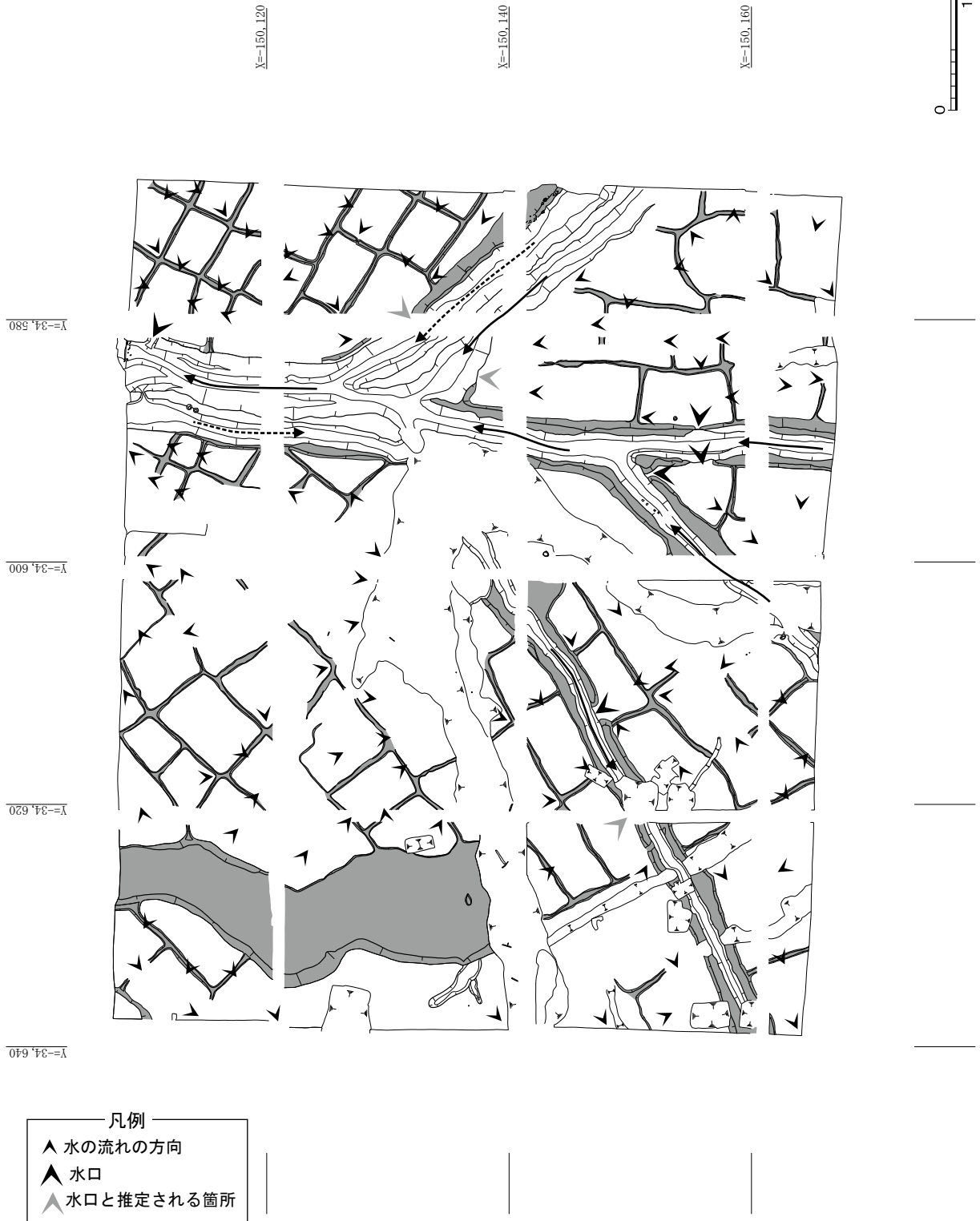
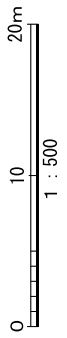


図75 第11-2面水田配水概念図

おおむね自然地形に対応するように設置されているが、365水路との合流部までの364水路のみは、調査区東辺に南北方向に延びる微高地を横切るように掘削されていることがわかる。

当調査区で検出したそれらの水路は、おおむね北に向って水が流れるように設けられているが、373水路のみはそれらとは逆方向、つまり北東から南西にむけて溝底が傾斜する。373流路は他の溝との合流部分が攪乱により削平されるため、これがいずれの水路から派生するかは明確でない。ただ前述のように、368水路が水路としての機能をほとんどもたなかったと考えると、365水路から派生していた可能性の方が、やや高いのではないかと考える。

上記のように当調査区で検出された水田域は、地形的な条件からみると、調査区の北西部を占める微高地と、東辺を占める微高地に造成されたものと、それらの微高地に挟まれた部分に造成されたものとに峻別できる。地形的な条件と折り合いをつけながら、当時の人々が可能な限り水田区画を設けようとしたことが今回の調査でもうかがえるが、そのなかで371微高地は標高が高いために配水ができず、水田造成から除外されたと考えられる。調査区北西部の微高地は371微高地によって、それ以外のエリアは水路によって分断された結果として、当調査区では6つの水田域をとらえることができる。

第11-3面 (図77・図78)

第11-2層を除去して検出した、弥生時代後期の遺構面である。上層形成過程で攪乱され、旧地表面は残存しないとみられることから、この面で検出した遺構は、第11-2面の下面遺構と考えられる。標高はおおむねT.P.+2.0~2.3mで、調査区北半部と東辺が高く、南西部に向けて徐々に低くなる傾向が認められた。

この面では溝・土坑・ピットを検出した。388・389溝や393溝は第11-2面で検出した水田畦畔と方向がおおむね合致すること、埋土に粒状の炭化した植物遺体が含まれており、第11-2層の水田土壌と類似する

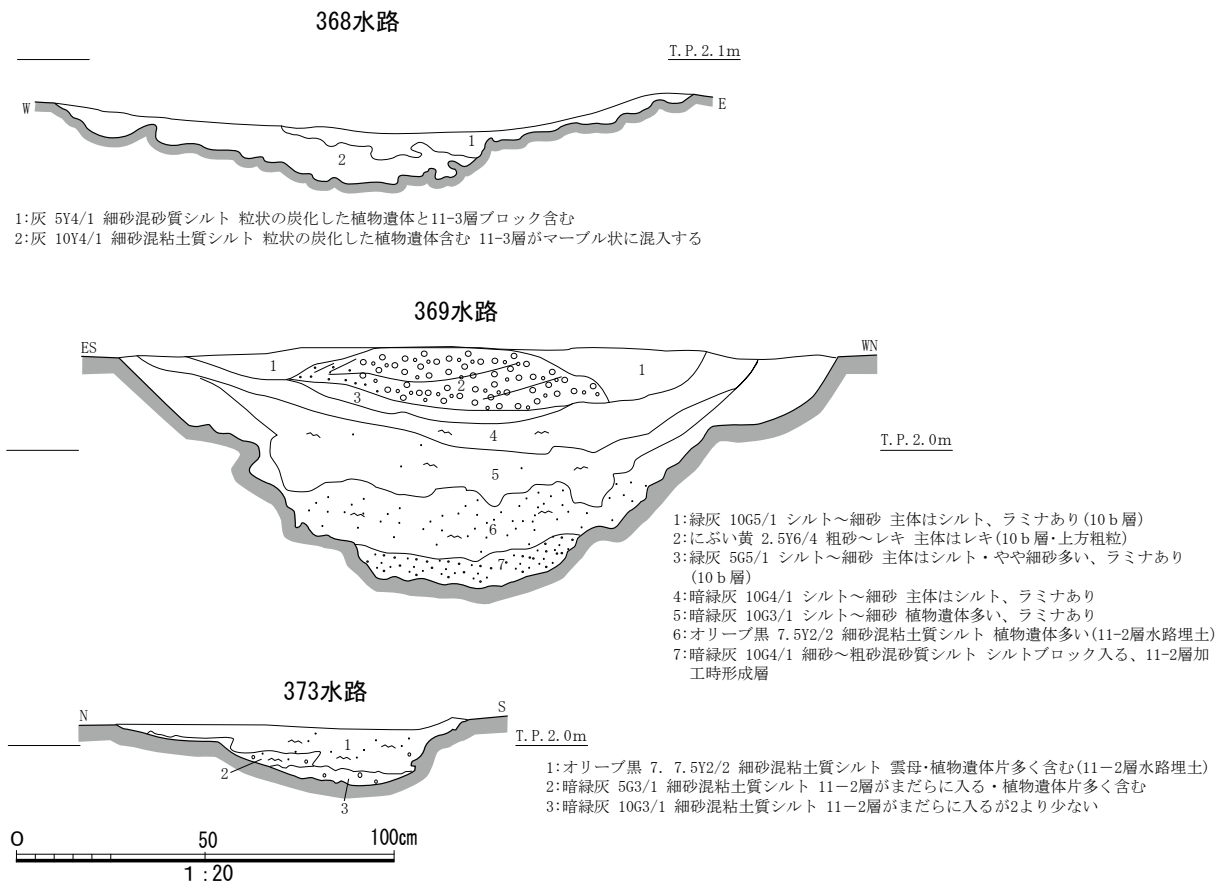


図76 第11-2面検出遺構断面図

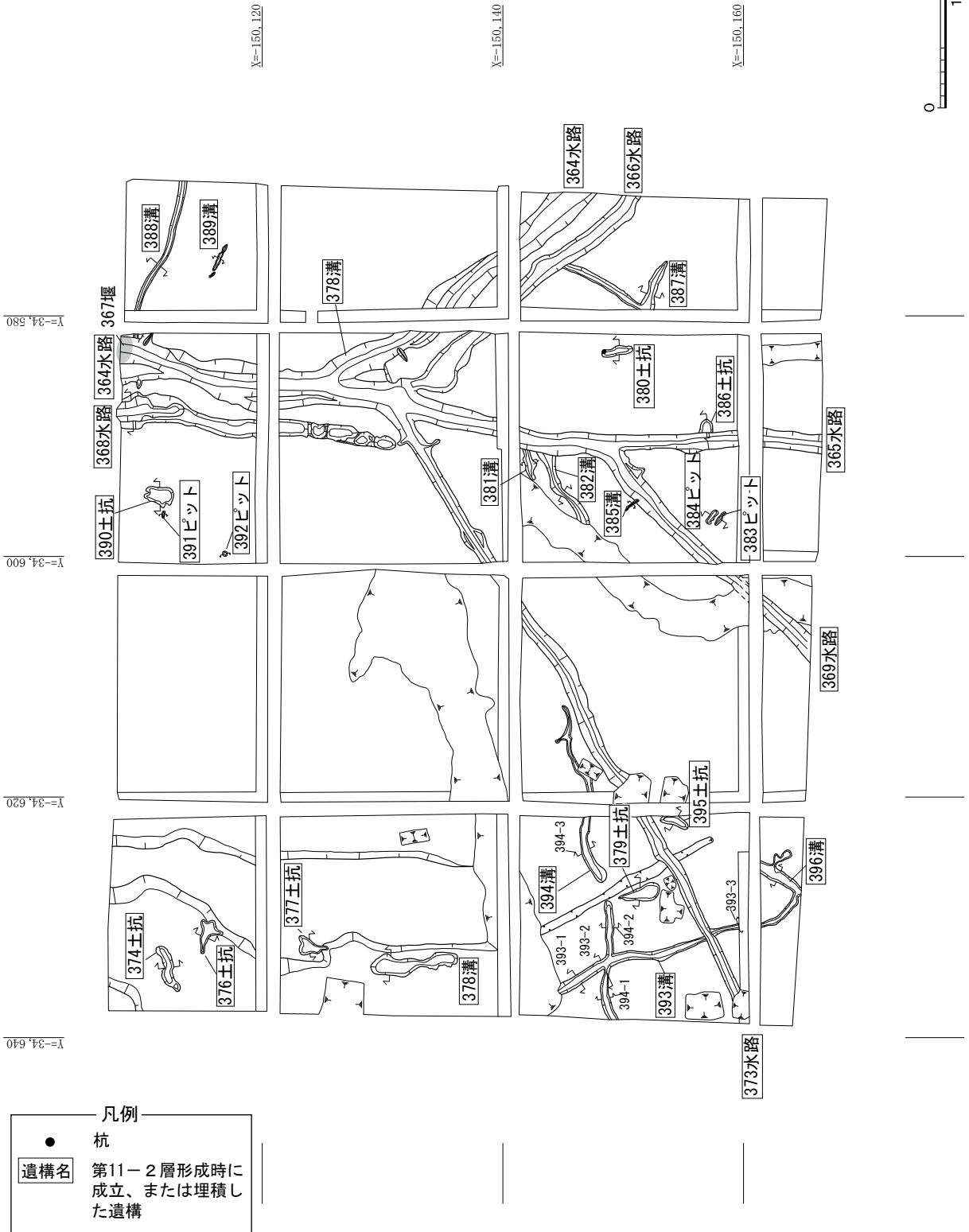


図77 第11-3面平面図

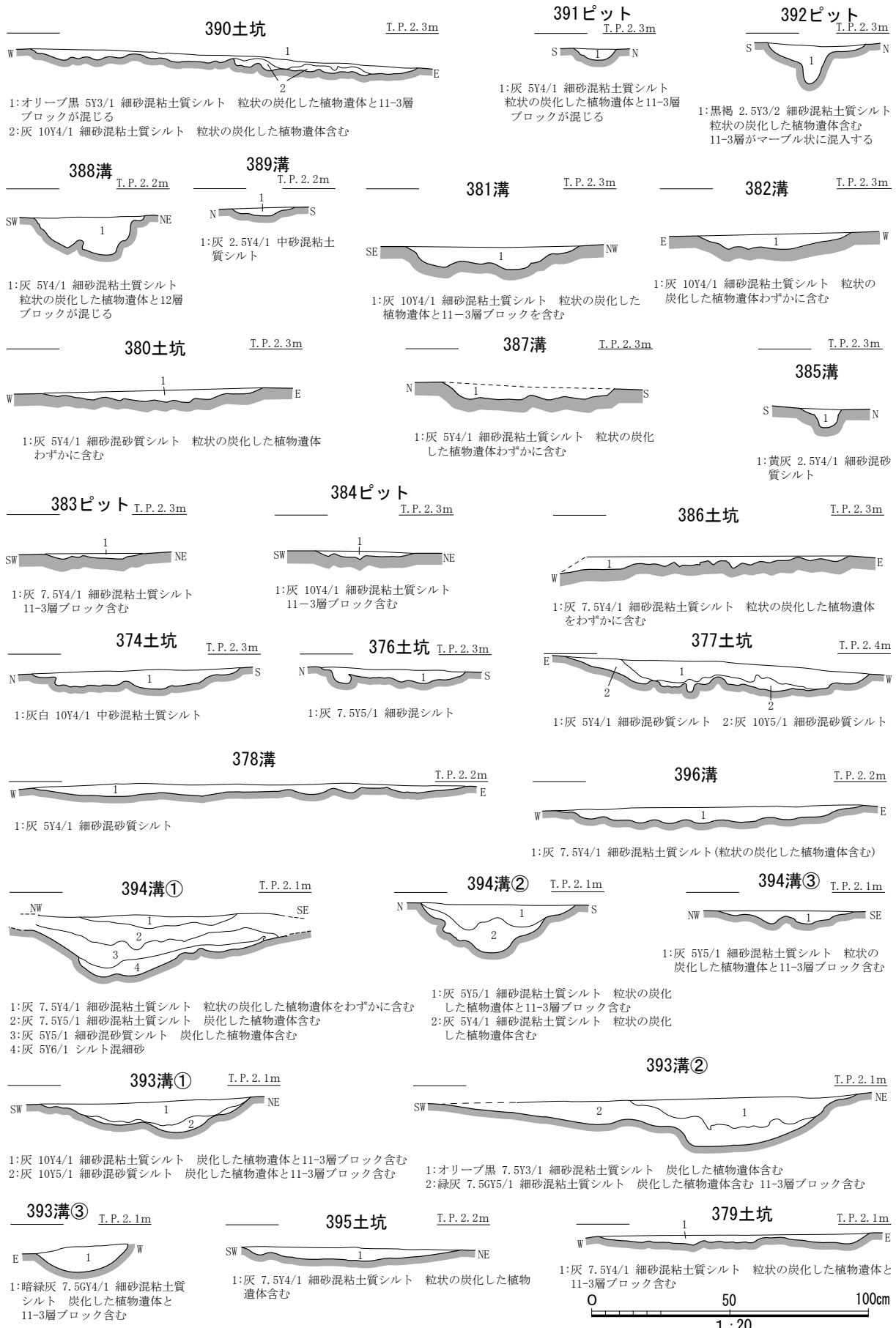


図78 第11-3面検出〔第11-2層下面〕遺構断面図

ことから、それらは畦畔の下部である可能性が考えられる。もしそうであれば、393溝と交差する394溝も同様のものとしてとらえられる可能性がある。368水路の下面は、調査区の中程で途切れ、土坑状のくぼみが連なるような形状であることから、364水路の堤を作る際に生じた、土取りの痕跡として生じたものの可能性がある。土坑はおおむね不整な楕円形で、深さは10cmに満たない浅いものが大半を占める。

第10b層～11層出土遺物（図79・図80）

第11層以下の土層では、主に弥生土器を検出した。弥生土器片には接合しなくても、胎土や調整方法からみて、明らかに同一個体と判別できる場合があった。また検出時の状況から、同一個体であることは明らかなのにもかかわらず、風化が進んで脆弱なため、取り上げて洗浄している段階で、器形復元が困難になったものもある。それらに関しては破片数をかぞえるのではなく、個体数をかぞえることとした。

第10b層～11-1層出土遺物は、図示したもの以外に43点ある。内訳は土師器が33点、須恵器が2点、弥生土器が8点である。土師器の中では古式土師器甕とみられる破片を15点と、壺とみられる破片を1点認めた。古式土師器甕のうち、布留式甕もしくはそれに類するものと判断できたのは5点、庄内式甕とみられるものは6点だった。図80-290・291からもわかるように、第10b層～11-1層出土遺物は、弥生土器が含まれるものの、おおむね古墳時代前葉の時期におさまるのが見てとれる。当初はこれらの遺物を第11-1層出土遺物ととらえていたが、第11-1層とその上層の第10b層は洪水堆積層の累積である。両者の土質の違いを勘案しながら掘削したものの、土質の違いが不明瞭で凹凸の複雑な洪水砂同士の層理面を平均化して掘り分けているので、第11-1層として採取した遺物に第10b層の遺物が混入している可能性は不可避と考えた。

第11-2層では、図示したもの以外に21点の出土遺物があった。内訳は弥生土器が11点、古式土師器とみられる破片が10点である。弥生土器では、複合口縁壺とみられる破片を1点、甕2点、壺3点、鉢とみられる破片1点を認めた。古式土師器では高杯を5点、甕とみられる破片を1点、壺1点を認めた。第11-2層は第11-1層に比べて遺物の出土量が少ないが、弥生土器の比率が高くなるのは確実である。弥生土器のうち、生駒西麓産胎土とみられるものは5点で、器種判別できたものの中では複合口縁壺と甕で各1点認められた。第11-3面で検出した遺構の埋土から出土した遺物は、第11-2層形成期間に堆積・混入したものととらえられることから、ここで併せてふれておきたい。365水路からは、弥生時代後期の甕とみられる破片が2個体分出土した。うち1点は生駒西麓産胎土とみられる。369溝では壺とみられる弥生土器1点を検出した。380土坑では壺の破片を1点、393溝では甕とみられる弥生土器1点を検出した。このような遺構埋土出土遺物の状況と、図79-283～288に図示した遺物とを併せて勘案すると、第11-2層の出土遺物は弥生時代後期後半の時期にまとまりがある。

第11-3層出土遺物は図示したものも含め、すべて弥生時代のものからなる。実測遺物以外では27点あり、生駒西麓産胎土とみられるものが6点だった。内訳は甕14点、壺もしくはその可能性のある破片が4点で、生駒西麓産胎土とみられる破片が甕では4点、壺では1点認められた。甕には受口状口縁や、体部外面にタタキ調整をした後、肩部まで粗いハケ調整を施したものが認められた。図80-294・296～298と併せて勘案すると、第11-3層出土遺物には弥生時代後期の土器が、前期・後期のかたよりなく、全般的に含まれることがわかる。

第11-2層に古墳時代の遺物が含まれているのは、第11-1層出土遺物と同様、第10b層の遺物が混入していることによる可能性がある。その意味では第11-3層の状況が、弥生時代後期水田土壌における遺物の出土状況を、最もよく示していると言えるかもしれない。

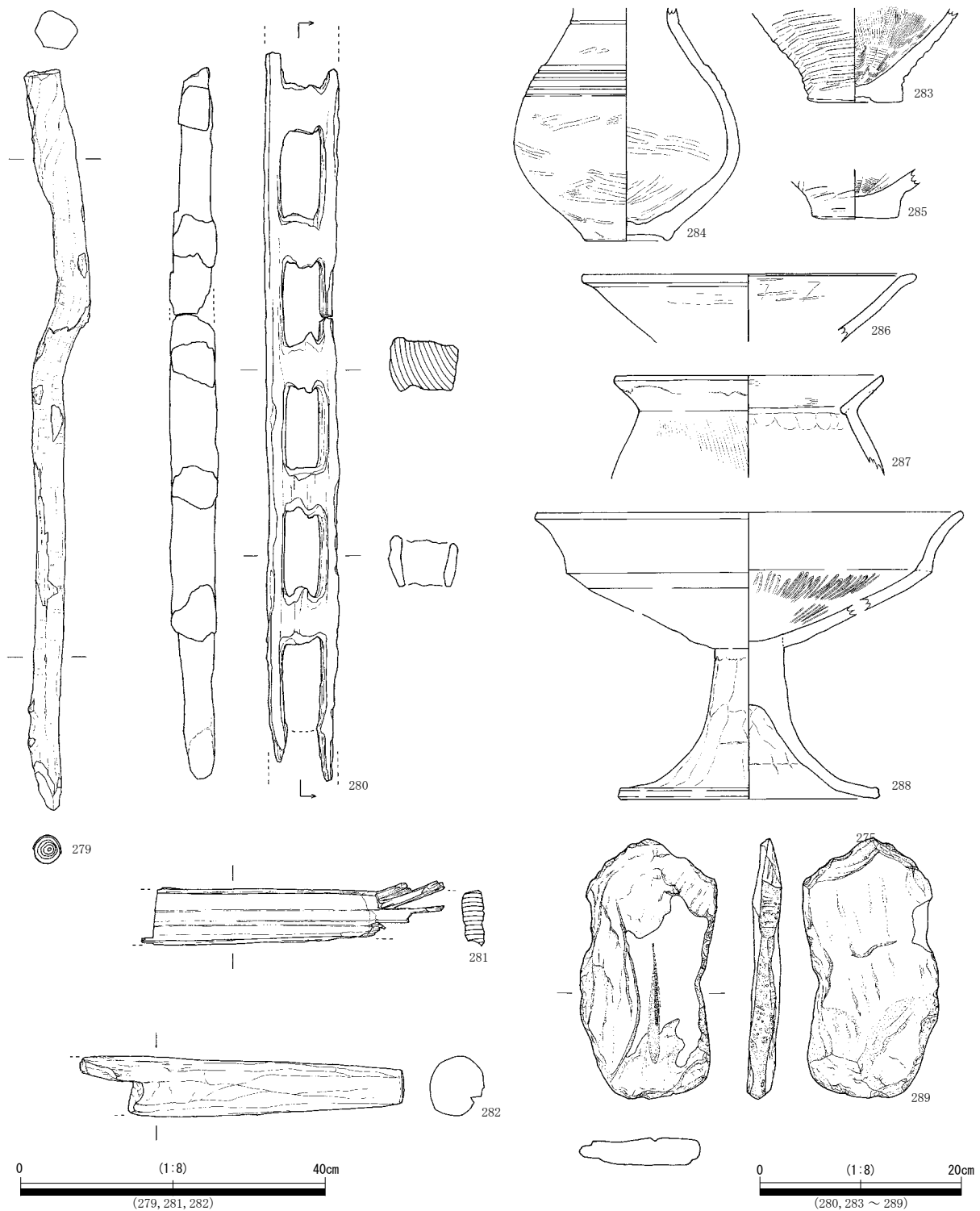


図79 364流路・365水路・366水路・367堰・368水路・369水路出土遺物実測図〔279：第11-2面検出367堰、280：第11-2面検出369水路上部、281：第11-2面検出366水路、282：第11-2面368水路、283・284：第11-3面364流路、285～287：第11-3面365水路、288：第11-3面366水路、289：第11-2面364流路もしくは366水路〕

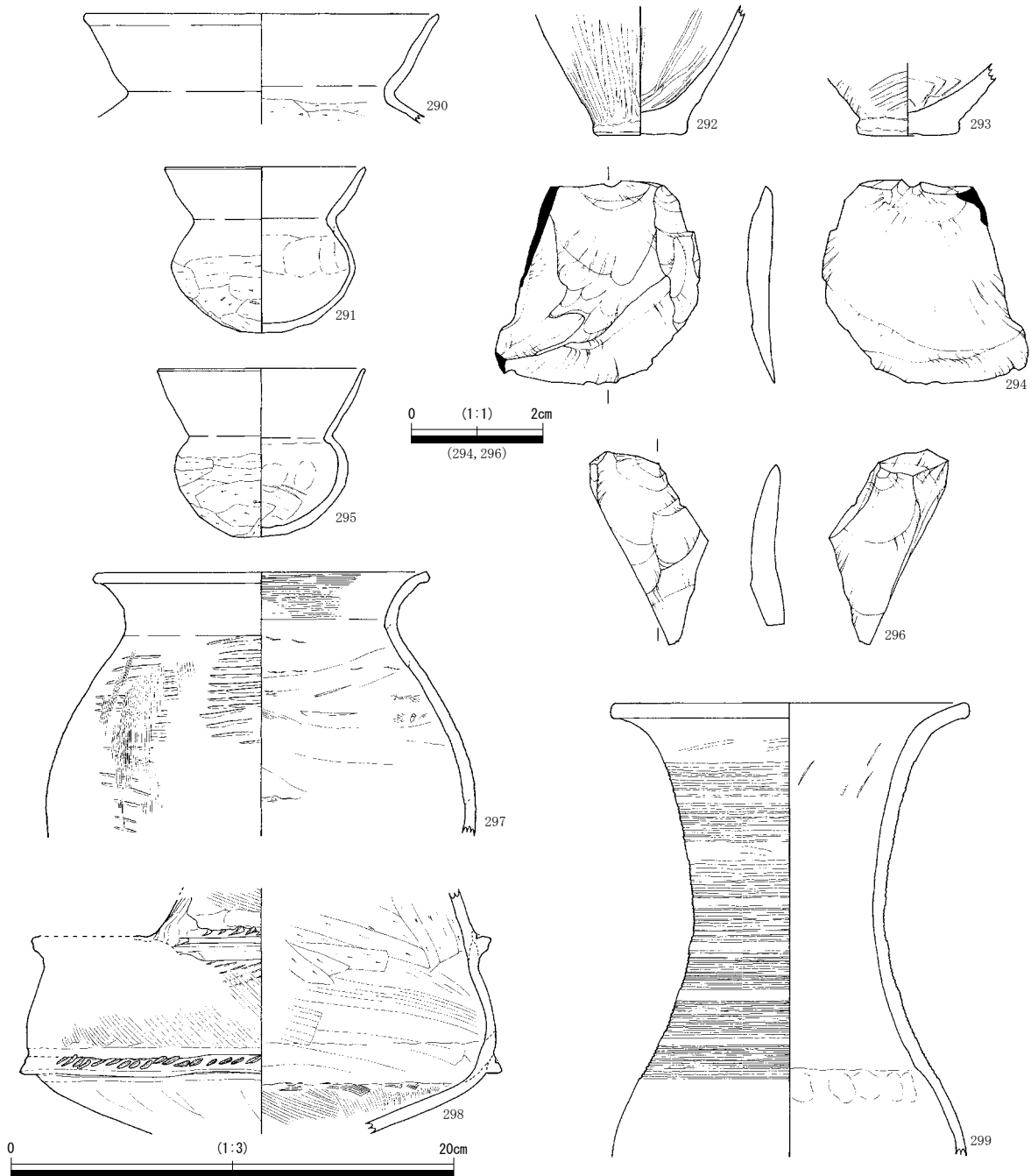


図80 第10b層～第11-1層・第11-2層・第11-3層・側溝（第11-1～第12層・第10b層～第11-3層）出土遺物実測図〔290・291：第10b層～第11-1層、292・293：第11-2層、294：第11-3層、295：第10b～11-3層、296～298：第11-3層、299：第11-1～12層〕

第12面（図81～図84）

第11-3層を除去して検出した、弥生時代中期の遺構面である。標高はおおむねT.P.+2.0～2.3mで、調査区北半部と東辺が高く、南西部に向けて徐々に低くなる傾向が認められた。

当遺跡の調査においては、従来「第2黒色泥層」と呼称される土層の上面にあたるが、「第1黒色泥層」や「第3黒色泥層」に比べると粘性は低く、黒色化の度合いはかなり低い。さらにこの面では畦畔など、水田耕作にかかわるとみられる遺構は検出されなかった。ただ土壌分析の結果から、近隣で水田耕作が行われていた可能

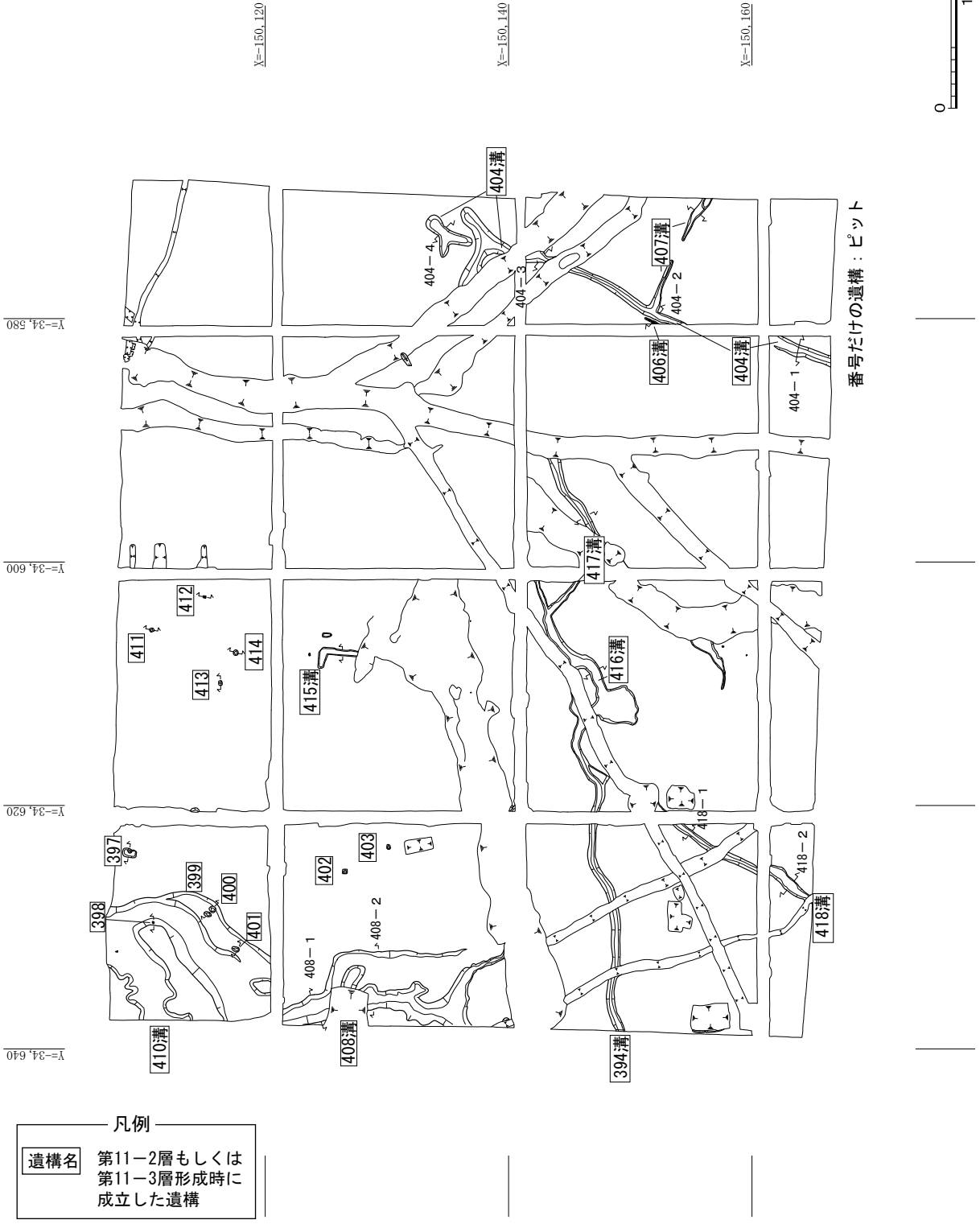


図81 第12面平面図

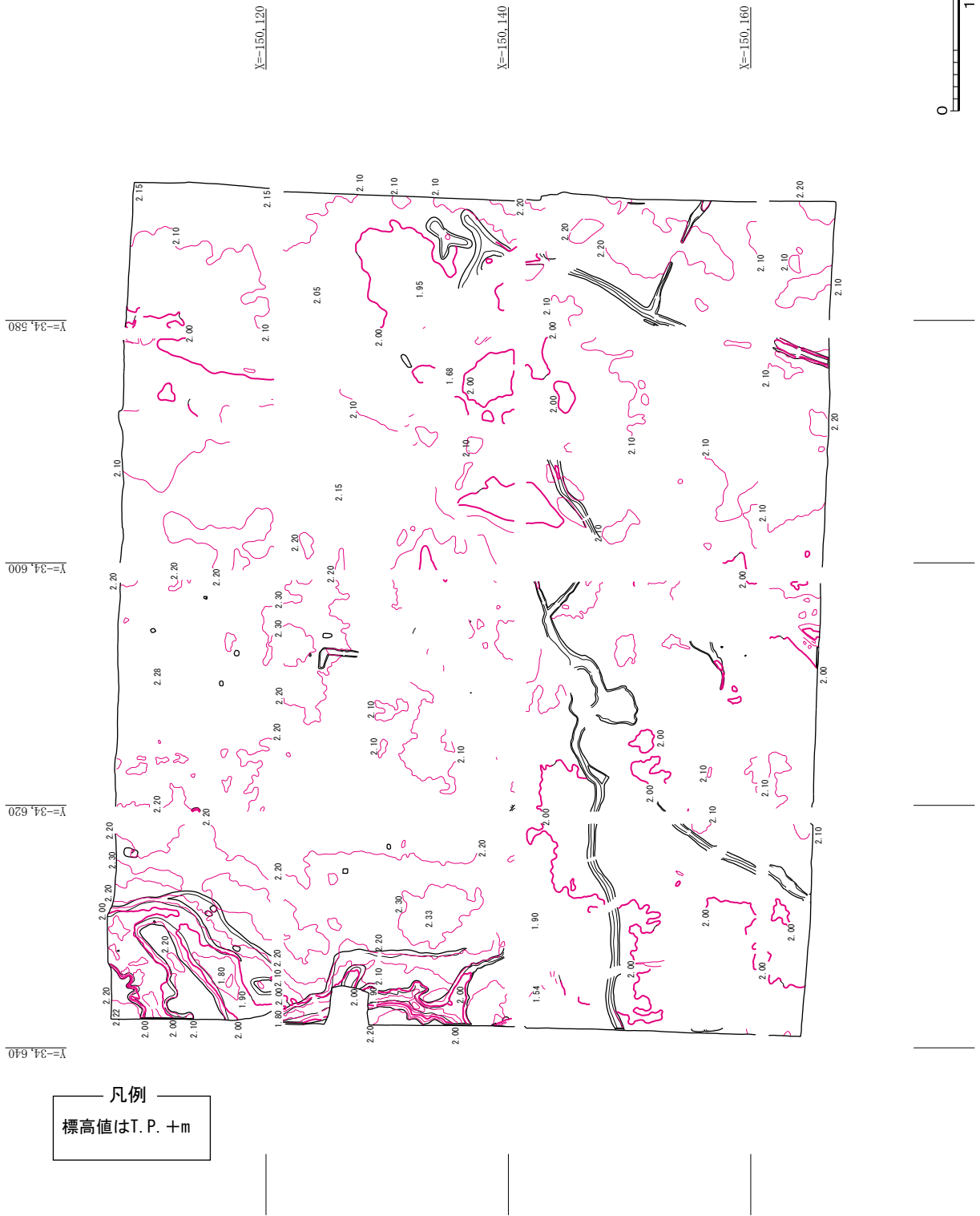


図82 第12面等高線図

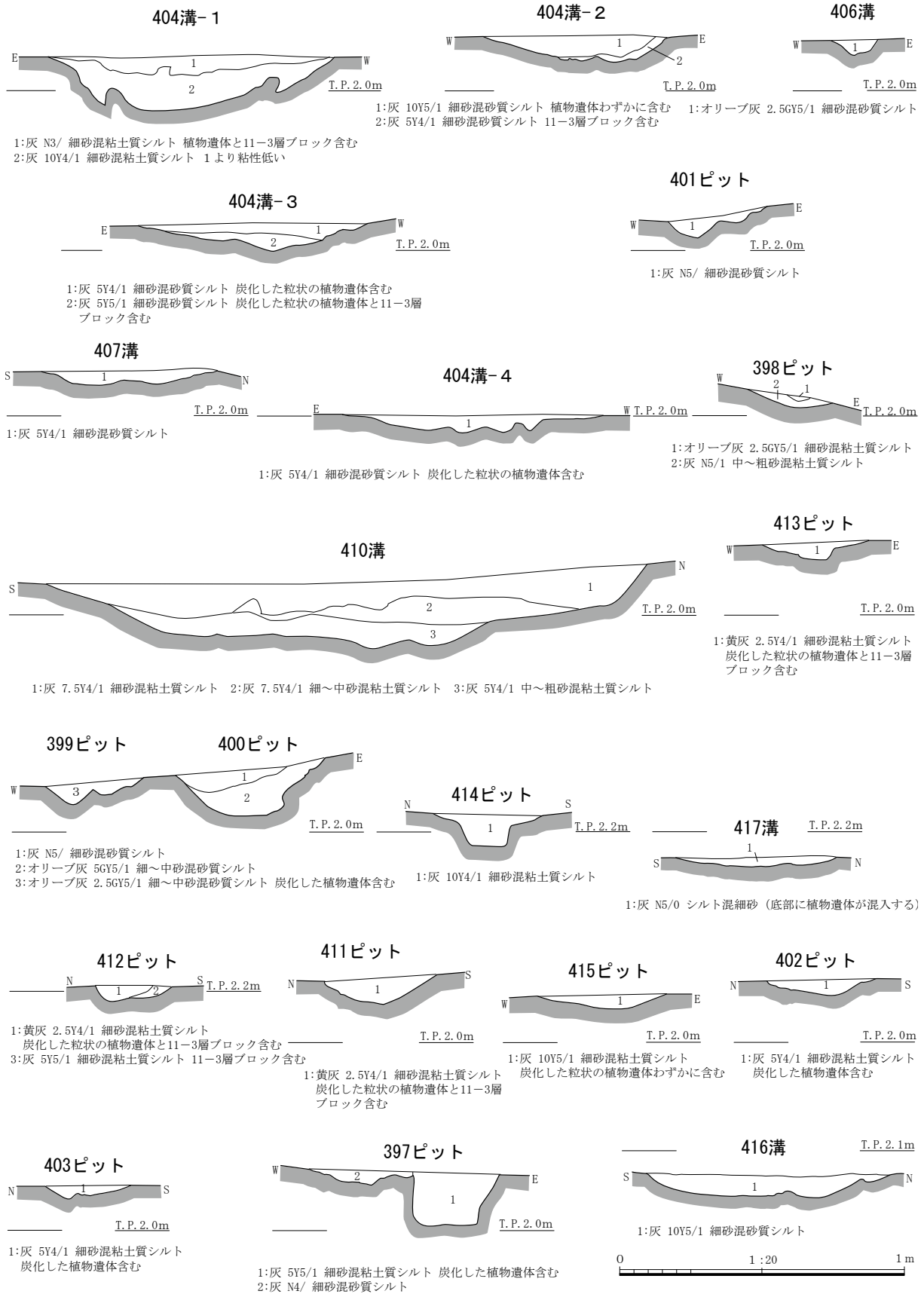


図83 第12面検出〔第11-3層下面〕遺構断面図

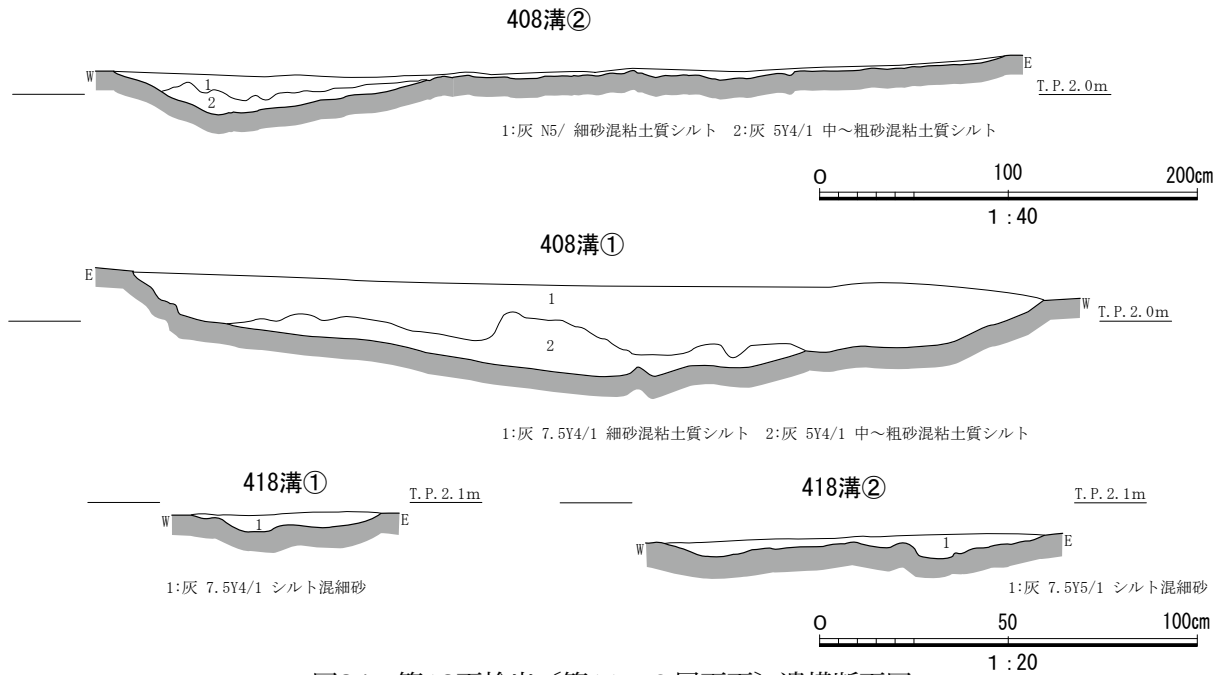


図84 第12面検出〔第11-3層下面〕遺構断面図

性は示唆されている（第4章第1節参照）。

遺構としては調査区北西と南半で溝、調査区北半でピットを検出した。それらの遺構はおそらく上層の形成過程で成立した遺構ととらえられる。410溝と408溝はおそらく一連のものとみられ、西から東に向かって流れていたものが、南に大きく方向を転じて流れていたとみられるが、南にいくほど徐々に先細りしながら、本流は西へ蛇行するとみられる。404溝・406溝・407溝・415溝は直線的で、ほぼ直角の方向転換や垂直方向の接続がみられること、粒状の炭化した植物遺体が含まれており、第11-2層の水田土壌と類似することから、畦畔の痕跡である可能性が考えられる。

ピットは直径がおおむね30～50cmで、深さは10cm前後と浅い。

第12b面（図85～図87）

第12b面は、第12a層を除去して検出した。標高はおおむねT.P.+1.8～2.1mで、調査区北西部と東辺部でやや高く、西もしくは南方向へむけて標高が下がる傾向がみられた。第12面と同様、水田耕作を積極的に裏付けるような遺構は検出しなかった。

この面ではピットや土坑、溝を検出した。ピットの検出状況には粗密がみられ、第11面段階の微高地や第10面の342流路の部分に集中するのがみてとれる。後者は上層まで、流路埋土による攪乱が深く及んでいたことから、必ずしもこの遺構面に伴うものとは断定できない。むしろ上面に帰属するものの可能性が高いと考える。また第11面段階の微高地にあたる部分で検出した遺構のうち、425～428ピット・429溝・430土坑の埋土は第11-3層に類似することから、第11-3層の下面遺構の可能性が高い。それ以外の遺構は第12層の下面遺構ととらえられる。

ピットは直径が30cm前後、深さは10～20cmの浅いものが大半を占める。435土坑は断面形状から、複数のピットが最終的に一度に埋まったものと考えられる。433・434・436・437・438ピットは、調査区北西部を蛇行しながら南北に流れる溝の肩に集中していることから、護岸のために打ち込まれていた杭の痕跡とも考えられる。446土坑は、北半分がトレンチにかかっていたため、全形を検出できなかったが、もとは直径80cm弱の円形と見られる。垂直にちかい角度で掘り下げられ、底面も平坦に近い形状を呈していた。遺構埋土に

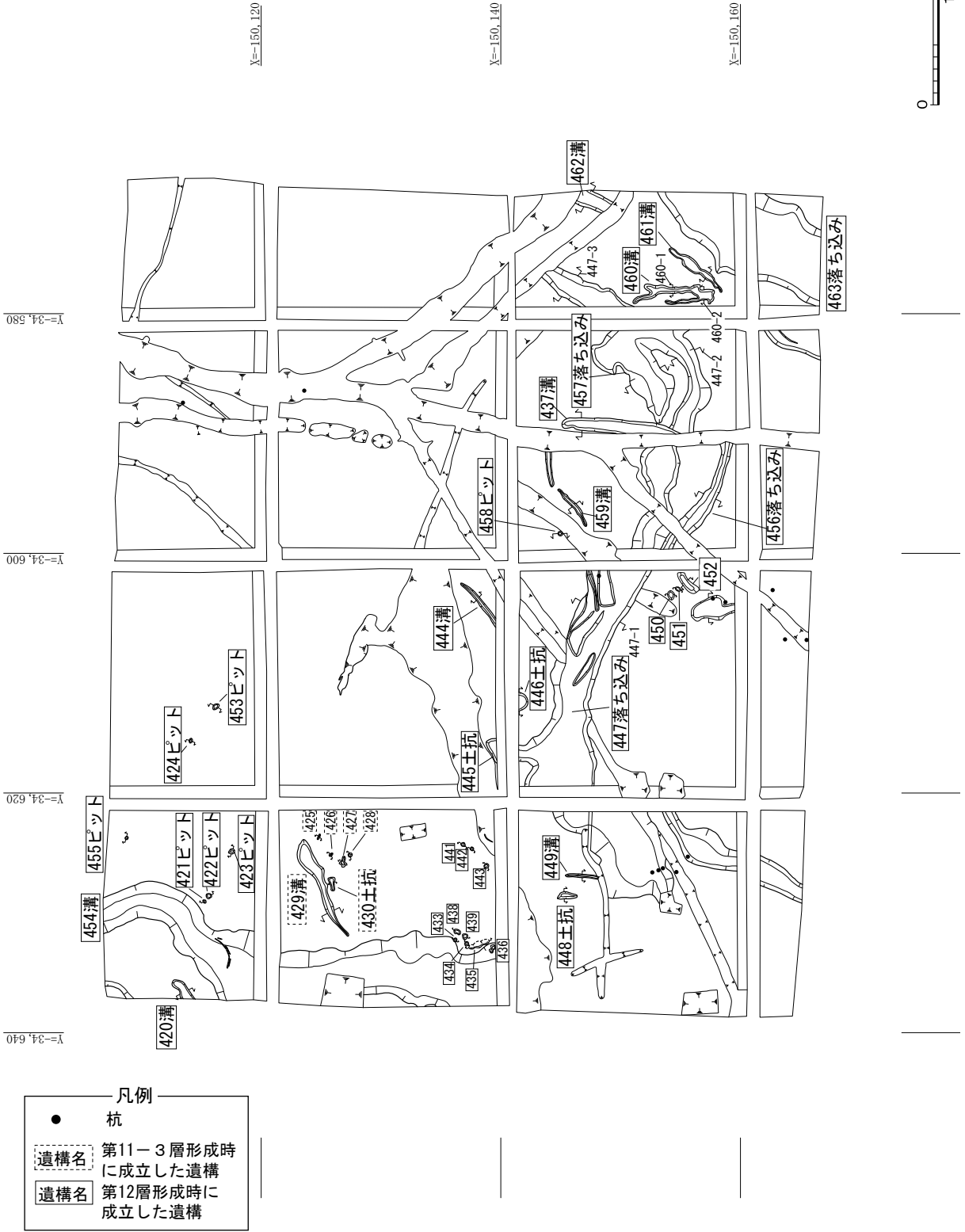


図85 第12b面平面図

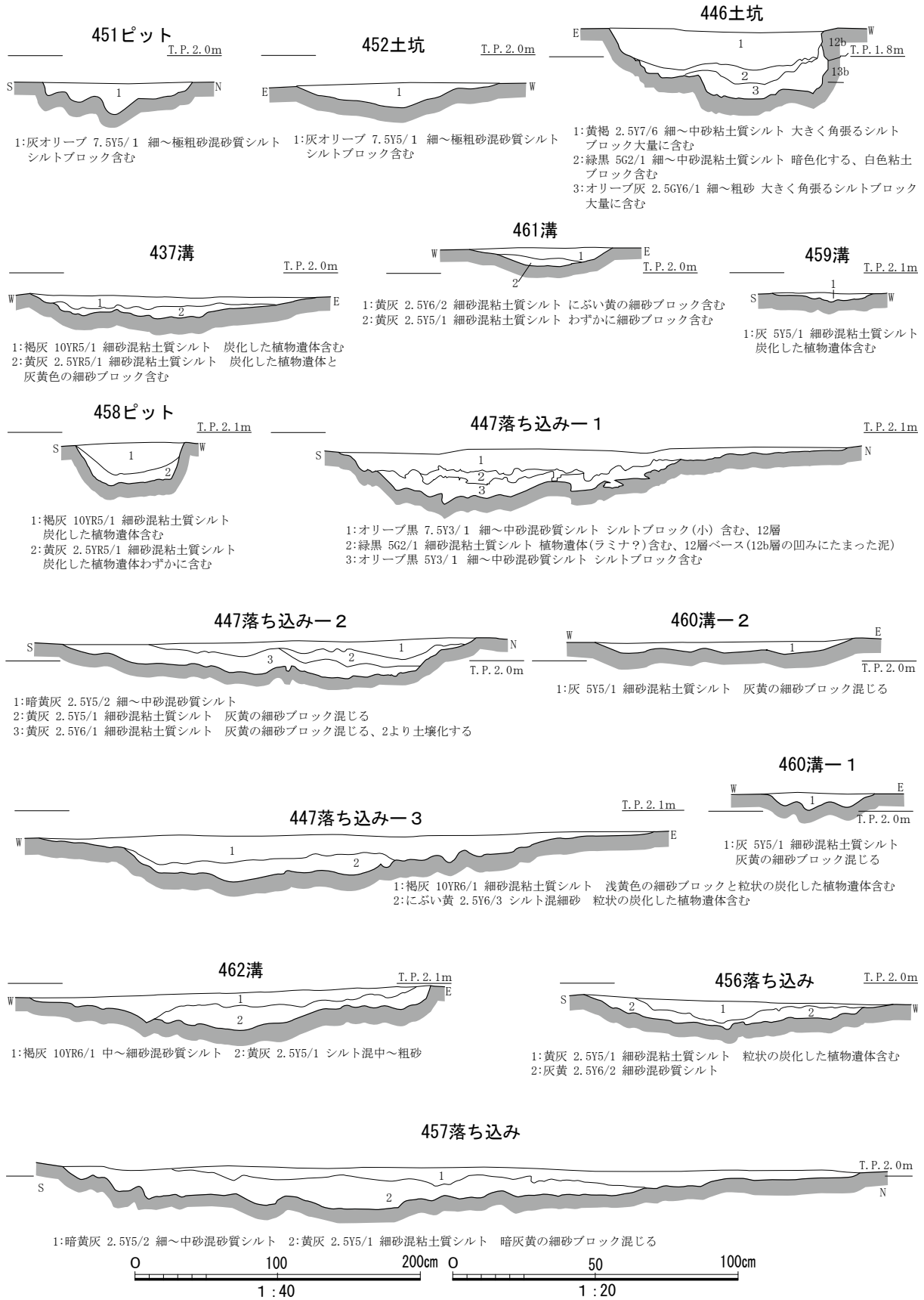


図86 第12b面検出〔第12層下面〕遺構断面図

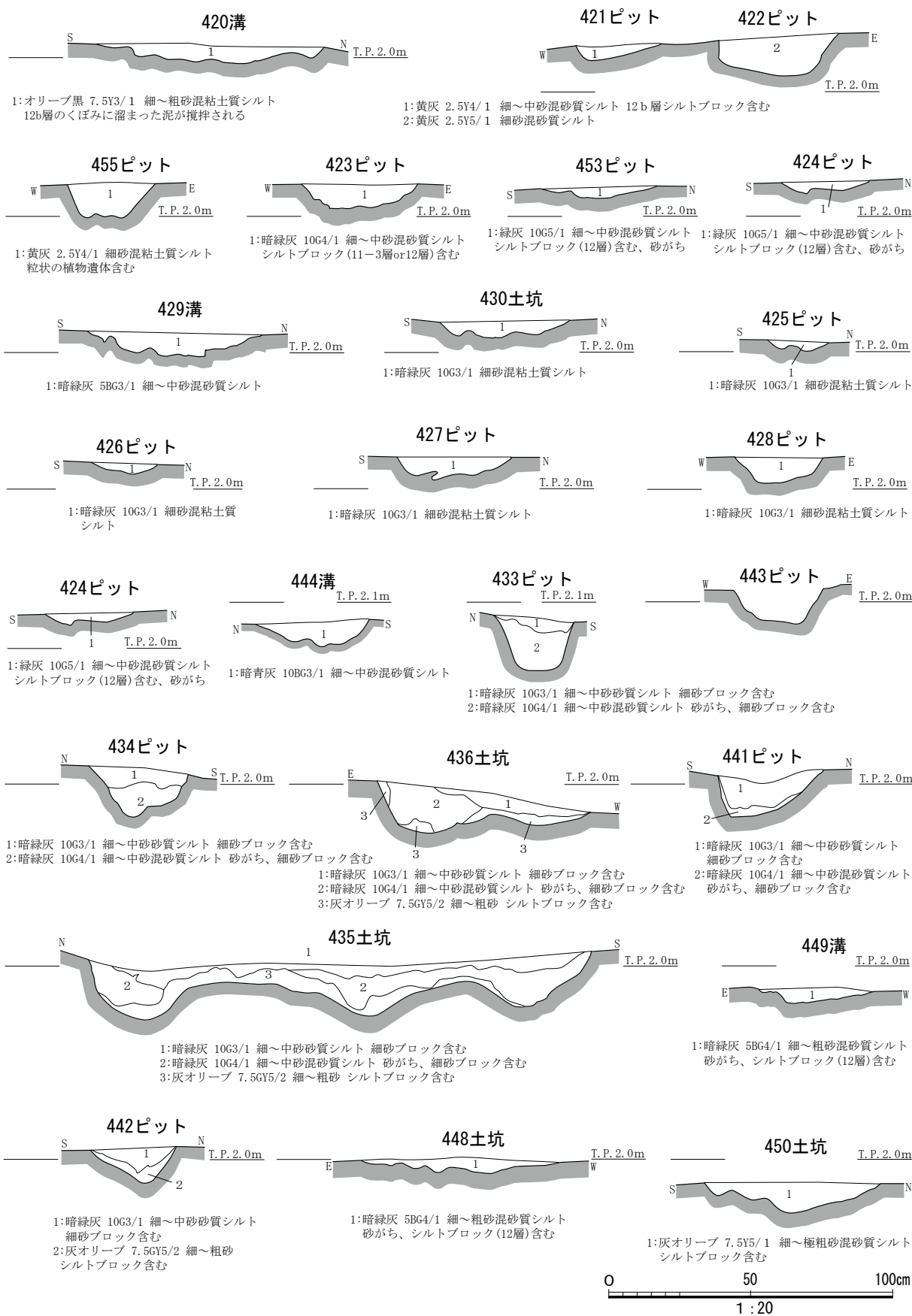


図87 第12b面検出〔第12層下面〕遺構断面図

シルトブロックが大量に含まれていたことから、比較的短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

調査区の南寄りの部分でゆるやかに蛇行しつつ東西方向を指向する447・456・457落ち込みや、調査区南東隅で検出した463落ち込みの検出範囲は、第13面で検出した、洪水砂による第13層の浸食部分と位置や方向性が共通する。したがってこれは、13層の浸食部分が第12b層で埋積される過程で最終的に生じたくぼみととらえられ、人為的に形成されたものではないと考える。

420・429・454溝を除く溝は、落ち込みを検出した調査区南範囲に集中するのに加え、地盤の傾きに平行する。437溝の検出状況から見て、落ち込みが埋積した後に生じたものとみられる。460・461溝のように不整形なものも含まれることから、それらは浸食痕の可能性もある。

第12層出土遺物 (図88～図90)

第12層出土遺物はすべて弥生土器で、図示したものの他に12点あり、うち生駒西麓産胎土とみられるものは4点だった。12b面検出の437溝埋土からは、同一個体とみられる弥生土器の細片が数点出土した。

第12b層出土遺物は、図示したもの以外に弥生土器が13点ある。そのうち器種判別できたのは甕1点と、

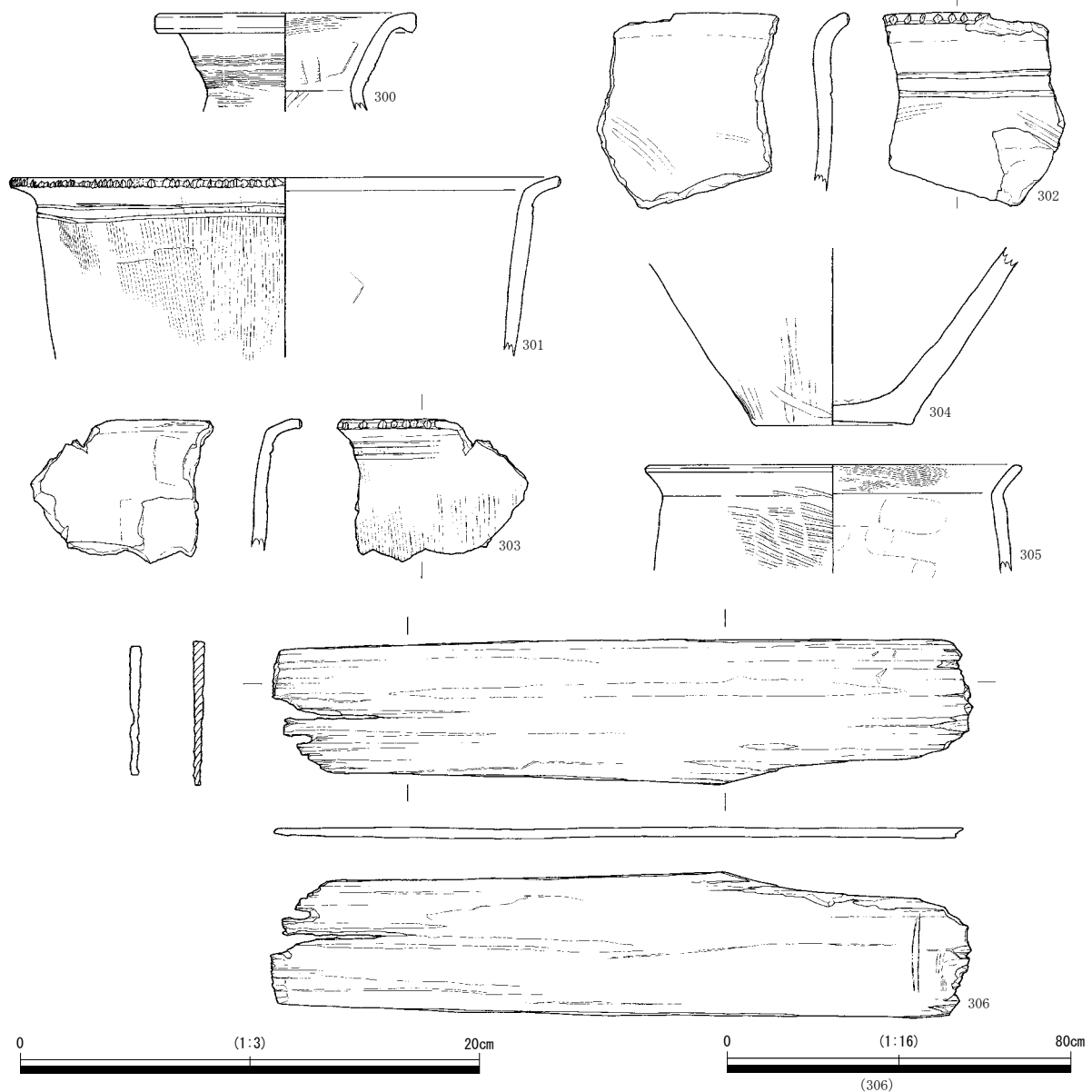


図88 464流路・第12層・第12b層出土遺物実測図 [300:第12層、301・303:第12層以下、302・304～306:第12b層]

壺もしくはその可能性のあるものが4点だった。生駒西麓産胎土とみられるのは3点あり、うち2点は壺の破片とみられる。第13面で検出した464流路の出土遺物は、第12b層で埋積していたことから、その出土遺物は第12b層と関連付けられるので、ここでふれておきたい。464流路からは、器種判別のできない生駒西麓産胎土の弥生土器の破片が1点出土した。

第12層・第12b層のいずれにおいても出土遺物は少ないものの、板状の木製品や各種の石器など、多種類の遺物が出土した。ただ土器の大半が、器種判別の難しい細片で占められるため、時期の傾向をとらえるのは難しい。凶化した遺物を見る限り、前期後葉から中期後葉までの遺物が含まれており、特に時期的なまとまりは感じられない状況である。前期後葉の遺物が、耕作に伴い第13層からまきあげられて混入したものとすると、第12層・第12b層には弥生時代中期全般の土器が含まれているととらえられる。

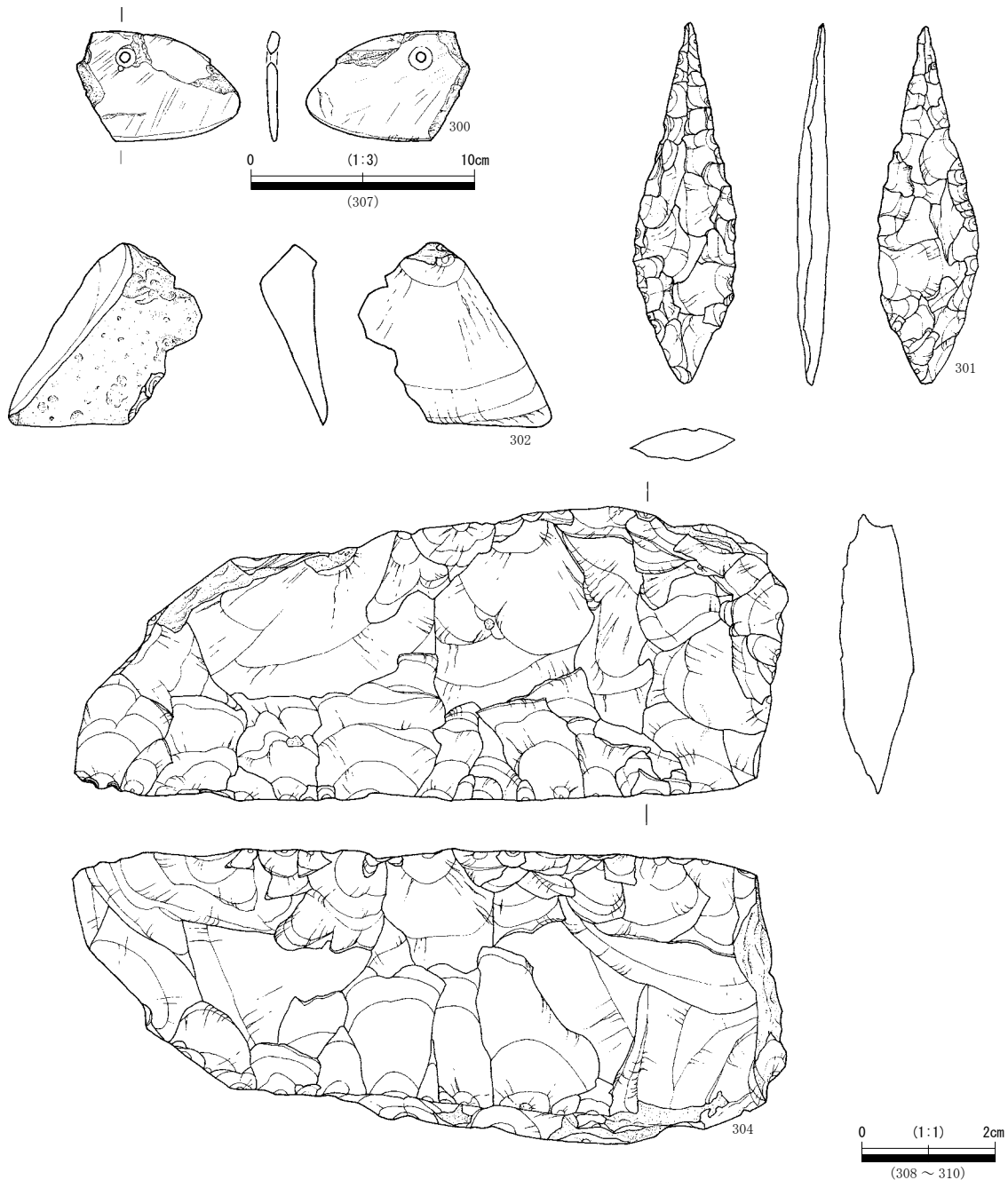


図89 第12層・第12b層出土遺物実測図〔307：第12層、308～310：第12b層〕

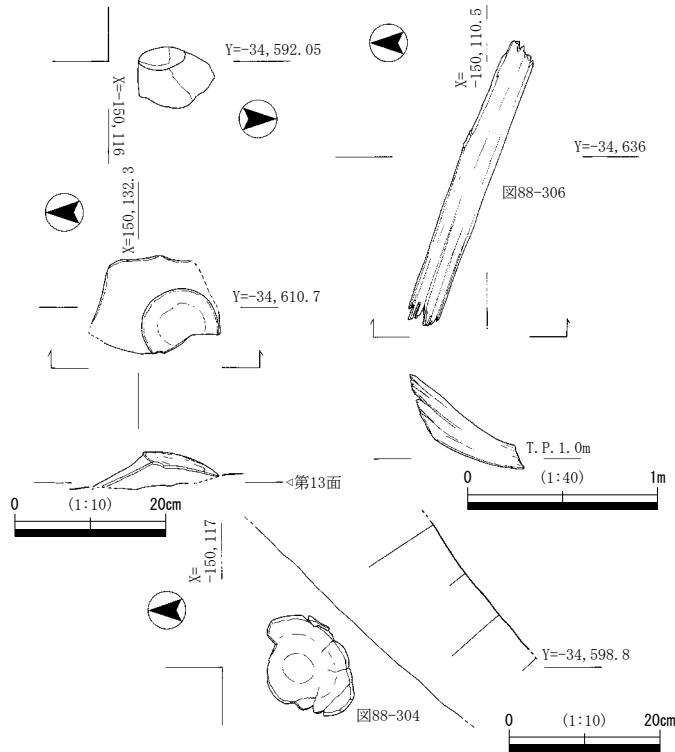


図90 第12b層・第13面遺物出土状況図

この流路は第12b面で検出した454溝の前身とみられる。流路内は第12b層に由来する非常に粗粒の堆積物で埋積されており、過去の調査成果も勘案すると、幅約20mの大規模なものともみられる。流路内から全長150cmあまりの長大な木製の板が出土した他、流木も含まれていた。それらは洪水砂に押し流されるようにして運ばれ、流路内に埋積したとみられる。木製の板は、大きさからみて、棺材の可能性も考えられる。

調査区西半部中央で、東西方向にはしる466大畦畔を検出した。調査区中央では、466大畦畔から北東—南西方向の467大畦畔が枝分かれますとみられる他、東側延長部分には北西—南東方向の468大畦畔が位置する。465水路は、466大畦畔の南側に平行するように同様の盛土を施し、導水機能を負わせたものである。水はそこを西から東に向けて流下したとみられる。467大畦畔の東側にもそれと平行するように同様の盛土がなされており、両者に挟まれた部分は北に向ってゆるやかに傾斜することから、この部分も導水機能を負っていたと推測される。

468大畦畔の南側にもこれと平行する盛土が施され、465水路が延長していた可能性があるが、466～468大畦畔の結節部分にあたる箇所が洪水砂の浸食を受けて削平されており、詳細は不明である。

465水路と468大畦畔より北側では、水田畦畔が検出された。畦畔の検出範囲は後述するように、もともと微高地を呈していたと考えられる。466大畦畔と468大畦畔は調査区南部の浸食部分の北辺と範囲や方向が類似することから、微高地の南辺に沿うように設けられていた可能性もあろう。

洪水砂浸食部分を詳細にみると、洪水砂の流れの方向は必ずしも一つではなく、方向の異なる流れの痕跡が認められた。特に調査区南西部では、南北方向の洪水砂の流痕が深くまで及んでいるのがみてとれた。

第13層からは土器が比較的多く出土した。そのうち完形に近いものは、畦畔を除去している段階で検出したことから、畦畔を築いている際に意図的に埋め込まれたと考えられる。特に畦畔の交点付近では複数の土器を検出した。また第13面で検出した畦畔の位置とは合致しないものの、完形にちかい土器が第13層を掘削中に出土している。したがってそれらももともと、削平されてしまった畦畔に伴っていたものである可能性が考えられる。

第13面（図90～図95）

第12b層を除去して検出した弥生時代前期後半の遺構面である。調査区の北半部で水路や畦畔など、水田耕作に伴う遺構を検出したが、調査区南半は第12b層の基盤となる洪水砂に大きく侵食され、第13層の上部が遺存しなかった。したがってこの部分は大きくくぼんだ形状を呈する。

調査区北西で464流路を検出したが、流路の大半は調査区外にひろがり、今回の調査区では東肩を検出したのみである。北側の08—1調査区の調査の際に検出された、この流路の延長部分はゆるやかに蛇行しながら、ほぼ南北方向を指向する。今回の調査区で検出した部分は、南西方向からの水の流れが、北に向けて方向を転じる部分に当たると考え

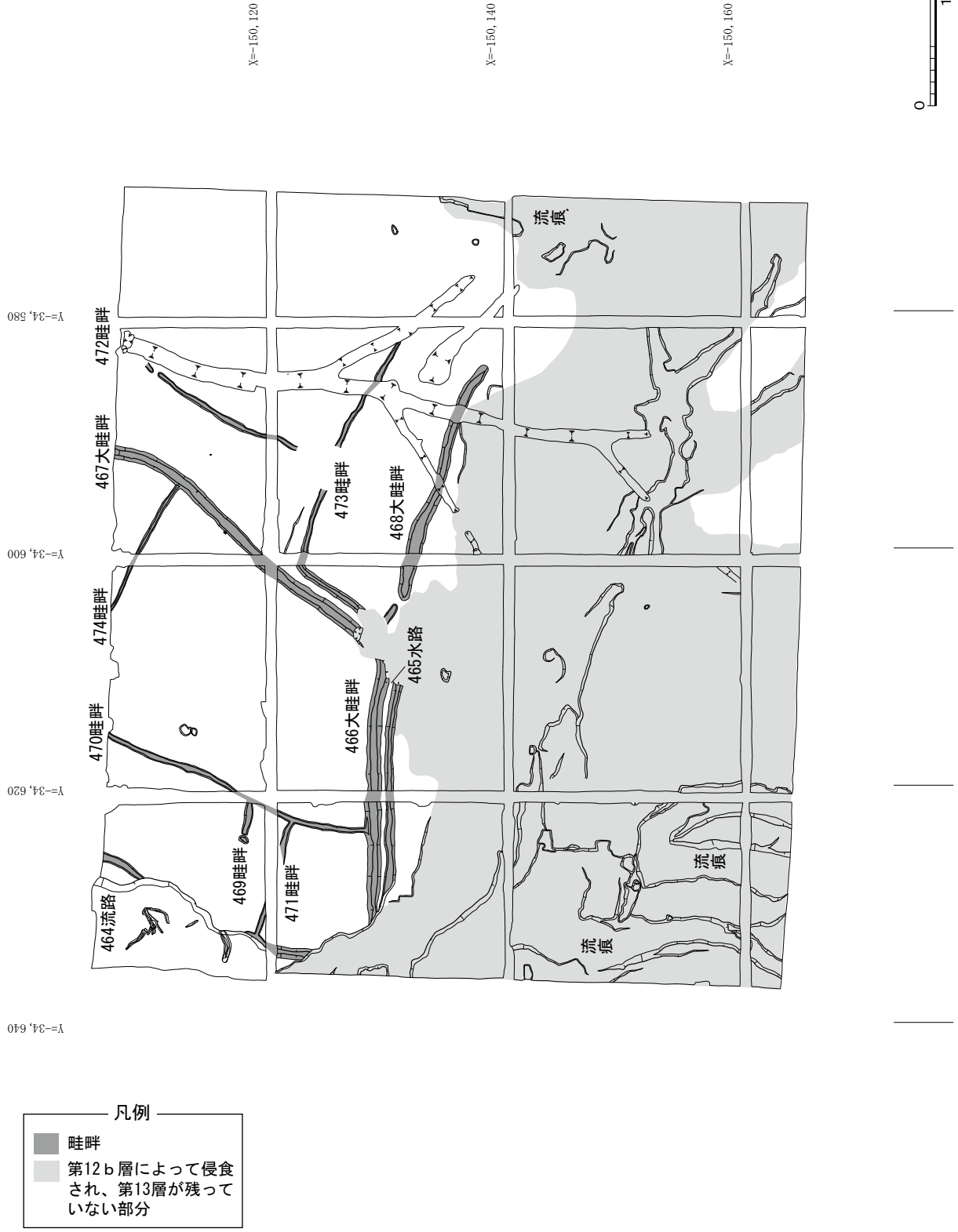


図91 第13面平面図

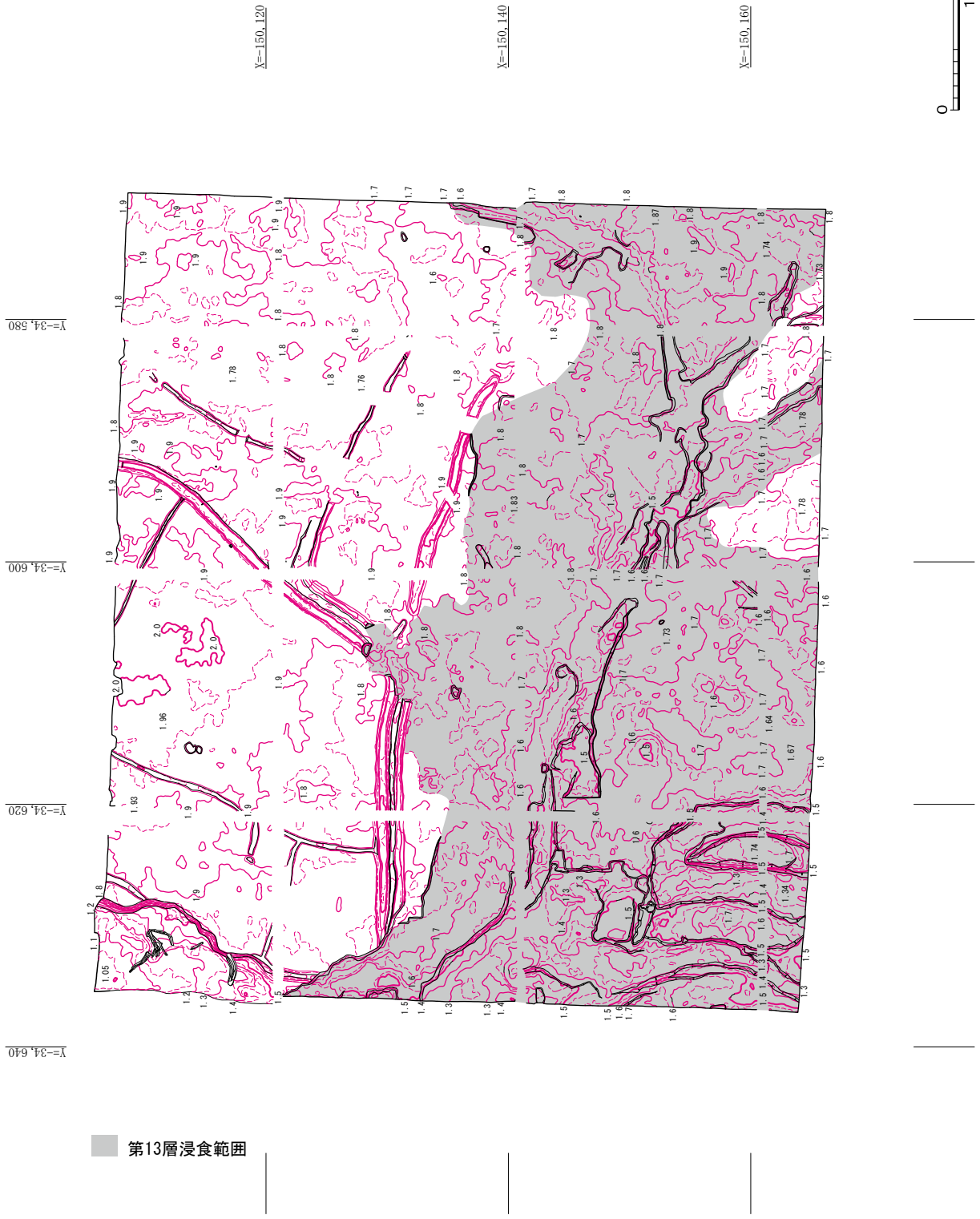


図92 第13面等高線図

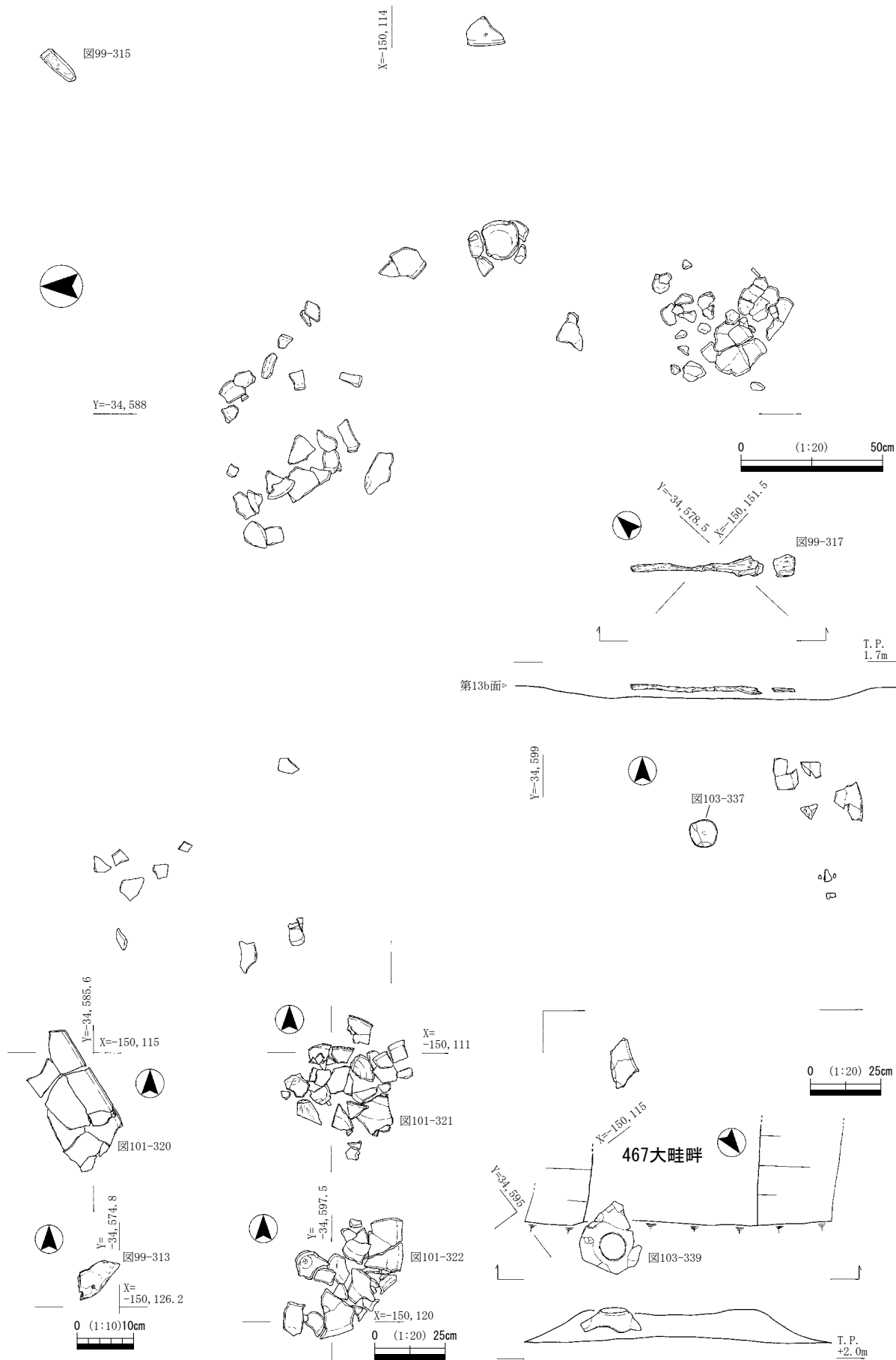


図93 第13層遺物出土状況図 (図99-313出土状況は1/10、それ以外は1/20)

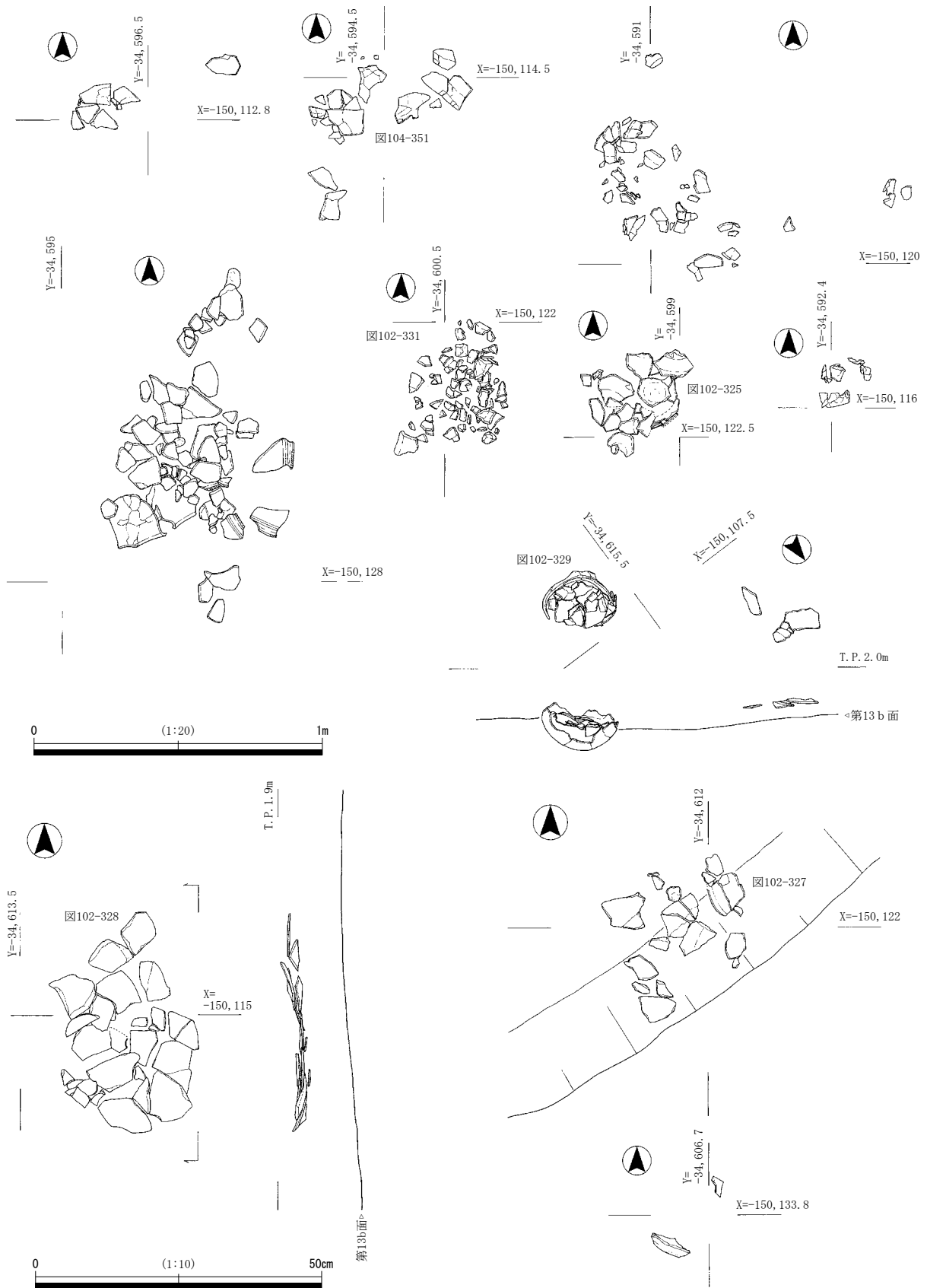


図94 第13層遺物出土状況図

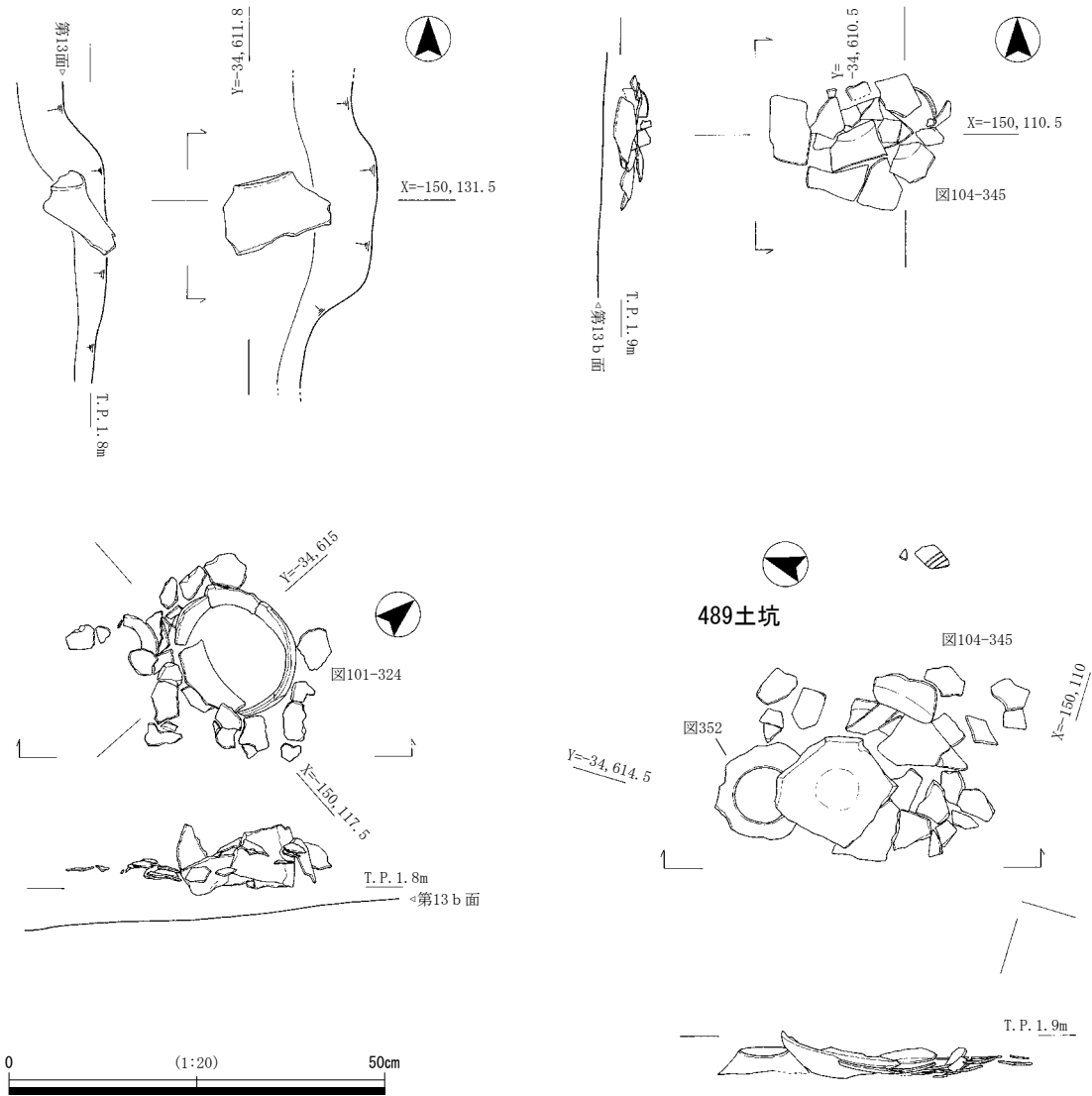


図95 第13層遺物出土状況図

第13b面 (図96～図98)

第13b面は、第13層を除去して検出した。第14-2面の地形と照らしてみると、相対的に標高が低い調査区南部がまず粗流の堆積物で埋まり、徐々に北側へ堆積の場が移っていき、最終的には調査区北半部以北で微高地が形成されたとみられる。

調査区北半の第13面が遺存していた部分では、溝・土坑・ピットを多数検出したが、これらは第13層形成段階に成立した遺構ととらえられる。溝は北東-南西方向(477・479・519溝)ないし北西-南東方向(502・497溝)で、第13面の畦畔の方向と一致している。したがってこれらの遺構も、第13面もしくはそれよりやや古い段階の水路・畦畔に由来するととらえられる。497溝の存在から推して、第13面検出段階では畦畔が削平されて残らないものの、この時期の水田域は調査区南東側にも広がっていたと考えられる。土坑は不整形なものが多く、調査区西半で検出した土坑は477・479溝と、東半で検出した土坑は519溝と、おおむね主軸方向が一致する傾向がられた。

土器は主に調査区北部で出土した。

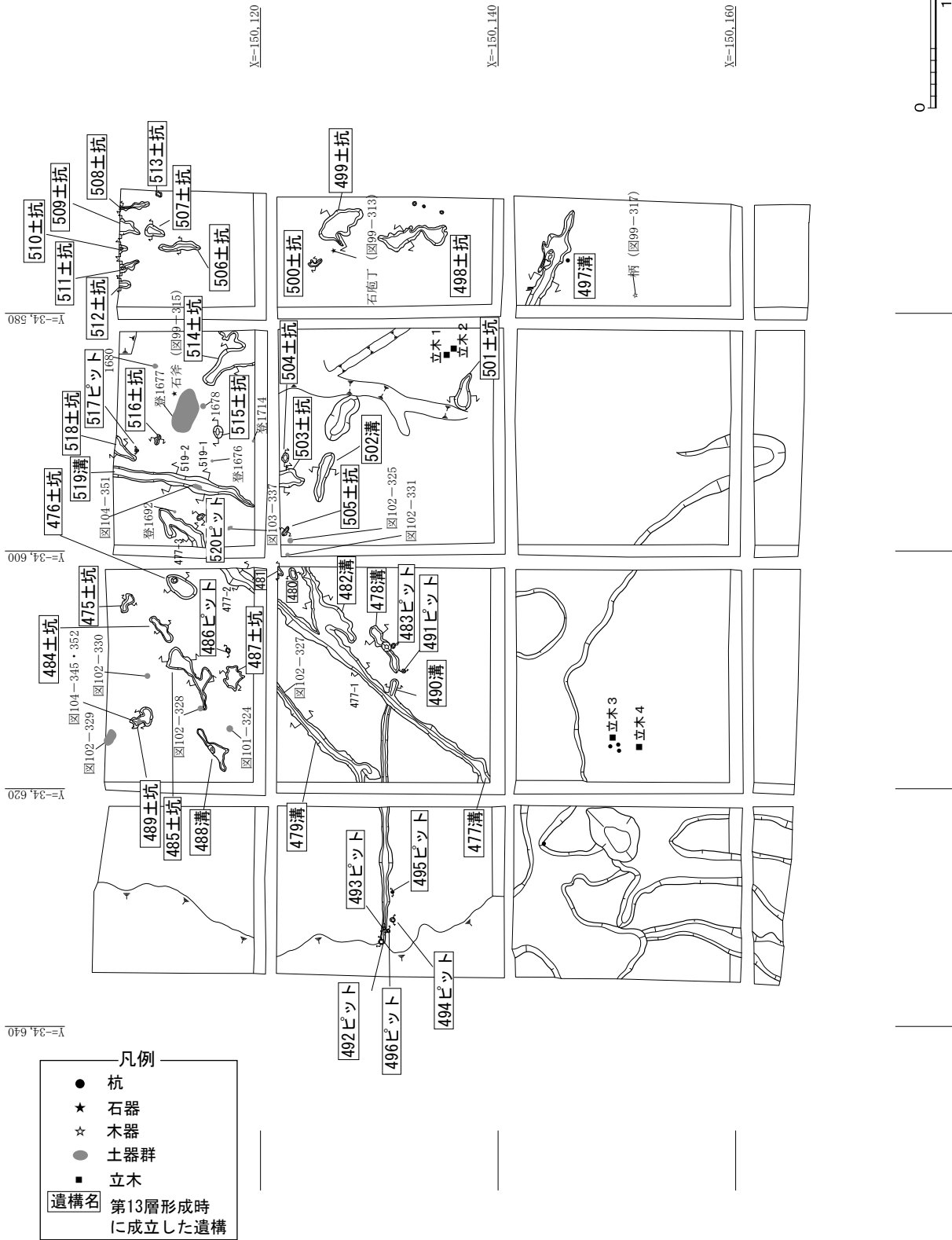


図96 第13b面平面図

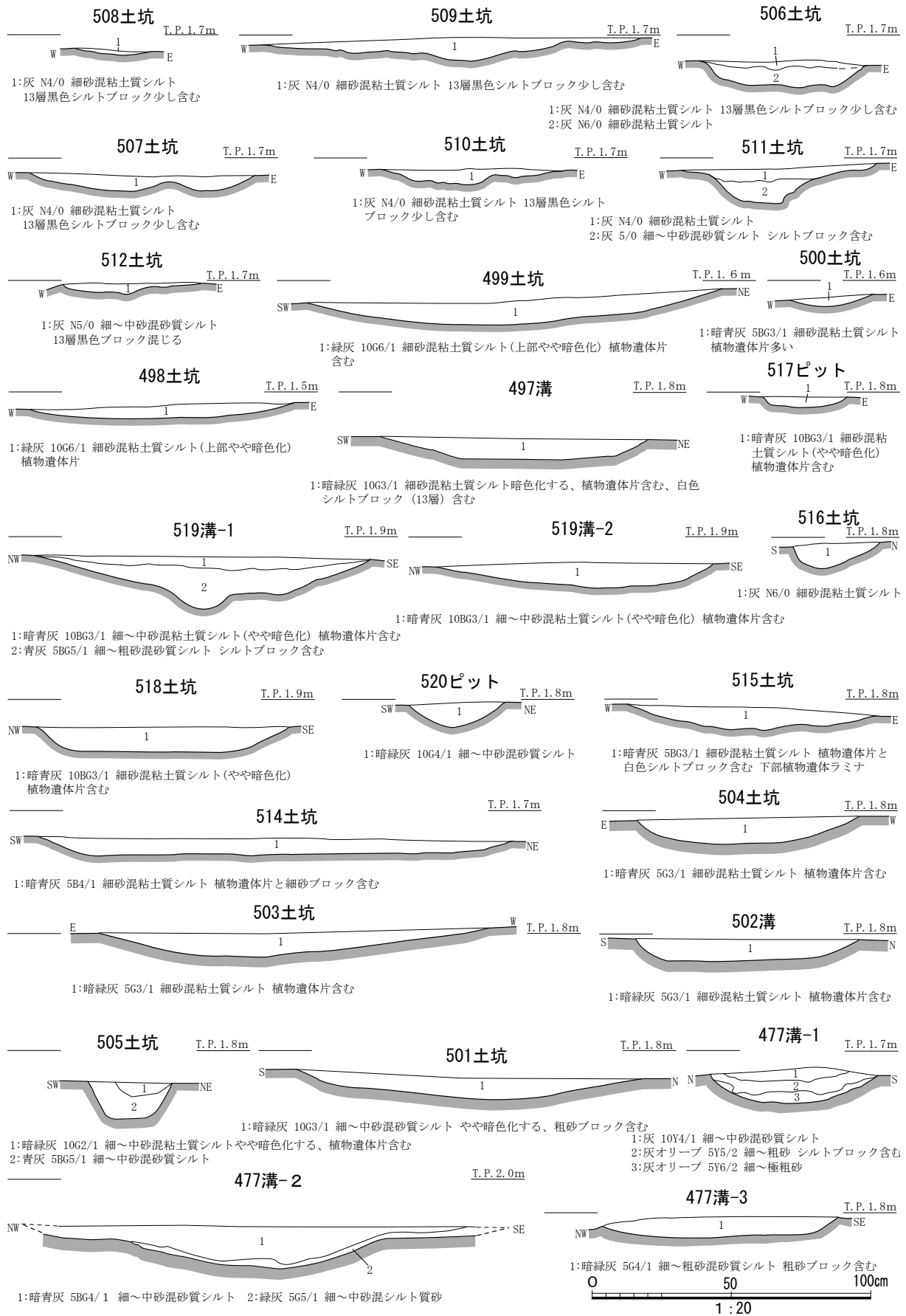


図97 第13b面検出〔第13層下面〕遺構断面図

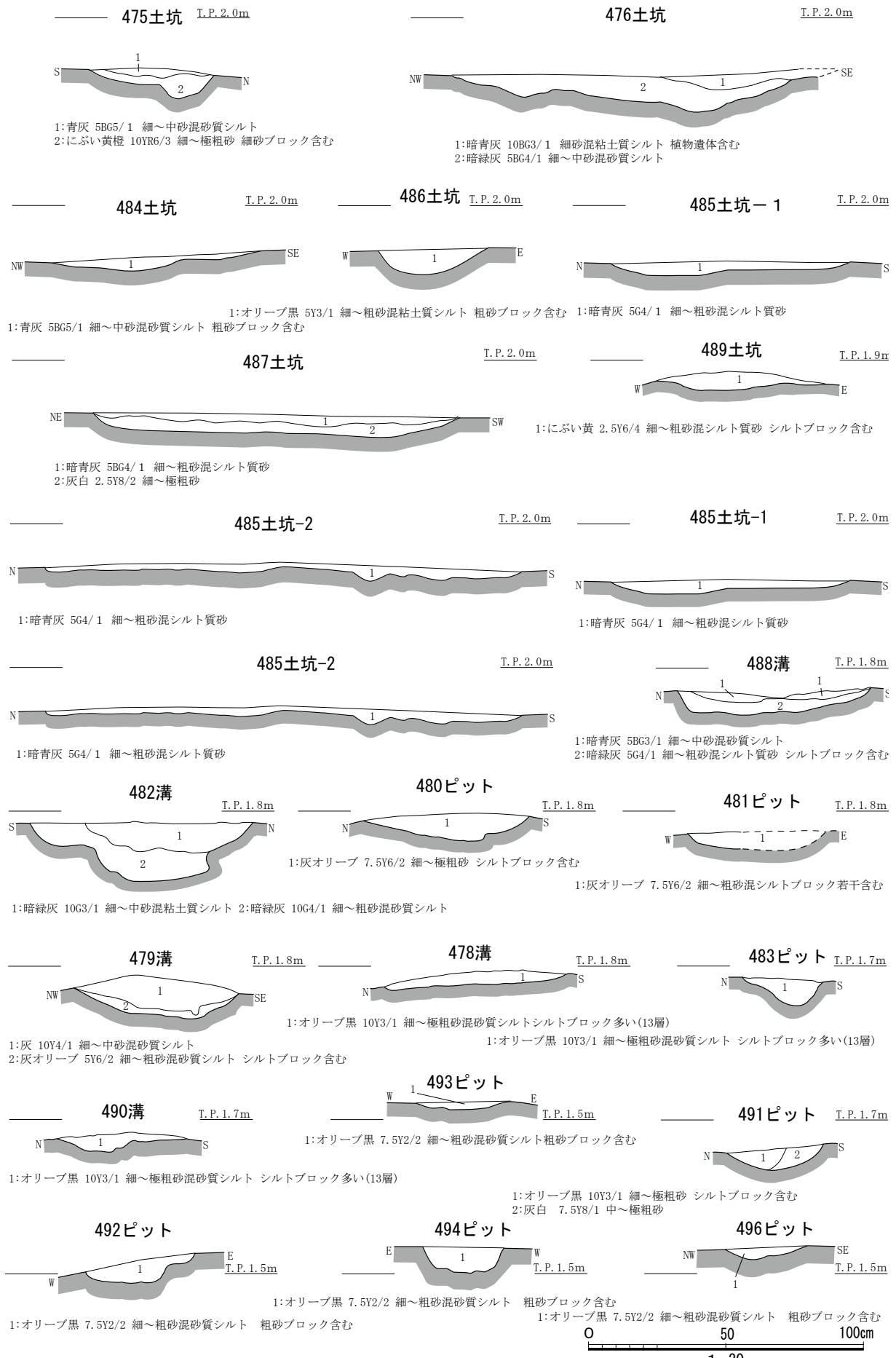


図98 第13b面検出〔第13層下面〕遺構断面図

第13層出土遺物（図99～図105）

第13層と第13b層からは、第11層以下では最もまとまった量の弥生土器が出土している。また石庖丁や石鏃以外に、太型蛤刃石斧や伐採斧の柄が出土した点も注目される。ただ前述したように、出土状況や胎土・調整方法などから明らかに同一個体で、少なくとも器種判別のできる状態で出土したとみられるにもかかわらず、風化が進んで脆弱なため、取り上げて洗浄した後に、全体の器形復元が困難になってしまった例は、第13層・第13b層で特に顕著で、計8点ほどあった。それらに対しては可能な限り接合をこころみ、復元できた部分を実測するか、可能な場合は図上で全形復元を行い、図示することをこころがけた。それによりほぼ、全点を網羅することができたが、実測図作成のかなわなかったものは、出土状況図を掲載しているので、そちらを参照されたい。

第13層出土遺物は、図化したもの以外に弥生土器が27点ある。そのうち生駒西麓産胎土とみられるものは16点だった。弥生土器のうち甕、もしくはその可能性のあるものが6点で、それらはすべて生駒西麓産胎土とみられる。一方、壺と判断したのは8点で、そのうち生駒西麓産胎土とみられるのは6点である。第13面で検出した畦畔を除去している段階で、完形もしくはそれに近い形状の土器が検出されたのは前述したとおりである。これらは畦畔を築く際に意図的に埋め込まれたと考えられるため、ほぼ全点を図示したが、466大畦畔からは、図103-343の他に、器種判別のできない弥生土器の細片が1点出土している。第13b面で検出した遺構は、第13層の形成過程で成立したものととらえられることから、そこで出土した遺物は第13層に関連付けてとらえることができる。対象となる遺構埋土出土遺物は、図104に示した通りだが、それ以外に477溝から弥生土器の細片3点が出土した。うち一点は生駒西麓産胎土とみられる。478溝では実測遺物以外に、壺とみられる弥生土器片2点が出土しており、それらはいずれも生駒西麓産胎土とみられる。497溝からは器種判別のできない弥生土器片が1点出土した。

第13b層では、実測図を掲載した遺物以外に弥生土器が52点出土した。その中で生駒西麓産胎土とみられるのは10点だった。出土した土器は著しく磨滅を受けており、器種判別のできないものが大半を占める。その中で甕、もしくはその可能性のあるものが4点、壺もしくはその可能性のあるものが6点あった他、長原式の深鉢の破片とみられるものが1点あった。器種判別できたものの中で生駒西麓産胎土と判断したのは、甕2点である。

第13層・第13b層のいずれにおいても、器種判別できた弥生土器のうち、積極的に弥生中期と判断できるものはなく、おおむね弥生前期後半の時期にまとまるのではないかと考える。加えて第13b層には、わずかながら縄文晩期の土器片が含まれており、第13層出土遺物に比べて古層を示すと言える。

上記の遺物のほかに第13b層では、立木の根株を4点検出した。それらは断片を採取して、樹種同定を行った。表21をみると第13b層で採取した樹種サンプルのうち1点がミズキで、他の3点はヤナギ属である。ヤナギ属はそれ以上の分類が難しいこともあり、ここで検出されたのがどのような環境を好む樹種なのかを特定することは難しい。ただ採取された場所が、洪水の影響により裸地化して日当たりの良い場所だったとみられることから、河岸の湿地に群生しやすい、日光を好む耐水性のある樹種と考えられる。ただその場合、先駆性樹種で樹高があまり高くないため、時間の推移とともに森林層が推移する過程で淘汰される。しかし第13面検出の464流路埋土から検出した流木もヤナギ属であることから、第12b層の堆積時にいたるまで、当調査地近隣の森林植生はそれほど推移しなかったことがうかがえる。その要因として、弥生時代前期後半～中期初頭にかけての水田開発の影響があったのではないかと考える。

ミズキの方は山腹の緩斜面で、土壌の深い肥沃地を選ぶ傾向があるため、耐水性のあるヤナギ属とは植生環境が異なる印象がある。ただ耐陰性が弱く、日光を好むため、調査地一帯でも一定の生育環境が満たされてい

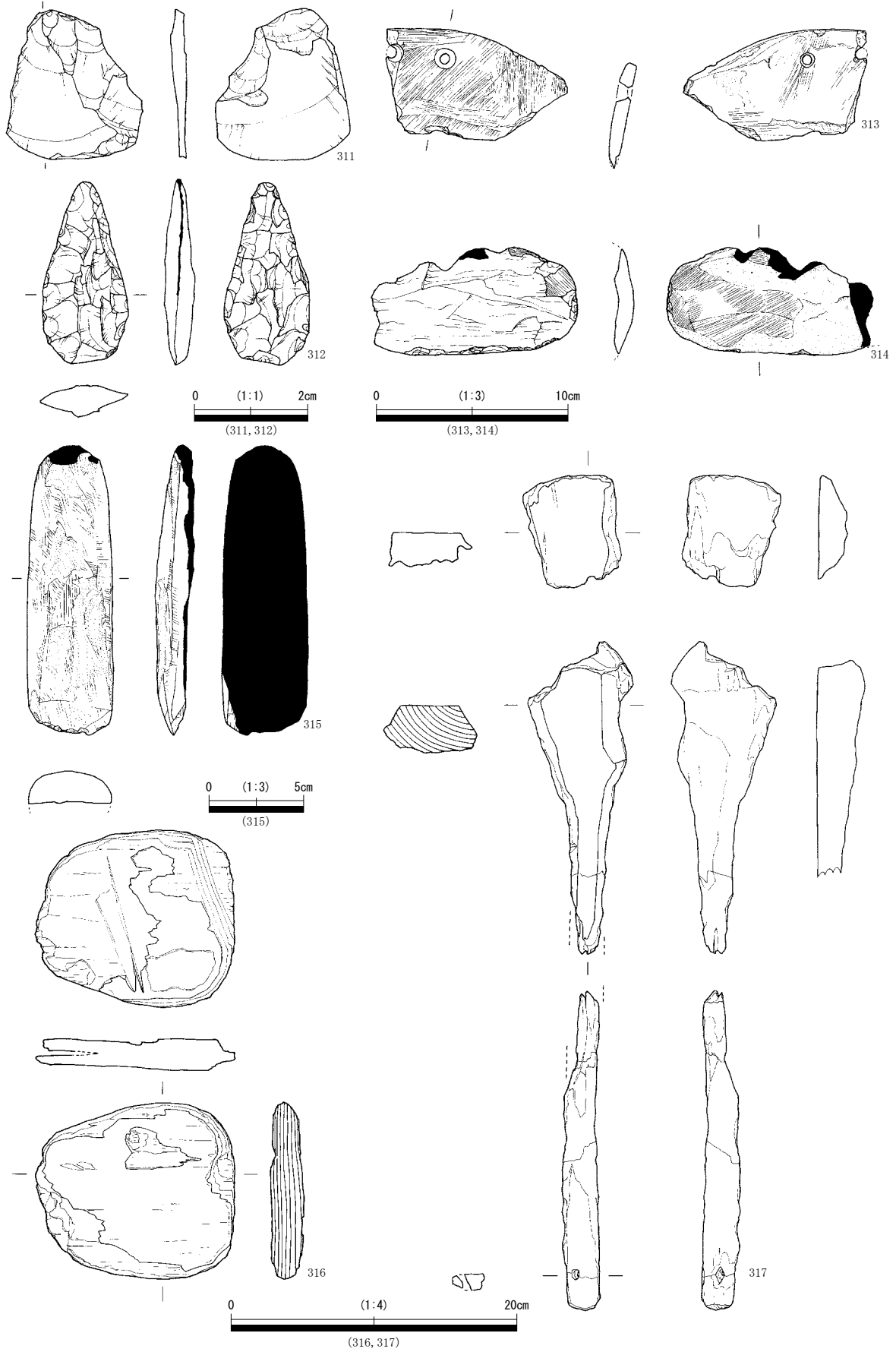


図99 第13面・第13層出土遺物実測図〔311：第13面、312～317：第13層〕

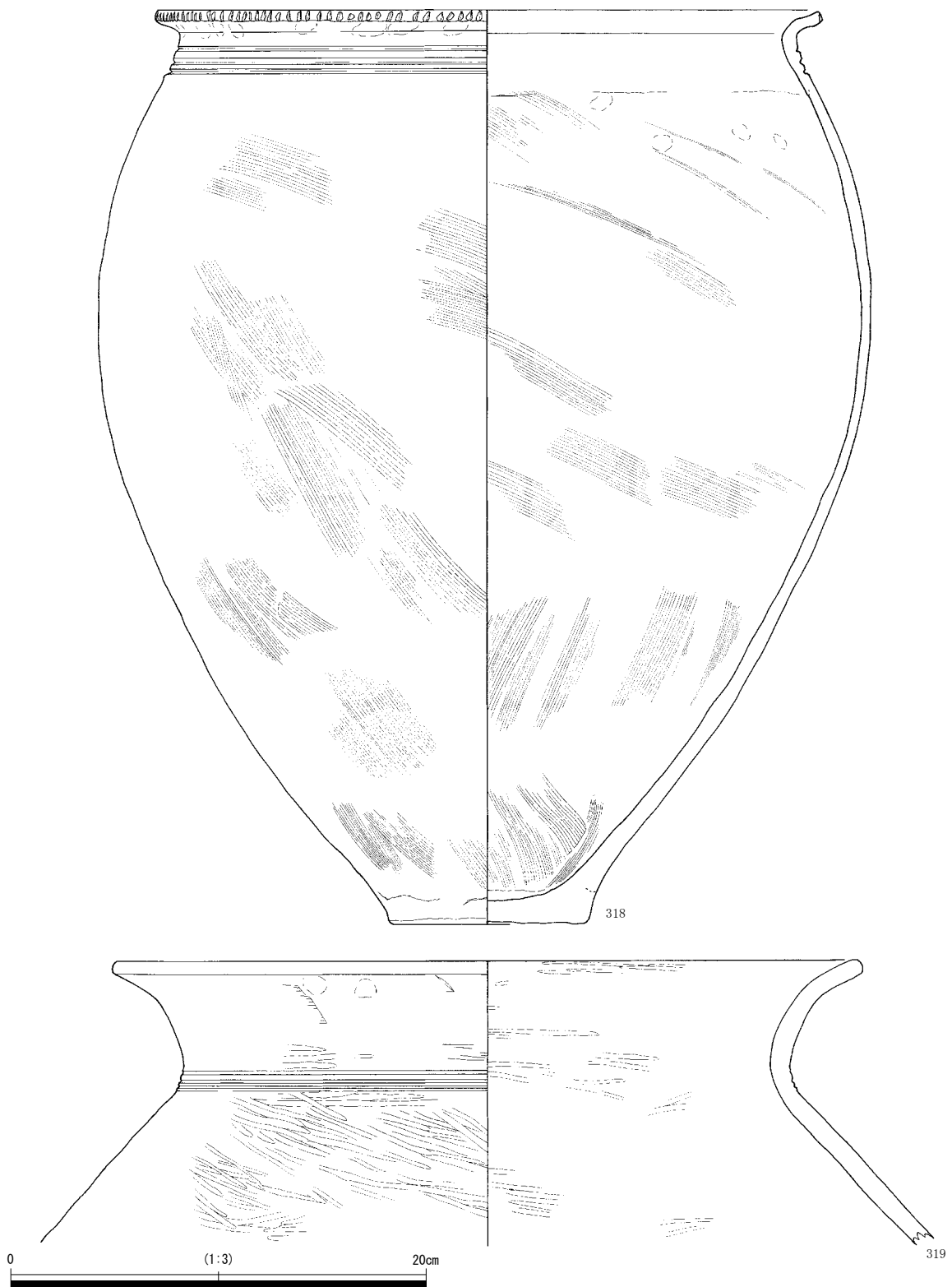


图100 第13面・第13層出土遺物実測図〔318：第13面、319：第13層〕

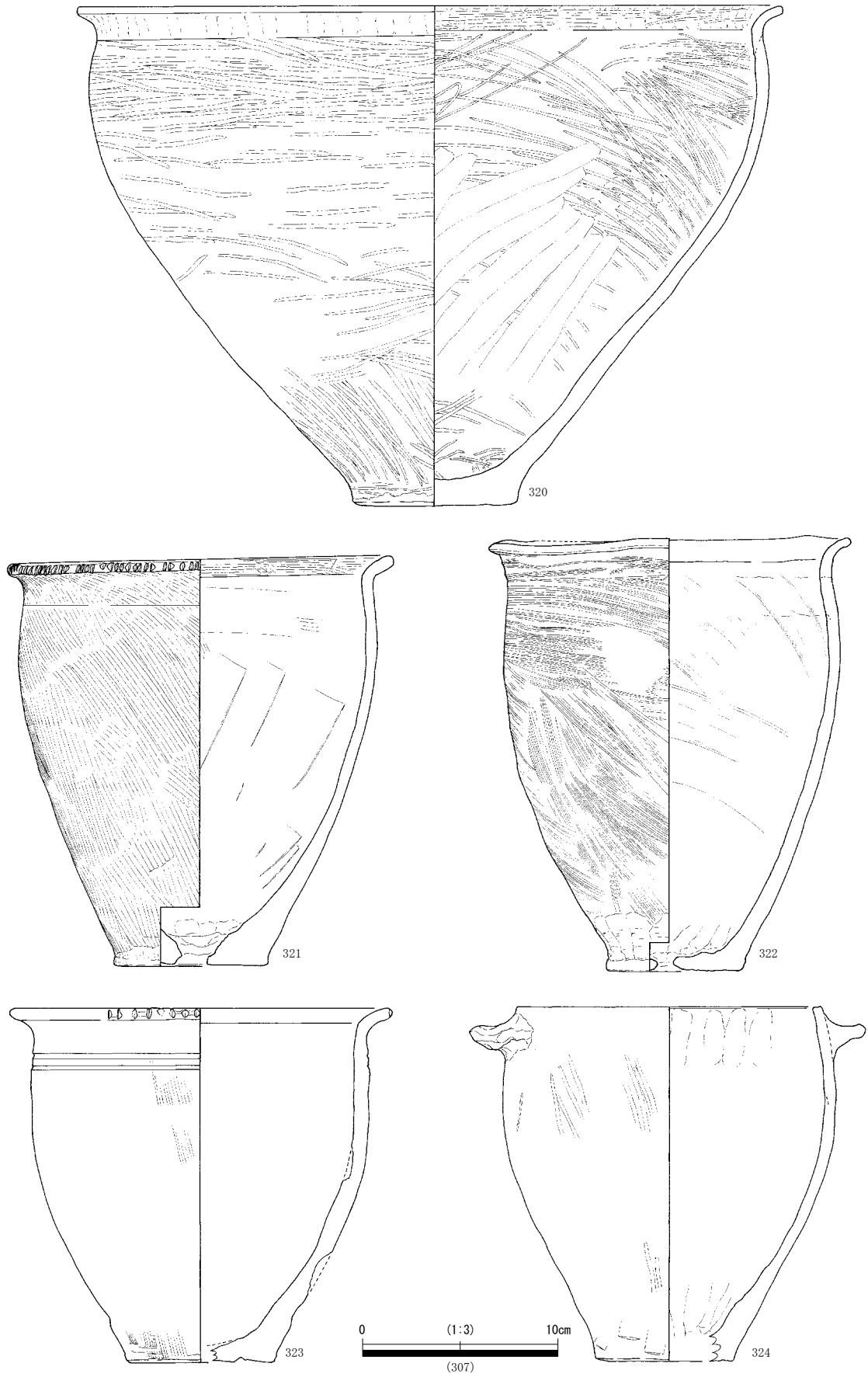


图101 第13層出土遺物実測図



图102 第13層出土遺物実測図

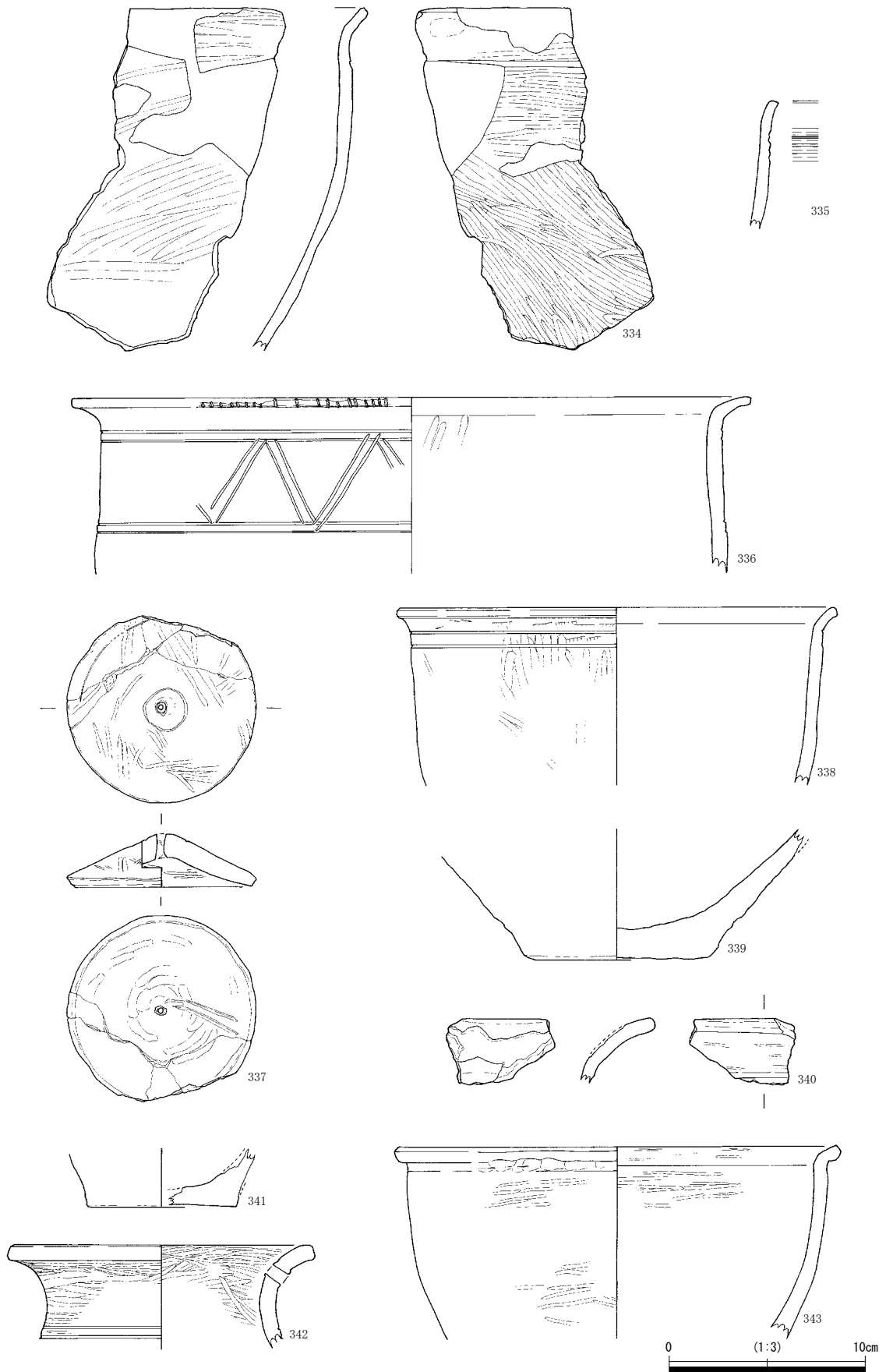


図103 第13層、第13面466・467大畦畔・470畦畔出土遺物実測図〔334・335・342：第13層、336～340：467大畦畔内、341：470畦畔内、343：466大畦畔内〕

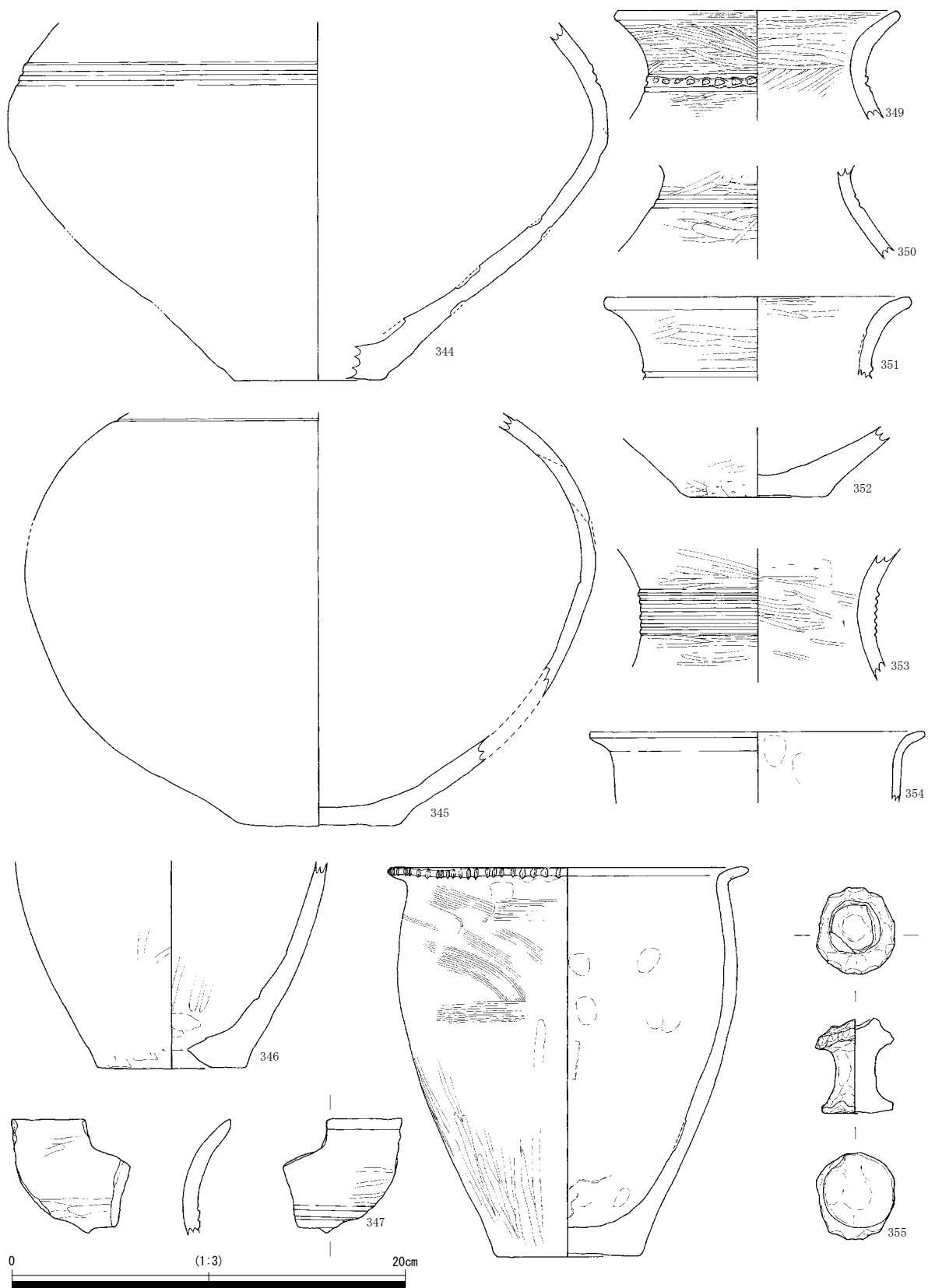


图104 第13b面476土坑·477溝·478溝·489土坑·519溝、第13b層出土遺物実測図〔344・351：519溝、345・352：489土坑、346～348：477溝、349・350：第13b層、353：476土坑、354・355：478溝〕

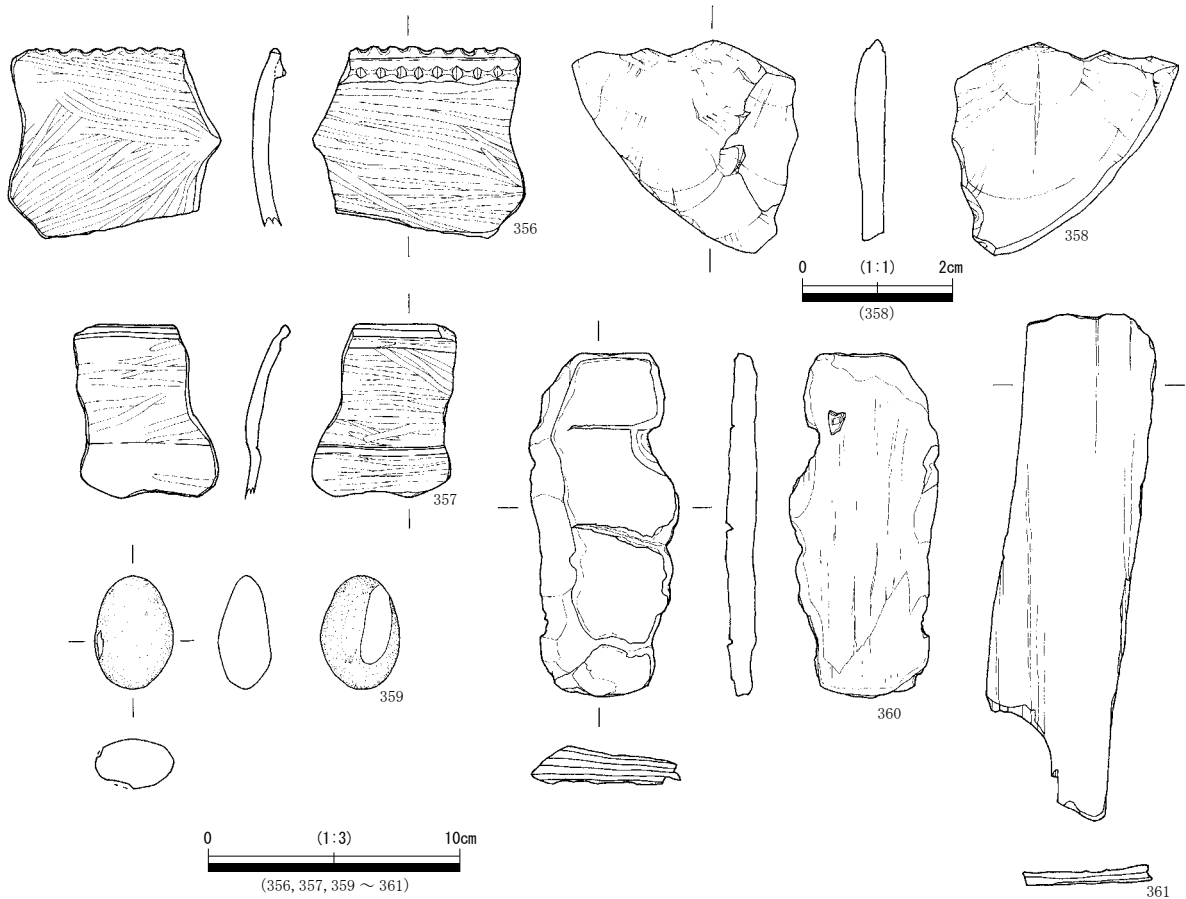


図105 第13b層出土遺物

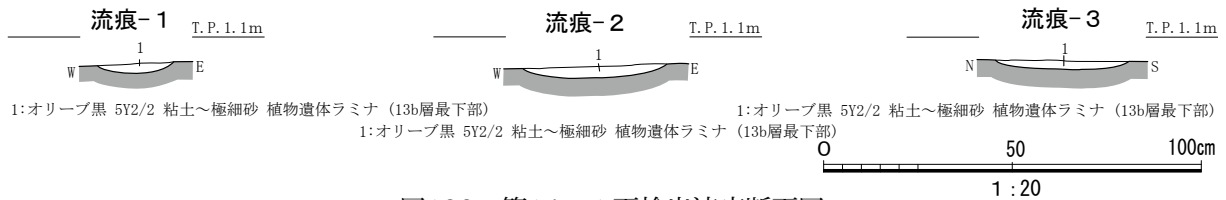


図106 第14-1面検出流痕断面図

たとは言えるだろう。またミズキは材が柔らかく、加工しやすいことから、人為的に選ばれて生育されたものである可能性も考えられる。

第14-1面 (図106・図107)

第13b層を除去して検出した遺構面である。この段階では、当調査区域まで水田が及んでいなかったと考えられる。第14-1面は調査区北半でのみ検出した。南半では調査深度 (T.P.0.9m) より下に位置する第14-1面は検出しえなかった。

第13b層最下部のシルト層と、第14-1層との差が不明瞭で、平面的に検出した際、特に調査区北西半では境界を検出しにくい部分もあった。調査区北東の上面では、流痕もしくは地震痕跡とみられる、浅い溝状のくぼみを認めたが、人為的な遺構は検出されなかった。第14-1層、もしくはその上面で、遺物は検出しなかった。

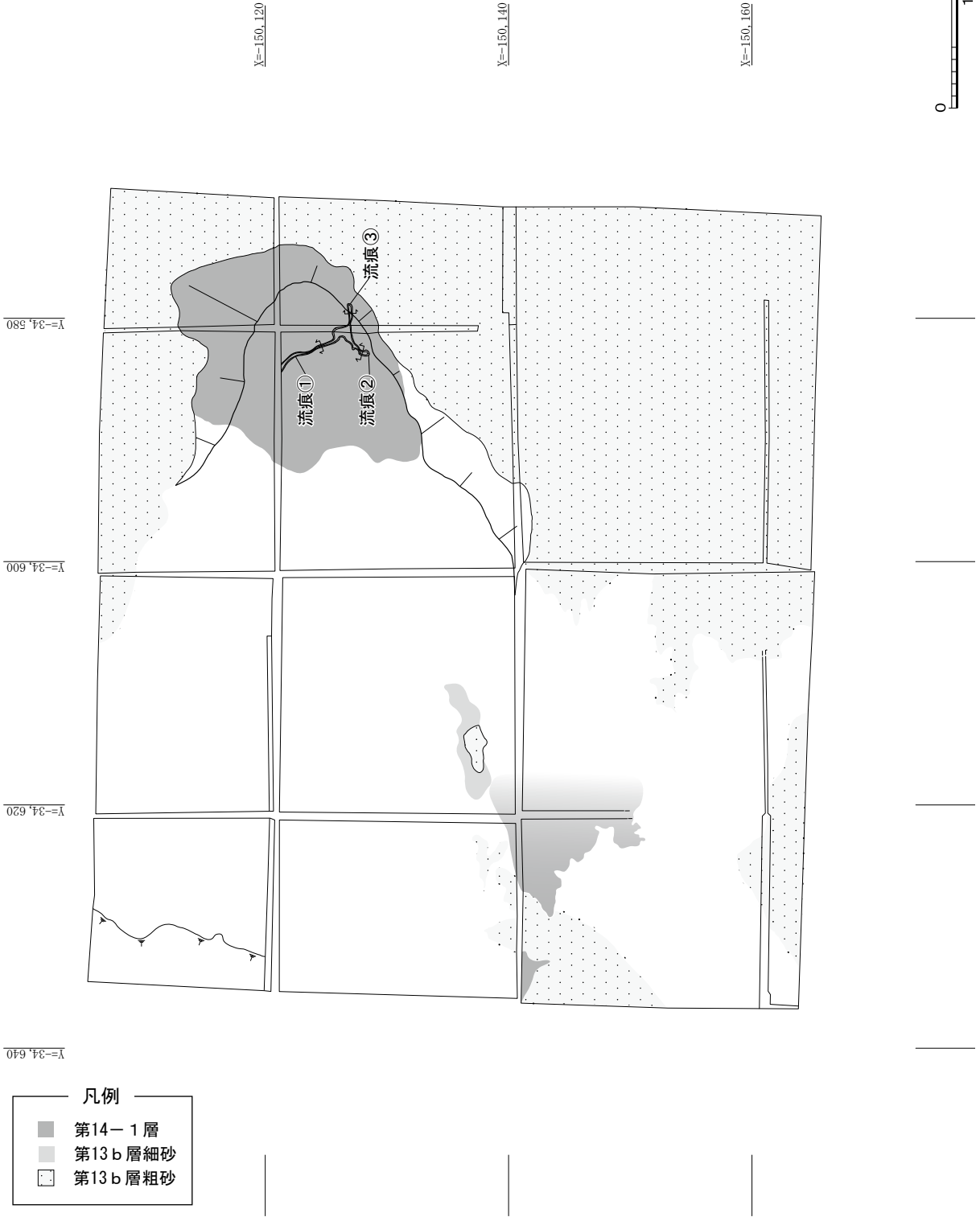


图107 第14-1面平面图



図108 第14-2面平面図

第14-2面 (図108)

第14-1層を除去して検出した遺構面である。上面が調査深度 (T.P.0.9m) よりも高く、第14-2面が検出できた部分は調査区北東の東西15m、南北20mほどの範囲だった。人為的な遺構は検出されなかった。

第14層出土遺物

第14-2面から土器片が2点出土した。いずれも生駒西麓産胎土とみられる。細片のため詳細は不明だが、1点は外面にケズリの痕跡が認められる。他方は外面にススが付着する。これらをもって第14層の形成時期を把握することはできないが、従来の調査成果を勘案すると、弥生時代前期前半に相当すると推測される。

第3節 移動式竈

当調査区では、移動式竈の破片とみられる遺物が出土している。それらはおおむね細片で、全体の器形を復原できるものはなかった。それらは第7層から第10b層にかけての層位で出土するが、大半は第9層・第10層・第10b層から出土する。第7層や第8層出土のものは、おそらくもとは古墳時代から古代前半の土層に含まれていたものが、後世の耕作に伴って巻き上げられ、新たに形成された耕耕作土層に紛れ込んだものととらえられる。移動式竈の可能性のあるもののうち、かろうじて部位が判断できるものを実測し、図109・110に掲載した。図109に掲載したのは、脚部もしくは裾部、さらに焚口部分とみられるものである。脚部に関してみると、幅はそれぞれ異なる。図110に掲載した遺物は、掛口部分や底、もしくは底に近い部分とみられる破

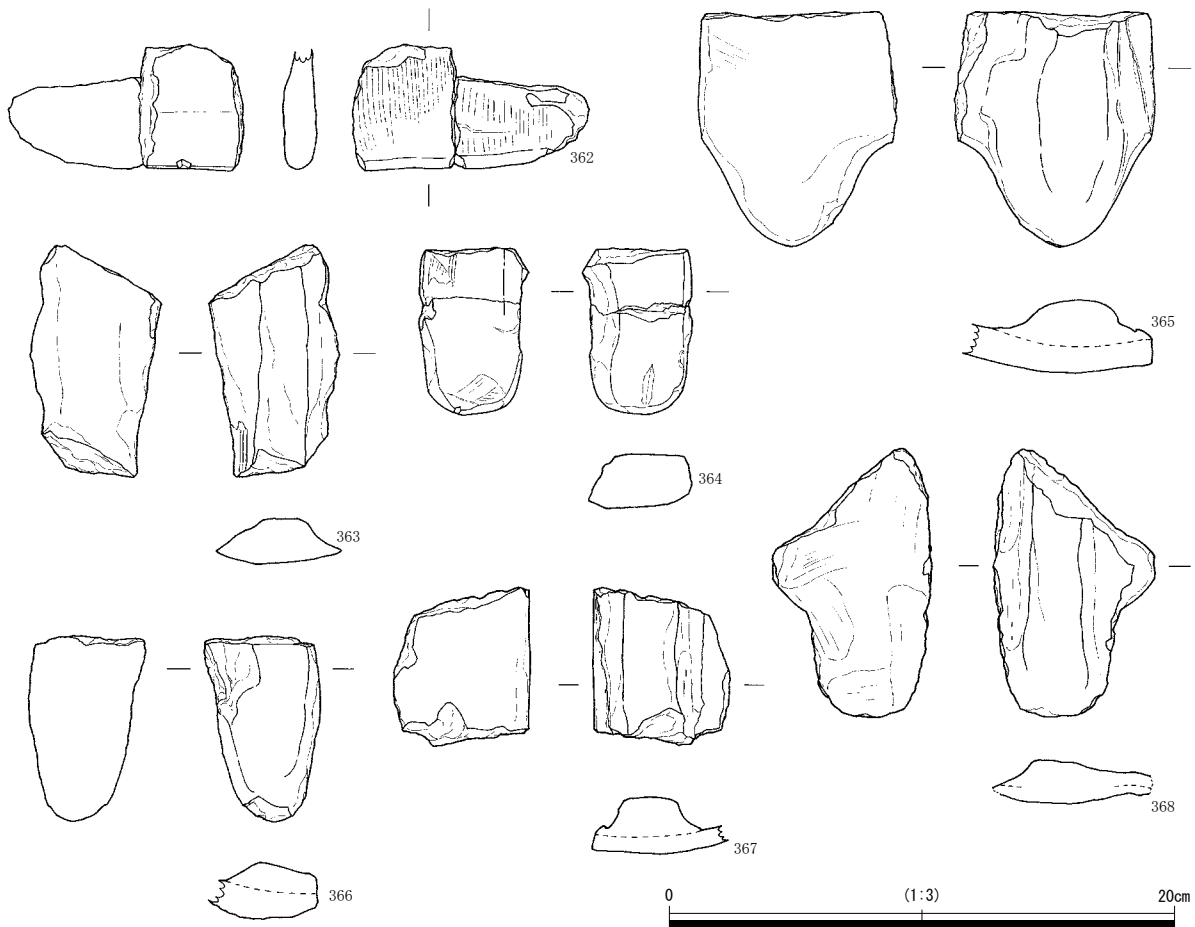


図109 移動式竈実測図

片である。掛口部分は、ナデ調整で仕上げるものもあるが、内面の角を横方向のケズリ調整で整形するものが主体を占めるとみられる。

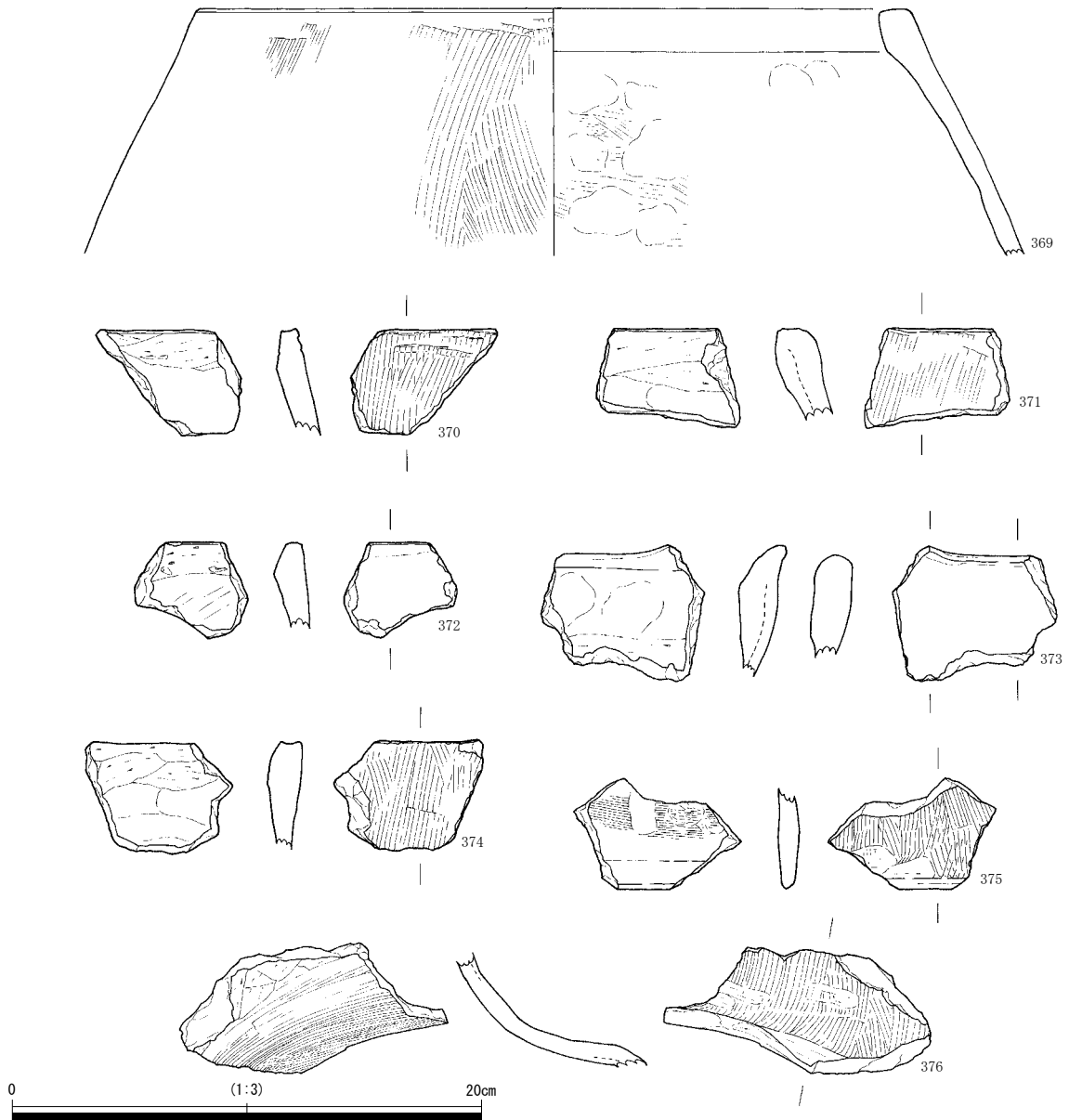


図110 移動式竈実測図

第4章 自然科学分析

第1節 福万寺Ⅱ期地区（09－1）調査区における植物珪酸体・花粉・珪藻分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

池島・福万寺遺跡は、河内平野の南東部、東大阪市池島町と八尾市福万寺町に所在する。本遺跡では、弥生時代後期に大規模な水田開発が行われ、その後、幾度も洪水で中断されてはその都度復旧して、水田稲作が営まれ続けてきたことがこれまでの発掘調査で明らかになっている。

ここでは、池島・福万寺遺跡09－1調査区における農耕、土地利用、周辺植生さらに堆積環境を検討することを目的として、植物珪酸体分析、花粉分析および珪藻分析をあわせて実施した。

2. 試料

分析試料は、調査区東壁の第9－1・2層、第9－3層、第9－4層、第10層、Y1トレンチ東壁の第12－1層と第12－2層より採取された6試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析方法

（1）植物珪酸体分析

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節型は0.3である（杉山，2000）。

（2）花粉分析

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

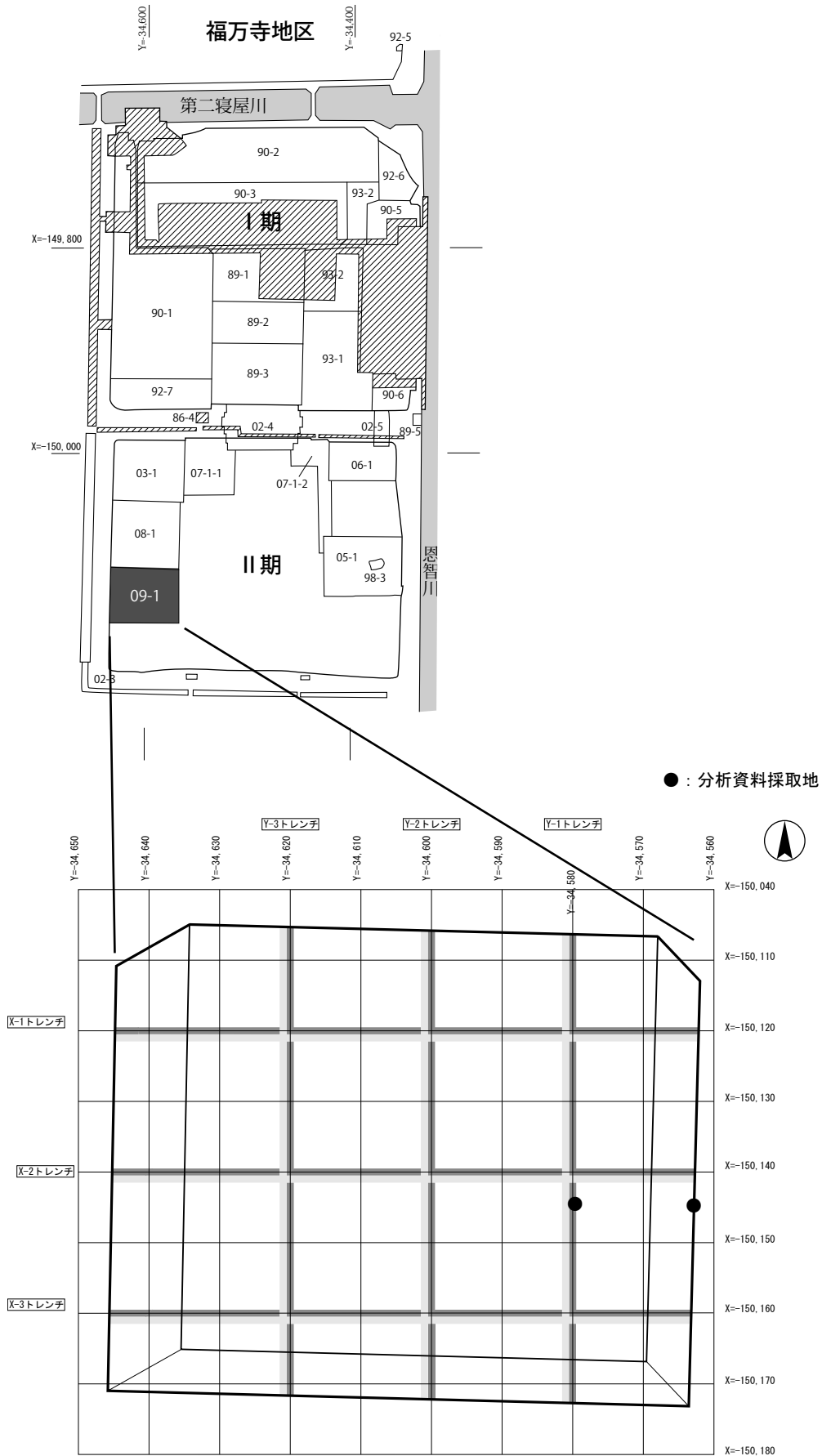


図111 分析資料採取地点

- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本とを対比して行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考に、表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

（3）珪藻分析

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

（1）植物珪酸体分析

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図112、図113に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

表2 池島・福万寺遺跡（09-1）における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）		地点・試料	調査区東壁				Y1トレンチ	
分類群	学名		9-1・2	9-3	9-4	10	12-1	12-2
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>		55	95	100	123	31	22
ヨシ属	<i>Phragmites</i>					14	12	14
キビ族型	Paniceae type		14	7	7			
タケ亜科	Bambusoideae							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		21	37	43	36	12	43
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		7	15				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		7	22	21	7	6	22
未分類等	Others		69	37	93	72	37	87
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin		14	7	29	14	6	7
棒状珪酸体	Rodshaped		34	44	36	29	67	22
未分類等	Others		55	80	71	115	92	94
樹木起源	Arboreal							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>					7		
クスノキ科	Lauraceae				7	7	6	
その他	Others		14	7	21	7	6	22
(海綿骨針)	Sponge spicules		7			7	6	7
植物珪酸体総数	Total		288	351	428	433	275	333
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m ² ・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>		1.61	2.79	2.93	3.61	0.90	0.64
ヨシ属	<i>Phragmites</i>					0.91	0.77	0.91
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		0.10	0.18	0.21	0.17	0.06	0.21
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		0.05	0.11				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.02	0.07	0.06	0.02	0.02	0.07
タケ亜科の比率（%）								
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		58	50	76	89	76	76
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		30	31				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		12	19	24	11	24	24
メダケ率	Medake ratio		58	50	76	89	76	76

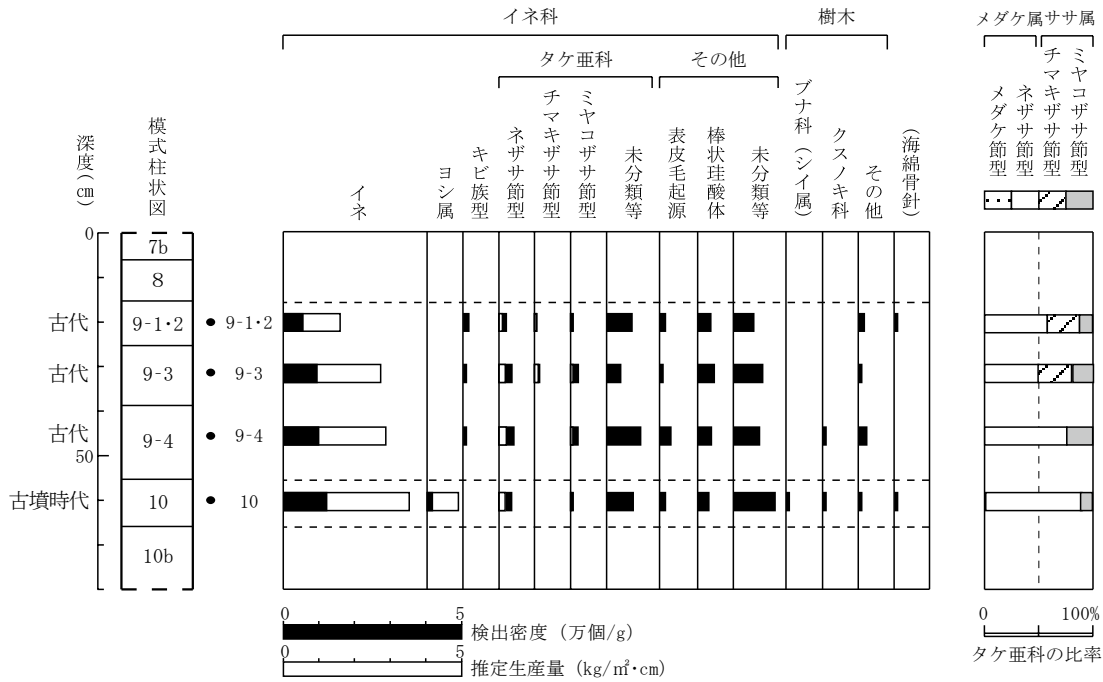


図112 池島・福万寺遺跡 (09-1) 遺跡調査区東壁における植物珪酸体分析結果

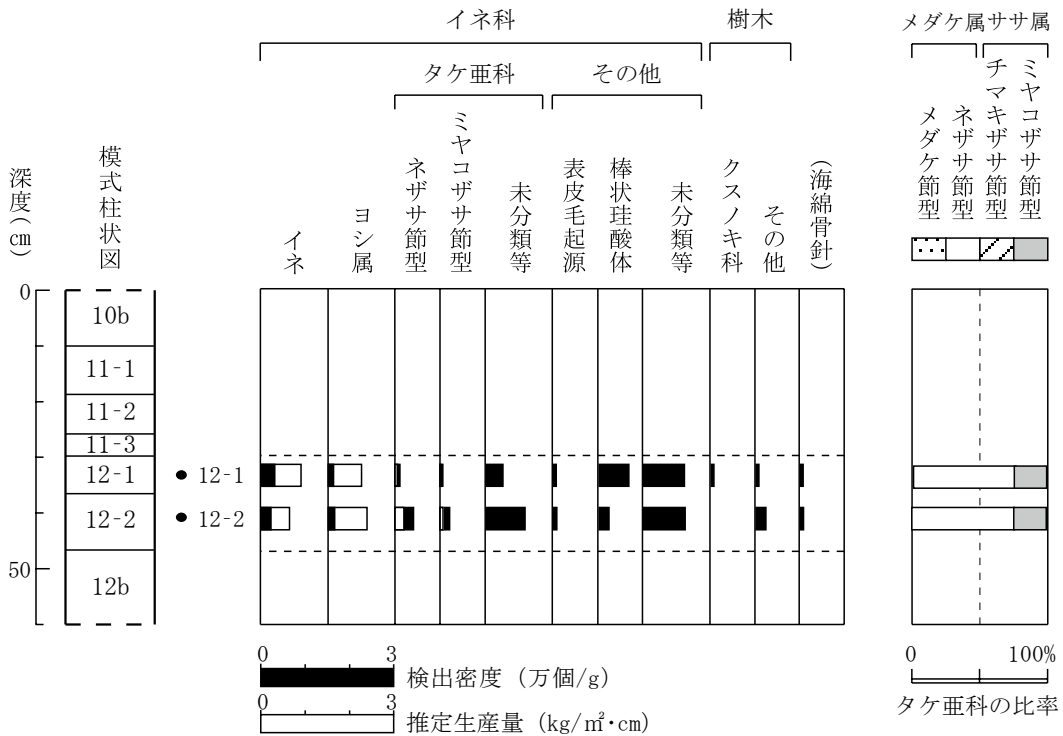


図113 池島・福万寺遺跡 (09-1) : Y1 トレンチ東壁における植物珪酸体分析結果

(2) 花粉分析

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉23、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉21、シダ植物孢子3形態の計50である。これらの学名と和名および粒数を表3に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図114、図115に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、ミズワラビ、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

それぞれの地点において、花粉組成および構成の特徴を記載する。

① 調査区東壁（第10層、第9-4層、第9-3層、第9-1・2層）：古墳時代から古代・図114

第10層（古墳時代）では、草本花粉の占める割合が高く約60%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われる。樹木・草本花粉ではクワ科-イラクサ科が比較的多い。樹木花粉ではシイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属などが出現する。

第9-4層、第9-3層、第9-1・2層（古代）では、花粉組成、構成ともに下位の第10層と類似する。なお、第9-3層と第9-1・2層では草本花粉の占める割合が増加する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が増加し、ヨモギ属、カヤツリグサ科が伴われ、オモダカ属が出現する。第9-3層ではミズワラビがわずかに出現する。

② Y1トレンチ東壁（第12-2層、第12-1層）・図115

第12-2層では、草本花粉の占める割合が高く約55%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優勢で、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ、マツ属複雑管束亜属、クリなどが出現する。ミズワラビがわずかに出現する。

第12-1層では、クワ科-イラクサ科が増加する。草本花粉では、カヤツリグサ科、セリ亜科が増加し、イネ科（イネ属型）が減少する。樹木花粉では、シイ属、クリ、トチノキが増加し、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ、マツ属複雑管束亜属などが減少する。

表3 池島・福万寺遺跡09-1における花粉分析結果

学名	分類群	和名	調査区東壁				Y1トレンチ東壁	
			9-1・2層	9-3層	9-4層	10層	12-1層	12-2層
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>		マキ属						1
<i>Abies</i>		モミ属	1	1	6	2	2	3
<i>Tsuga</i>		ツガ属				1		3
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複維管束亜属		3	5	5	3	13
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	32	16	36	25	8	17
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		1	1			1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	20	15	23	28	10	20
<i>Salix</i>		ヤナギ属	1	1	1		2	1
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ			1			
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1		2		1	
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	1	1	1	1	1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	1		1		1	2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	1	2	1	1	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2	1	10	4	14	9
<i>Castanopsis</i>		シイ属	26	29	30	36	34	26
<i>Fagus</i>		ブナ属			1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	14	13	24	12	19	21
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	25	25	34	32	23	56
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ		7	1	3		5
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		5	2			1
<i>Ilex</i>		モチノキ属			1			
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ			1		7	1
<i>Vitis</i>		ブドウ属	1	1			1	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	14	4	18	31	14	4
Rosaceae		バラ科	2	1	1			1
Leguminosae		マメ科	2	1		4	2	3
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属				1		
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	1					
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	5	9	2		2	2
Gramineae		イネ科	138	197	127	169	79	126
<i>Oryza type</i>		イネ属型	12	18	9	12	7	65
Cyperaceae		カヤツリグサ科	37	45	35	23	51	26
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ	1	1		3		
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属		1		3		2
<i>Allium</i>		ネギ属			1			
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節			1			2
<i>Rumex</i>		ギンギシ属		2		1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	7	4	2	5		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	4	2	1		2	
Cruciferae		アブラナ科	5	13	10	7	3	2
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	6	6	2	1		
Apioidae		セリ亜科	2	2	3	10	14	2
<i>Plantago</i>		オオバコ属				1		
Lactucoideae		タンポポ亜科	2		2			1
Asteroidae		キク亜科			1	2		1
<i>Xanthium</i>		オナモミ属				1		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	25	34	24	38	11	23
Fern spore		シダ植物孢子						
Monolate type spore		単条溝孢子	4	4	2	3	8	8
Celatopteris		ミズワラビ		1				1
Trilate type spore		三条溝孢子	4	1	1	2	3	4
Arboreal pollen		樹木花粉	127	120	183	150	127	181
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	18	6	19	35	16	8
Nonarboreal pollen		草本花粉	245	334	220	277	169	252
Total pollen		花粉総数	390	460	422	462	312	441
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	3.6	6.1	6.0	6.9	2.1	7.2
			×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³	×10 ⁻³
Unknown pollen		未同定花粉	4	12	12	4	15	12
Fern spore		シダ植物孢子	8	6	3	5	11	13
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

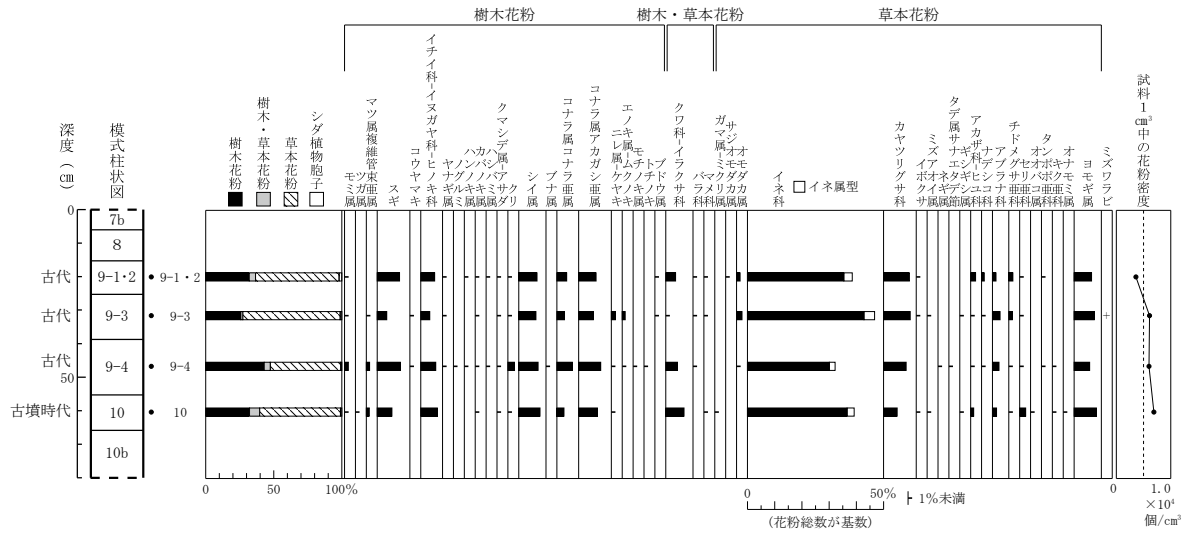


図114 池島・福万寺遺跡 (09-1) : 調査区東壁における花粉分析結果

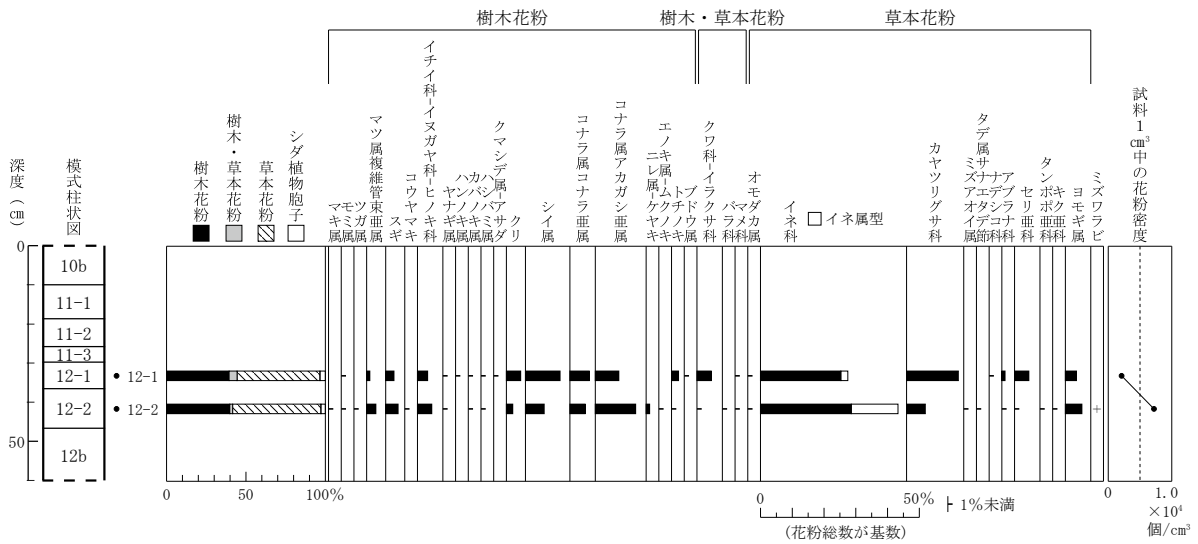


図115 池島・福万寺遺跡 (09-1) : Y1トレンチ東壁における花粉分析結果

(3) 珪藻分析

1) 分類群

出現した珪藻は、中～貧塩性種（汽～淡水生種）2分類群、貧塩性種（淡水生種）72分類群の計74分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものを1個とし、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。表4に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図116、図117に示す。また、主要な分類群については顕微鏡写真を示した。

珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）や渡辺（2005）等の記載による。また、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群のうち汽水生種は小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）による。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔中～貧塩性種〕

Achnanthes brevipes

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Amphora copulata*, *Amphora montana*, *Anomoeoneis sphaerophora*, *Aulacoseira ambigua*, *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica-radiosa*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella turgidula*, *Diploneis elliptica*, *Diploneis spp.*, *Eunotia diodon*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Fragilaria construens*, *Gomphonema augur*, *Gomphonema grovei*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptocephala*, *Navicula cuspidata*, *Navicula elginensis*, *Navicula kotschyi*, *Navicula laevissima*, *Navicula mutica*, *Neidium ampliutum*, *Nitzschia clausii*, *Nitzschia nana*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

2) 珪藻群集の特徴

① 調査区東壁（第10層、第9－4層、第9－3層、第9－1・2層）：古墳時代から古代・図116

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

第10層（古墳時代）では、流水不定性種が約55%、陸生珪藻が約25%、好止水性種が約15%、真・好流水性種が約5%を占めるが、珪藻密度は低い。流水不定性種の*Amphora copulata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia praerupta*、好止水性種の湖沼沼沢湿地付着生環境指標種群の*Aulacoseira ambigua*が優占する。他に陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Pinnularia schroederii*、*Navicula confervacea*がやや多い。

第9－4層（古代）では真・好流水性種が約15%を占め、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Cocconeis placentula*、*Navicula elginensis*、中～下流性河川環境指標種群の*Cymbella turgidula*が増加する。

第9－3層（古代）では珪藻密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。

第9－1・2層（古代）では流水不定性種が約65%を占め、*Amphora copulata*が優占種となり、*Anomoeoneis sphaerophora*、*Navicula laevissima*、*Diploneis spp.*、*Gyrosigma spp.*などが伴われる。

② Y1トレンチ東壁（第12－2層、第12－1層）・図117

いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Navicula contenta*、流水不定性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia praerupta*、好止水性種の*Cyclotella bodanica-radiosa*、真・好流水性種で中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*などがわずかに出現する。

5. 植物珪酸体分析から推定される稲作、農耕、植生および環境

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあ

表4 池島・福万寺遺跡(09-1)
における珪藻分析結果

分類群	調査区東壁				Y1トレンチ東壁	
	9-1・2層	9-3層	9-4層	10層	12-1層	12-2層
貧塩性種 (淡水生種)						
<i>Achnanthes inflata</i>	1					
<i>Achnanthes lanceolata</i>					1	
<i>Amphora copulata</i>	54	4	57	40		
<i>Amphora montana</i>		1	2	1		
<i>Anomooneis sphaerophora</i>	7	2	4	3		
<i>Aulacoseira ambigua</i>	7	1	8	20	1	
<i>Cocconeis placentula</i>	3		12	2		
<i>Cyclotella bodanica-radiosa</i>					1	1
<i>Cymbella naviculiformis</i>			2			
<i>Cymbella silesiaca</i>			6			
<i>Cymbella sinuata</i>		1				
<i>Cymbella tumida</i>	1		2			
<i>Cymbella turgidula</i>		1	8			
<i>Diploneis elliptica</i>			6			
<i>Diploneis</i> spp.	4	1	6	5		
<i>Eunotia diodon</i>				3		1
<i>Eunotia minor</i>	1		4	3		
<i>Eunotia pectinalis</i>	2	1	1	1		
<i>Eunotia praerupta</i>	3	4	3	18	5	1
<i>Fragilaria brevistriata</i>		1		1		
<i>Fragilaria capucina</i>			3			
<i>Fragilaria construens</i>	2		1	1		
<i>Fragilaria pinnata</i>			1			
<i>Frustulia vulgaris</i>			1			
<i>Gomphonema acuminatum</i>			2			
<i>Gomphonema angustum</i>	2					
<i>Gomphonema augur</i>	1		1	1	1	
<i>Gomphonema clevei</i>			1			
<i>Gomphonema gracile</i>	1	1				
<i>Gomphonema grovei</i>						1
<i>Gomphonema minutum</i>			6			
<i>Gomphonema parvulum</i>	3	1	11	4		
<i>Gomphonema truncatum</i>	1		2			
<i>Gyrosigma</i> spp.	4		24	1		
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2		1	1		
<i>Meridion circulare</i>	1					
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>				1		
<i>Navicula americana</i>			3			
<i>Navicula confervacea</i>	3	2	26	5		
<i>Navicula contenta</i>						1
<i>Navicula cryptocephala</i>			4			
<i>Navicula cryptotenella</i>			1			
<i>Navicula cuspidata</i>	3	1	5	2		
<i>Navicula elginensis</i>			10			
<i>Navicula goeppertiana</i>	1					
<i>Navicula kotschyi</i>			2	2		
<i>Navicula laevisissima</i>	7		17	2		
<i>Navicula menisculus</i>			1			
v. <i>upsaliensis</i>						
<i>Navicula mutica</i>	8	4	32	14	9	2
<i>Navicula pupula</i>			1			
<i>Neidium ampliatum</i>	2		3			
<i>Nitzschia brevissima</i>	2			1		
<i>Nitzschia clausii</i>					1	
<i>Nitzschia debilis</i>			1			
<i>Nitzschia nana</i>	1		1	4		
<i>Nitzschia palea</i>			1	2		
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>			1			
<i>Pinnularia appendiculata</i>			1	3		
<i>Pinnularia borealis</i>	1	1				
<i>Pinnularia gibba</i>			2			
<i>Pinnularia karelica</i>				1		
<i>Pinnularia microstauron</i>			4			
<i>Pinnularia obscura</i>			1			
<i>Pinnularia schroederii</i>	6		16	7		
<i>Pinnularia subcapitata</i>			4	2		
<i>Pinnularia viridis</i>			1			
<i>Rhopalodia gibba</i>			1			
<i>Stauroneis acuta</i>			1			
<i>Stauroneis anceps</i>	1		1			
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	3	1	2			
<i>Synedra ulna</i>	2		2			
<i>Tabellaria fenestrata</i>			1		1	
- <i>flocculosa</i>						
中-貧塩性種 (汽-淡水生種)						
<i>Achnanthes brevipes</i>	3	1	1			
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1					
合計	144	29	322	151	20	7
未同定	1	1	12	7	1	0
破片	477	155	495	775	30	24
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	2.9	6.0	3.0	3.2	4.2	1.4
	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$
完形殻保存率 (%)	23.3	-	40.3	16.9	-	-

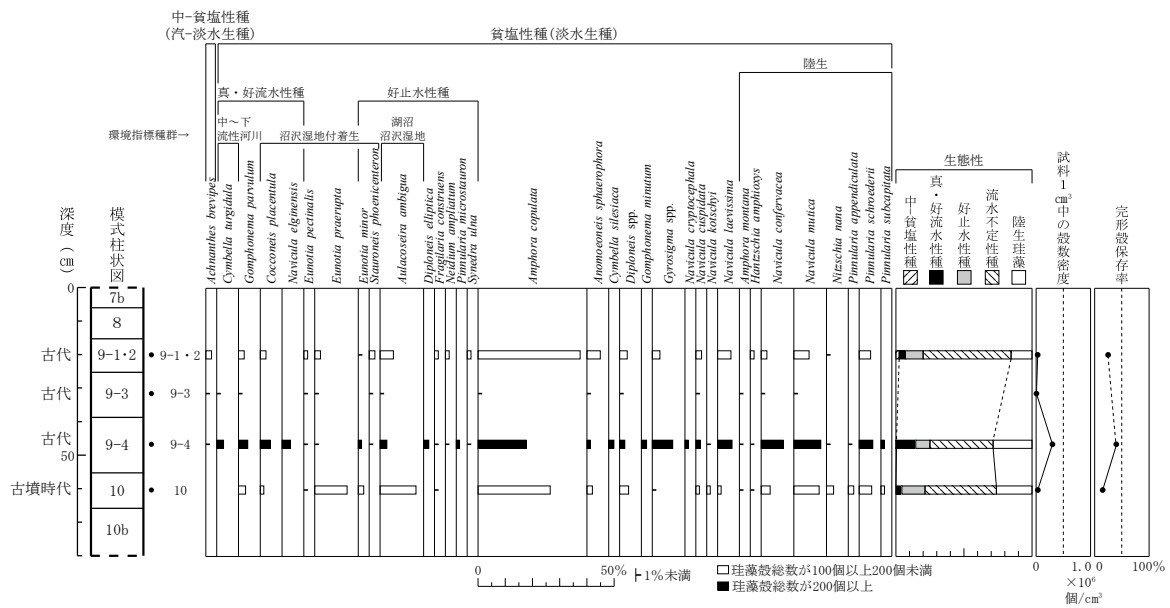


図116 池島・福万寺遺跡 (09-1) : 調査区東壁における主要珪藻分析結果

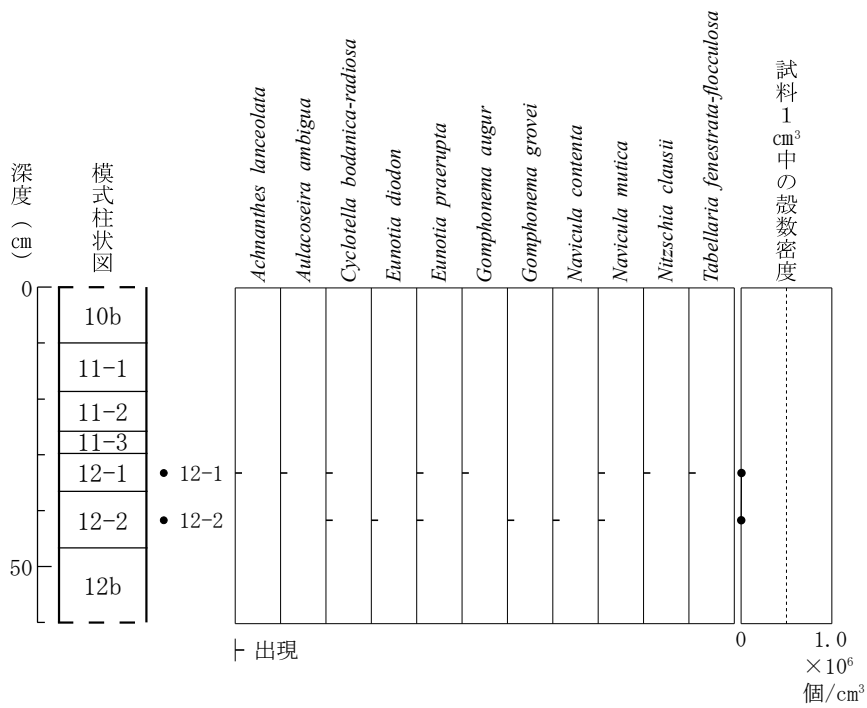


図117 池島・福万寺遺跡 (09-1) : Y1トレンチ東壁における珪藻分析結果

たり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、5,000個は一応の目安として、ここでは植物珪酸体の産出状況や遺構の状態をふまえて検討する。

1) 調査区東壁

第9-1・2層から第10層までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、第9-3層、第9-4層、第10層では密度がそれぞれ9,500個/g、10,000個/g、12,300個/gとかなり高い値であり、第9-1・2層でも5,500個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) Y1トレンチ東壁

第12-1層と第12-2層について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、第12-1層では密度が3,100個/gと比較的高い値であるが、第12-2層では2,200個/gとやや低い密度である。したがって、これらの層では調査地もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植生と環境

下位の第12-2層、第12-1層、第10層では、上記の分類群以外にヨシ属、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、およびクスノキ科などの樹木起源が検出されたが、いずれも少量である。第9-4層より上位では、キビ族型やチマキザサ節型が出現し、ヨシ属は見られなくなっている。おもな分類群の推定生産量によると、第10層より上位ではイネが優勢であり、その他の分類群は少量である。

以上の結果から、下位の第12-2層、第12-1層、第10層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(ネザサ節)やササ属(ミヤコザサ節)などの竹笹類が生育し、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が分布していたと考えられる。第9-4層より上位では、管理の行き届いた集約的な稲作が行われており、イネ科の野草や雑草はあまり見られなかったと推定される。

6. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

1) 調査区東壁

第10層(古墳時代)の時期は、イネ科とイネ属型の出現から、堆積地の周辺に水田が分布していたと推定される。堆積地や水田の周囲には、ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科-イラクサ科などの多様な環境に生育する草本が繁茂していたとみなされる。近隣にはシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林、スギ林、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹林、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹が分布していたと考えられ

る。

第9-4層、第9-3層、第9-1・2層（古代）の時期には、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズワラビなどの水田雑草を伴ってイネ科（イネ属型を含む）が増加し、水田が拡大したとみなされる。

2) Y1トレンチ東壁

第12-2層の時期は、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ミズアオイ属、オモダカ属、ミズワラビなどの水田雑草が伴われることから、堆積地周辺には水田が分布していたと考えられる。近隣にはコナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とし、シイ属、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亜属などの針葉樹を構成要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。

第12-1層の時期には、イネ属型が減少し、カヤツリグサ科、セリ亜科が増加することから水田稲作を行う一方、シイ属の森林がやや拡大した。

7. 珪藻分析から推定される堆積環境

調査区東壁の第10層、第9-4層、第9-3層、第9-1・2層はいずれも珪藻密度が低く、Y1トレンチ東壁の第12-2層と第12-1層は珪藻がほとんど検出されない。調査区東壁の第10層、第9-4層、第9-3層、第9-1・2層では、流水不定性種の*Amphora copulata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia praerupta*、好止水性種の湖沼沼沢湿地付着生環境指標種群の*Aulacoseira ambigua*などが多く、優占する。このほかにも陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Pinnularia schroederii*、*Navicula confervacea*もやや多い。優占する*Amphora copulata*は、不安定な環境下である水田に多い珪藻であり、*Amphora copulata*、*Eunotia praerupta*など他の珪藻の生育特性からは水草の生育する沼沢湿地の環境が示唆される。このことから、調査地は水田の環境が想定される。なお、珪藻密度が低いのも水田の特徴であり、各層準とも水田であった可能性が高いと考えられる。

8. まとめ

池島・福万寺遺跡09-1調査区において、植物珪酸体分析、花粉分析および珪藻分析をあわせて行い、農耕、植生および堆積環境について検討を行った。その結果、調査区東壁の第9-1・2層から第10層までの各層ではイネの植物珪酸体が多量に検出され、また、水田雑草を伴ってイネ属型花粉も認められた。さらに、珪藻分析においても水田の環境が示唆されたことなどから、これら各層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Y1トレンチ東壁でも第12-1層でイネの植物珪酸体が比較的多量に検出され、第12-2層ではイネ属型の花粉が多産することから、これらの層でも調査地もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。なお、第9-4層より上位では、管理の行き届いた集約的な稲作が行われており、イネ科の野草や雑草はあまり見られなかったと推定される。

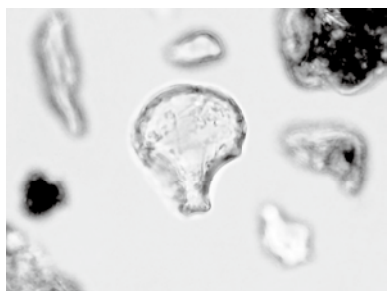
周辺の植生と環境は、各層とも概ね類似しており、水田の近辺にはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の草本やメダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育していた。水田にはオモダカ属、ミズワラビなどの水田雑草も見られた。下位の第12-2層、第12-1層、第10層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられた。周辺地域にはシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林、スギ林、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹林、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹が分布していた。

文献

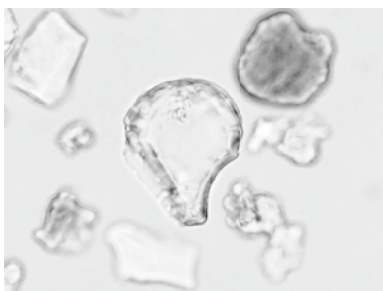
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 中村純（1967）花粉分析. 古今書院, p.82-102.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- 渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 内田老鶴圃, pp.666.
- Asai,K.&Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
- Hustedt,F.（1937—1938）Systematische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131—506.
- K. Krammer・H.Lange-Bertalot（1986-1991）Bacillariophyceae, 1-4.
- Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh—water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

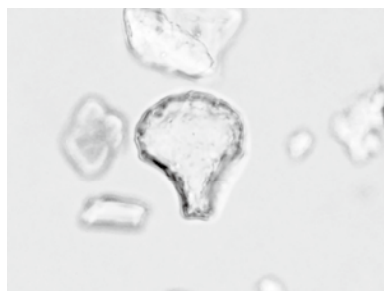
写真1 池島・福万寺遺跡Ⅱ（その11）の植物珪酸体（プラントオパール）



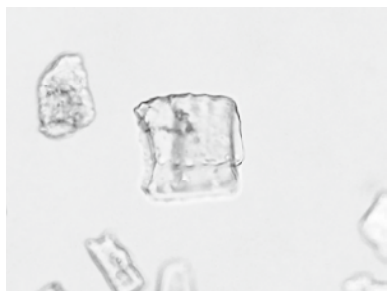
イネ
調査区東壁 9-1.2



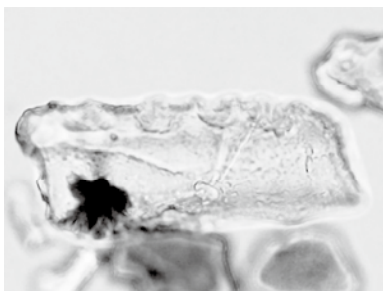
イネ
調査区東壁 10



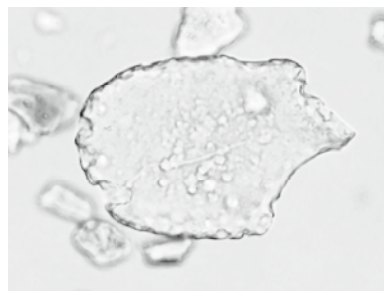
イネ
調査区東壁 10



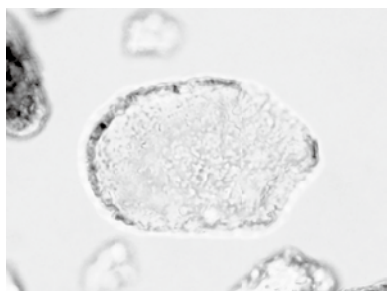
イネ（側面）
Y1トレンチ東壁 12-1



キビ族型
調査区東壁 9-1.2



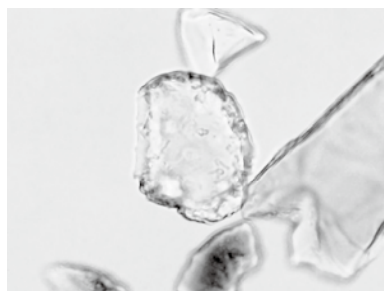
ヨシ属
調査区東壁 10



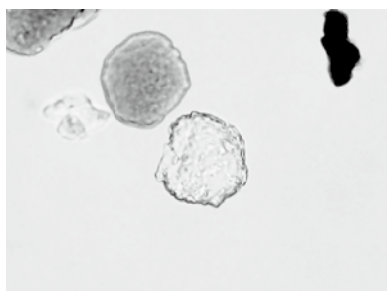
ヨシ属
Y1トレンチ東壁 12-2



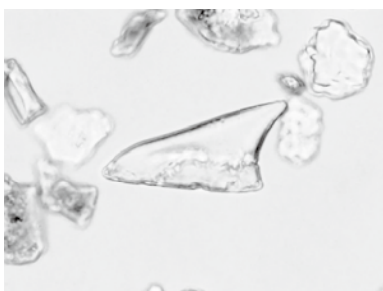
ネザサ節型
調査区東壁 9-1.2



チマキザサ節型
調査区東壁 9-3



ミヤコザサ節型
調査区東壁 9-3



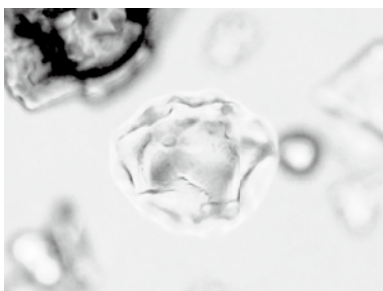
表皮毛起源
調査区東壁 10



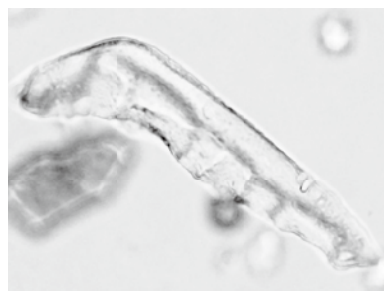
棒状珪酸体
調査区東壁 10



海綿骨針
調査区東壁 9-1.2



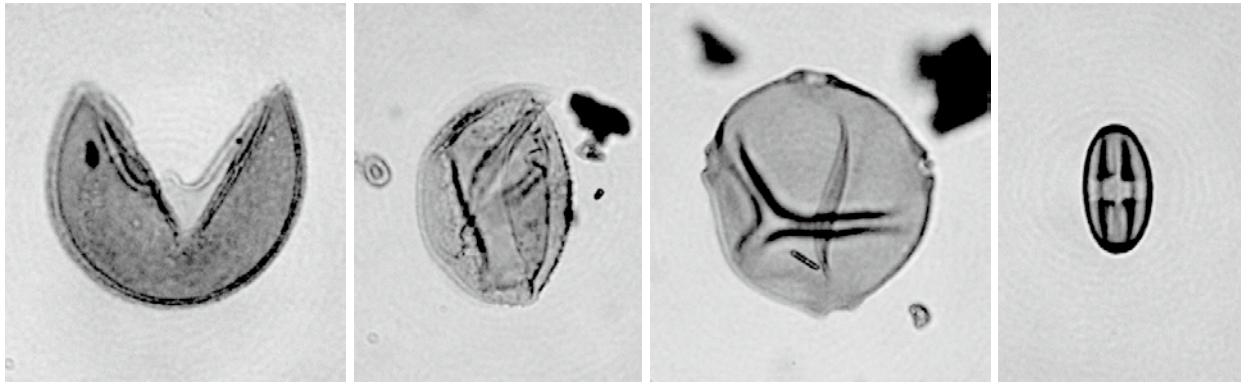
ブナ科（シイ属）
調査区東壁 10



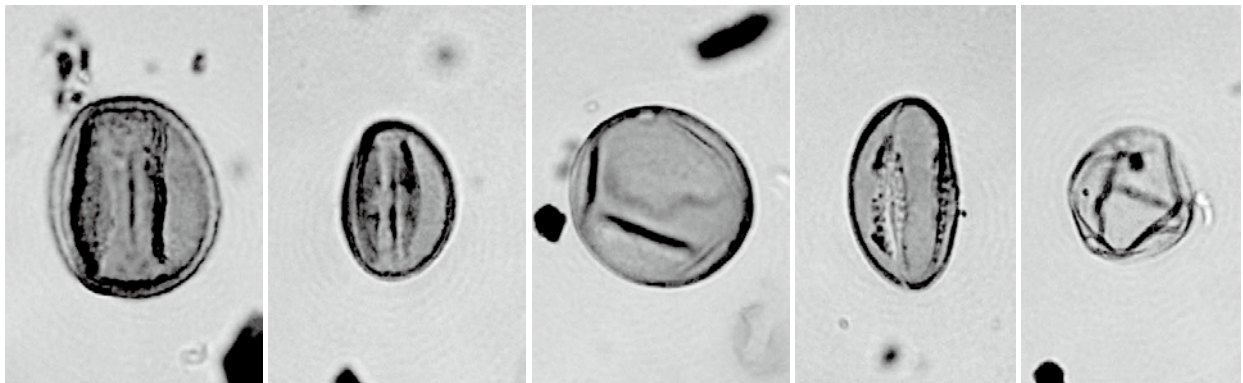
クスノキ科
Y1トレンチ東壁 12

— 50 μ m

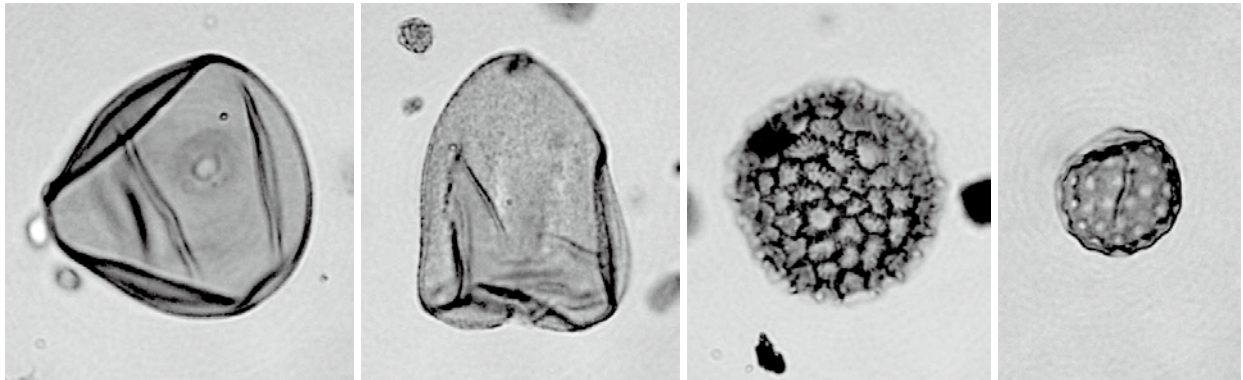
写真2 池島・福万寺遺跡II（その11）の花粉・孢子



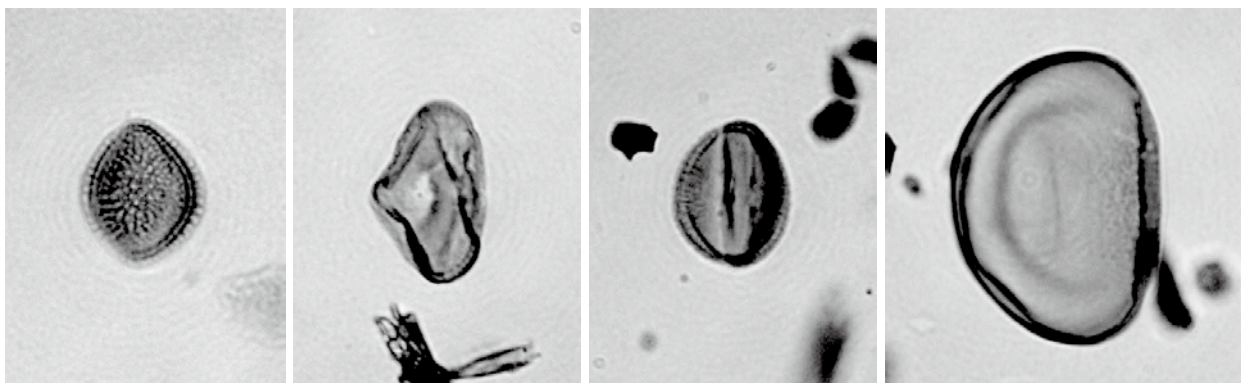
1 スギ 2 イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科 3 クマシデ属-アサダ 4 シイ属



5 コナラ属コナラ亜属 6 コナラ属アカガシ亜属 7 エノキ属-ムクノキ 8 トチノキ 9 クワ科-イラクサ科



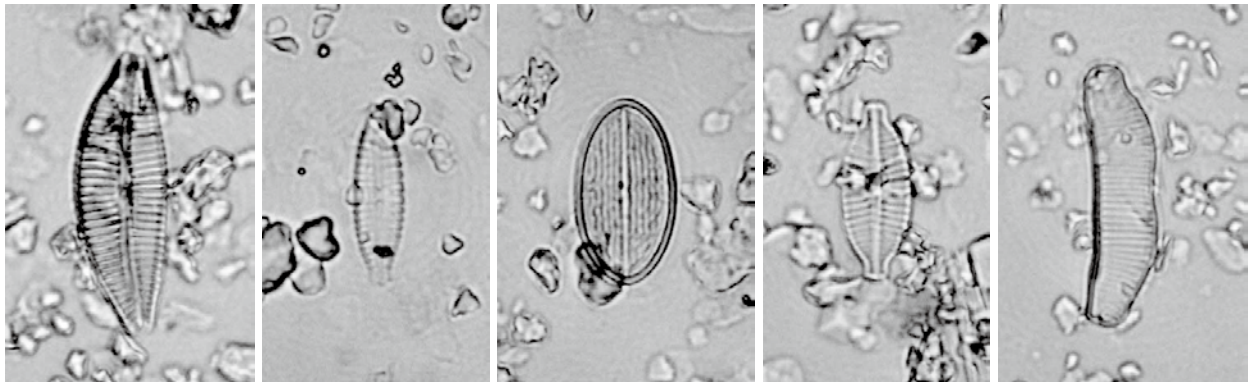
10 イネ属型 11 カヤツリグサ科 12 タデ属サナエタデ節 13 アカザ科-ヒユ科



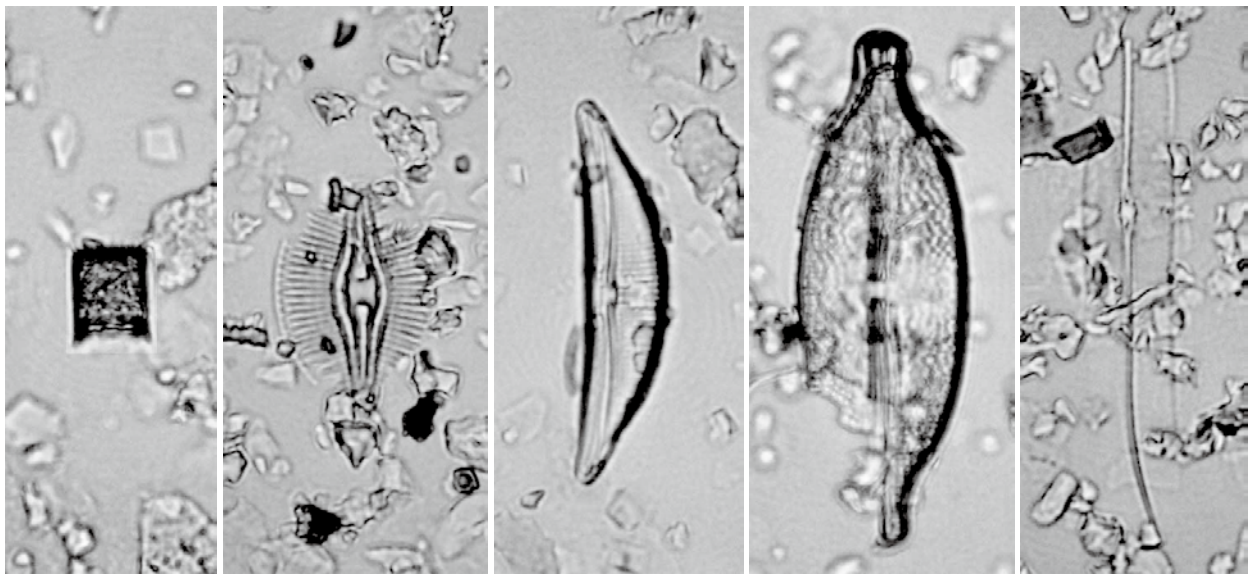
14 アブラナ科 15 チドメグサ亜科 16 ヨモギ属 17 シダ植物単条溝孢子

— 10 μm

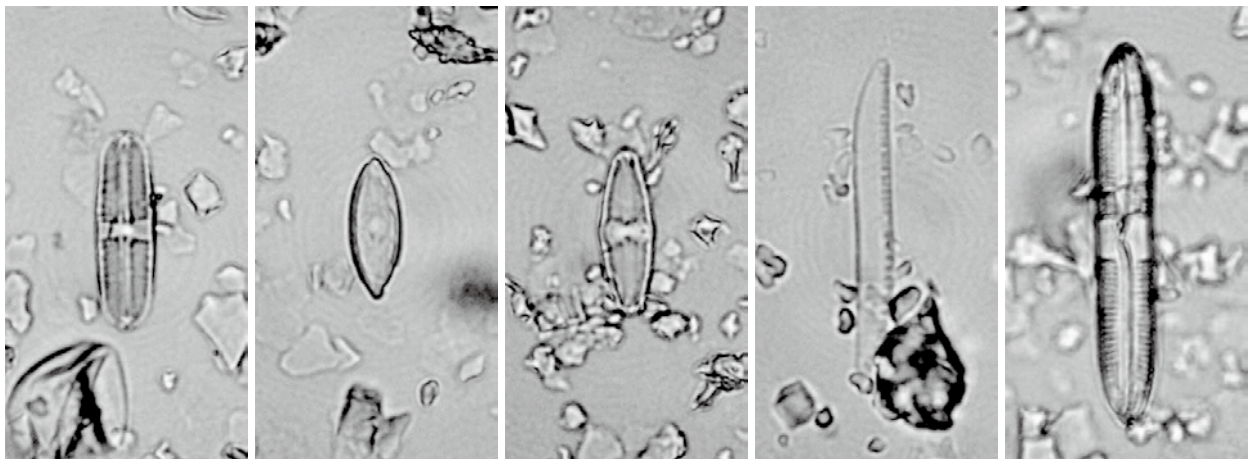
写真3 池島・福万寺遺跡Ⅱ（その11）の珪藻



1 *Cymbella turgidula* 2 *Gomphonema parvulum* 3 *Cocconeis placentula* 4 *Navicula elginensis* 5 *Eunotia praerupta*



6 *Aulacoseira ambigua* 7 *Diploneis elliptica* 8 *Amphora copulata* 9 *Anomoeoneis sphaerophora* 10 *Gyrosigma* spp.



11 *Navicula laevis* 12 *Navicula confervacea* 13 *Navicula mutica* 14 *Nitzschia nana* 15 *Pinnularia schroederii*

— 10 μm

第1節 池島・福万寺遺跡から出土した動物遺存体

山崎 健（奈良文化財研究所）

大阪府池島・福万寺遺跡（09-1調査区）において、弥生時代から中世にかけての動物遺存体が合計31点出土し、哺乳類ではウマ、ウシ、貝類ではオオタニシを同定した。分析資料の保存状態は全般的に良好ではなく、ビビナイトが析出した資料や歯のみが残存する資料も認められた。一部の骨資料は、大阪府文化財センターにおいて、10%のバインダー液で表面の汚れを取り除き、乾いた後に再度20%のバインダー液を塗布している。また、計測可能な資料については、Driesch（1976）に従い、デジタルノギスを用いて0.01mm単位まで計測をおこなった。ただし、歯の計測は、セメント質がすべて脱落していたためにエナメル質の部分を計測した。

1. 分類群の記載

ウマ *Equus caballus*

古墳時代から中世後半にかけて21点が出土した。そのうち20点が遊離した歯のみであった。とくに古代前半の323流路からは、上顎歯13点がまとまって出土しており、残存部位から本来は1個体分の頭蓋骨が存在していたと考えられる。ほかに中手骨が1点出土したが、保存状態が悪いため解体痕など人為的痕跡の有無は確認できなかった。

ウシ *Bos Taurus*

古代前半の323流路から左右の下顎骨が1点ずつ、中手骨1点の計3点が出土した。右側の下顎骨（No.966）の全臼歯列長（Length of the cheektooth row）が158.15mm、前臼歯列長（Length of the premolar row）が58.31mm、後臼歯列長（Length of the molar row）が99.12mm、左側の下顎骨（No.1283）の後臼歯列長は98.70mmであった。

その他の哺乳類

ウマあるいはウシの歯の破片が1点、種不明の骨片が2点出土した。

オオタニシ *Cipangopaludina japonica*

弥生時代中期後半の第12層から1点が出土した。殻の周縁が角張っていることからオオタニシと同定した。

その他の貝類

323流路（古代前半）から巻貝類、第3-3・4層（中世後半）から二枚貝類と思われる資料が出土したが、保存状態が悪いため種同定には至らなかった。

2. 考察

弥生時代では第12層（弥生時代中期後半）からオオタニシが出土した。オオタニシは流れの緩やかな河川や用水路、ため池などの水量と水質の安定した場所に生息する（増田・内山2008）。第12層では自然科学分析の成果から調査地もしくはその近傍で稲作が行われたことが推測されており、このオオタニシも水田や水路を含む淡水域に生息していたものと考えられる。池島・福万寺遺跡では、これまでも02-4調査区の第14~14b層や04-2調査区の339落ち込みから、イシガイやオオタニシなどの淡水性貝類が出土している（池田2006、乾2008）。

また、古代前半の323流路からウシやウマの骨がまとまって出土した。これまでに池島・福万寺遺跡では、古代から中世の溝や水路からウシやウマを中心とした動物遺存体が出土している（松井1995、丸山・松井2006、安部2008）。とくに90-3調査区では坪境水路内からは、ウシの頭蓋骨や下顎骨を埋納した獣骨埋納

土坑が2基検出された(松井1995)。08-1調査区において323流路の北側の延長部分が検出されており、その前後の層を含めて祭祀に関連する遺構や遺物が出土し、詳細な報告がないものの動物骨も多数出土している(駒井・岡本2011)。今回の調査区でも土器の様相から323流路で祭祀がおこなわれた可能性が考えられるため、出土したウシの下顎骨やウマの頭蓋骨(上顎歯)も祭祀に関係した可能性が示唆される。

引用文献

安部みき子2008「池島・福万寺遺跡出土の動物遺存体の分析」『池島・福万寺遺跡6(福万寺Ⅱ期地区05-1調査区)』134-135頁
 池田研2006「02-4調査区出土の貝類について」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要34-02-4・5調査区の概要一』、202頁
 乾哲也2008「池島・福万寺遺跡04-2調査区自然科学分析」『池島・福万寺遺跡5(福万寺Ⅱ期地区04-2調査区)』、129-154頁
 駒井正明・岡本圭司2011「まとめ」『池島・福万寺遺跡12(福万寺Ⅱ期地区08-1調査区)』118-120頁
 増田修・内山りゆう2008『日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類』ピーシーズ
 松井章1995「池島・福万寺遺跡出土の動物遺存体」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XI-90-3調査区の概要一』、99-104頁
 丸山真史・松井章2006「池島・福万寺遺跡(02-4・5調査区)出土の動物遺存体」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要34-02-4・5調査区の概要一』、203-204頁

Driesch, A. 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1.

表5 同定動物遺存体資料一覧

登録番号	地区割	遺構名	検出面	所属層位	時代	種名	部位	部分	左右	計測値(mm)
1590	7B-1d			第12層	弥生中期後葉	オオタニシ				
1247	6B-10e	342流路	第10b面	第10層	古墳時代	ウマ	遊離歯	上顎M3	右	
1588	7B-1g	342流路	第10b面	第10層	古墳時代	哺乳類種不明	骨(部位不明)		不明	
1531	6B-9d			第9-4~10層	古墳~古代前半	ウマ	遊離歯	下顎臼歯(P3~M2)	左	L: 26.18, B: 15.25
896	6B-9b	323流路	第9-3面	第9-2b層	古代前半	ウシ	中手骨	骨幹部	右	
952	6B-9b	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	貝類種不明	二枚貝			
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I1	左	
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I2	左	
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎P3	左	B: 24.90
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎P4	左	L: 22.23, B: 24.31
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M1	左	L: 26.05, B: 25.94
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M2	左	L: 25.78, B: 25.22
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M3	左	
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I1	右	
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I2	右	
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I3	右	
955	6B-9d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M1	右	
955	6B-9d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M2	右	L: 26.20, B: 26.39
955	6B-9d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎M3	右	L: 26.10, B: 20.90
962	6B-10d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯			
1211	6B-9d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	不明	骨片?			
1283	6B-9d	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウシ	下顎骨		左	P3(L: 22.59, B: 11.36), M1(L: 26.59, B: 15.95), M2(L: 31.39, B: 14.98), M3(L: 37.67, B: 13.30)
966	6B-9c	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウシ	下顎骨		右	P3(L: 21.53, B: 10.62), P4(L: 23.75, B: 14.72) M1(L: 26.59, B: 15.64), M2(L: 31.82, B: 14.41), M3(L: 38.71, B: 13.55)
966	6B-9c	323流路	第9-4面	第9-3b層	古代前半	ウマ	遊離歯	上顎I3	右	
1011	7B-4d			第9-4層	古代前半	哺乳類種不明	骨(部位不明)		不明	
1112	6B-10f			第8~9-4層	古代後半	ウシ・ウマ	歯破片		不明	
729	7B-1c			第8層	古代後半	ウマ	遊離歯	下顎臼歯(P3~M2)	左	L: 26.84, B: 14.67
668	6B-9d			第8層	古代後半	ウマ	歯破片			
124	6B-7d			第3-2層	中世後半	ウマ	遊離歯	下顎臼歯(P3~M2)	左	L: 24.56, B: 14.83
190	6B-8d			第3-3-4層	中世後半	貝類?				
319	6B-8g			第5層	中世後半	ウマ	中手骨	遠位端	左	

第3節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtavidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1. はじめに

東大阪市と八尾市にまたがって所在する池島・福万寺遺跡では、現代から弥生時代前期にかけての時期の水田遺構が豊富にあり、度重なる洪水災害と闘いながら耕作を続けた経緯と、それに伴う土地利用の変化や水田景観の変遷が復元されている。古墳時代には微高地上に展開する集落居住域の変遷も明らかになっている。他、弥生時代前期の居住域も部分的に検出されている。また弥生前期から縄文時代晩期の墓も検出され、採集から農耕へと移行する時期の様子も垣間見ることができる。

ここでは、調査区09-1の第13層および第10a層より出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表6のとおりである。PLD-17407は、炭化材で、第13層の土壌より検出された。PLD-17408は、第10b面で検出された342流路の埋土より出土した木製品(登録番号1219)で、埋土は第10a層に対応する。両者共に、最外年輪は確認されていない。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表6 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17407	調査区: 09-1 グリッド: G6-15-7B-3c 層位: 13層 (3黒)	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 不明 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-17408	調査区: 09-1 グリッド: G6-15-6B-10d 遺構: 10b面342流路 層位: 埋土 (10a層に対応) 登録番号1219	試料の種類: 生材 (木製品) 試料の性状: 不明 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

3. 結果

表7に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図118に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下2σ暦年代範囲を基に述べる。土器編年との対応関係については、藤尾（2009）、小林（2009）を参照した。

13層の炭化材（PLD-17407）は、1σ暦年代範囲（確率68.2%）で512-414 cal BC（68.2%）、2σ暦年代範囲（95.4%）で727-693 cal BC（8.9%）および542-406 cal BC（86.5%）となり、2σ暦年代範囲に着目すると、紀元前8世紀後半～同5世紀末の範囲を示した。小林（2009）に照らすと縄文時代晩期末～弥生時代前期にあたるが、1σ暦年代範囲まで絞り込むと紀元前6世紀後半～同5世紀後半となり、弥生時代前期である可能性が高い。この時期（¹⁴C年代で2400年前後）は、「2400年問題」と呼ばれる暦年較正曲線が平坦な時期にあたり、暦年代範囲が絞り込み難い。

342流路の木製品（PLD-17408）は、1σ暦年代範囲で263-278 cal AD（14.4%）および329-385 cal AD（53.8%）、2σ暦年代範囲で257-302 cal AD（28.4%）および316-400 cal AD（67.0%）となり、3世紀中頃～4世紀末の範囲を示した。これはおおよそ古墳時代前期にあたる。

ただし木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の部分を測定すると最外部からの年輪分に応じて古い年代が得られる（古木効果）。今回測定した試料は、両者とも最外年輪の確認されていない試料であるため、古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

表7 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-17407	-30.32±0.19	2420±20	2420±20	512BC (68.2%) 414BC	727BC (8.9%) 693BC 542BC (86.5%) 406BC
PLD-17408	-27.25±0.17	1707±19	1705±20	263AD (14.4%) 278AD 329AD (53.8%) 385AD	257AD (28.4%) 302AD 316AD (67.0%) 400AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣。

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82，雄山閣。

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

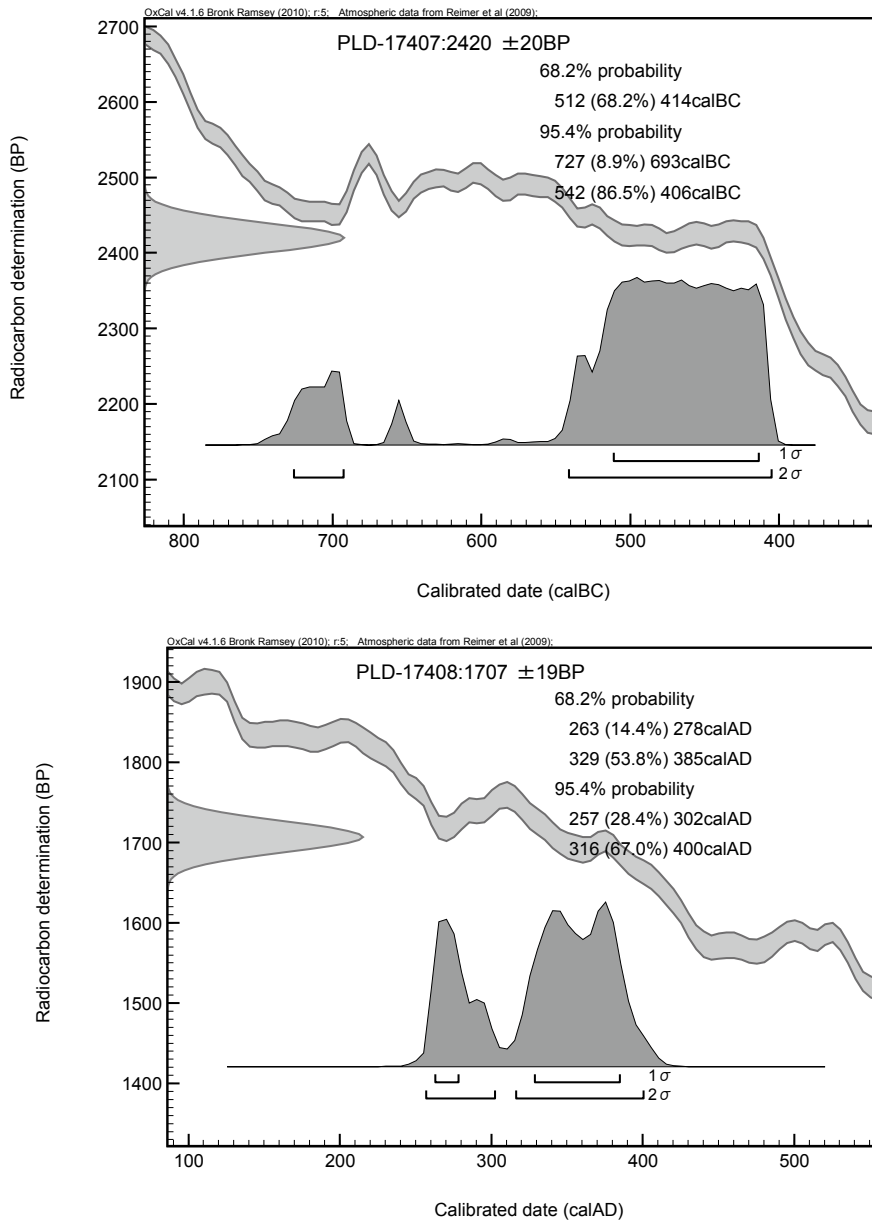


図118 暦年較正結果

第1章 まとめ

当調査区は、耕作活動が始まる以前（第14-1・第14-2面）には若干の起伏のある、湿地であったと考えられる。その後、断続的に洪水に襲われ、分厚い洪水砂が堆積するが、その間には人が活動したり、根もとの直径が20~30センチ程度のヤナギ属の樹木やミズキが枝を伸ばした時期も存在したことがわかった。

弥生時代前期後半（第13面）には調査区西側に流路が存在し、調査区北半に水田が営まれる。この時期の水田面では規模の大きい畦畔しか見られず、また一つの区画が大きい。この傾向は福万寺地区の、同時期の水田の状況と共通している。さらに調査区の南東にも水田域が広がる可能性があることがわかった。調査区南半は、大部分が洪水の影響を受けやすい不安定な場所だったとみられ、東寄りの部分以外は、水田として開発された可能性が低いと考えられる。畦畔内や耕作土中からは、甕や壺等の弥生土器が多数出土した。

弥生時代中期（第12面）では、福万寺地区のこれまでの状況と同じく、人の活動の痕跡を遺構から確認することはできなかった。ただ自然科学分析を行った結果、第4章第1節で述べられているように、近傍で稲作が行われていたことがわかった。

弥生時代後期（第11-2面）には、基幹となる水路が掘削され、そこに支線の水路がつながり、灌漑施設が充実する。その結果、水田面積が増大したとみられ、当調査区でも微高地を除いてほぼ全面に、小区画水田を検出した。水路の両肩は堤防状の高まりを呈し、水田畦畔が取り付く。また数箇所、堤防状の高まりが部分的に途切れるのを認めたが、それらは水口と考えられる。今回の調査で、福万寺地区で検出されてきた弥生後期の水田域が、さらに拡大することが明らかとなった。これらの遺構は、弥生時代後期末葉から古墳時代初頭に埋没するとみられる。

古墳時代（第10面形成段階）には、大きく屈曲する流路が存在した。それを除くと、遺構は希薄だったが、流路埋土からは多数の木製品、土器が出土している。土器があまり摩滅していないことから、近辺に集落が存在した可能性が指摘できる。今回の調査では、古墳時代の遺物包含層を掘削中に、埴輪の破片を検出した。これまでの調査においても円筒埴輪の細片が検出されることはあったが、本例に類似するものは検出されていない。これは埴輪の口縁部とみられ、口縁端部を横方向に短く水平に折り返し、一見箍を施すようにも見えるのに加え、口縁から8cm程度下がったところに貼り付けた箍の部分から径がすぼまるという特徴的な形態を呈する。しかし残存率が低いため全体の形状をとらえられなかったことから、器種を特定することが出来なかった。いずれにせよ調査地周辺に、認知されていない古墳が存在する可能性が考えられる。なお古墳時代の間に、前述の流路は埋没してしまう。

古代前半（第9-1~4面）には、調査区西部にほぼ南北方向を指向する流路が存在する。これは時期を経るにつれて直線的になっていく。もとはゆるやかに蛇行する流路を直線化する作業は、飛鳥から奈良時代に、初期段階の条里型地割の施工に伴って段階的に行われたとみられる。08-1調査区で検出されたこの流路の北側延長部分の状況と併せてみると、当初は南北方向を指向しつつ、ゆるやかに蛇行していた流路のうち、ほぼ南北方向を指向する部分（09-1調査区検出部分）に手を加えて、直線的な形状に近づけたことがわかる。そして第9-2面の段階、つまり8世紀前葉から中頃にかけての時期になると、岸に杭を密に打ち込み、坪境においては流路下流をほぼ直角に西側へ屈曲させ、より条里型地割に適応する形態へと改変したことがうかがえる。流路の埋土からは、多数の土器の他、祭祀と関係する可能性のある動物骨や歯が複数出土した。検出面が全体に削平を受けているため、この面に伴う流路以外の遺構は顕著ではないが、おそらくこの時期に水田耕作が積極的に行われたであろうことがうかがえた。

そこで第9-1層から第10層にかけては層ごとに土壌サンプルをとり、植物珪酸体分析・花粉分析・珪藻分析による古環境復元を試みた他、第9-2面・第9-3面・第9-4面で検出された流路から出土した動物遺存体の同定を依頼した（第4章）。

その結果、古墳時代から古代前半にかけての時期に、水田耕作をとりまく状況に大きな変化が生じたことが、自然科学分析からも跡付けられた。具体的には古代に至ると、古墳時代に比べて水田面積が増大するとともに、集約的な稲作農耕へ移行した可能性が高いことが指摘された。おそらくそれは、調査地一帯において初期の条里の施工に伴う、流路の段階的な改変と軌を一にする現象ととらえられる。

なお当調査区北側に隣接する08-1調査区でも、同様の自然科学分析が行われたが、その際は古代の層とは対照的に、古墳時代の層で水田の存在を明瞭に示す分析結果は得られていない。このことから古墳時代の水田造成は、自然地形に応じた部分的なものだったこと、それが古代にいたると拡大したことが明確に読み取れる。

流路は平安時代前半を上限とする時期に埋没し、その後は大規模な畦畔となった。そして平安時代半ばには一帯が条里型地割にのっとった水田域となる。ただここで注意しておかなければならないのは、第2章でも若干ふれたように、古代前半から古代後半にかけて、条里型地割が直線的に継承されたわけではないと考えられる点である。08-1調査区で検出された古代前半の条里型地割の施工に伴うとみられる流路の変更をみると、東西方向へと振り変えられる流路の位置は、古代後半以降の条里型地割の地境の位置と合致するが、南北方向の流路の位置に関してみると古代後半とは位置が異なる。したがって、両者の間には何らかの画期が含まれる可能性が高い。今回の調査では、10世紀前半代の遺物が極端に少ないことから、時期的に見てその時期に何らかの変化が生じた可能性があるのではないかと考える。

なお埋土から出土した土器や、動物遺存体から、古代前半に水田造成が大きく変換する時期に、基幹水路の役割を果たした流路においてミニチュア土器や牛・馬を用いた祭祀が、盛んに行われたことが推測された。条里型地割に基づく水田造成や水利施設の施工と、集約農耕の運営にあたっては、農耕にかかわる集団の規模やあり様にも大きな変化が伴ったと考えられる。前述した祭祀の痕跡は、そのような社会の転換期において、人々が新しい集団関係の構築や維持、自然に対する不安の払しょくなどを目的に行ったものかもしれない。

一方、流路の護岸のために打ち込まれたとみられる杭の樹種は、花粉分析結果から推定される水田周辺の森林の植生に含まれるものだった。おそらく耕作に関わった人たちが、近辺の森林で杭に適した材を採取し、それを加工して杭として用いたことがうかがえる。

古代後葉（第8面）に至ると調査区のほぼ全面にわたって畦畔と水口が検出され、当時の水田の様相を具体的に把握することができた。古代後半の水田面が洪水堆積層で覆われた後に造成された、古代末から中世初頭の時期の島畠が、当調査地における最初期の島畠と位置付けられる。調査地一帯は洪水による土砂の供給が多かったことから、その後も島畠が造られ続けた。その中にはもとの島畠を拡張し、長期間にわたって継続的に使用されたものもある。

中世から近世にかけての遺構面では、島畠とそれに連続する畦畔を検出する機会が多かったが、中世後半の遺構面では、部分的に畠の畝溝を検出できた場合や、島畠の周囲の水田地割を把握することができる場合があった。

近世初頭の大規模な洪水により、調査区とその周辺の水田や島畠は一旦、ほぼ埋没してしまう。したがって近世（第2-1～第2-3面）の島畠は、中世の島畠を踏襲したものではない。ただその後で作られた島畠や、洪水後の水田復旧のために掘削されたとみられる長大な土坑からみて、近世以降も南北方向の地割は踏襲されたことがわかる。またそれ以前の時期は、洪水堆積層を積み上げて造られた島畠が主体だったのに対し、近世

以降は周囲の水田面を掘り下げ、その土を掘り残した部分に積み上げて島畠とするものが主体となる状況もとらえられた。

近世終わりの洪水砂は、恩智川に近い場所に比べ、もたらされた土砂の堆積量は少ないものの、それに伴って作られた島畠は、近代になっても存在したことは、現在の景観からもうかがうことができる。

以上に述べたように、今回の池島・福万寺遺跡の調査においても、土地利用や農耕技術の時期的な変化や、自然環境とのかかわり方を明らかにすることができた。

参考文献

- 秋山浩三1996「近畿南部の煮炊具―播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・淡路―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4煮炊具―』古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究会27―35頁
- 秋山浩三・朝田公年・別所秀高・趙哲済・金原正明・井上智博ほか2000「旧石器・縄文時代古環境の復原―98-3・99-1調査区深堀成果の位置づけをめぐる―」第28・29回低湿地遺跡研究会の記録から―『池島・福万寺遺跡』1（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第48集148―167頁
- 市川創2005「難波地域の土器様式」『古代の土器研究―聖武朝の土器様式―』古代の土器研究会第8回シンポジウム古代の土器研究会41―53頁
- 井上智博2002「遺構面の認識と標準層序」『池島・福万寺遺跡』2（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集18―27頁
- 井上智博2011「地層観察の方法と層序区分の観点」『池島・福万寺遺跡』10（財）大阪府文化財センター調査報告書第211集10―11頁
- 上村憲章「土器と陶磁器3須恵器」『平安京提要』古代学協会・古大学研究所編角川書店721―738頁
- 江浦洋1992「条型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ（財）大阪文化財センター77―104頁
- 神野恵2005「聖武朝の土器―平城宮―」『古代の土器研究―聖武朝の土器様式―』古代の土器研究会第8回シンポジウム古代の土器研究会11―24頁
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年九州近世陶磁学会10周年記念』
- 九州近世陶磁学会2006『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』九州編
- 京嶋覚1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ大阪市文化財協会187―200頁
- 駒井正明・岡本圭司2011「まとめ」『池島・福万寺遺跡』12（財）大阪府文化財センター調査報告書第218集118―120頁
- 小森俊寛1993「土器と陶磁器1平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』古代学協会・古大学研究所編角川書店675―688頁
- 小森俊寛1993「土器と陶磁器2土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』古代学協会・古大学研究所編角川書店689―720頁
- 小森俊寛1996「近畿北部の煮炊ぐ―但馬・丹後・丹波・山城・大和・近江・伊賀・伊勢・志摩―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4煮炊具―』古代の土器研究会第4回シンポジウム古代の土器研究会36―48頁
- 小森俊寛2005『京から出土する土器の編年的研究―日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀―』真陽社
- 佐藤隆1997「難波地域」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東5七世紀の土器―』古代の土器研究会第5回シンポジウム古代の土器研究会6―19頁
- 三宮昌弘2003「平安時代の粗製土師器碗について―河内地域南部の土師器碗の動向―」『郡戸遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第88集216―230頁
- 杉本厚典2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集大阪府文化財センター39―61頁
- 中世時研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

- 辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形跡の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室編集真陽社351—365頁
- 寺沢薫・森井貞雄1989「各地域の様式編年河内地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 奈良康正2005「恭仁宮」『古代の土器研究—聖武朝の土器様式—』古代の土器研究会第8回シンポジウム古代の土器研究会25—40頁
- 西村歩2003「古墳出現期における和泉地域の土器様相と集落の動向」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集大阪府文化財センター
- 平尾政幸「土器と陶磁器 4 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』古代学協会・古大学研究所編角川書店739—758頁
- 山口均2006「6乙訓地域の中世土器（土師器Ⅲ）編年について」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第71集（財）向日市埋蔵文化財センター1—8頁
- 米田敏幸1991「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』第6巻雄山閣
- 若林邦彦2003「中川地地域における古式土師器変化の定点観測～久宝寺遺跡とその周辺を中心として～」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集大阪府文化財センター
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター199—217頁

遺物觀察表

樹種同定表

表8 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
15	1	陶器	播鉢	第1層	復元口径:37.0 残存器高:4.7	口縁部1/12
	2	土師器	人形	第1層	残存長:3.8	約1/2
	3	陶器	鉢	第1層	復元口径:21.0 残存器高:7.9	口縁部1/10
	4	磁器	碗	第1層	復元口径:9.6 残存器高:3.6	口縁部1/6
	5	磁器	碗	第1層	復元底径:4.6 残存器高:2.35	底部1/2
	6	磁器	皿	第1層	復元口径:12.9 残存器高:2.8	口縁部2/5
	7	陶器	皿	第1層	復元高台径:2.95 残存器高:2.65	約1/2
	8	磁器	碗	第1層	復元口径:9.4 残存器高:2.2	口縁部1/12
	9	磁器	碗	第1層	復元底径:4.5 残存器高:2.55	底部1/10
	10	陶器	碗	第1層	復元高台径:3.8 残存器高:2.9	底部1/8
	11	磁器	銚子	攪乱坑	復元高台径:4.8 残存器高:4.5	底部1/4
	12	磁器	碗	第2-1層	復元高台径:4.0 残存器高:3.3	約1/2
	13	磁器	碗	第2-1層	復元高台径:4.0 残存器高:2.8	底部1/4
	14	陶器	碗	第2-2層	復元高台径:4.5 残存器高:4.3	約1/2
	15	陶器	播鉢	第2-2層	残存器高:3.2	口縁部1/12以下
	16	石製品	硯石	第2-2層	残存長:4.8 最大幅:2.95 重:20.7	
	17	石製品	砥石	第2-2層	残存長:9.3 残存幅:7.35 重:151.5	
21	18	瓦質土器	風炉	第3-1b層	復元口径:31.8 残存器高:3.3	口縁部若干
	19	木製品	用途不明	第3-1b層	最大長:14.6 最大幅:5.6 最大厚:1.5	
	20	木製品	椀か?	第3-2層	高台径:7.5 厚:0.65~0.9	底部若干
	21	瓦質土器	播鉢	第3-2層	復元口径:28.2 残存器高:4.0	口縁部若干
	22	瓦質土器	播鉢	第3-2層	復元口径:28.0 残存器高:5.3	口縁部若干
	23	土師器	灯明皿	第3-2層	復元口径:7.8 器高:2.15	約1/5
	24	瓦質土器	播鉢	第3-2層	残存器高:4.3	口縁部若干
	25	瓦質土器	火鉢	第3-2層	残存器高:5.75	底部若干
	26	瓦器	椀	第3-2・3層	復元口径:13.4 残存器高:3.6	1/12弱
	27	土師器	灯明皿	第3-3層	復元口径:7.6 残存器高:1.6	1/4弱
	28	磁器	碗	第3-3・4層	底径:4.95 残存器高:1.65	若干
	29	瓦器	椀	第3-3・4層	復元口径:14.6 残存器高:1.75	口縁部1/10
	30	銅器	銭	第3-3面 101島畠	直径:2.5 郭:一辺0.55 最大厚:0.15	完形
	31	瓦質土器	火鉢	第3-3面 101島畠	残存器高:3.2	口縁部若干
	32	土師器	皿	第3-3面 101島畠	復元口径:8.8 残存器高:1.6	1/10強
	33	木製品	用途不明	第3-2~7層	最大長:9.3 最大幅:2.4 最大厚:1.7	
	34	土師器	皿	第3-2~7層	復元口径:8.8 器高:1.5	1/10強
	35	瓦器	椀	第3-2~7層	復元口径:14.9 器高:5.5	約3/10
	36	瓦器	椀	第3-2~7層	復元口径:15.5 器高:5.4	1/3強
24	37	土師器	皿	第4層	残存器高:1.2	約1/8
	38	土師器	皿	第4-1層	復元口径:10.4 残存器高:1.2	口縁部1/6
	39	土師器	皿	第4-1層	復元口径:9.8 器高:1.6	約1/6
	40	青磁	碗	第4-1層	残存器高:3.5	若干
	41	銅器	銭	第4-1面	直径:2.5 郭:一辺:0.7 最大厚:0.15	完形

特徴	備考	時期	地区
内面はナデ後、13条一単位の揃り目を入れる。口縁部と外面は回転ナデ泥を型押しにして作られた立位仏。上半部欠損	美濃・瀬戸	16世紀中葉か	6B-10d
内面と外面上半は施釉。外面下半は露胎	肥前系・刷毛目文	18世紀	7B-2f
全面施釉。外面に草花紋をあしらう。	肥前系染付	18世紀	7B-3g
底部のみ残存。高台畳付以外全面施釉	肥前系染付	18世紀	6B-8c
全面施釉。見込みと底部外面は釉剥ぎ。内面に松葉様の文様をあしらう。	肥前系染付	18世紀	6B-10e
底部のみ残存。内面は施釉後、見込みに蛇の目釉剥ぎ。外面は底部まで施釉、高台は露胎	肥前系染付	18世紀	6B-8c
全面施釉。外面に草花紋をあしらう。	肥前系染付	18世紀	6B-9c
高台畳付以外は全面施釉。高台の内側に、はなれ砂が附着。	肥前系染付	18世紀	6B-8c
高台畳付以外は全面施釉。体部外面に凹線を巡らす。	肥前系染付	18世紀	7B-4g
内面と高台畳付は露胎。外面は施釉。外面に草花紋をあしらう。	肥前系染付	18世紀	6B-9c
底部のみ残存。全面施釉。高台内面端部に、はなれ砂附着。外面に施紋。	染付	18世紀	6B-7c・7d
高台畳付以外は全面施釉。外面に施紋。	染付	18世紀	6B-9e
高台以外は施釉。高台畳付に胎土目附着。高台内側に焼成後に入れられた×形の線刻あり	唐津焼・胎土目	16世紀末葉～17世紀初頭	7B-3c
注ぎ口付近。内外面とも回転ナデ	備前	16世紀	7B-3d
平面形は長方形で、板状。鋭利な刃先があたったような使用痕が多数みられる。	頁岩		6B-9e
破片。一面だけ残存する使用面はよく使い込まれてなめらか。	結晶片岩		6B-10f
口縁部付近のみ残存。口縁直下の外面に凸帯を二条巡らし、その間にスタンプで花菱紋をあしらう。凸帯の下に透孔あり。	奈良火鉢	15世紀中頃もしくは16世紀か	7B-4e
板状。長軸に対して斜め方向に工具痕が認められる			7B-2d
塗り物の高台部分。黒漆を塗布した後、赤漆で仕上げたとみられる。			6B-10g
口縁部と内面は回転ナデ。体部外面は、口縁部の回転ナデ後、ヘラケズリ。口縁部外面はいぶされて黒色化する	大阪府南部産	14世紀末葉～15世紀初頭	7B-1d
口縁部に回転ナデ後、外面は大雑把なヘラケズリ、内面はナデで仕上げる。外面には粘土の接合痕が残存。内面には10条一単位の揃り目あり。	大阪府南部産	14世紀末葉～15世紀初頭	6B-7f
内外面ともナデ。外面には所々に指オサエの痕跡あり。内面は全体に被熱のため赤変し、口縁部付近にわずかにスス附着		14世紀か	7B-1d
被熱のためわずかに赤変し、全体に摩滅が進む。外面口縁部近くに粘土の接合痕あり。内面に5条一単位の揃り目あり	大和型	14世紀末葉～15世紀初頭	7B-4f
平面形が方形の器形である。基部のコーナー部分のみが残存する。脚はない。外面は側面・底面ともに丁寧にミガキを施す。基部に二条の突帯をめぐらせ、その間にスタンプで雷紋を施す。	奈良火鉢	16世紀か	6B-10d
内面ナデ、外面は指オサエ後、ナデを施し、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面にはまばらにミガキが認められる。		13世紀後半か	7B-3e
内外面ともナデ。口縁部に一箇所、スス附着		14～15世紀	7B-1d
高台のみ残存。内面は施釉、外面は露胎。削り出して高台を作る。見込みに凹線をめぐらす。	白磁		7B-1g
口縁部のみ残存。外面はヨコナデ後、ミガキ。内面は密なミガキ調整で光沢を帯びる。		13世紀前半	6B-7e
錆化はそれほど進んでおらず、保存状態は良好である。	永樂通寶	15～17世紀	6B-8f
口縁部のみ残存。外面は密なミガキ調整で光沢を帯びる。内面は回転ナデで仕上げ、粘土の接合痕とみられるくぼみが僅かに残る。		15世紀中頃	6B-9g
体部内面と口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエ後、ナデ調整で仕上げる。		15世紀末～16世紀初頭	6B-10e・10f
角柱状。丁寧に平坦面が作り出されるが、工具痕は認められない。	土層観察用トレンチ出土		6B-10g
内面はナデ調整、外面は指オサエ後、ナデ調整し、口縁部はヨコナデで仕上げる。	土層観察用トレンチ出土	13世紀	7B-5e
内面は密なミガキ調整で光沢を帯びる。見込みに格子状の暗文あり。外面は底部付近までミガキが施され、その隙間から、口縁部にはヨコナデ、体部には指オサエの痕跡が認められる。	土層観察用トレンチ出土・楠葉型	12世紀中頃	7B-3b
内面はナデ後、細いミガキを施す。見込みに連結輪状暗文あり。外面は口縁部ヨコナデ、体部は指オサエの痕跡が明瞭で、ミガキはない。	土層観察用トレンチ出土・和泉型	13世紀前葉	6B-9e
内面ナデ。外面は底部が指オサエ後ナデ、立ち上がりから口縁にかけてはヨコナデで、その下端に僅かに段が生じる。		14世紀か	7B-2c
内外面ともヨコナデで仕上げる。		15世紀後葉	7B-1c・1d
内外面ともおおむねヨコナデで仕上げるが、外面底部付近には指オサエの痕跡あり		15世紀後葉	6B-10c
釉薬は淡緑色で透明感がある。	鎬連弁紋	12世紀	6B-9d
錆化はそれほど進んでおらず、保存状態は良好である。	景祐元寶 (1034铸造)		6B-10f
			7B-3d

表9 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
24	42	瓦質土器	羽釜	第4-1・2層	鏝径:33.4 残存器高:4.2	鏝部1/9
	43	須恵器	鉢	第4-1・2層	復元口径:25.0 残存器高:3.3	約1/8
	44	土師器	灯明皿	第4-1・2層	復元口径:7.8 器高:0.9	約1/4
	45	瓦器	椀	第4-1・2層	復元口径:11.4 残存器高:2.2	約1/10
	46	須恵器	鉢	第4-1・2層	残存器高:2.3	若干
	47	銅器	銭	第4-1・2層	直径:2.5 郭:一辺:0.7 最大厚:0.1	完形
	48	銅器	銭	第4-1・2層	直径:2.5 郭:0.7×0.6 最大厚:0.1	完形
	49	木製品	曲物?	第4-1・2層	直径:12.5 厚:0.5~0.6	
	50	土師器	皿	第4-2層	復元口径:9.3 器高:1.4	約1/6
	51	陶器	皿	第4-2層	復元口径:10.8 器高:2.4	約1/8
	52	土師器	高杯	第4-2層	残存器高:4.0	脚部若干
	53	土師器	皿	第4-2層	復元口径:11.8 残存器高:2.1	約1/8
	54	瓦質土器	羽釜	第4-2層	復元口径:20.4 残存器高:6.0	約1/6
	55	金属器	用途不明	第4-2層	直径:2.5 厚:0.45~0.5	
56	木製品	用途不明	第4-2層	最大長:10.2 最大幅:6.7 最大厚:0.65		
26	57	瓦器	椀	第5層最上部	復元口径:15.0 器高:5.4	約1/8
	58	金属器	突き鑿	第5面	長:20.2 幅:0.25~1.2 厚:0.2~1.1	完形
	59	瓦器	椀	第5面 119島島	残存器高:2.2	若干
	60	土師器	釜	第5面 119島島	復元口径:36.8 残存器高:3.1	口縁部若干
	61	瓦器	皿	第5面 113島島	復元口径:11.2 器高:1.5	
	62	木製品	用途不明	第5層	残存長:11.8 最大幅:3.6 最大厚:2.0	
	63	陶器	甕	第5層	復元口径:26.8 残存器高:5.1	約1/8
	64	瓦質土器	播鉢	第5層	復元口径:36.6 残存器高:6.7	口縁部1/8
	65	須恵器	鉢	第5層	復元口径:29.0 残存器高:7.1	約1/8
	66	瓦質土器	羽釜	第5層	復元口径:15.2 残存器高:6.2	約1/5
	67	土師器	皿	第5層	復元口径:8.4 残存器高:1.1	約1/5
68	土師器	皿	第5層	復元口径:9.5 器高:1.9	約4/5	
69	土師器	皿	第5層	復元口径:10.0 器高:1.85	約1/8	
29	70	木製品	下駄	第6面	最大長:21.4 最大幅:10.3 厚:1.4~3.0	ほぼ完形
	71	土師器	羽釜	第6層	残存器高:5.8	口縁部若干
	72	瓦器	椀	第6層	復元口径:10.5 残存器高:3.0	約1/5
38	73	土師器	皿	第7層	復元口径:10.2 器高:0.9	約3/5
	74	土師器	皿	第7層	復元口径:10.0 器高:0.9	約1/5
	75	黒色土器	椀	第7層	復元口径:16.8 復元器高:6.0	約1/10
	76	土師器	皿	第7層	復元口径:12.2 残存器高:1.25	1/10弱
	77	土師器	煮炊具?	第7層	復元口径:17.2 残存器高:4.75	口縁部1/10強

特徴	備考	時期	地区
鏝はヨコナデ、内面は横方向のハケ。鏝の下面に接合痕とわずかにススの付着が認められる。		16世紀	7B-3e
内外面とも回転ナデで仕上げる	東播系	12世紀末葉～13世紀初頭	7B
立ち上がりから口縁にかけては、内外面ともヨコナデ。底部内面はナデ、外面は指オサエ後、部分的にナデ。薄くて粗雑な印象を受ける。内面は全体に薄くスス付着		14世紀後葉か	7B-4g
口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデで、ヨコナデの下端部に段が生じている。内面はまばらなミガキで仕上げる。		14世紀前半	7B
口縁部は内外面とも回転ナデ。体部内面はナデで仕上げる。口縁端部が全体に摩滅する		13世紀か	7B-4e
錆化はそれほど進んでおらず、保存状態は良好である。	開元通寶		7B-4f
ほぼ二つ折りの状態で出土。	種類不明		7B-1f
平坦面と側面は丁寧加工される。	蓋か？		7B-3b
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部は内外面ともナデ。外面のヨコナデ下端にわずかに段が生じる。		14世紀か	6B-10e
底部外面に回転糸切り痕あり。回転ナデの後、外面口縁部付近と内面に透明感のある淡緑色の釉薬をかける。	古瀬戸・緑釉小皿	14世紀後葉～15世紀初頭	7B-4e・5e
全体に摩滅する。脚部外面は幅広の縦方向のケズリで、12面体の形状に仕上げる。内面にはシボリ目とナデの痕跡あり。		9世紀	7B-3c
口縁部外面と内面はヨコナデ。体部外面は指オサエの後、ナデ。薄くて粗雑な印象を受ける。		16世紀か	6B
口縁部外面と鏝は回転ナデ。鏝下面に僅かに接合痕とススが残存する。内面は指オサエ後ナデ、ハケで仕上げる。ハケは口縁端部におよぶ。全体に金属質の光沢を帯びる		16世紀	7B-3e
断面形状は長方形である。	環状		6B-9g
工具痕は認められないが、平坦面と側面は丁寧に加工される。	板状		7B-4b
内面は体部に分割ヘラミガキ、口縁付近には圏線ミガキ、見込みに平行状暗文を施す。外面は底部付近まで密にミガキを施し、光沢を帯びるが、指オサエの部分にはミガキが及ばない部分もある。金属質の光沢を帯びる。	楠葉型	12世紀中頃	7B-3g
茎の中ほどでやや湾曲するが、おおむね保存状態は良い。			6B-9f
口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整。内面は細くてまばらな圏線ミガキで仕上げる。		14世紀後葉～15世紀初頭	7B-2c
口縁部は内外面とも回転ナデ。体部は内外面ともナデ。内面の、体部から口縁部にかけての屈曲部には、横方向のハケの痕跡あり。外面は全体に薄くスス付着。		14世紀	7B-2f
内面はヨコナデ後、まばらに幅広のミガキ。外面は口縁部付近にナデ、それ以外は指オサエ。		13世紀	7B-4b
角柱状。丁寧に平坦面が作り出されるが、工具痕は認められない。			6B-8g
内外面とも回転ナデ。口縁部内面と肩部外面に薄く自然釉がかかる。口縁端部は面を作り出しながら上方にわずかにつまみあげる。	常滑か	12世紀末葉	7B-3e
外面は指オサエ後ヨコナデ。内面はヨコナデ後、6条一単位の播り目を入れる。内面に薄くスス付着。	大和型	14世紀後葉～15世紀初頭	7B-2e
内外面とも回転ナデ。内面から口縁部外面にかけて、薄くスス付着。	東播系	13世紀	7B-3c
内面はケズリもしくはハケ調整の後ヨコナデ。外面は口縁部から鏝にかけて回転ナデ、体部指オサエ後ナデ。内面部分的に薄くスス付着。		14～15世紀	7B-5e
立ち上がりから口縁にかけて、内外面ともヨコナデ。底部外面はナデ。		14世紀前葉か	7B-3d
器壁の磨滅により調整痕不明瞭。内外面とも底部にわずかに指オサエの痕跡有り。		13世紀	7B-3g・4g
口縁部外面と内面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデ。		14世紀後葉か	6B-10g
先端部欠損。かなり使い込まれており、指のあたっていた部分がわずかにくぼむ。			7B-3g
内面の内弯部分から、外面鏝にかけての部分は、回転ナデ。それ以外の場所はナデ。外面の鏝より下の部分に薄くスス付着。	大和型羽釜の形状に似る	13世紀	7B-1d
口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面はナデ後、幅広のミガキをまばらに施す。体部外面は指オサエ後、大雑把なナデ。		13世紀後葉～14世紀前半	7B-2e
立ち上がりから口縁にかけてはヨコナデ。底部は、内面が目の粗いハケの後ナデ調整、外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-9f
立ち上がりから口縁にかけてはヨコナデ。底部は内面がナデ、外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-10c
口縁部は内外面ともヨコナデ、口縁端部をやや上方につまみあげる。体部外面はナデ、内面は大雑把なミガキ調整で仕上げる。	A類	11世紀前葉	6B-9b
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部は内面が目の粗いハケを施した後ナデ、外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-9g
内面は頸部付近から口縁にかけてヨコナデ。外面は口縁端部をヨコナデ。それ以外の箇所はナデか。		11世紀か	6B-9b

表10 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
38	78	瓦器	椀	第7-1・2層	復元高台径:6.6 残存器高:1.55	高台部1/4
	79	瓦器	椀	第7-1・2層	復元口径:14.7 残存器高:4.0	1/4弱
	80	瓦器	椀	第7-1・2層	復元口径:15.2 器高:4.75	約2/5
	81	土師器	皿	第7-1・2層	復元口径:14.0 器高:2.25	1/7強
	82	土師器	皿	第7-2層	復元口径:10.5 器高:1.3	約3/4
	83	須恵器	壺	第7-2層	復元底部径:10.3 残存器高:3.85	底部若干
	84	須恵器	壺	第7-2層	復元口径:26.2 残存器高:6.6	口縁部1/10弱
	85	木製品	下駄	第7-3面? 153溝	最大長:15.5 最大幅:6.55 最大厚:3.9	完形
	86	土師器	皿	第7-3面? 153溝	器高:2.0	若干
	87	土師器	皿	第7-3層	復元口径:9.8 器高:1.0	1/5弱
	88	土師器	錘	第7-3層	最大長:4.7 幅:1.2~1.5 紐孔径:0.5	完形
	89	土師器	皿	第7-3b層	復元口径:10.5 器高:0.95	口縁部1/5弱
	90	土師器	甕	第7-3b層	復元口径:8.6 残存器高:5.0	口縁部1/4
	91	土師器	皿	第7-3b層	復元口径:9.9 器高:0.9	1/5強
	92	土師器	皿	第7-3b層	復元口径:10.5 器高:1.3	1/4弱
	93	土師器	甕	第7-3b層	復元口径:10.7 残存器高:3.15	口縁部1/3弱
	94	土師器	皿	第7-3b層	器高:1.2	若干
	95	土師器	甕	第7-3b層	復元口径:13.7 残存器高:6.15	口縁部1/5弱
	96	須恵器	杯身	第7-3b層	残存器高:2.7	若干
	97	土師器	甕	第7-3b層	復元口径:16.5 残存器高:2.7	口縁部1/5弱
98	土師器	高杯	第7-3b層	復元口径:6.2 器高:4.7~5.25	2/3強	
99	土師器	杯	第7-3b層	復元口径:15.0 残存器高:2.65	口縁部1/10	
100	土師器	杯	第7-3b層	復元口径:13.4 器高:3.05	1/10弱	
39	101	土師器	羽釜	第7-3b層	復元口径:27.9 残存器高:6.4	上部1/7
	102	黒色土器	椀	第7-3b層	復元底径:8.0 残存器高:1.7	底部1/2弱
	103	土師器	碗	第7-3b層	口径:7.15 器高:2.3	完形
	104	土師器	高杯	第7-3b層	復元脚部径:7.8 残存器高:5.2	約1/2
	105	瓦器	椀	第7-3b層	口径:14.45 器高:6.15	完形
	106	土師器	杯	第7~10層	復元口径:13.4 残存器高:5.15	口縁部1/4
	107	土師器	高杯	第7~10層	復元口径:7.6 器高:5.55	約7/10
	108	土師器	杯	第7~10層	復元口径:15.0 器高:3.8	約2/5

特徴	備考	時期	地区
底部のみ残存。内面は幅広のミガキで、見込みに同心円状暗文？貼り付け高台は断面長方形。全体に金属質の光沢を帯びる。		11世紀前葉か	6B-8g
口縁部は内外面ともヨコナデし、ゆるやかに外反する。体部は内面がナデ後、幅狭のミガキをまばらに施し、外面は指オサエ後、大雑把なナデ。楠葉型で特徴的にみられる油滴状の光沢あり。		13世紀前葉	6B-8d
口縁部は内外面ともヨコナデし、わずかに外反する。口縁端部に密にミガキを施す。体部は内面がナデ後、幅広のミガキをまばらに施し、外面は指オサエ。楠葉型で特徴的にみられる油滴状の光沢あり。		12世紀末～13世紀初頭	6B-8e・8f
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部は内面がナデ、外面は指オサエ後ナデ。		13世紀前葉	7B-1g
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面がハケ後ナデ、外面は指オサエ後ナデ。口縁部内面は半分ほどにわたり、薄くスス付着。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-9g
底部のみ残存。貼り付け高台。外面はヘラケズリで成形し、底部は手持ちの状態ヘラケズリか。内面は回転ナデで、底部のみナデ。		8世紀後葉か	6B-10c
頸部外面はタタキ調整の後、頸部から口縁部にかけ内外面とも回転ナデ。内面の頸部下端部はナデ調整。体部内面には当て具痕がわずかに残る。頸部内面と肩部外面に自然釉が付着。		8～9世紀	6B-10g
よく使い込まれており、指先とかかとかあたる部分はすりへってややくぼむ。			6B-8f
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部外面にヘラケズリの痕跡がわずかに残る。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-7g
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部は内面が目の粗いハケの後ナデ、外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	6B-8e
穿孔後ナデ調整で仕上げる。			7B-2d
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部は内外面とも指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	7B-3f
頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部内面はケズリ、外面はナデ。			7B-5f
全体に磨滅しており、調整痕は不明瞭。底部に指オサエの痕跡あり。	「て」字状口縁皿	11世紀	7B-2b
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部内面はハケ後ナデ、外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	11世紀	7B-4e
頸部から口縁にかけてヨコナデ。体部内面はケズリ後ナデか。体部外面はナデか。			7B-3e
磨滅により調整痕不明。口縁部に部分的に薄くスス付着。口縁端部をわずかに上方につまみあげる。		11世紀後半	7B-5f
体部外面に縦方向のハケ後、頸部から口縁にかけてヨコナデ。体部内面は横方向にヘラケズリ後、ナデ。頸部から上の部分の内面と、外面頸部から下の部分に薄くスス付着。		9世紀	7B-3c
磨滅により調整痕は不明瞭だが、受部内面に回転ナデ、体部外面に回転ヘラケズリの痕跡有り		6世紀	7B-3d
頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。頸部外面にハケを押し当てた痕跡あり。体部内面はケズリ調整か。		4世紀	7B-4f
小型。手捏ね成形。全体に指オサエの痕跡が顕著で、口縁端部は不整形。ナデ調整で仕上げる。		古代	7B-4f
口縁部外面と体部内面はヨコナデ。体部外面にヘラケズリの痕跡あるが、磨滅により不明瞭。		8世紀末～9世紀初頭	6B-7b
口縁部外面と体部内面はヨコナデ。底部内面はナデ、体部外面は指オサエ後ナデ。終わりごろの瓦器碗の形態に似る。		10世紀後葉～11世紀初頭	6B-8g
鏝部より上のみ残存。外面はヨコナデを施し、粘土の接合痕が残存する。内面はハケで仕上げる。鏝の下面に薄くスス付着。		9世紀前半	6B-8f
全体に磨滅する。内面にミガキ、底部外面はナデで仕上げた痕跡あり。高台は高さがあるがやや華奢な印象。	A類	10世紀後葉	7B-3c
手捏ね成形とみられ、外面に指オサエの痕跡顕著。口縁端部やや不整形。内面にハケメあり。内外面ともナデ調整で仕上げたとみられる。		古代	7B-2c
脚柱部の外面は幅広の縦方向のナデで、面取り風に仕上げ、内面はシボリ痕の凹凸をならすようにナデを施す。裾部内面には布目圧痕が認められる。		古代	7B-3c
口縁部内面に凹線を一条巡らす。内外面とも密な分割ミガキで、光沢を帯びる。見込みはジグザグ状に密に磨く。		11世紀後半	7B-5d
斜放射・放射状2段暗文。体部外面はヘラケズリの後、端部上半にヨコナデ。		7世紀中頃	6B-7c・8c
小型。手捏ね成形。全体に指オサエの痕跡が顕著で、口縁端部は不整形。杯部内面にハケ調整の痕跡あり。脚部外面には2段のシボリメあり。内外面ともナデ調整で仕上げる。表面2/3にわたって黒班あり。	土層観察用トレンチ出土	古代	6B-8d
体部外面はケズリの後、指オサエもしくはナデ。底部外面にケズリの痕跡が残る。口縁部外面から内面の底部付近までヨコナデ。底部内面はナデ調整。	土層観察用トレンチ出土	8世紀前葉～中頃	6B-9b

表11 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
39	109	土師器	高杯	第7~10層	復元脚部径:4.5 残存器高:4.5	3/10強
	110	須恵器	壺	第7~10層	復元口径:7.8 残存器高:6.4	口縁部1/4
	111	土師器	羽釜	第7~10層	復元鏝径:31.0 残存器高:5.2	鏝部1/4
43	112	土師器	皿	第8面	復元口径:14.9 残存器高:1.4	若干
	113	土師器	羽釜	第8層	残存器高:3.7	若干
	114	金属器	帯金具	第8層	最大長:4.55 最大幅:3.25 厚:0.05	
	115	土師器	高杯	第8層	脚部径:4.8 残存器高:4.5	脚部1/2
	116	木製品	火付け木	第8層	最大長:22.0 最大幅:1.4 最大厚:1.1	
	117	木製品	曲げ物?	第8層	最大長:11.2 最大幅:8.1 最大厚:0.85	
	118	土師器	皿	第8層	復元口径:9.8 器高:1.5	約1/8
	119	土師器	皿	第8層	復元口径:12.3 器高:1.9	約1/5
	120	土師器	甕	第8層	復元口径:10.8 残存器高:4.7	若干
	121	土師器	甕	第8層	復元口径:9.0 残存器高:4.9	約2/5
	122	土師器	椀	第8層	復元口径:11.8 残存器高:3.2	約1/8
	123	須恵器	杯身	第8~10-1層	復元口径:9.8 器高:3.5	約1/2
44	124	土師器	羽釜	第9-1面 306流路	復元口径:30.8 残存器高:9.8	上半部1/10
	125	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:21.4 残存器高:6.5	口縁部1/4弱
	126	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:9.3 残存器高:4.2	口縁部1/4強
	127	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:9.4 器高:5.35	1/8強
	128	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:8.65 器高:5.4	1/2強
	129	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:10.4 残存器高:5.8	約1/4
	130	土師器	甕	第9-1面 306流路	口径:9.0 器高:6.8	1/2強
	131	土師器	甕	第9-1面 306流路	口径:8.1~8.8(楕円) 器高:5.3	完形
	132	土師器	甕	第9-1面 306流路	復元口径:10.8 残存器高:6.35	1/4弱
	133	土師器	甕	第9-1面 306流路	口径:9.6 器高:5.6	3/4弱
	134	土師器	甕	第9-1面 306流路	口径:11.7~12.4 器高:6.55	ほぼ完形
	135	土師器	高杯	第9-1面 306流路	口径:6.0~6.4 器高:3.4~4.3	完形
	136	土師器	杯	第9-1面 306流路	口径:12.0~12.2 器高:4.1~4.7	ほぼ完形
	137	土師器	高杯	第9-1面 306流路	口径:6.1~6.2 器高:3.8~4.3	ほぼ完形
	138	土師器	杯	第9-1面 306流路	口径:13.5 器高:3.3	約5/6
	139	土師器	杯	第9-1面 306流路	復元口径:14.4 器高:4.0	1/3弱
	140	土師器	甕	第9-1面 306流路	口径:8.7~8.9 器高:5.4	ほぼ完形

特徴	備考	時期	地区
小型。脚部のみ残存。外面はヘラケズリの後、ナデ調整。内面はナデで仕上げるが、接合痕が残存する。	土層観察用トレンチ出土	古代	7B-1e・1f
口～頸部のみ残存。内外面とも回転ナデで仕上げる。口縁を上方につまみ上げ、口縁端部に面を作り出す。		9世紀後葉	6B-8g・9f
鏝部のみ残存。内面はケズリおよび指オサエ後、ナデ。体部外面はハケ調整。鏝はヨコナデ。鏝下面にスス付着。		9世紀前半	6B-9g・10g
底部内面はナデ。内面立ち上がり部分から口縁外面にかけてはヨコナデ。口縁部以外の外面は指オサエ後ナデ。	「て」字状口縁皿	10世紀後葉～11世紀初頭	6B-9d
鏝はヨコナデで仕上げるが、上面に指オサエノ痕跡が顕著にのこる。体部外面はハケ、内面は指オサエ後ナデ。		10世紀中頃～後葉	6B-9d
		古代	7B-1b
小型。手握ね成形のため、全体に指オサエの痕跡顕著。内外面ともナデ調整で仕上げる。		古代	7B-2b
棒状の木っ端の片方の端部のみを使用。	端部炭化・スギ		6B-9f
平坦面には工具痕が認められる。目釘孔あり。	底板か		6B-9b
内面と口縁部外面はヨコナデで仕上げる。体部外面は指オサエ後ナデ。口縁端部をわずかに上方へつまみあげる。	「て」字状口縁皿	12世紀	7B-1e
体部外面に指オサエの痕跡あり。立ち上がりから口縁部にかけてはヨコナデで仕上げる。	「て」字状口縁皿	10世紀後葉～11世紀初頭	6B-10d
小型・外面に墨書有り。頸部内面にヘラケズリの痕跡有り。頸部から口縁にかけては、内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整で仕上げる。		古代	6B-9e
小型。体部は内外面とも指オサエ後ナデ。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデで仕上げる。		古代	6B-9f
体部下半外面は指オサエ後ナデ。体部上半から口縁にかけてはヨコナデ。内面にはその後放射状暗文を施す。		8世紀前半か	7B-1b・2b
内外面とも回転ナデ。底部外面には回転糸切り痕跡が顕著に残る。外面下半に部分的に自然釉がみられる。		8世紀中頃	7B-1d
鏝と口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ。体部内面は指オサエ後板ナデ。	第8b層	8世紀～9世紀前半	6B-9g
頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。口縁部は上方につまみ上げ、口縁端部に面をつくりだす。体部は外面がハケ調整、内面はハケ後板ナデ。	第8b層	8世紀末葉～9世紀初頭	6B-9d
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面がナデ、外面は指オサエ後大雑把なナデ調整で仕上げる。	第8b層	古代	6B-9g
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面が板ナデ後ナデ、外面は指オサエ後大雑把なナデ調整で仕上げており、接合痕が残存する。	第8b層	古代	6B-9c
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面がナデ、外面は指オサエ後ナデ調整で仕上げる。体部外面に黒班あり。	第8b層	古代	6B-9f
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面が板ナデ後、下半部を中心にナデ、外面は指オサエ後大雑把なナデ調整で仕上げる。	第8b層	古代	6B-9d
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内外面とも指オサエ後ナデ調整で仕上げる。	第8b層	古代	6B-9f
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は外面が強いナデで、指オサエ様の痕跡が残り、内面は板ナデ。	第8b層	古代	6B-9b
小型。頸部から口縁にかけては内外面とも指オサエ。体部内面はヘラケズリ後ナデか。体部外面は指オサエ後大雑把に板ナデ。	第8b層	古代	6B-9b
小型。内面は板ナデ後、頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面が板ナデ後ナデ、外面は指オサエ後ナデ調整で仕上げる。	第8b層	古代	6B-9f
小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部は内面がケズリ後ナデ、外面はナデ調整で仕上げる。強くナデているため、指オサエ様の痕跡が残る。	第8b層	8世紀か	6B-9c
小型。手握ね成形とみられ、外面に指オサエの痕跡顕著。外面は脚部が縦方向のナデ、杯部は大雑把なナデで仕上げる。杯部内面は板ナデ後ナデ、脚部はヨコナデで仕上げる。	第8b層	古代	6B-9b
口縁部はヨコナデ。外面は大雑把なナデで仕上げ、底部に指オサエ、体部に接合痕が僅かに残る。内面は板ケズリ後ナデ。	第8b層	古代	6B-9c
小型。杯部は内外面とも丁寧なナデ。脚部は外面が縦方向の強いナデ、内面はヨコナデで仕上げる。	第8b層	古代	6B-9f
立ち上がりから口縁にかけてはヨコナデ、底部内面はナデ、外面は指オサエ後ナデ調整で仕上げる。	第8b層	8世紀前葉～中頃	6B-9c
立ち上がりから口縁にかけてはヨコナデ、底部内面はナデ、外面は指オサエ後ナデ調整で仕上げる。	第8b層	8世紀前葉～中頃	6B-9e
小型。内面は底部以外は板ナデ後ヨコナデ。外面は頸部から口縁にかけてヨコナデ、体部は粗いナデで接合痕が残存する。底部内面はナデ。	第8b層	古代	6B-9g

表12 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
55	141	須恵器	杯身	第9-1層	口径:9.8 器高:3.2	約3/4
	142	須恵器	杯身	第9-1層	残存器高:1.6	底部若干
	143	須恵器	壺	第9-2層	高台径:7.0 残存器高:1.85	底部1/8
	144	須恵器	杯身	第9-3層	復元口径:11.8 器高:3.9	約1/5
	145	土師器	椀	第9-3層	口径:12.1 器高:3.3~3.7	約1/2
	146	土師器	椀	第9-3層	口径:12.35 器高:3.05	約3/5
	147	土師器	高杯	第9-3層	口径:6.4 器高:4.0~4.3	約4/5
	148	土師器	高杯	第9-3層	脚部径:10.6 残存器高:5.9	脚部2/5
	149	木製品	用途不明	第9-3層	最大長:24.0 最大幅:6.4 最大厚:0.7	
	150	土師器	高杯	第9-3層	口径:6.8 器高:5.2~5.4	4/5弱
	151	石器	砥石	第9-4面 329 土坑	残存長:5.7 幅:4.9 最大厚:4.45 重:158.7	
	152	木製品	杭	第9-4面 329 土坑	残存長:41.8 幅:2.7~4.1	
	153	木製品	杭	第9-4面 329 土坑	残存長:117.7 幅:6.5~6.6	
	154	須恵器	杯蓋	第9-4層	復元口径:16.0 器高:5.1	1/4強
	155	須恵器	杯身	第9-4層	復元口径:12.0 器高:3.6	約1/2
	156	石器	浮か	第9-4層	最大長:10.6 最大幅:7.7 最大厚:6.0 重:72.1	
	157	木製品	火付け木	第9-4層	残存長:7.7 最大幅:0.8 最大厚:0.4	
	158	須恵器	杯身	第10面 336ピット	復元口径:12.6 器高:5.3	約1/6
	159	土師器	椀	第10面 336ピット	口径:12.4 器高:3.3~3.7	ほぼ完形
	160	土師器	椀	第9-4層	口径:12.6 残存器高:5.1	1/2強
161	須恵器	杯身	第9層	口径:11.0 器高:3.9	約4/5	
162	土師器	杯	第9-3~11-2層	復元口径:12.8 残存器高:2.5	約1/5	
163	須恵器	杯蓋	第9-3~11-2層	復元口径:14.8 残存器高:3.5	約1/6	
164	土師器	甕	第9-3~11-2層	復元口径:14.5 残存器高:4.2	口縁部1/5	
165	土師器	高杯	第9-3~11-2層	口径:16.1 残存器高:4.9	杯部3/4	
56	166	土師器	杯	第9-3面 323流路	口径:14.7 器高:3.85	約3/4
	167	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:13.8 残存器高:2.9	口縁部1/5弱
	168	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:12.8 残存器高:3.1	1/6弱
	169	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:12.8 残存器高:3.3	1/4弱
	170	土師器	羽釜	第9-3面 323流路	復元口径:27.9 残存器高:8.7	口縁~鏝部1/4

特徴	備考	時期	地区
内外面とも回転ナデ。底部内面にのみ一方方向のナデを施す。底部外面に回転ヘラオコシの痕跡。		7世紀後葉	7B-1b
底部のみ残存。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ後、高台を取り付け、高台部分を回転ナデで仕上げる。		7世紀後葉	6B-10c
底部のみ残存。内面と高台は回転ナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。		8世紀中葉	6B-10b
底部外面の回転ヘラケズリ以外は回転ナデ。高台を取り付け、高台部分を回転ナデで仕上げる。外面に高台の接合痕が残存する。		8世紀後葉	7B-4c
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部内面はナデ、外面は指オサエ後、ナデ。内面に放射状暗文を入れるが、磨滅によりほとんど見えない部分有り。		7世紀中葉	7B-1g
外面は立ち上がりから口縁にかけて、内面は底部付近から口縁にかけてヨコナデ。底部内面はナデか。体部外面は指オサエ後ナデ。		8世紀前半	6B-10c
小型。手捏ね成形とみられ、外面は指オサエの痕跡顕著。杯部内面は丁寧なナデ調整。脚部外面にシボリメ残存。杯部外面と脚部内面は縦方向の強いナデにより、指オサエ様の痕跡残る。外面は大雑把なナデ調整で仕上げる。		古代	6B-8f
脚部のみ残存。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリにより11面体に仕上げ、内面はヨコナデで仕上げるが、シボリメの痕跡わずかに残る。脚裾部外面は回転ナデ、内面はハケ後ナデか。裾端部にわずかに丸みをもたせる。		8世紀後葉	6B-9f
板状。整った平坦面だが、工具痕跡は認められない。			6B-10d
小型。手捏ね成形とみられ、外面は指オサエの痕跡顕著。杯部内面はナデ調整か。脚部外面は縦方向の強いナデにより、指オサエ様の痕跡残る。脚部内面にはシボリメ顕著。		古代	7B-1d
柱状。中ほどで折損する。よく使い込まれており、使用面はなめらかな凹面を呈する。	第9-3層・凝灰岩		6B-8e
先端部にのみ加工痕あり。	第9-3層・ミズキ		6B-8e
先端部にのみ加工痕あり。	第9-3層・スギ		6B-8e
外面は頂部から全体の1/3ほどの範囲で回転ヘラケズリを施す以外は回転ナデで仕上げる。外面に線刻あり。		6世紀末葉～7世紀初頭	7B-2d
底部が尖り気味で作りが粗雑な印象を受ける。底部に回転ヘラケズリを施す以外は回転ナデで仕上げる。		7世紀前半	6B-10c
明確な使用痕・加工痕は認められない。	軽石		7B-1c
中ほどで折損する。端部が炭化する。			7B-4e
口縁端部が凹面をなす。底部から体部中ほどにかけて回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデで仕上げる。		5世紀後葉	7B-3e
体部外面は指オサエ、内面は板ナデで整形した後、立ち上がりから口縁にかけての内面と、口縁外面はヨコナデ、底部内面はナデ、体部外面は大雑把なナデ調整で仕上げる。	第9-1層	11世紀か	7B-3e
口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面が指オサエ後ナデ、内面はナデ調整の後放射状暗文を施す	第9-1層か	5世紀後葉か	7B-3f
底部外面に回転ヘラオコシの痕跡あり。その周辺を大雑把に回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデ調整で仕上げるが、底部内面にのみ一方方向のナデを施す。	土層観察用トレンチ出土	7世紀中葉	7B-1c
内面と口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指オサエ後ナデ調整。見込みで斜放射状暗文を施した後、底部内面に螺旋暗文を施したとみられる。	土層観察用トレンチ出土	8世紀中頃	6B-9c
黒色。頂部から体部1/3にかけて回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデで仕上げる。	土層観察用トレンチ出土	7世紀前半	7B-1g
頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。口縁端部はわずかに上方につまみあげる。体部は内面ハケ後ナデ、外面はハケ調整で仕上げる。	土層観察用トレンチ出土	6世紀後半	6B-8c
立ち上がりから口縁にかけては、外面に指オサエノ痕跡残るがヨコナデで、底部内面はナデ調整で仕上げる。底部外面はヘラケズリ後、指オサエで整形し、ナデ調整で仕上げる。	土層観察用トレンチ出土	5世紀前葉	7B-3g
立ち上がりから口縁にかけての外面と、口縁部内面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデ、内面は板ナデの後ナデ調整で仕上げる。口縁部わずかに内弯する。	第9-2b層	8世紀中葉	6B-9b
内面と口縁部外面はヨコナデし、口縁部はごくわずかに内弯する。体部外面はミガキ調整で仕上げる。内面には斜放射2段暗文を施す。	第9-2b層	7世紀後葉	6B-9b
内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデ調整で仕上げる。外面底部付近に接合痕がわずかに認められる。	第9-2b層	8世紀前半	6B-9b
内面と立ち上がりから口縁にかけての外面はヨコナデ。それ以外の外面は指オサエ後ナデ。	第9-2b層	8世紀前半	6B-9d
内面はハケ調整するが、鏝が付く位置に指オサエの痕跡が残る。鏝から上の部分の外面と、口縁部内面はヨコナデで仕上げる。体部外面にはハケ調整。	第9-2b層	8世紀～9世紀前半	6B-9b・9d

表13 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
56	171	土師器	羽釜	第9-3面 323流路	鏝径:29.4 残存器高:6.1	鏝部1/2
	172	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:13.65 残存器高:2.65	若干
	173	須恵器	杯身	第9-3面 323流路	口径:13.9 器高:3.6~4.0	ほぼ完形
	174	木製品	用途不明	第9-3面 323流路	最大長:35.5 最大幅:15.6 最大厚:8.0	
	175	土師器	甕	第9-3面 323流路	復元口径:9.5 器高:5.2	1/4弱
	176	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:10.9 残存器高:3.1	1/6弱
	177	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:10.7 残存器高:3.3	1/6弱
	178	土師器	杯	第9-3面 323流路	復元口径:14.4 残存器高:2.55	若干
	179	土師器	杯	第9-3面 323流路	口径:11.6 器高:3.1	約3/4
	180	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:12.4 残存器高:2.5	約1/6
	181	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:13.8 残存器高:3.5	約1/8
	182	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:13.8 残存器高:3.2	約2/3
	183	須恵器	高杯	第9-4面 323流路	脚部裾径:12.0 残存器高:7.3	脚部1/4
	184	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:12.7 器高:2.9	1/3弱
	185	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:12.2 残存器高:2.8	約1/4
	186	土師器	杯	第9-4面 323流路	口径:13.15 残存器高:2.5	3/4弱
	187	土師器	甕	第9-4面 323流路	復元口径:10.9 残存器高:6.8	1/3弱
57	188	土師器	鍋	第9-4面 323流路	復元口径:38.6 残存器高:5.5	口縁部1/8
	189	土師器	羽釜	第9-4面 323流路	復元口径:26.5 残存器高:7.85	口縁~鏝部1/4
	190	土師器	鍋	第9-4面 323流路	鏝径:30.0 残存器高:4.25	鏝部1/5弱
	191	土師器	甕	第9-4面 323流路	厚:0.45~0.55	把手部のみ
	192	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	最大長:9.8 最大幅:6.5 最大厚:3.55	
	193	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	残存長:4.1 最大幅:1.8 最大厚:1.35	
	194	金属器	鎌	第9-4面 323流路	最大長:10.6 最大幅:2.1 最大厚:0.15	
	195	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	残存長:101.9 最大幅:9.9 厚:1.0~1.8	
	196	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	残存長:50.9 最大幅:9.9 最大厚:3.2	
	197	土師器	杯	第9-4面 323流路	口径:15.4 残存器高:2.3	約1/5
	198	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:12.4 器高:2.3	約1/4
	199	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:13.6 器高:2.3	約1/4
	200	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:13.0 器高:2.6	約1/5
	201	土師器	高杯	第9-4面 323流路	口径:7.5 器高:5.45~6.0	約1/2

特徴	備考	時期	地区
鏝と口縁部付近のみ残存。口縁部付近の内面にハケ調整が残るが、外面はヨコナデ、内面のハケ調整より下の部分はナデ調整で仕上げる。外面にスス附着。	第9-2b層	8世紀～9世紀前半	6B-9g
内面と立ち上がりから口縁にかけての外面はヨコナデ。底部外面は指オサエ後ナデ。内面に放射状暗文を施す。口縁端部にわずかに面を作り出す。	第9-2b層	8世紀前半か	6B-9b
内外面とも回転ナデ。底部内面のみナデ調整を施す。	第9-2b層	8世紀後葉	6B-9b
丸太を大雑把にみかん割りしたような形状を呈する。	第9-2b層		6B-9b
小型。底部は内外面ともナデ、口縁部と内面はヨコナデ、外面は指オサエ後ナデ。粘土の接合痕が残存する。内面には全体に薄くスス附着。外面には黒斑あり。	第9-2b層	6世紀後半～7世紀初頭	6B-9b
内面と立ち上がりから口縁にかけての外面はヨコナデ、それ以外の外面は指オサエの後ナデ調整。口縁部内面をわずかに内弯させる。内面に放射状暗文。	第9-2b層	8世紀	6B-9b
内面と、口縁部外面はヨコナデ。それ以外の外面は指オサエ後ナデ。内面に放射状暗文を施す。口縁端部を上方につまみあげ、口縁端部にわずかに内弯する面をつくる。外面の口縁からやや下がった部分に先端が尖っているか、または薄い工具によるとみられる短い細線が並ぶ。	第9-2b層	8世紀	6B-9b
内面と口縁部外面はヨコナデ、それ以外の外面は指オサエ後ナデ。内面に斜放射状暗文。	第9-2b層	8世紀前半	6B-9b
立ち上がりから口縁にかけては内外面ともヨコナデ。底部内面の調整は不明だが、外面は指オサエ後ナデ。外面には体部上半に所々ミガキ。内面には2段の斜放射状暗文を密に施す。	第9-2b層	8世紀前半	6B-9f
内面と立ち上がりから口縁にかけての外面は知ヨコナデ。それ以外の外面は指オサエ後ナデ。内面には斜放射状暗文。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9d
口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は指オサエ、ナデ後ハケ調整。内面は磨滅により調整は不明だが、放射状暗文あり。	第9-3b層	8世紀	6B-9c
内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後、大雑把なナデ調整で仕上げる。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9d
脚部のみ残存。内外面とも回転ナデで仕上げる。脚柱部中ほどに凹線を巡らす。	第9-3b層	7世紀前葉か	6B-9c
内面と口縁部外面はヨコナデ。それ以外の外面は指オサエ後大雑把なナデ。内面は斜放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。口縁をやや上方につまみ上げ、口縁端部にわずかに凹面をつくりだす。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9g
内面と、立ち上がりから口縁にかけての外面はヨコナデ。底部外面は指オサエ後、大雑把なナデ調整を施す。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9b
外面に墨書かすかに有り。内面と口縁部外面はヨコナデ。それ以外の外面は指オサエ後大雑把なナデ調整を施す。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9f
小型。頸部から口縁にかけてはヨコナデ。体部内面はヘラケズリ後ナデ、外面は指オサエ後大雑把なナデ調整。	第9-3b層	古代	6B-9d
口縁部付近のみ残存。体部内面はヘラケズリ後ヨコナデ、外面は指オサエ後ハケ調整。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。	第9-3b層	9世紀	6B-9c
鏝から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。口縁部内面はその後ハケ調整。体部外面はハケ、内面はナデ調整で仕上げる。鏝から口縁にかけて、粘土の接合痕が顕著。鏝下面にスス附着。	第9-3b層	8世紀～9世紀前半	6B-9c
鏝のみ残存。外面はヨコナデ、内面は指オサエ後板ナデで仕上げる。鏝下面にスス附着。	第9-3b層	8世紀～9世紀前半	6B-9d
把手はナデ、それ以外の外面はハケ。内面はナデ調整で仕上げるが、把手の接合痕とみられる粘土のくぼみが残存する。	第9-3b層	5世紀後半	6B-9d
角柱状。平坦な面が作り出されるが、加工痕は認められない。	第9-3b層		6B-8e
棒状。平坦面に平行する浅い溝状の凹凸が多数認められる。上端部と側面は丁寧に面取りされる。	第9-3b層		6B-9d
刃のみ。錆化による刃こぼれがすすむ。	第9-3b層		6B-9f
板状。加工痕は認められない。	第9-3b層		6B-9d
板状。加工痕は認められない。	第9-3b層		6B-9f
内外面ともナデ調整で仕上げるが、底部外面に指オサエの痕跡が残る。内面に斜放射状暗文を施した後、見込みに螺旋状暗文を入れる。口縁をやや上方につまみ上げ、口縁端部にわずかに凹面を作り出す。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9d
内面に朱書きあり。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後大雑把なナデ。内面に斜放射状暗文を施した後、螺旋状暗文を入れる。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9e
立ち上がりから口縁にかけての外面と、内面はヨコナデ。底部外面は指オサエ後大雑把なナデ。内面に斜放射状暗文を施した後、見込みに螺旋状暗文を入れる。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9b
内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデ。内面に斜放射状暗文を施した後、螺旋状暗文を入れる。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9e
小型。手捏ね成形とみられ、外面は指オサエの痕跡顕著。杯部内面はナデ調整。脚部外面は縦方向の強いナデ。脚部内面も指オサエの痕跡顕著。	第9-3b層	古代	6B-9d

表14 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
57	202	土師器	高杯	第9-4面 323流路	復元脚部径:10.5 残存器高:6.75	脚部1/6
	203	須恵器	杯身	第9-4面 323流路	口径:9.2 器高:3.1~3.5	ほぼ完形
	204	須恵器	杯身	第9-4面 323流路	復元口径:9.8 器高:3.2	1/2弱
58	205	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	残存長:21.8 最大幅:10.95 最大厚:3.2	
	206	木製品	用途不明	第9-4面 323流路	残存長:20.8 最大幅:7.3 最大厚:3.05	
	207	土師器	杯	第9-4面 323流路	復元口径:10.2 器高:2.5	約1/4
	208	須恵器	甕	第9-4面 323流路	復元口径:19.8 残存器高:18.5	上半部2/5弱
	209	須恵器	杯身	第10面 337ピット	口径:14.0~14.3 器高:4.0	完形
68	210	土師器	甕	第10面	復元口径:14.2 残存器高:5.15	口縁部1/4
	211	須恵器	杯身	第10面	口径:11.3 残存器高:3.3	ほぼ完形
	212	石製品	砥石	第10層	残存長:8.5 最大幅:5.5 最大厚:2.55 重:178.3	
	213	石製品	石庖丁	第10層	最大長:13.3 幅:4.2 最大厚:0.85 重:85.2	
	214	土師器	壺	第10層	復元口径:11.0 残存器高:8.6	上半部1/5弱
	215	土師器	杯	第10層	口径:10.6 器高:3.9	1/2強
	216	土師器	高杯	第10層	脚部径:2.2 残存器高:1.9	脚部1/2弱
	217	須恵器	壺	第10層	復元体部径:18.0 残存器高:12.5	体部4/5
	218	須恵器	壺	第10層	復元口径:18.5 残存器高:5.6	口縁部1/5
	219	須恵器	杯身	第10b面 349ピット	復元口径:11.6 器高:3.3	約1/2
	220	木製品	用途不明	第10層	残存長:39.7 最大幅:9.8 最大厚:2.4	
	221	木製品	用途不明	第10層	残存長:30.5 残存幅:9.8 厚:1.4~5.7	
222	木製品	用途不明	第10層	残存長:52.6 最大幅:11.25 最大厚:3.5		
69	223	土師器	甕	第10b面 342流路	復元口径:12.8 残存器高:12.0	約1/3
	224	土師器	甕	第10b面 342流路	復元口径:15.0 残存器高:3.5	口縁部1/6
	225	須恵器	壺	第10b面 342流路	体部径:26.0 残存器高:17.7	頸~体部3/5
	226	土師器	鉢	第10b面 342流路	復元口径:10.4 残存器高:6.6	約1/4
	227	土師器	壺	第10b面 342流路	復元口径:10.1 残存器高:4.8	口縁部1/4
	228	須恵器	壺	第10b面 342流路	頸部径:13.6 残存器高:13.0	約1/3
	229	須恵器	蓋	第10b面 342流路	口径:12.4 残存器高:4.3	ほぼ完形
	230	須恵器	壺蓋	第10b面 342流路	復元口径:12.8 器高:3.5	約1/2
	231	須恵器	杯身	第10b面 342流路	復元口径:13.0 残存器高:5.0	約1/8
	232	須恵器	杯身	第10b面 342流路	口径:17.0 器高:4.5	約4/5
	233	土師器	高杯	第10b面 342流路	復元口径:25.0 残存器高:6.8	杯部1/4

特徴	備考	時期	地区
脚部のみ残存。全体に磨滅が進み、調整は不明だが、脚柱部内面にシボリメあり。	第9-3b層	7世紀前葉	6B-9g
底部から体部1/3までは回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデを施すが、底部内面に一方方向のナデを加えて仕上げる。	第9-3b層	7世紀中葉	6B-9d
底部外面にヘラオコシの痕跡が顕著に残る。それ以外は回転ナデ。	第9-3b層	7世紀後半	6B-9b
板状。丁寧に面を作り出すが、加工痕は認められなかった。	第9-3b層		6B-8g
屈曲する部分は、素材の形状を生かしたものと考えられるが、全体に丁寧な面取りが施されている。	第9-3b層		6B-9c
内面と、立ち上がりから口縁にかけての外表面はヨコナデ、底部外面は指オサエ後ナデ。内面は斜放射状暗文を施した後、螺旋状暗文を入れる。	第9-3b層	8世紀前半	6B-9c
頸部から口縁にかけては内外面とも回転ナデ。体部外面はタタキ後カキメ調整、頸部直下に逆T字形のヘラ記号あり。体部内面には当て具の痕跡が残存する。頸部内面にヘラ状の工具があたったような痕跡残存。	第9-3b層	9世紀か	6B-9c
内外面ともおおむね回転ナデで仕上げるが、高台畳付けと底部外面はナデ調整。全体に黒色もしくは暗緑色の自然釉がかかる。	第9-4層	9世紀か	7B-1g
頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ調整で仕上げる。外面スス付着。		5世紀前葉か	7B-3f
底部から体部中ほどにかけての外表面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ。底部外面に焼成前線刻あり。		6世紀後葉～7世紀初頭	7B-1g
柱状。上下端とも折損する。よく使い込まれており、使用面はなめらかな凹面を呈する	砂岩		6B-8d
丁寧に研磨されるが、穿孔部に敲打痕が残存する。背面に部分的に二次使用の痕跡あり。	緑色片岩	弥生時代	7B-3d
磨滅が進んでおり、内外面とも最終調整は不明だが、体部内面に指オサエの痕跡、頸部に粘土接合痕残存。		5世紀前葉	7B-3b
体部外面ケズリ後大雑把なナデ、内面は板ナデ後ナデ。口縁部は内外面ともヨコナデか。		5世紀前葉か	6B-8g
小型。脚部のみ残存。手捏ね成形のため、外面指オサエの痕跡顕著。脚部内面ナデ調整。			6B-8e
体部のみ残存。内面は回転ナデで仕上げるが、底部に指オサエの痕跡残る。外面底部は指オサエ後大雑把なナデ調整で仕上げるが、上半部はカキメ調整、底部周辺は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。		9世紀か	6B-10b
頸部から口縁にかけてのみ残存。内外面とも回転ナデで仕上げる。内面に自然釉が付着する。		5～6世紀	6B-8d
底部外面は調整が不十分で雑に仕上げる。おそらく回転糸切り後、指オサエでしあげたとみられ、粘土の残片が付着したままになっている。それ以外は回転ナデで仕上げる。底部内面に一方方向のナデ調整あり。	第10層	7世紀前半	6B-10e
板状。全体に炭化している。			6B-8d
板状。中央にホヅ穴有り			6B-10d
板状。片方の端部が炭化する。			7B-1f
外面は体部がハケ調整、口縁部は指オサエ後ヨコナデ、内面は口縁部が指オサエ後ハケ、体部はヘラケズリで仕上げるが、ケズリの及ばない部分には指オサエの痕跡が顕著に残る。内外面とも薄くスス付着。	第10層	6世紀か	7B-1f
外面はハケ調整の後、口縁部はヨコナデ。内面は体部がヘラケズリ。それ以外の箇所は磨滅により調整不明。	第10層	5世紀	7B-1f
内外面とも回転ナデで仕上げるが、外面には所々タタキの痕跡が残る。頸部から口縁にかけての内面と、外面体部上半に自然釉がかかる。	第10層	6世紀	6B-10d
内外面とも丁寧なヨコナデで仕上げる。	第10層	5世紀	6B-10d
頸部から口縁にかけては内外面とも丁寧なヨコナデで仕上げる。体部はわずかにしか残存せず、調整方法は不明。内外面とも薄くスス付着。	第10層	5世紀	7B-1g
下半部と口縁部欠損。内面は回転ナデ、外面は頸部が回転ナデ、体部はカキメ調整で仕上げるが、体部内面には当て具痕、外面にはタタキの痕跡が残る。	第10層	5世紀	7B-1g
おおむね回転ナデで仕上げるが、つまみの接合により器壁が厚くなっている部分の内面には、回転ナデが及ばず、ナデの痕跡が認められる。外面に薄く自然釉がかかる。	第10層	6世紀	6B-10e
頂部から器高1/3あたりまで回転ヘラケズリが及ぶが、それ以外はナデ調整で仕上げる。平行する短い沈線が2本あり。	第10層	6世紀	7B-1g
外面の底部から体部の中ほどまで回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデで仕上げる。	第10層	5世紀	6B-10d
外面の底部から体部の2/3あたりまで回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデで仕上げる。体部外面に線刻が1本あり。	第10層	5世紀	7B-1d
杯部のみ残存。内面はヨコナデ、外面は段から口縁にかけてはヨコナデ、段から下は指オサエ後大雑把なナデ調整。その後内外面ともジグザグにミガキを施す。外面は全体に薄くスス付着。	第10層	4世紀	7B-1g

表15 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
69	234	土師器	高杯	第10b面 342流路	残存器高:2.7	若干
	235	土師器	高杯	第10b面 342流路	残存器高:3.5	杯部1/10強
	236	土師器	高杯	第10b面 342流路	脚部径:9.3 残存器高:6.3	約3/4
	237	土師器	高杯	第10b面 342流路	脚部径:9.0 残存器高:6.0	約3/4
	238	土師器	高杯	第10b面 342流路	脚部径:9.3 残存器高:6.8	約1/2
70	239	木製品	鋤	第10b面 342流路	残存長:95.6 残存鋤先幅:10.3 柄径:2.5~2.9	
	240	木製品	織具	第10b面 342流路	残存長:38.7 最大幅:7.2 最大厚:1.3	
	241	木製品	矢板?	第10b面 342流路	最大長:49.2 最大幅:9.6 最大厚:1.25	
	242	金属器	鉄鏃	第10b面 342流路	残存長:13.2 幅:0.5~0.9 厚:0.2~0.3	
	243	木製品	用途不明	第10b面 342流路	最大長:44.2 最大幅:12.4 最大厚:1.95	
	244	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:45.1 最大幅:15.7 最大厚:2.0	
	245	木製品	杭?	第10b面 342流路	最大長:78.0 最大幅:7.7 厚:2.5~3.4	
	246	木製品	用途不明	第10b面 342流路	最大長:55.5 最大幅:6.8 最大厚:1.9	
	247	木製品	杭	第10b面 342流路	残存長:64.0 最大幅:9.3 厚:3.5~7.6	
	248	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:43.9 最大幅:5.4 最大厚:1.8	
	249	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:37.7 最大幅:3.9 最大厚:2.7	
	250	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:38.7 幅:5.0~7.7 最大厚:2.0	
	251	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:33.5 最大幅:8.1 最大厚:1.9	
	252	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:29.2 最大幅:4.4 最大厚:2.0	
253	木製品	杭?	第10b面 342流路	最大長:37.5 最大幅:6.2 最大厚:2.1		
254	木製品	用途不明	第10b面 342流路	残存長:63.4 最大幅:6.1 最大厚:2.6		
71	255	須恵器	壺	第10b層	復元口径:9.5 残存器高:5.65	口縁部1/2
	256	土師器	高杯	第10b層	脚部径:9.8 残存器高:6.5	脚部1/6
	257	須恵器	杯	第10b層		若干
	258	石器	サヌカイト石核	第10b面	残存長:2.45 最大幅:3.5 最大厚:0.45 重:9.2	
	259	土師器	高杯	第10b面	脚部径:9.0 残存器高:6.1	脚部3/4
	260	土師器	壺	第10b面	復元口径:7.5 器高:8.9	約3/4
	261	土師器	甕	第10b面	復元口径:10.0 残存器高:6.8	約1/3
	262	須恵器	横瓶	第10b面	最大長軸胴部径:32.8 残存器高:24.2	体部2/5
	263	土師器	甕	第10b面	復元口径:31.8 残存器高:4.08	口縁部1/8弱
	264	木製品	用途不明	第10b面	最大長:54.5 最大幅:3.6 最大厚:1.65	
	265	金属器	銅鏃	第10b層	最大長:3.4 最大幅:1.3 最大厚:0.35	完形
	266	弥生土器	手焙形土器	第10b層	復元頸部径:14.0 残存器高:11.3	下半部1/4強
	267	弥生土器	細頸壺	第10b層	口径:8.5 残存器高:19.85	約3/5

特徴	備考	時期	地区
杯底部のみ残存。立ち上がりから口縁にかけての部分は、接合部分で剥離したとみられ、接合前につけられたハケ調整が残る。杯の内外面はハケ後ナデ調整で仕上げる。	第10層	5世紀	7B-1f
杯の部分のみ残存。ヨコナデ後、ジグザグにミガキを施したとみられる。	第10層	5世紀	7B-3e・4e
脚部のみ残存。穿孔3箇所。外面は丁寧なミガキで仕上げられるが、わずかにハケ調整の痕跡残る。脚柱部内面はナデ後穿孔。ナデの及ばない部分にシボリメが残存する。裾部内面は指オサエ後ナデで仕上げるが、脚柱部との境界あたりにヘラケズリの痕跡有り。	第10層	5世紀	7B-1f
脚部のみ残存。穿孔2箇所。外面は丁寧なミガキ、脚柱部内面は穿孔後ナデ調整で仕上げるが、裾にかけて、ナデの及ばない部分には指オサエやハケ調整痕が残る。	第10層	5世紀	6B-10d
脚部のみ残存。穿孔2箇所。外面は丁寧なミガキ。内面はナデ調整で仕上げるが、脚柱部にシボリメが顕著に残る他、裾部との境界部分にハケ調整の痕跡残る。調整後、穿孔する。	第10層	5世紀	6B-10e
柄の先端に平面形が台形の把手を柄結合する。	第10層		6B-10d
丁寧に面取りされるが、側面に糸の圧痕等は認められない。	第10層・経巻具		7B-2d
板状。全体に丁寧に面が作り出されており、片方をV字状に整形している。	第10層		7B-1d
茎が途中で折損するが、錆化がそれほど進まず、保存状態は良好である。	第10層		7B-2d
板状。一部炭化する箇所有り。	第10層		7B-1f
板状。穿孔が4箇所認められる。	第10層		7B-2d
角材状で、片方の端部を尖らせる	第10層		7B-2d
板状	第10層		6B-10e
棒状で、片方の先端部を尖らせる。一部炭化する箇所有り。	第10層		6B-10e
板状	第10層		7B-1f
角材状	第10層		7B-1d
板状で、加工痕が部分的に認められる。	第10層		7B-2d
板状	第10層		7B-1f
角材状	第10層		6B-9g
板状で片方の端部を尖らせる。全体に加工痕が認められる。	第10層		7B-1f
角材状	第10層		7B-2d
頸部付近から口縁部のみ残存。頸部より上は内外面とも回転ナデ。体部内面は指オサエ後ナデの痕跡が認められるが、外面は自然釉がかけり、調整不明。		6世紀中葉	6B-8d
脚部のみ、穿孔2箇所。外面はハケ後面取り風に縦方向の丁寧なナデ。穿孔後、脚柱部内面を板ケズリで平滑にするが、裾部付近にシボリメが残存する。裾部は丁寧なナデで仕上げる。		5世紀前葉	6B-10d
「十」字形とみられる線刻あり、拓本のみ掲載			6B-8g
剥離面の風化の度合いに2種類ある。サヌカイト石核が、時期を経て再利用された可能性がある。左面中央部の剥離は、下辺部分を台において、上辺中央を垂直方向に撃ち欠く動作によって生じたと見られる。	サヌカイト	弥生時代	7B-1c
脚部のみ残存。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリにより多面体に仕上げ、内面はヨコナデで仕上げるが、シボリメの痕跡わずかに残る。裾部は内外面ともナデ調整で仕上げるが、内面にはハケ調整の痕跡あり。		5世紀前葉	7B-1d
頸部から口縁にかけてはヨコナデで仕上げる。体部下半にはヘラケズリの痕跡と、ケズリのおよばない部分に指オサエの痕跡あり。体部内面下半にも指オサエの痕跡顕著。所々に粘土の接合痕あり。全体に磨滅しており、体部の調整痕は不明瞭。外面に一部薄くスス付着。		5世紀前葉	6B-10f
底部欠損、小型。頸部から口縁にかけては内外面ともヨコナデとみられるが、表面の剥落により体部の最終調整は不明である。ただ頸部外面と、体部内面にケズリの痕跡が認められる。		5世紀前葉	6B-10f
内面には当て具痕、外面にはタタキの痕跡が顕著。胴端部にはタタキ痕の上からカキメを施す。		6世紀	6B-9f
頸部から口縁にかけてのみ残存。外面は指オサエ後ナデ調整。内面はハケ調整後、頸部以下の部分にヘラケズリを施す。			6B-10f
棒状。			6B-10c
保存状態は良く、銅特有の光沢が残る。		弥生時代	7B-1d
内外面ともハケ調整し、部分的にその後ナデ調整を加える。		弥生時代後期	6B-8e
外面は口縁部がヨコナデ、頸部から体部にかけては丁寧なミガキを施すが、体部下半にはハケ調整の痕跡が残存する。内面は頸部直下にわずかにシボリメがみられるほか、体部に指オサエの痕跡が残るが、口縁部と体部はハケ調整で仕上げる。頸部内面はナデ調整で仕上げる。		弥生時代後期	6B-8f

表16 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
72	268	弥生土器	甕	第10b層	復元口径:16.7 残存器高:5.8	
	269	土師器	高杯	第10b層	口径:17.1 残存器高:4.95	杯部3/4
	270	土師器	甕	第10b層	復元口径:15.8 残存器高:4.3	口縁~頸部1/6強
	271	須恵器	杯蓋	第10b層	口径:12.2 器高:4.1	1/2弱
	272	土師器	壺	第10b層	復元口径:8.0 器高:6.35	約2/3
	273	土師器	杯	第10b層	復元口径:13.1 器高:4.1	約1/4
	274	土師器	杯	第10~11-1層	復元口径:18.8 残存器高:5.1	口縁部1/5弱
	275	土師器	甕	第10b面~11-1面 370溝	最大胴部径:19.0 残存器高:17.45	1/2弱
	276	土師器	小型器台	第10b面~11-1面 370溝	復元脚部径:12.9 残存器高:5.4	脚部若干
	277	土師器	高杯	第10~11-3層	脚部径:14.4 残存器高:8.8	脚部4/5強
	278	木製品	用途不明	第10層以下	残存:37.5 最大幅:6.2 最大厚:1.9	
81	279	木製品	杭	第11-2面 367堰	残存長:96.7 幅:3.6~5.5 厚:3.5~5.5	
	280	木製品	田下駄の一部か	第11-2面 369水路 上部	残存長:35.4 最大幅:3.3 最大厚:2.6	
	281	木製品	用途不明	第11-2面 366水路	残存長:39.0 最大幅:7.0 最大厚:2.7	
	282	木製品	用途不明	第11-2面 368水路	残存長:42.6 直径:4.1~7.9	
	283	弥生土器	甕	第11-2面 364流路	底部径:4.65 残存器高:4.6	底部1/2
	284	弥生土器	壺	第11-3面 364流路	最大胴部径:11.0 残存器高:11.3	1/2弱
	285	弥生土器	甕	第11-3面 365水路	底部径:4.2 残存器高:2.4	底部のみ
	286	弥生土器	高杯	第11-3面 365水路	復元口径:16.2 残存器高:3.25	口縁部1/10
	287	弥生土器	甕	第11-3面 365水路	復元口径:13.0 残存器高:4.9	口縁部1/5弱
	288	弥生土器	高杯	第11-3面 366水路	復元口径:20.7 推定器高:14.0	1/2弱
	289	石器	敲打具	第11-2面 364流路 か366水路	最大長:12.7 最大幅:6.4 最大厚:1.3 重: 181.9	
82	290	土師器	甕	第10b~11-1層	復元口径:15.8 残存器高:4.9	口縁部1/5弱
	291	土師器	壺	第10b~11-1層	復元口径:8.95 器高:7.45	9/10弱
	292	弥生土器	甕	第11-2層	復元底径:4.2 残存器高:5.8	底部3/5
	293	弥生土器	甕	第11-2層	底径:4.45 残存器高:3.2	底部のみ
	294	石器	サヌカイト 剥片	第11-3層	最大長:3.05 最大幅:3.1 最大厚:0.4 重: 4.1	
	295	土師器	壺	第10b~11-3層	復元口径:9.2 器高:7.55	4/5強

特徴	備考	時期	地区
磨滅により調整痕は不明瞭だが、体部外面にタタキ、口縁部内面にハケ調整の痕跡あり。体部内面には強いナデにより、指オサエ様のくぼみがある。頸部から口縁にかけての外面に薄くスス付着。	生駒西麓産胎土	弥生時代後期以降	6B-9c
杯部のみ残存。外面はヨコナデ。内面の調整は磨滅により不明。		3世紀末～4世紀前葉	6B-8g
体部内面の、頸部よりやや下がったところでヘラケズリの痕跡あり。それ以外の部分はヨコナデで仕上げる。外面にわずかにスス付着。		3世紀後葉～4世紀	6B-10g
頂部から天井部1/3あたりまで回転ヘラケズリ。それ以外は回転ナデで仕上げる。		5世紀	6B-10b
体部外面は下半部を板ケズリで整形後ナデ調整で仕上げるが、底部には指オサエの痕跡が残る。体部内面もナデ調整で仕上げるが、体部上半に指オサエの痕跡残る。頸部から口縁にかけてはヨコナデ。		5世紀前葉	7B-2f
内面と、立ち上がりから口縁にかけての外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後大雑把なナデ。内面に放射状暗文を施した後、螺旋状暗文を入れる。		7世紀前半	6B-9e
内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は指オサエ後ナデ調整。その後外面全体に粗いミガキを施す。	土層観察用トレンチ出土	7世紀前半か	7B-1c
口縁部欠損。外面には細かいタタキ、内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。外面下半にはタタキ後ハケ調整を施したとみられるが、表面の剥落により、不明瞭。全体にススが付着するが、外面は特に顕著。	生駒西麓産胎土	3世紀	7B-3f
脚部のみ残存。穿孔2箇所。内外面とも磨滅により、調整痕はとらえにくい。外面はおそらくヨコナデ。杯との接合部が残存しており、ハケ状の工具を放射状に押し付けた刻みが残存する。		3世紀	7B-3f
脚部のみ残存。外面は磨滅により最終調整は不明だが、脚柱部に縦方向のナデを施した痕跡あり。脚柱部内面はヨコナデ調整を施すが、およばない部分にはシボリメが残存するのに加え、裾部はハケ調整。それらの後穿孔。	土層観察用トレンチ出土	3世紀前葉	6B-10d
板状、一端を尖らす			6B-10d
自然木の先端のみを尖らす。			6B-9a
上下端とも欠損。			7B-1g
板状。			6B-9d
棒状。断面が円形になるように全体を丁寧に加工。			6B-9d
底部のみ残存。体部外面はタタキ、内面はハケ調整で仕上げる。体部外面はスス付着顕著。		弥生時代後期	6B-9d
口縁部欠損。外面はハケ後ミガキ、内面は磨き調整で仕上げる。内外面とも体部上半で磨滅が進む。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-9c
底部外面に靱圧痕あり。体部外面にタタキ、内面にハケ調整の痕跡がかるうじて認められる。		弥生時代後期	6B-9d
杯部のみ残存。口縁部はおそらく内外面ともヨコナデ。外面は磨滅により最終調整は不明だが、わずかにヘラケズリの痕跡あり。内面は板ナデ後ミガキ調整。		弥生時代後期	6B-10e
全体に磨滅がすすみ、調整痕は不明瞭だが、体部外面と口縁部内面にハケ調整、内面頸部直下に指オサエの痕跡がみとめられる。頸部内面に粘土の接合痕跡が明瞭に残る。外面に薄くスス付着。		弥生時代後期	6B-9d
屈曲部付近から口縁にかけては内外面ともヨコナデ。それより下の杯部外面はナデ調整。杯部内面にはジグザグのヘラミガキを放射状に施す。脚柱部外面は縦方向のヘラケズリ後ナデ、内面は縦方向の強いナデ、裾部は内外面ともヨコナデで仕上げる。脚柱部内面にはわずかにシボリメの痕跡有り。		弥生時代後期	6B-7e
砥石を転用したものか。片面に研磨面あり。それ以外には側縁部に使用痕が認められる。	結晶片岩		6B-8d
頸部より上は内外面ともヨコナデ。体部内面にケズリの痕跡が明瞭に残る。		古墳時代前期以降	6B-10g
小型。口縁部内外面と、体部上半はヨコナデ、体部下半外面は横方向のケズリ調整で仕上げる。体部内面はナデ調整で、上半部は強い横ナデのため、指オサエ様の痕跡が残る。		3～4世紀	6B-10g
外面は丁寧にミガキ、内面はナデ後大雑把なミガキ調整。底部外面は指オサエ後ナデ。外面は全体に薄くスス付着。		弥生時代中期	6B-8f
全体に器壁が磨滅しており、調整痕は不明瞭。外面にタタキ、内面にはケズリの痕跡が認められる。		弥生時代後期	7B-4d
右図側が主要剥離面である。その裏面の最終剥離面も、主要剥離面と打点、打撃方向がほぼ一致することから、連続的に行われた打撃動作で生じた剥片のうちの一片であることがわかる。	サヌカイト		7B-4c
小型。口縁部内外面と、体部上半はヨコナデ、体部下半外面は横方向のケズリ調整で仕上げる。体部内面はナデ調整で、上半部には指オサエの痕跡、下半部には板ナデの痕跡が残る。		3～4世紀	7B-1f

表17 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
82	296	石器	サヌカイト剥片	第11-3層	最大長:2.95 残存幅:1.85 最大厚:0.45 重:1.7	
	297	弥生土器	甕	第11-3層	復元底径:14.7 残存器高:11.8	口縁部1/10強
	298	弥生土器	手焙形土器	第11-3層	復元胴部径:21.7 残存器高:11.0	鉢部1/5強
	299	弥生土器	壺	第11-1~12層	復元口径:15.7 残存器高:20.4	1/5弱
90	300	弥生土器	壺	第12層	復元口径:11.0 残存器高:4.25	口縁部1/5
	301	弥生土器	甕	第12層以下	復元口径:23.8 残存器高:7.8	口縁部1/5
	302	弥生土器	甕	第12b層	残存器高:7.7	口縁部若干
	303	弥生土器	甕	第12層以下	残存器高:5.7	口縁部若干
	304	弥生土器	壺	第12b層	底径:7.0 残存器高:7.7	底部のみ
	305	弥生土器	甕	第12b層	復元口径:15.8 残存器高:4.65	口縁部1/10
	306	木製品	棺材か	第12b層	最大長:161.2 最大幅:33.4 最大厚:2.4	
91	307	石器	石庖丁	第12層	残存長:7.3 残存幅:4.85 最大厚:0.45 重:30.2	約1/2
	308	石器	サヌカイト剥片	第12b層	最大長:2.7 最大幅:3.9 最大厚:0.85 重:4.0	
	309	石器	鏃	第12b層	最大長:5.35 最大幅:1.55 最大厚:0.5 重:3.1	完形
	310	石器	不定形刃器	第12b層	最大長:10.6 最大幅:4.3 最大厚:1.1 重:60.3	完形
101	311	石器	サヌカイト剥片	第13面	最大長:2.6 最大幅:2.35 最大厚:0.25 重:2.1	
	312	石器	鏃(錐に転用)	第13層	最大長:3.2 最大幅:1.5 最大厚:0.5 重:2.1	完形
	313	石器	石庖丁	第13層	残存長:9.5 残存幅:5.3 最大厚:0.75 重:57.5	1/2強
	314	石器	不定形刃器	第13層	残存長:10.7 残存幅:5.3 最大厚:0.85 重:72.4	
	315	石器	磨製石斧	第13層	残存長:14.95 最大幅:4.4 残存厚:1.7 重:142.2	
	316	木製品	用途不明	第13層	最大長:13.7 最大幅:12.2 最大厚:2.2	
	317	木製品	伐採斧の柄	第13層	最大長:58.0 最大幅:5.9 最大厚:2.3	

特徴	備考	時期	地区
右図側は主要剥離面だが、打ち欠かれた際の衝撃で、剥片の両端部が折損したとみられる。	サヌカイト		7B-4d
口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ調整。体部内面はケズリ後大雑把なナデ調整、外面はタタキ後、大雑把なハケ調整で仕上げる。		2～3世紀	7B-3b
外面は貼り付け突帯から上の部分はハケ調整で仕上げるが、ハケがあたらなかった部分に、わずかにタタキの痕跡残る。底部はケズリ後、大雑把なナデ調整で仕上げる。内面はナデとハケ調整で仕上げるが、覆いの部分にはナデがおよぼず、ケズリの痕跡が顕著に残る。		3～4世紀	7B-4a
下半部欠損。全体に磨滅しており、調整痕は不明瞭。頸部内面にハケ状の工具があたった痕跡、体部内面に指オサエの痕跡が残る。外面にはわずかにミガキが残存する。		弥生時代中期	6B-9e
器壁の磨滅により調整痕不明瞭。口縁部は内外面ともヨコナデとみられる。外面は櫛描き直線紋の間にミガキを施す。内面は頸部にハケの痕跡有り、体部はミガキを施すとみられる。	生駒西麓産胎土	弥生時代中期～後期	6B-8c
内外面とも全体にスス付着。口縁端部に刻目を施す。口縁部は内外面ともヨコナデを施すとみられる。体部外面は縦方向のハケ調整。内面は磨滅のため、調整痕不明瞭。	土層観察用トレンチ出土、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-3c
内面に薄くスス付着。器壁の磨滅により調整痕は不明瞭だが、体部内外面にわずかにミガキの痕跡あり。口縁端部に刻目あり。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-7g・8g
器壁の磨滅により調整痕不明瞭。口縁部は内外面ともヨコナデし、端部に刻目を施す。体部外面は縦方向のハケ調整で仕上げる。内面はケズりらしき痕跡あり。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-3d
全体にもろく、器壁の剥落がすすみ、調整痕は不明瞭だが、外面には縦方向のミガキ、内面は底部に指オサエの痕跡がわずかに認められる。	生駒西麓産胎土	弥生時代中期	6B-10b
口縁部外面はヨコナデ、内面はハケで仕上げる。体部外面にはタタキ、内面は強いナデ調整により、指オサエ様の痕跡あり。内面にわずかにスス付着。	生駒西麓産胎土		7B-4b
板状で、丁寧に平坦面が作り出される。			7B-4b
右図体部の研磨はそれほど入念ではなく、穿孔周辺には素材の摂理面の形状がうっすらと残る。左図には穿孔のやや斜め下に、再度穿孔をしかけたような痕跡が残る。刃縁には2次的な使用痕跡が認められ、当初の鋭利さを失っている。	緑色片岩		7B-2f
礫面を直接打ち欠いた際に生じた剥片である。打面調整の際に生じたものとみられる。右図は主要剥離面で、左図にみられる剥離面は、その剥離の際に生じた折損面とみられる。	サヌカイト		7B-4b
丁寧に作りで、先端部は非常に鋭利に作り出される。平面形は柳葉形でほぼ左右対称である。	サヌカイト		6B-8b
石目が縦方向になるように刃部を作り出している。刃部は両面から丁寧に作り出されている。基部と、背部の大部分に礫面を残すが、背部の先端付近には礫面がのこらなかつたためか、刃潰しをしている。	サヌカイト		7B-4d
縦長剥片の一辺に、両面から加工を加えて刃部を作り出している。打製石器の製作途中品である可能性もある。	サヌカイト（きめが粗い）		6B-10b
全体に丁寧に作りで、厚みが均一に仕上げられている。切っ先には折損の痕跡はみられないものの、先端が丸みを帯び、刃縁はこすれて鋭利さを失っていることから、鏃として使用された後、錐に転用されたものと考えられる。	サヌカイト		6B-8e
滑石に近い光沢をもち、層状の節理が顕著である。右図右側の紐孔の左下に穿孔をしかけた際のくぼみあり。左図側の面は丁寧に研磨されるが、右図側の方は研磨が大雑把で、砥石にあたらなかった部分には剥離痕跡が残る。背面は丁寧に面を作り出すが、端に近い部分では十分な厚みをとれなかつたため、形なりに研磨して仕上げる。右図の背面と刃部に、肉眼でコーングロスを認めることができる。	緑色片岩		6B-8c
大型蛤刃石斧の基部に近い部分の剥片を、再加工して刃器として使用したとみられる。凸面にあたる、右図側の面は、凸部にのみ研磨痕が認められ、くぼんだ部分には礫面が残る。このことからもとの石斧は手ごろな形状の礫を素材として作られたとみられる。図の上辺部は、折損面からも研磨を加え、刃を研ぎだしている。一方下辺部は、折損面にリタッチを加えて刃部を作り出している。その縁部には使用痕跡が認められる。	熱変形を受けた頁岩		7B-1a・1b
風化による白色化が顕著。石目と刃縁が平行する方向で石材を利用しているため、使用時の衝撃に伴い、現状のような折損をしたとみられる。右図側の面の大半が失われているが、わずかに残っている刃部の形状から見て、片刃ぎみに刃が研ぎだされていたとみられる。刃幅や全長からみても、もともとそれほど重量の大きな石斧ではなかつたと考えられることから、加工斧として製作されたのではないかと考える。	砂岩？		6B-9b
板状を呈するが、磨滅によるものか、縁は丸まっている。			7B-2b
一部炭化。腐食が進んでおり、それぞれの断片は接合しないが、出土状況から全長をとらえることができる。大型蛤刃石斧の柄である。			6B-8f

表18 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値（長さ：cm 重：g）	残存率
102	318	弥生土器	甕	第13面	口径：31.8 器高：43.8	約3/5
	319	弥生土器	壺	第13層	復元口径：35.5 残存器高：13.5	口～頸部のみ残存
103	320	弥生土器	鉢	第13層	口径：47.6 器高：33.8	約8/10
	321	弥生土器	甕	第13層	口径：19.1 器高：20.8	約9/10
	322	弥生土器	甕	第13層	口径：18.0 器高：22.1	ほぼ完形
	323	弥生土器	甕	第13層	復元口径：18.9 器高：18.0	著しく摩滅
	324	弥生土器	把手付鉢	第13層	復元口径：15.5 器高：18.0	約4/5
	325	弥生土器	壺	第13層	最大胴部径：24.5 残存器高：20.7	体部7/10
104	326	弥生土器	甕	第13層	復元底径：6.4 残存器高：8.2	底部1/5
	327	弥生土器	甕	第13層	復元口径：16.3 残存器高：3.0	口縁部若干
	328	弥生土器	壺	第13層	底径：8.0 残存器高：12.6	底部3/5
	329	弥生土器	壺	第13層	最大胴部径：26.6 残存器高：18.45	4/5弱
	330	弥生土器	壺	第13層	頸部径：11.4 残存器高：12.7	
	331	弥生土器	甕	第13層	復元口径：21.5 推定器高：24.0	約1/2
	332	弥生土器	壺	第13層	残存器高：8.3	若干
	333	弥生土器	壺	第13層	底径：8.9～9.5 残存器高：8.55	底部9/10
	334	弥生土器	甕	第13層	残存器高：17.3	若干
105	335	弥生土器	鉢	第13層	残存器高：6.5	
	336	弥生土器	甕	第13層 467大畦畔内	復元口径：34.4 残存器高：8.9	口縁部1/8
	337	弥生土器	蓋	第13層 467大畦畔内	口径：9.6 器高：2.65	ほぼ完形
	338	弥生土器	甕	第13層 467大畦畔内	復元口径：22.0 残存器高：8.8	口縁部1/5弱
	339	弥生土器	壺か	第13層 467大畦畔内	底径：9～10 残存器高：6.55	底部7/10

特徴	備考	時期	地区
全体に器壁が磨滅しており調整痕は不明瞭だが、口縁部は外面屈曲部を指オサエした後、内外面をナデ調整したとみられる。口縁端部に刻目有り。体部内面に指オサエの痕跡がわずかに認められるが、内外面ともにハケ調整で仕上げる。粘土の接合痕が認められる。		弥生時代前期	7B-2d
口縁部外面はハケ調整の後ナデ調整か。指オサエの痕跡もわずかにあり。頸部以下の外面はミガキ調整で仕上げる。内面はミガキ調整で仕上げるが、全体に磨滅しており調整痕は不明瞭。多条沈線の条数が若干異なるが、出土地点と胎土の類似性から、332と同一個体の可能性あり。		弥生時代前期	6B-10b
口縁部は内外面とも指オサエの痕跡が有り、外面はナデ調整、内面はハケ調整で仕上げる。体部外面はミガキで仕上げるが、中ほどの部分は磨滅により、調整痕は不明瞭。外部内面はミガキの後、下半は板ナデで仕上げる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-9b・10b
外面と口縁部内面は目の粗いハケ調整で仕上げる。口縁端部に刻目をもつ。内面は板ナデし、上部にナデ調整を施したと見られる。わずかにハケ調整の痕跡も残る。底部穿孔は外面から打ち欠いたもの。外面に薄くスス付着。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-9b
外面は目の細かいハケで調整した後、やわらかい繊維のたばでなでたような痕跡が見られ、底部付近にはケズリを施す部分がある。内面は板ナデ後上部にナデを施したとみられる。底部内面には指オサエの痕跡あり。口縁部はナデ調整で仕上げる。底部穿孔は外面から打ち欠いたもの。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
外面はハケ調整の痕跡がかるうじて残るが、器壁の剥落が進んでおり、内面の調整は不明である。口縁端部に刻目あり。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
器壁が磨滅しており、全体に調整痕は不明瞭。外面は底部にケズリの痕跡、胴部にミガキがわずかに認められる。内面は縦方向に強くナデた際に生じた凹凸が認められる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2b
体部は内外面とも横方向のミガキで仕上げるとみられるが、内面は磨滅により、調整痕が不鮮明。内面には成形後に、粘土を張り足して、器壁を補強したとみられる部分が2ヵ所あり。おおむね多条沈線の上端で打ち欠かれたように欠損しており、多条沈線より上の部分が残存しているのは全周の1/4弱で、その部分に1箇所穿孔あり。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10c
器壁が脆く、剥落している部分もあり、外面には縦方向のハケ調整がかるうじて認められるが、内面の調整は不明である。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
外面は全体に薄くススけている。器壁が剥落しているため、かるうじて口縁端部の刻目と沈線を認めることができたが、調整は不明。内面にはハケ調整の痕跡がわずかに残る。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2c
内外面とも器壁が磨滅するが外面は縦方向のハケ調整を施した後、ミガキ調整で仕上げたとみられる。内面には調整痕が残らないが、底部付近に板状の工具を押し付けた痕跡がかるうじて残る。外面の底部付近に薄くスス付着。		弥生時代前期	7B-2b
口～頸部欠損。外面は底部付近に指オサエの痕跡が残るが、ミガキ調整で仕上げる。内面は器壁の磨滅により、調整痕が不明瞭だが、ミガキの痕跡がわずかに認められる他、体部上半では板ナデの痕跡が認められる。底部から体部にかけて、黒班あり。		弥生時代前期	7B-2a
口縁部・体部下半欠損。頸部と体部の沈線がかるうじて認められるが、器壁の磨滅・剥落のため内外面とも調整不明。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2b
口縁部は外反が短く、反りも小さい。全体に器壁がもろく、磨滅が進み、体部内面の調整痕は不明。体部外面は縦方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10c
多条沈線の条数が若干異なるが、出土地点と胎土の類似性からみて、319と同一個体の可能性あり。		弥生時代前期	6B-10b
内面は器壁がほとんど剥離しているが、ごくわずかに残る器壁部分をみると、ミガキ調整で仕上げた可能性がある。外面はミガキ調整で仕上げる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2b
内面と体部外面にはミガキ調整の痕跡が明瞭に残る。口縁部外面は指オサエ後ナデ調整か。		弥生時代前期	7B-2a
内外面とも風化による剥落が進んでおり、調整は不明だが、かるうじて多条沈線と口縁端部を認めることができる。口縁部は外反が短く、反りも小さい。		弥生時代前期	6B-10b
外面は磨滅により調整方法は不明である。内面は口縁部はナデで、体部はミガキで仕上げると見られるが、器壁の磨滅により調整痕は不明瞭である。08-1調査区で出土した遺物(215)と同一個体の可能性があるが、接点が見つからなかったため、断定はできなかった。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
頂部に穿孔1あり。内外面ともミガキ調整で仕上げるが、内面にヘラ状の工具を押し当てたような痕跡も認められる。外面には穿孔の周囲に沈線で円を描くほか、口縁部付近にも口縁に平行するように短線が引かれる。	生駒西麓産胎土か	弥生時代前期	6B-10b
口縁の外反部分が短い。外面は縦方向のハケ調整の後、ミガキ調整で仕上げたとみられる。内面は磨滅が進んでおり、調整は不明である。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
器壁の磨滅・剥離が進んでおり、調整は不明。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b

表19 遺物観察表

図番号	遺物番号	種別	器種	遺構・層序	計測値(長さ:cm 重:g)	残存率
105	340	弥生土器	壺	第13層 467大畦畔内	残存器高:3.3	口縁部若干
	341	弥生土器	甕	第13層 470大畦畔内	復元底径:7.7 残存器高:2.95	底部1/2弱
	342	弥生土器	壺	第13層	復元口径:14.8 残存器高:5.2	口縁部1/5
	343	弥生土器	鉢	第13層 466大畦畔内	復元口径:22.2 残存器高:9.75	上半部1/10強
106	344	弥生土器	壺	第13b面 519溝	最大胴部径:30.4 残存器高:18.2	1/6弱
	345	弥生土器	壺	第13b面 489土坑	最大胴部径:32.0 残存器高:20.9	
	346	弥生土器	甕	第13b面 477溝	復元底径:7.6 残存器高:10.5	底部1/2強
	347	弥生土器	壺	第13b面 477溝	残存器高:5.8	口縁部若干
	348	弥生土器	甕	第13b面 477溝	復元口径:18.0 残存器高:9.7	約1/2
	349	弥生土器	壺	第13b層	復元口径:14.2 残存器高:5.4	口～頸部のみ残存
	350	弥生土器	壺	第13b層	復元頸部径:9.6 残存器高:4.3	若干
	351	弥生土器	壺	第13b面 519溝	復元口径:15.6 残存器高:4.2	口縁部1/6弱
	352	弥生土器	壺	第13b面 489土坑	底径:6.9 残存器高:3.5	底部のみ
	353	弥生土器	壺	第13b面 476土坑	復元頸部径:12.2 残存器高:6.7	頸部若干
	354	弥生土器	甕	第13b面 478溝	復元口径:17.0 残存器高:3.7	口縁部1/4
	355	弥生土器	高杯か	第13b面 478溝	最大径:4.1 器高:4.8	完形か
107	356	縄文土器	深鉢	第13b層	残存器高:7.5	口縁部若干
	357	縄文土器	浅鉢	第13b層	残存器高:6.8	口縁部若干
	358	石器	サヌカイト剥片	第13b層	最大長:2.8 最大幅:3.0 最大厚:0.4 重:4.1	
	359	石器	投弾か	第13b層	長軸長:4.45 短軸長:3.1 最大厚:2.05 重:14.5	
	360	木製品	用途不明	第13b層	最大長:13.6 残存幅:5.9 厚:0.9~1.35	
	361	木製品	用途不明	第13b層	最大長:20.0 最大幅:5.2 最大厚:0.7	
111	362	土製品	竈	第8層	厚:0.75~1.25	裾部
	363	土製品	竈	第8層	最大厚:1.8	脚か
	364	土製品	竈	第8層	残存器高:6.6 最大厚:2.1	脚
	365	土製品	竈	第8層	残存器高:9.25 厚:1.2~2.85	脚
	366	土製品	竈	第8b層	残存器高:7.3 厚:1.0~2.25	脚
	367	土製品	竈	第9-1層	厚:0.65~2.25	焚口部
	368	土製品	竈	第9-1層	残存器高:10.7 厚:0.8~1.7	脚
112	369	土製品	竈	第7-3層	復元口径:29.9 残存器高:10.5 厚:0.7~1.55	掛口
	370	土製品	竈	第7-2層	厚:0.7~1.2	掛口
	371	土製品	竈	第8層	厚:1.1~1.85	掛口

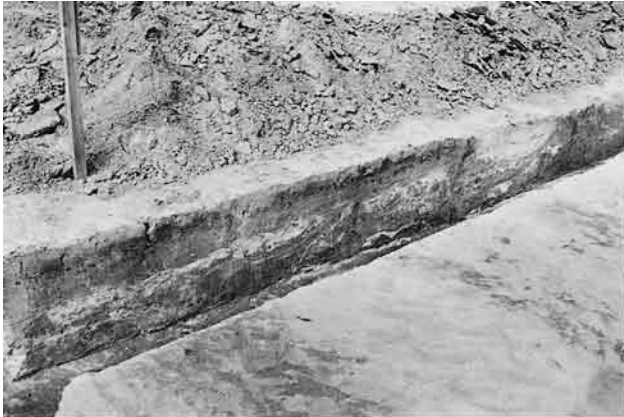
特徴	備考	時期	地区
器壁の磨滅・剥離がすすんでおり、調整痕は不明瞭だが、外面はおそらく横方向のミガキ調整で仕上げたとみられる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
器壁の磨滅・剥離が進んでおり、調整は不明。		弥生時代前期	7B-2b
内外面とも調整痕が明瞭。外面はミガキ調整、内面はハケ後ミガキ調整で仕上げる。焼成前穿孔が1箇所残存。		弥生時代前期	7B-4c
口縁部外面に指オサエと、それを板状の工具で押さえた痕跡が残ることから、外面は板ケズリもしくは板ナデで成形した後、ミガキ調整で仕上げたとみられる。内面はミガキ調整で仕上げる。	生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-3d
口～頸部欠損。器壁の磨滅・剥落が進んでおり、調整は不明。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
器壁の磨滅・剥落が進んでおり、調整は不明。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2a
底部に焼成後穿孔あり。底部外面と内面は全体に薄くスス附着。器壁が磨滅しており調整痕は不明瞭だが、外面はケズリの後、ミガキ調整で仕上げたとみられる。内面もミガキで仕上げたと見られる他、底部に指オサエの痕跡が認められる。	第13層	弥生時代前期	7B-2d
内外面ともミガキ調整で仕上げたとみられるが、器壁の磨滅により調整痕は不明瞭である。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2d
外面上半は全体に薄くスス附着。外面はハケ調整の後、体部下半部に縦方向のミガキを加えて仕上げたとみられる。口縁の屈曲部分に指オサエの痕跡がわずかに残る。内面は指オサエの後、横方向のケズリを大雑把に加えて仕上げたとみられ、底部には粘土を張り足したとみられる痕跡あり。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-1c
頸部の2条沈線間の刺突紋には、布を巻いた棒状の工具が用いられたとみられる。内外面ともていねいなミガキ調整で仕上げられ、全体に光沢を帯びる。		弥生時代前期	7B-1a・1b
外面はケズリ後ミガキ調整で仕上げる。内面は器壁の磨滅のため、調整は不明。		弥生時代前期	7B-1b
内外面とも横方向のミガキ調整で仕上げる。頸部に沈線が一条残存する。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	6B-10b
外面はケズリ後ミガキ調整で仕上げる。内面は器壁の磨滅のため、調整は不明。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-2a
削り出し突帯上に5条の沈線を入れる。外面は丁寧なミガキで、内面は板ナデ後ミガキ調整で仕上げる。外面全体に薄くスス附着。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-1b
全体に火を受けており、口縁端部が赤変する。器壁が磨滅しており調整痕は不明瞭だが、内面にわずかに指オサエの痕跡あり。	第13層、生駒西麓産胎土	弥生時代前期	7B-1d
小型。指で成形した後、丁寧なナデ調整で仕上げる。若干縁が欠ける部分があるが、ほぼ完形。	第13層	弥生時代前期	7B-1d
口縁のほぼ直下に貼り付け突帯あり。口縁端部と突帯に同じ工具を用いて入れたとみられる刻目あり。内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げている。光沢を帯びる。		縄文時代晩期・長原式	6B-10b
内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げている。光沢を帯びる。	生駒西麓産胎土	縄文時代後期	6B-10b
全体に磨滅しており、エッジが丸みを帯びる。全体ににおいつやを帯びる。同じ打面を同じ方向で打ち欠いて、連続的に剥片のうちの一片とみられる。	サヌカイト（表面は磨かれている）		6B-10b
平面形が楕円形の礫で、明確な加工痕は認めないが、整った形をしている。	凝灰岩		7B-3c
全体に炭化している			7B-3c
板状			7B-3c
外面は縦方向のハケ調整で仕上げる。内面はナデ調整、端部はヨコナデで仕上げる。			6B-9d
両面ともナデ調整で仕上げる。			6B-8f
両面ともナデ調整で仕上げる。左側の面に薄くスス附着。			6B-9d
両面ともナデ調整で仕上げる。外面に薄くスス附着。脚先端に黒班あり。			6B-10f
外面はナデ調整で仕上げる。内面は器壁の剥落により調整痕は不明。脚先端に黒班あり。			6B-9c
両面ともナデ調整で仕上げる。			6B-7e・8e
内面はケズリ後ナデ、外面はナデ調整で仕上げる。			6B-10d
外面は縦方向のハケ調整、内面はハケ後、指オサエとナデ調整で仕上げる。掛口端部はヨコナデで仕上げる。		古墳時代～古代	6B-8d
外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整で仕上げるとみられる。掛口端部は強いヨコナデで、わずかに凹面を呈する。掛口内面は横方向に粘土を削り取って、端部の出っ張りを落としている。		古墳時代～古代	6B-9b
外面はハケ調整、内面は強いナデ、掛口端部はヨコナデで仕上げる。掛口内面は横方向に粘土を削り取って、端部の出っ張りを落としている。		古墳時代～古代	6B-9f

特徴	備考	時期	地区
内面は全体にスス付着。外面は器壁の磨滅により調整不明。内面はナデ調整、掛口端部はヨコナデで仕上げる。掛口内面は横方向に粘土を削り取って、端部の出っ張りを落としている。		古墳時代～古代	6B-9d
内面全体にスス付着。器壁の磨滅により、調整方法は不明瞭だが、内面に指オサエとケズリの痕跡がみとめられる。掛口端部はヨコナデで丸く仕上げる。		古墳時代～古代	6B-9c
内面は全体にスス付着。掛口端部はヨコナデが施され、凹面を呈する。掛口内面は横方向に粘土を削り取って、端部の出っ張りを落としている。		古墳時代～古代	6B-9b
内外面とも指オサエ後、ハケ調整で仕上げ、裾端部にはヨコナデを施す。内面と外面とで、異なるハケを使用しているとみられる。		古墳時代～古代	6B-10b
外面は体部がハケ調整庇の部分はヨコナデで仕上げる。内面は庇に近い部分をハケ調整で仕上げるが、掛口に近いとみられる部分にはケズリの痕跡が認められる。内面は全体にススが付着する。		古墳時代～古代	6B-9f
全体に平たく、片面にガラス質の被膜が認められる		写真のみ掲載	7B-2b
全体に平たく、わずかに弯曲する		写真のみ掲載	7B-3b
水滴状の形状を呈する		写真のみ掲載	7B-2b
水滴状の形状を呈する		写真のみ掲載	7B-3b
素材の凹凸がやや残るが、残存面は磨滅してつやを帯びる	安山岩（角閃石・古銅輝石含有）	写真のみ掲載	6B-7c
釉薬はやや厚みを帯びるが、連弁紋は明瞭に認められる		写真のみ掲載	6B-8d
内面は横方向のハケで仕上げる。外面もハケ調整で仕上げるが、内面より粗い調整で、調整痕は不明瞭。外面に焼成前についたとみられる、浅くて不明瞭な沈線が認められる。		古墳時代中期か	6B-8d
方柱状を呈する。表面は風化してざらついており、人為的に整形された痕跡は認められない。角の部分はやや丸みを帯びる。	凝灰岩	参考資料	6B-8e
加工痕は認められない	安山岩（流理が発達）	参考資料	7B-6b

遺構/層位	樹種	遺物登録番号	備考	遺構/層位	樹種
3 0 6 流路	スギ	1400	先端のみ加工(それ以外は自然木)	第1 1 - 2 面	ハンノキ属
3 2 3 流路	ヤマゲワ	1404	先端のみ加工(それ以外は自然木)	第1 1 - 2 面	ハンノキ属
3 2 3 流路	ヤマザクラ	1406	先端のみ加工(それ以外は自然木)	第1 1 - 2 面	サカキ
3 2 9 土坑	スギ	1407	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 8 水路	クスノキ
3 2 9 土坑	サカキ	1413	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 6 水路	スギ
3 2 9 土坑	スギ	1414	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 6 水路	スギ
3 2 9 土坑	ヤブツバキ	1418	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 6 水路	スギ
3 2 9 土坑	ミズキ	1422	先端のみ加工(それ以外は自然木)	第1 1 - 1 面	スギ
3 2 9 土坑	スギ	1485	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	ミズキ
3 4 2 流路	スギ	1486	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	アカガシ亜属
3 4 2 流路	スギ	1491	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	アカガシ亜属
3 4 2 流路	アカガシ亜属	1492	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	アカガシ亜属
第1 0 面検出	スギ	1494	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	アカガシ亜属
第1 0 面検出	スギ	1498	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 7 堰	アカガシ亜属
第1 0 面検出	スギ	1526	先端のみ加工(それ以外は自然木)	3 6 8 水路	ミズキ
第1 0 面検出	スギ	1623	先端のみ加工(それ以外は自然木)	第1 2 b 層	スギ
第1 0 面検出	スギ	1638	流木サンプルNo.1	第1 3 面検出	ヤナギ属
第1 0 面検出	アカガシ亜属	1639	流木サンプルNo.2	第1 3 面検出	ヤナギ属
第1 0 面検出	アカガシ亜属	1640	流木サンプルNo.3	第1 3 面検出	ヤナギ属
3 2 3 流路	スギ	1641	流木サンプルNo.4	第1 3 面検出	ヤナギ属
3 4 2 流路	ヤブツバキ	1642	流木サンプルNo.5	第1 3 面検出	ヤナギ属
3 4 2 流路	スギ	1643	流木サンプルNo.6	第1 3 面検出	ヤナギ属
3 4 2 流路	ヤブツバキ	1644	流木サンプルNo.7	第1 3 面検出	ヤマゲワ
3 4 2 流路	アカガシ亜属	1697		13b層	サルノコシカケ科
3 2 3 流路	ヤマザクラ	1721	樹種サンプルT3	第1 3 b 層	ミズキ
第1 0 b 面	サカキ	1722	樹種サンプルT4	第1 3 b 層	ヤナギ属
第1 0 b 面	アカガシ亜属	1723	樹種サンプルT1	第1 3 b 層	ヤナギ属
第1 0 b 面	サカキ	1724	樹種サンプルT2	第1 3 b 層	ヤナギ属
第1 0 b 面	ヤブツバキ		火付け木 掲載番号157 (W10)		スギ
3 6 4 流路	スギ				
3 6 4 流路	ニレ属				
3 6 4 流路	シャシヤンボ				
第1 1 - 2 面	ムクノキ				
第1 1 - 2 面	クリ				
第1 1 - 2 面	ミズキ				
第1 1 - 1 面	ミズキ				
第1 1 - 2 面	ミズキ				

写真図版

図版 1



1. X=-150,140ライン土層断面 現代耕作土～2層
(Y=-34,600付近、南から)



2. X=-150,140ライン土層断面 第1b層～第3-1層
(Y=-34,600付近、南から)



3. X=-150,120ライン土層断面 第3-2層～第7b層
(Y=-34,600付近、南から)



4. Y=-34,600ライン土層断面 第8層～第11-2層
(X=-150,140付近、西から)



5. X=-150,140ライン土層断面 第10b層～第13層
(Y=-34,600付近、南から)



6. X=-150,140ライン土層断面 346流路部分 (南西から)



7. Y=-34,580ライン土層断面 第13層～第14層
(X=-150,120付近、西から)

図版 2



1. 第2-1面 全景 (西区、南から)



2. 第2-1面 14島畠 (西区、南から)



3. 第2-1面 13島畠 (西区、南から)



4. 第2-1面 12島畠 (西区、南から)



5. 第2-1面 11島畠 (西区、南から)

図版 3



1. 第2-1面 全景 (東区、南から)



2. 第2-3b面 全景 (西区、南から)

図版 4



1. 第3-1面 全景 (西区、南から)



2. 第3-1面 66流路 (西区、南から)

図版 5



1. 第3-2面 全景 (西区、南から)

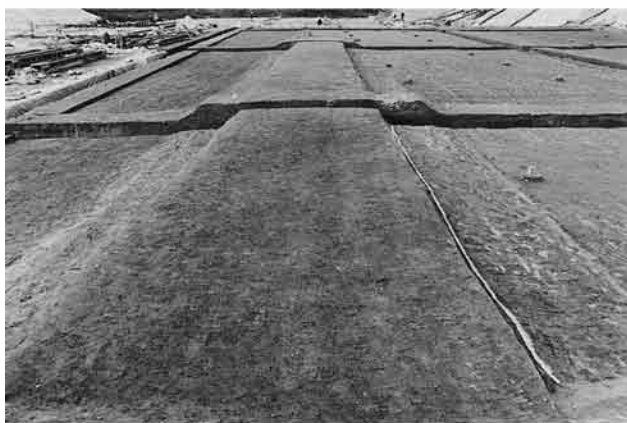


2. 第3-2面 全景 (東区、南から)

図版 6



1. 第3-3面 全景 (東区、南から)



2. 第3-3面 101島島 (東区、南から)



3. 第3-3面 105島島 (西区、南から)



4. 第3-3面 106島島 (西区、南から)



5. 第4-1面 銅銭検出状況 (西区、北西から)

図版 7



1. 第4-1面 全景 (西区、南から)



2. 第4-1面 全景 (東区、南から)

図版 8



1. 第4-2面 全景 (西区、南から)



2. 第4-2面 113島島 (西区、南から)



3. 第4-2面 112島島 (西区、南から)



4. 第4-2面 117島島全景 (東区、南から)



5. 第4-2面 117島島 (東区、南から)

図版 9



1. 第5面 全景 (西区、南から)



2. 第5面 全景 (東区、南から)



3. 第5面 鉄器出土状況 (東区、西から)



4. 第5面 122島 (西区、南から)



5. 第5面 521島・123畦畔 (西区、南から)

図版 10



1. 第6面 全景 (東区、南から)



2. 第7-1面 全景 (西区、南から)



1. 第7-3面 全景 (西区、南から)



2. 第7-3面 全景 (東区、北東から)



3. 第7-3面 遺構半掘状況 (東区、東から)



4. 第7-3面 遺構半掘状況 (西区、北西から)



5. 第7-3面 遺構検出状況 (西区、北西から)

図版 12

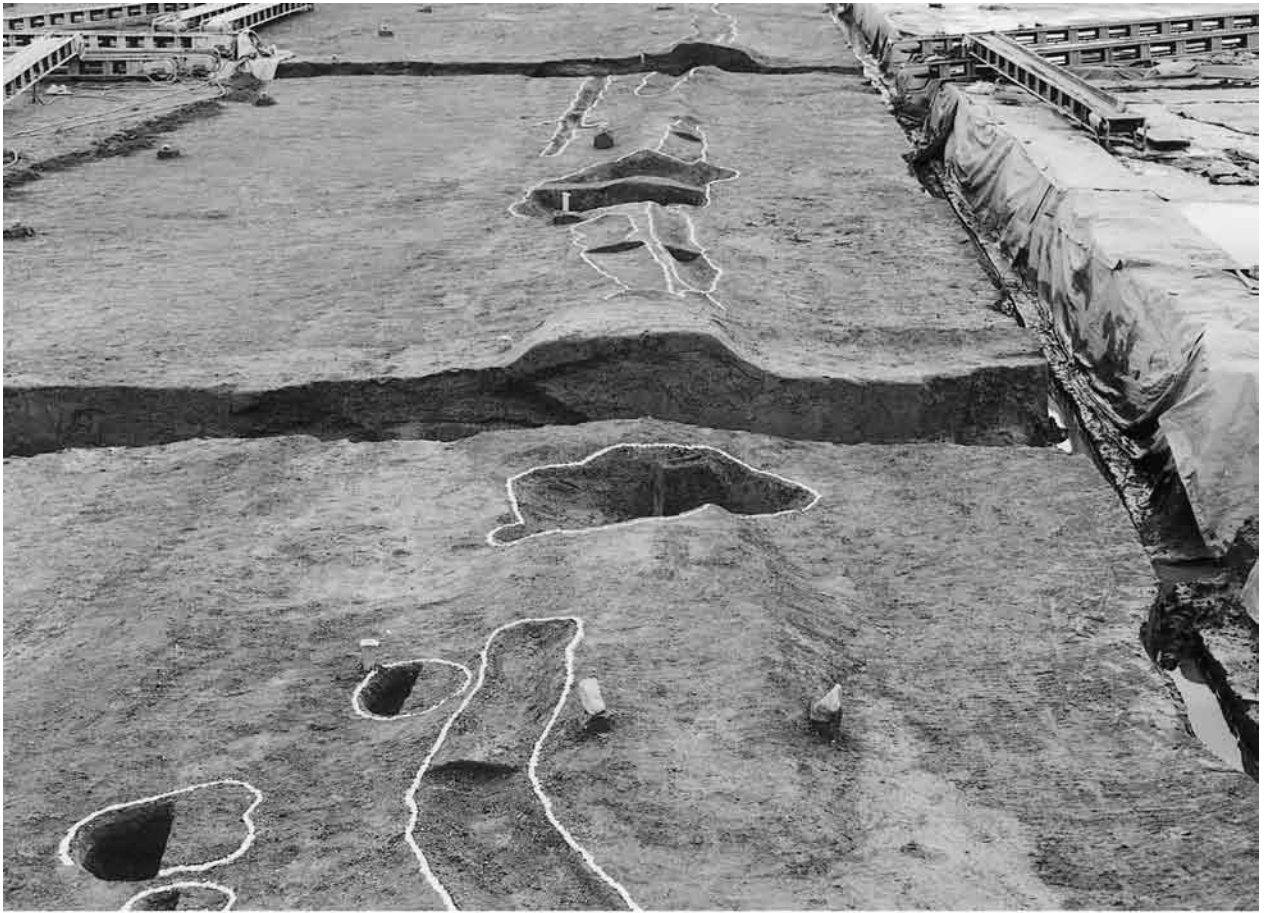


1. 第8面 全景（東区、南から）



2. 第8面 全景（西区、南から）

図版 13



1. 第8b面 全景（東区、南から）



2. 第9-1面 全景（東区、南から）

図版 14



1. 第9-1面 銅製帯金具出土状況
(東区、北から)



2. 第9-3面 全景(東区、南から)



3. 第9-3面 323流路遺物出土状況
(東区、北から)



4. 第9-3面 323流路遺物出土状況
(東区、東から)



5. 第9-3層(323流路内)獣骨出土状況
(東区、東から)



6. 第9-3層(323流路内)獣骨出土状況
(東区、北から)



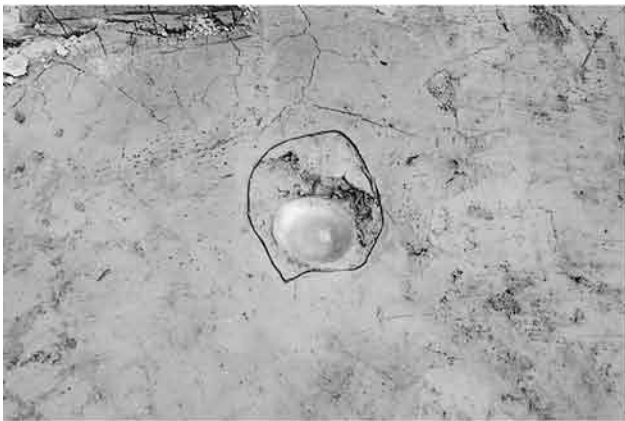
7. 第9-4面 全景(東区、南から)



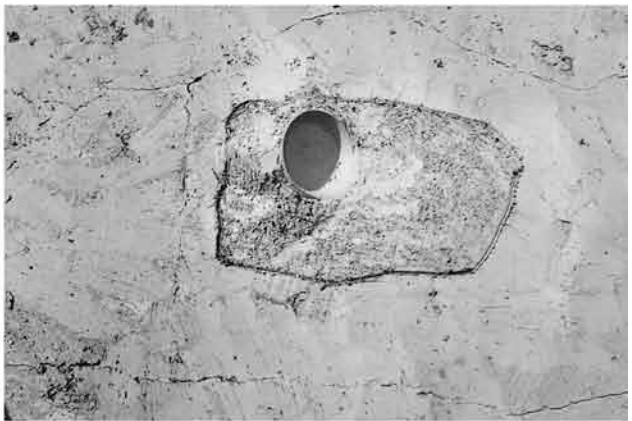
8. 第9-4層 須恵器出土状況(西区、北西から)



1. 第10b面 全景（東区、南から）



2. 第10面 336ピット検出状況（西区、南から）



3. 第10面 337ピット検出状況（西区、北東から）



4. 第10b面 340土坑（西区、北東から）



5. 第10b面 342流路（西区、南から）



1. 第11-2面 全景 (西区、南から)



2. 第11-2面 全景 (東区、南から)

図版 17



1. 第11-2面 365水路 (東区、南から)



2. 第11-2面 364流路・366水路 (東区、南東から)



3. 第11-2面 全景 (東区、東から)



4. 第11-2面 365水路への水口 (東区、南から)



5. 第11-2面 367堰 (東区、南から)



6. 第11-2面 367堰 (東区、北から)



7. 第11-2面 368水路・364水路 (東区、西から)



8. 第11-2面 369水路遺物出土状況 (西区、南東から)

図版 18



1. 第11-3面 全景 (東区、南から)



2. 第11-3面 368水路 (東区、北から)



1. 第12b面 全景 (西区、南から)



2. 第12b面 454溝 (西区、西から)



3. 第12b面 446土坑 (西区、北から)



4. 第12b面 447落ち込み (西区、東から)



5. 第12b面 463落ち込み (東区、南から)



1. 第13面 全景（西区、南から）



2. 第13面 全景（西区、西から）



3. 第13面 全景（東区、東から）



4. 第13面 467大畦畔内遺物出土状況
（東区、西から）



5. 第13面 466大畦畔内遺物出土状況
（西区、西から）



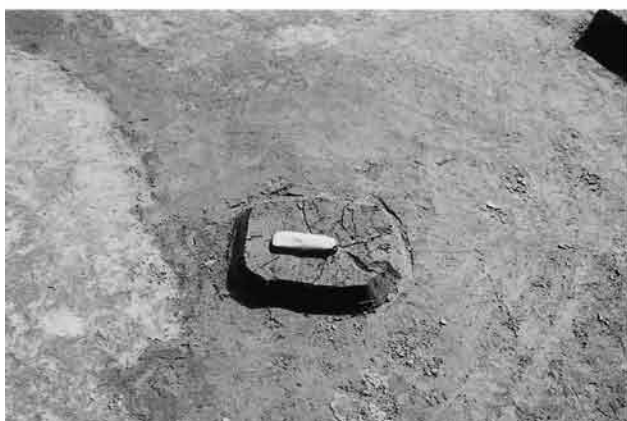
1. 第13b面 全景 (西区、南から)



2. 第13b面 全景 (西区、東から)



3. 第13a層 遺物出土状況 (東区、北西から)



4. 第13a層 石斧出土状況 (東区、南から)



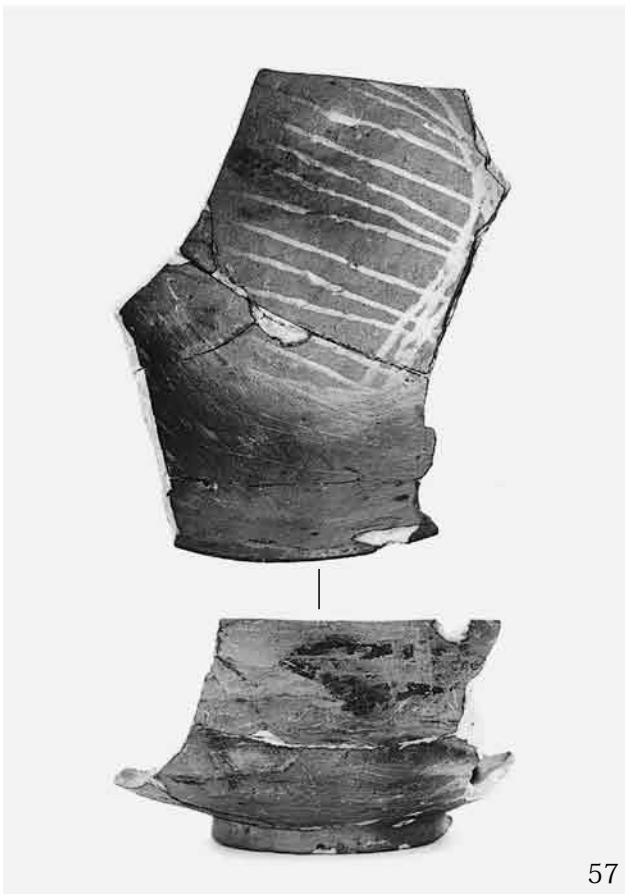
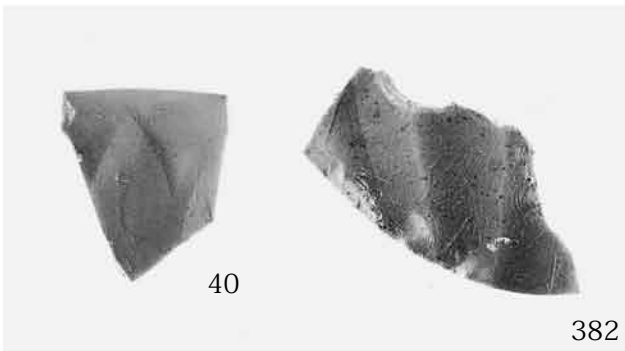
5. 第13a層 石斧柄出土状況 (東区、西から)



1. 第14-1面 全景（東区、南より）



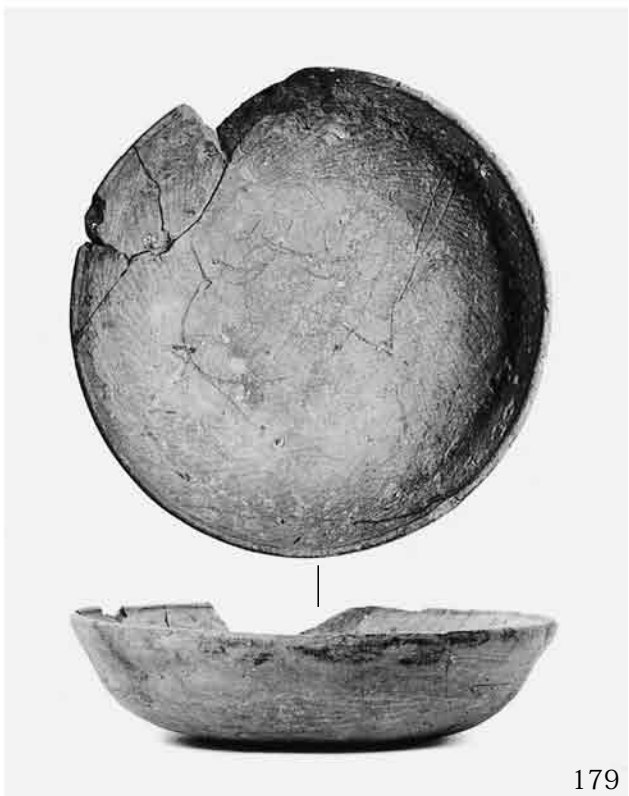
2. 第14-2面 全景（東区、南より）

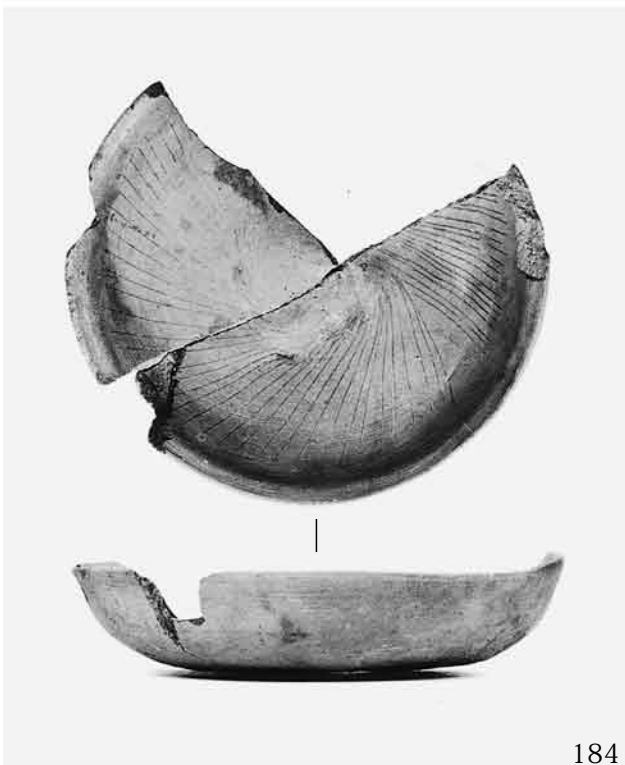




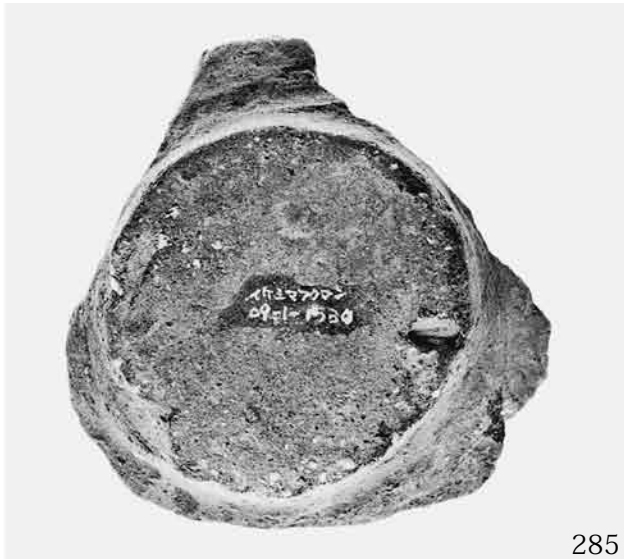
第7-3b層~第8層・306流路出土遺物



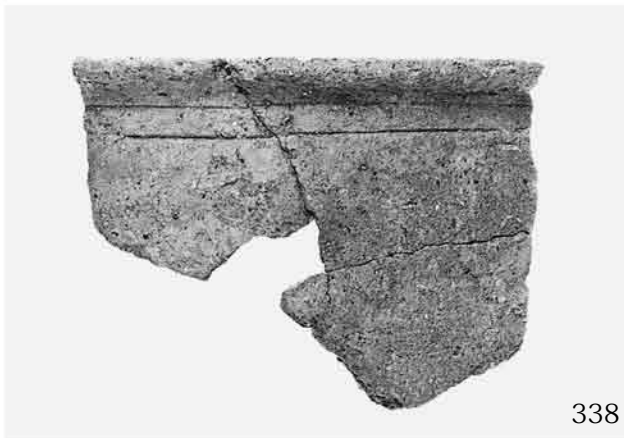
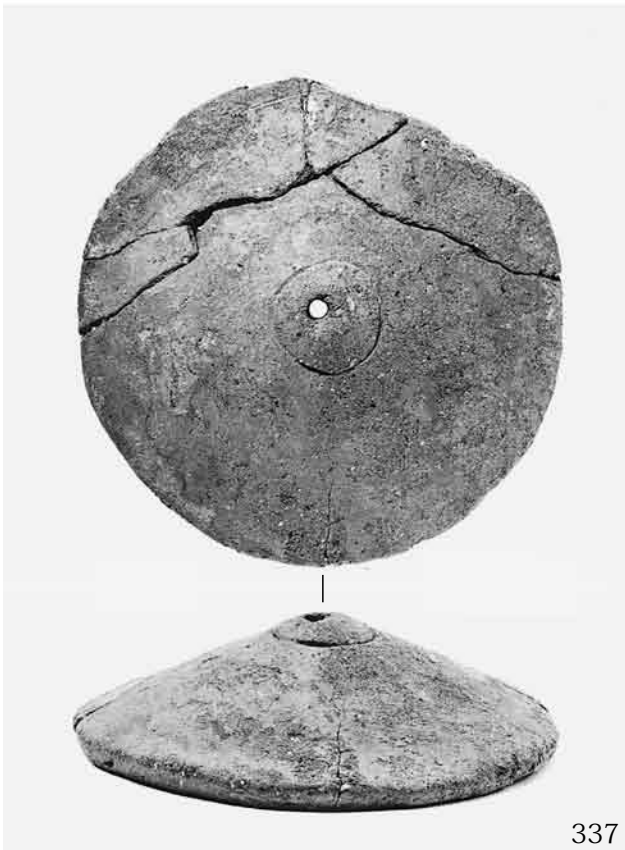
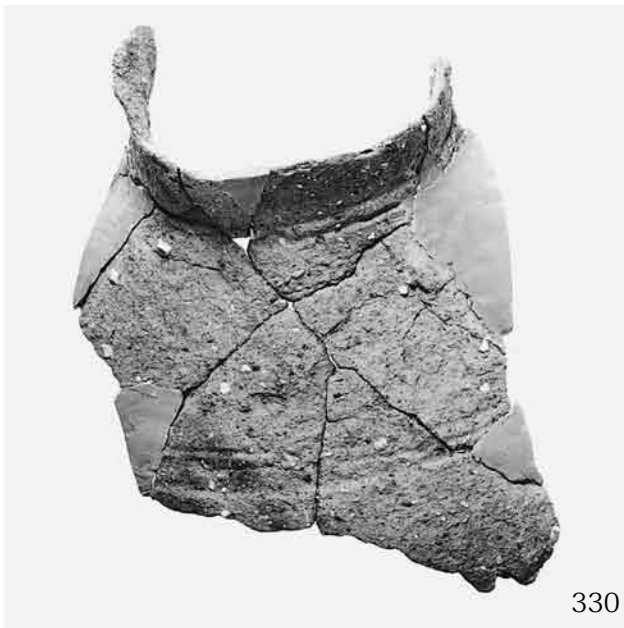




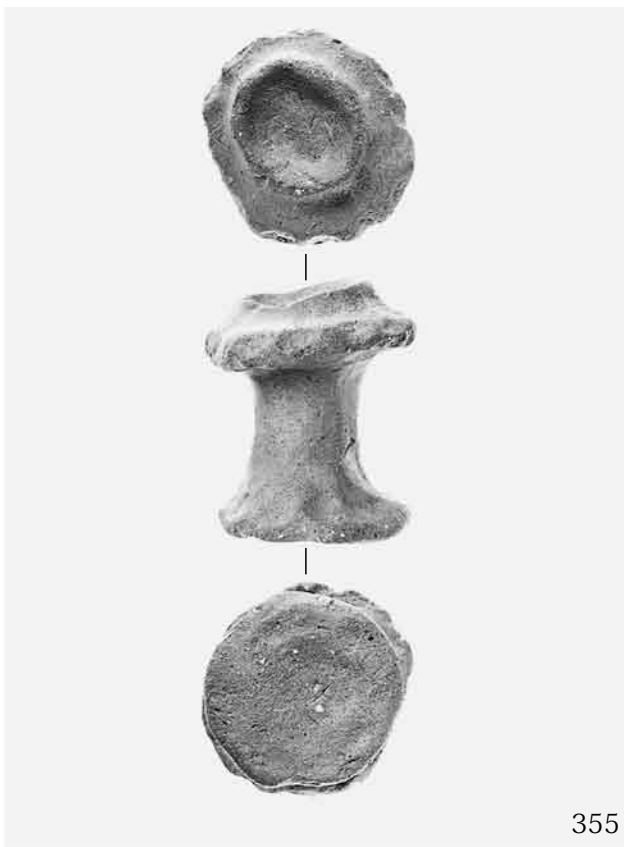


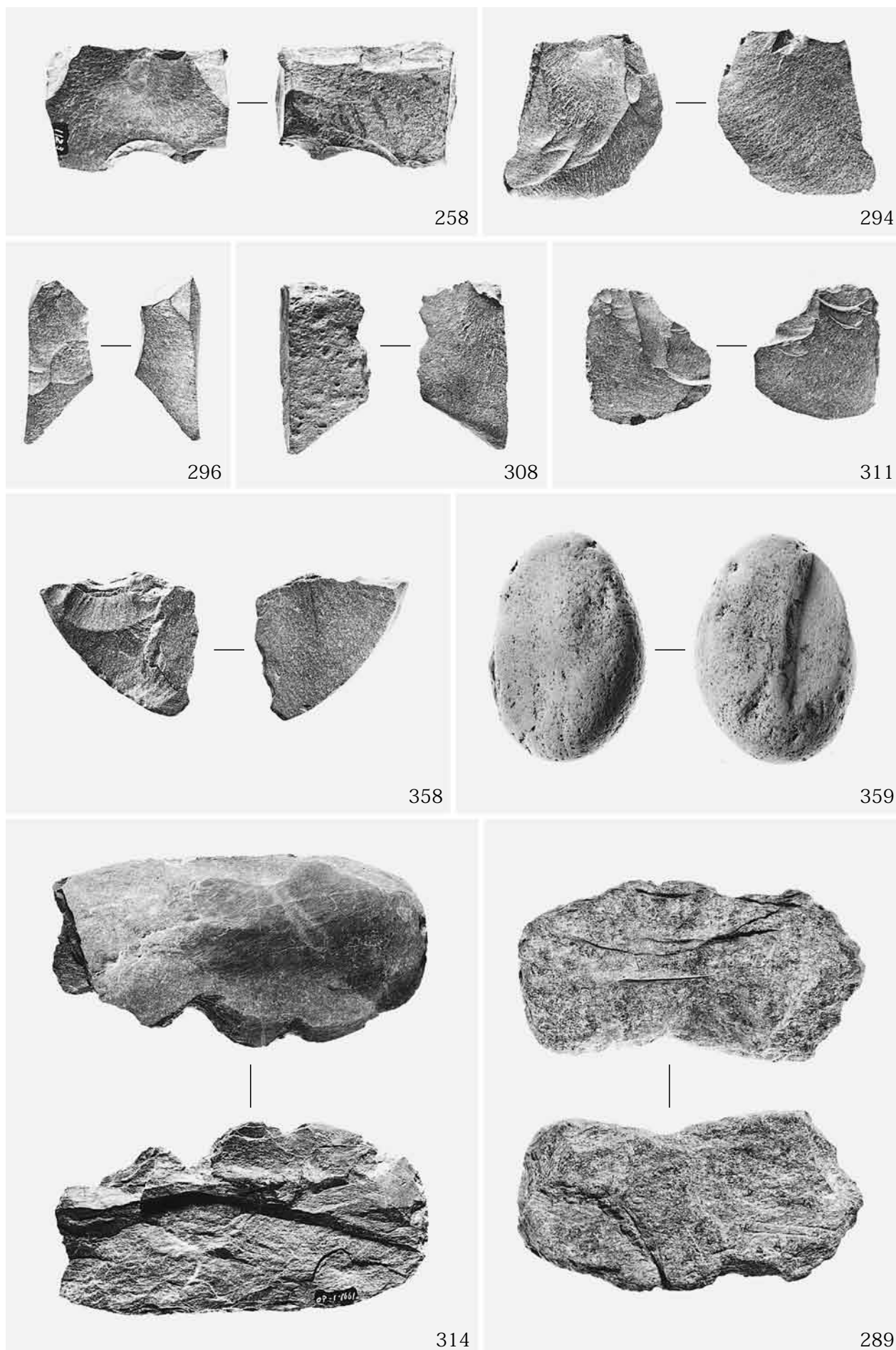


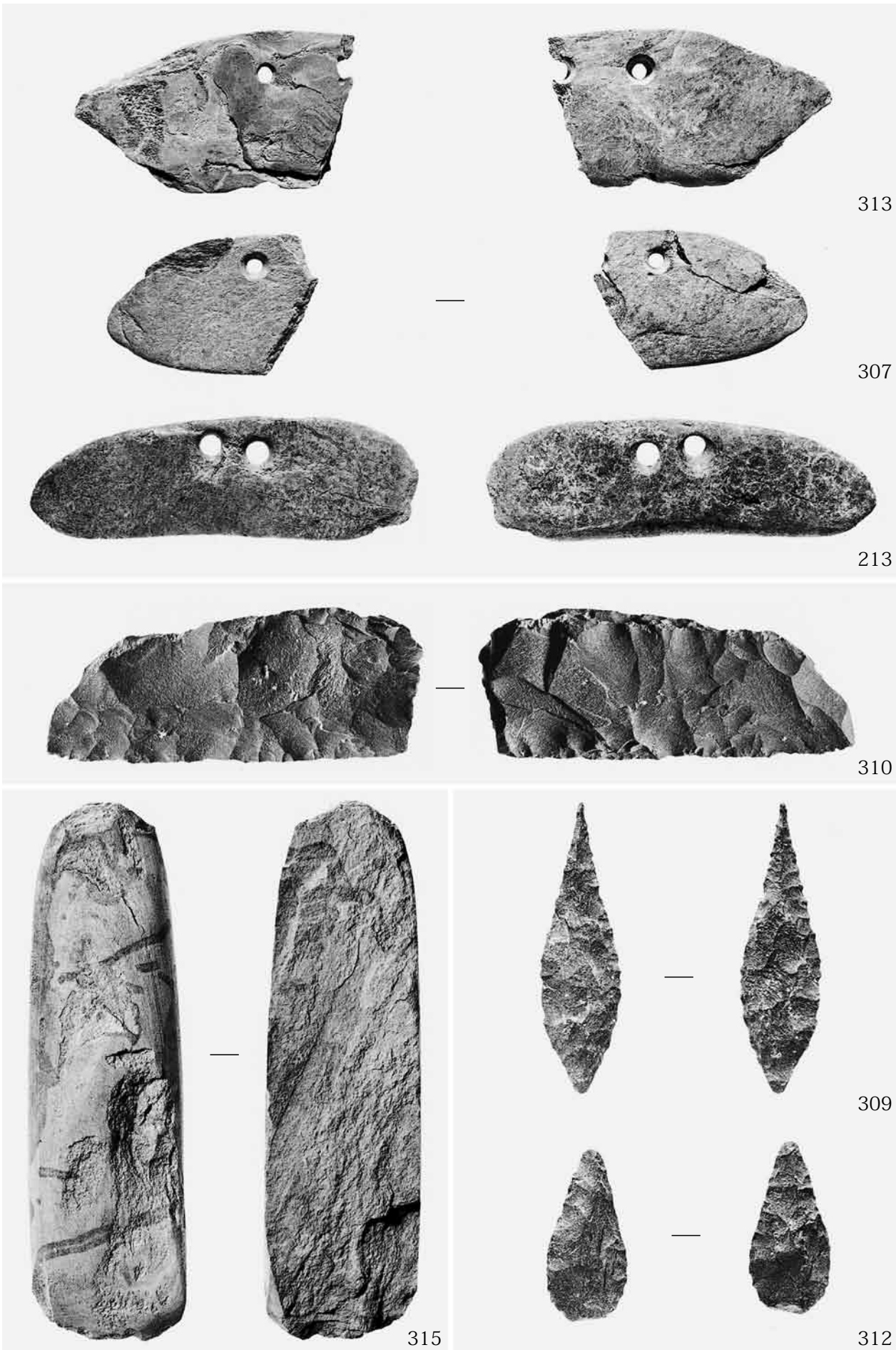


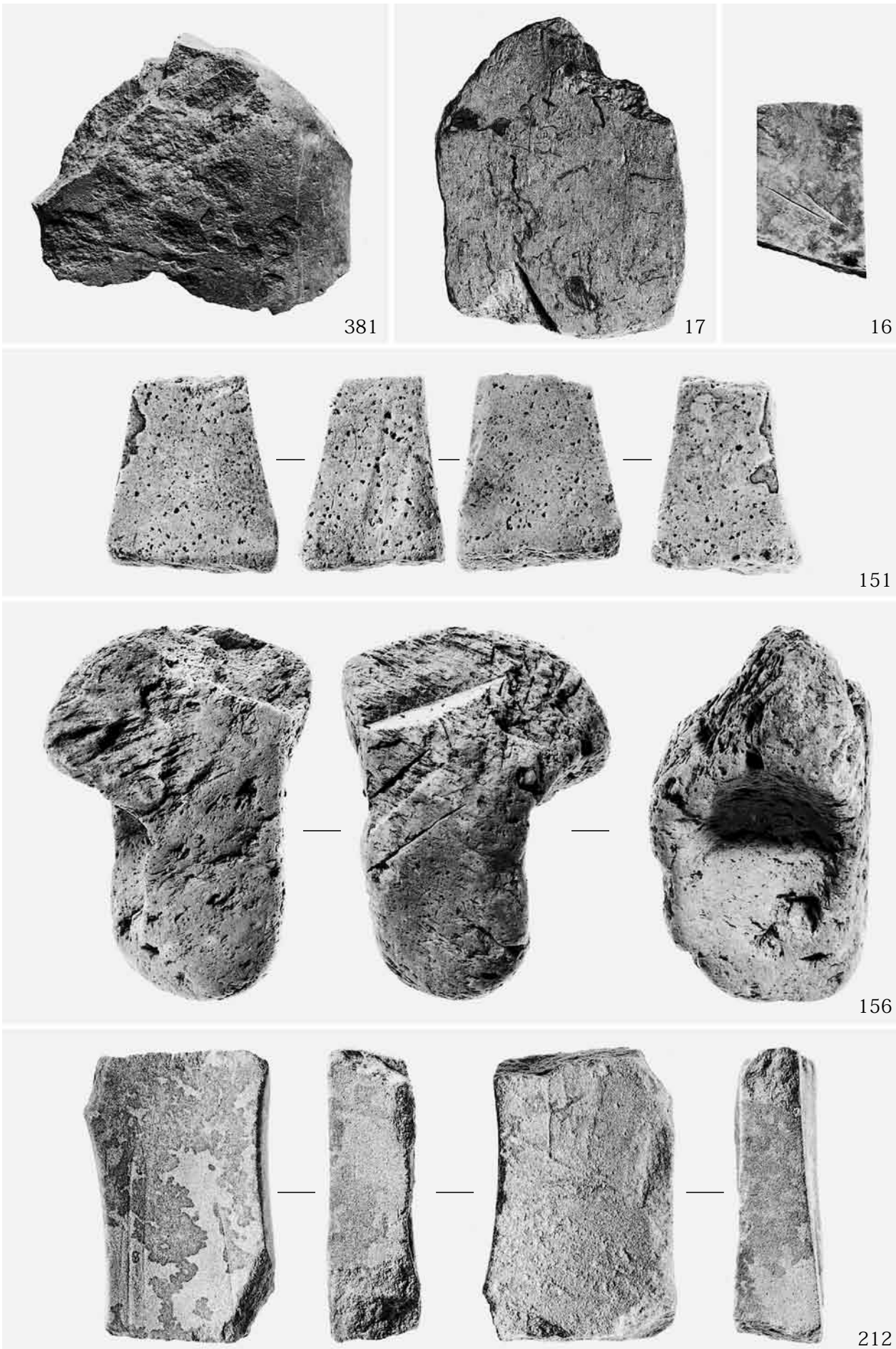


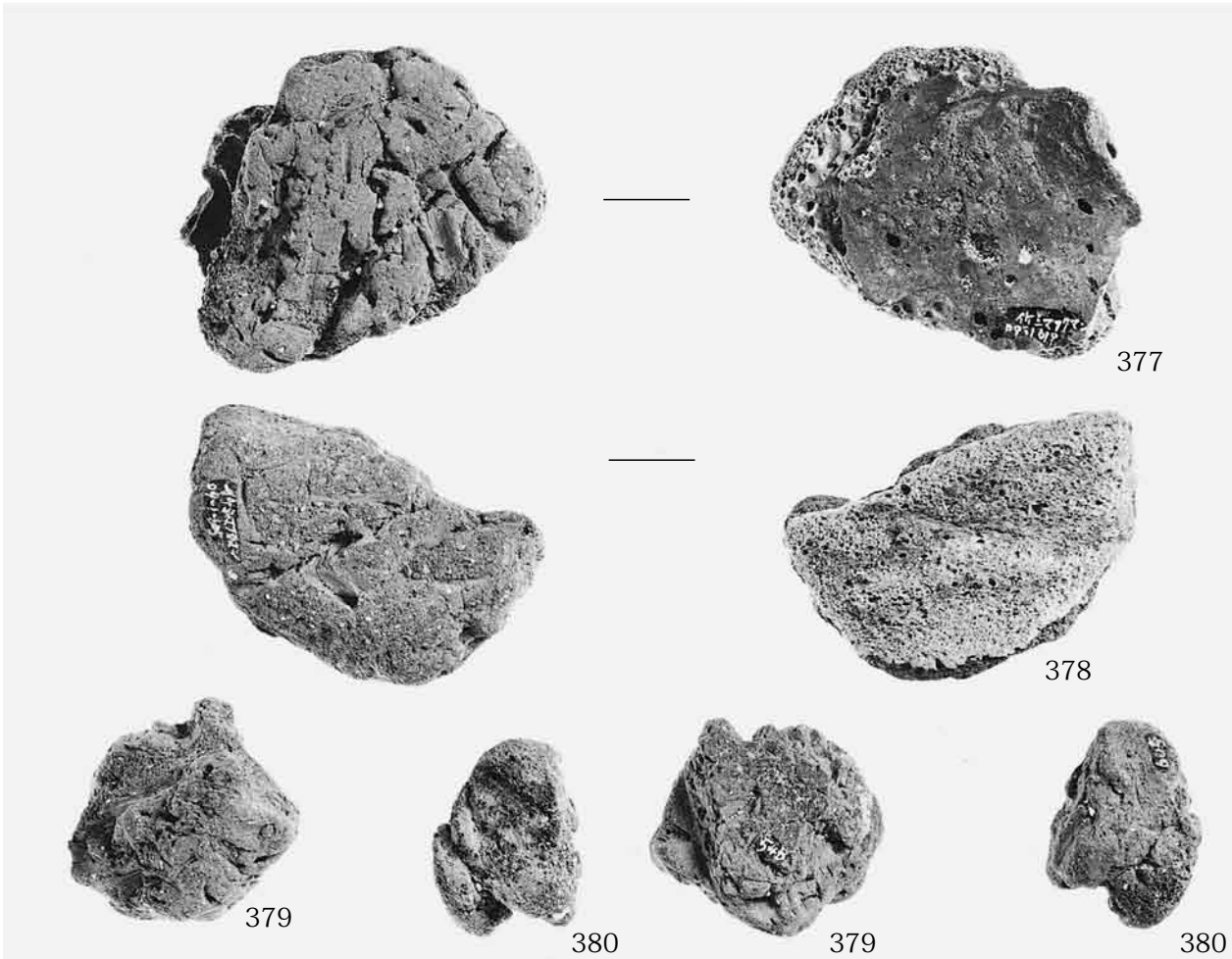
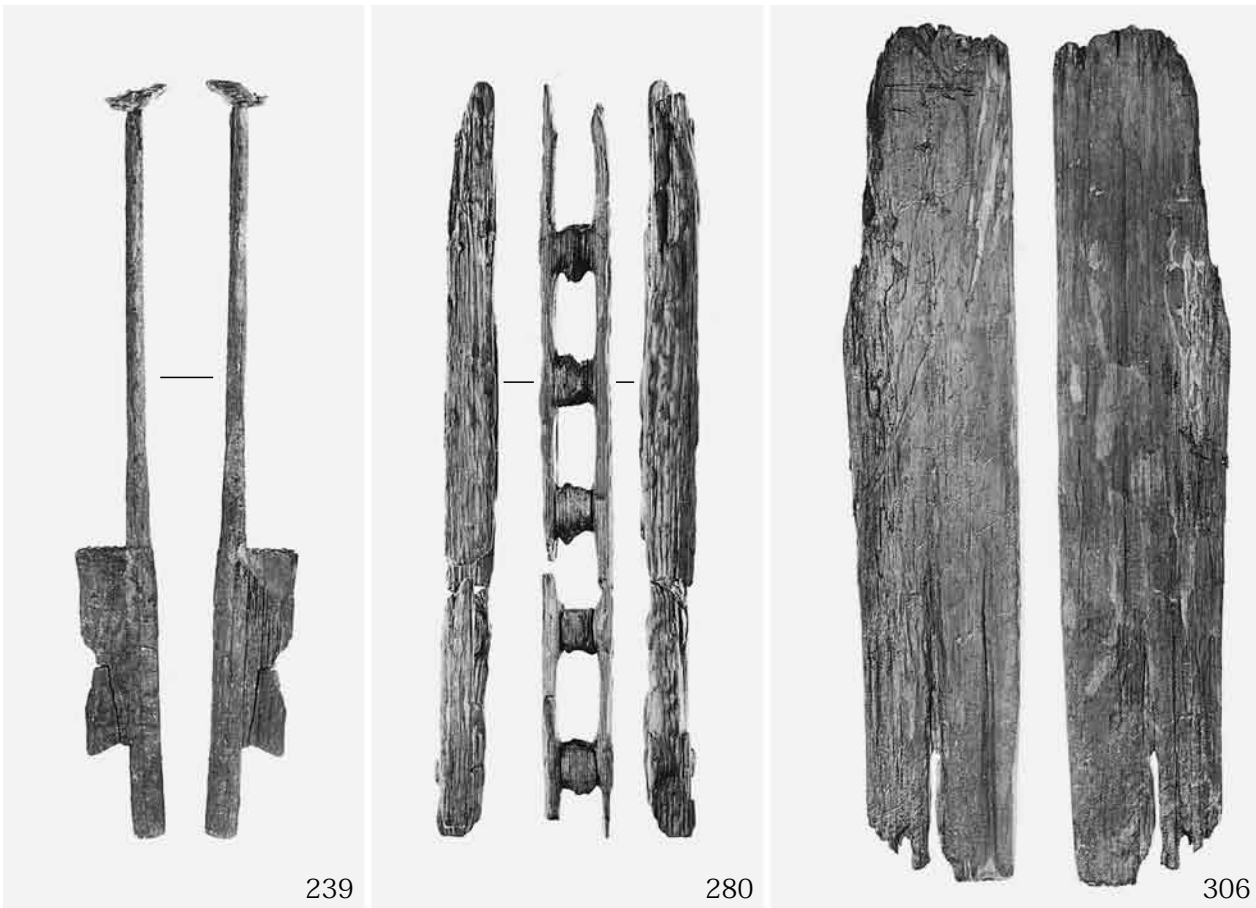
第13層出土遺物（367大畦畔内出土遺物含む）

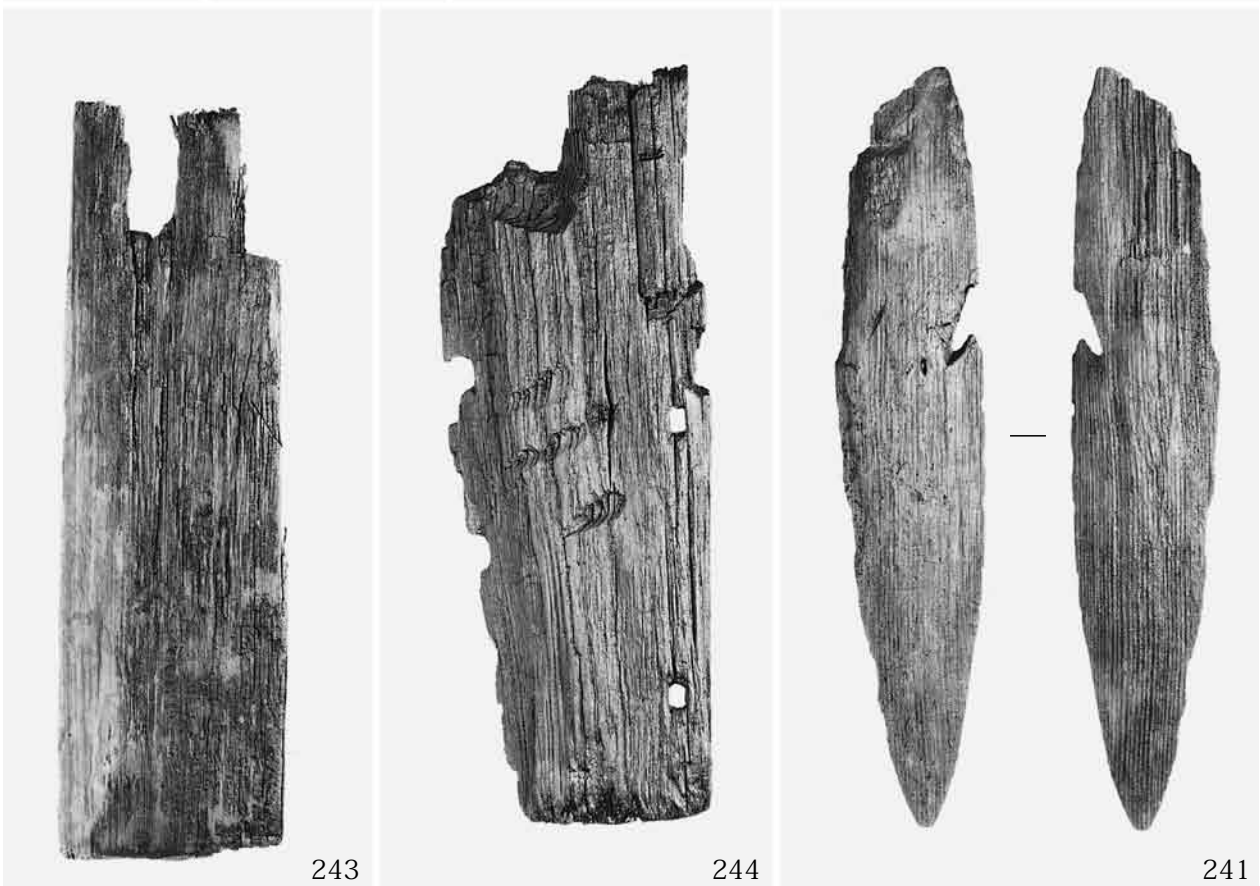
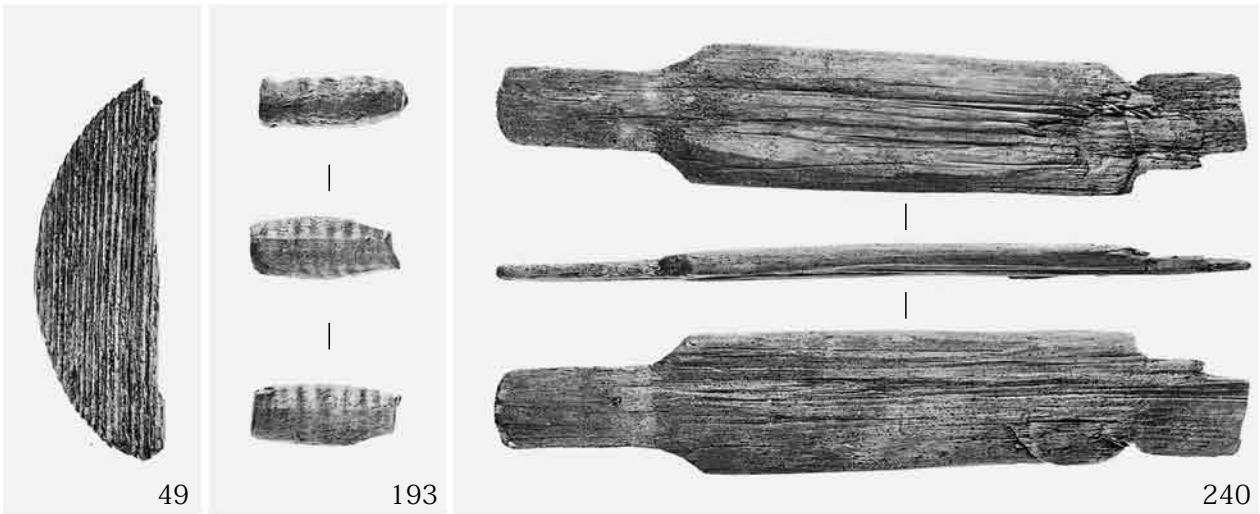
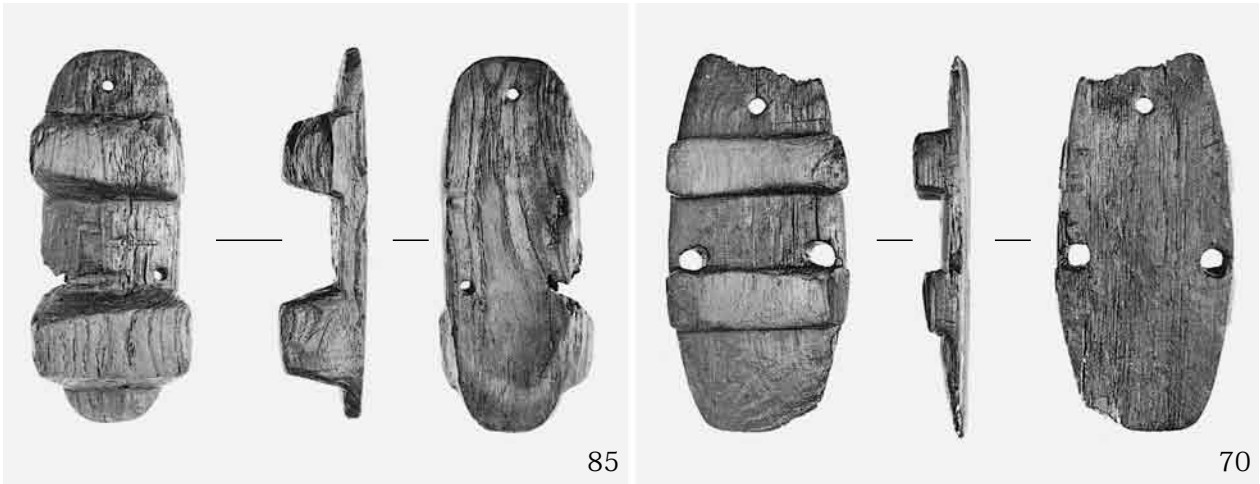












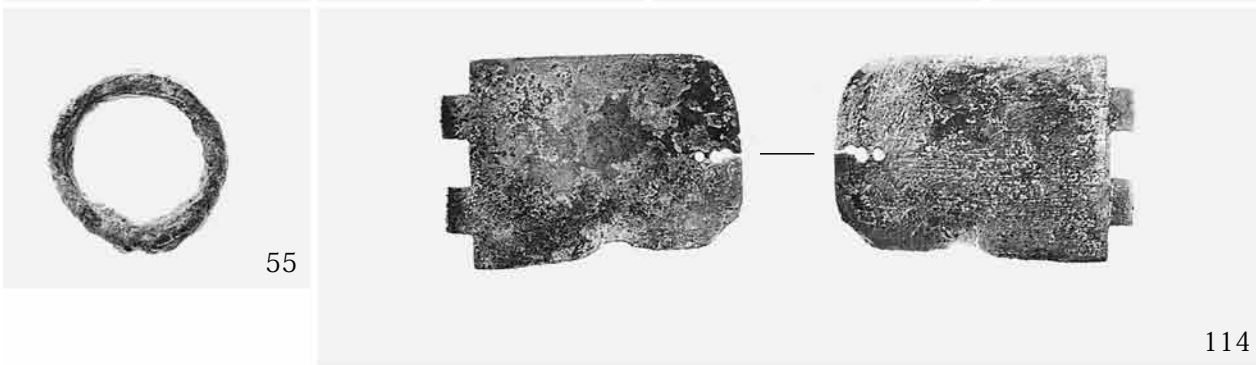


30

41

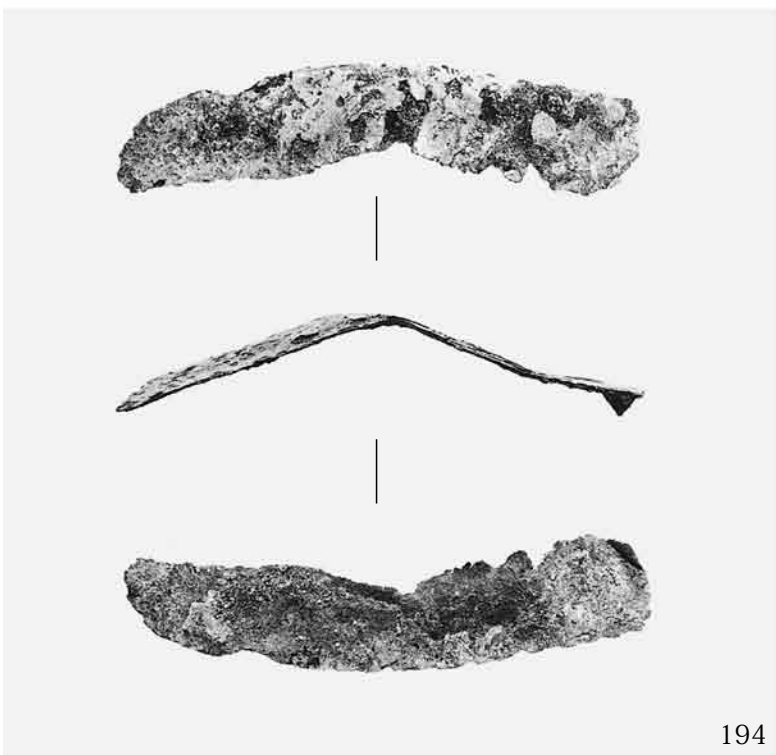
47

48



55

114



194



242



265

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき 14							
書名	池島・福万寺遺跡 14 (福万寺Ⅱ期地区09-1調査区)							
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第229集							
編著者名	若林 幸子(編) 山崎 健							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791							
発行年月日	2012年9月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけしま ふくまんじ 池島・福万寺 遺跡	おおさか ふ や お し 大阪府八尾市 ふくまん じちよう 福万寺町 ちない 地内	27212	72	34° 38' 48"	135° 37' 21"	2009年6月1日 ～ 2011年6月30日	3,826㎡	一級河川恩智川治水緑地建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
池島・福万寺 遺跡	田畠	古代～近世	水田・島畠・井戸・土坑・溝・ピット		陶磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・銭貨・鉄製品・木製品・漆器・獣骨		条里型水田の変遷 福万寺地区最古段階の条里型地割関連遺構	
	集落	古墳	流路		土師器・須恵器			
	水田	弥生	水田・水口・溝・ピット		弥生土器・土製品・石製品・石器・木製品		弥生時代の水田の変遷	
		縄文			突帯文土器			
要約	<p>弥生時代前期末～中期初頭、および弥生時代後期の水田面を検出した。古墳時代の遺構は希薄であったが、土器や木器を多く含む流路を検出した。古代前半では北流する自然流路を条里型地割として利用するにあたり、それを直線化した経緯をとらえることができた。中世以降は島畠を含めた水田経営の変遷をとらえた。出土遺物は細片化したものが多かったが、その中で比較的まとまって弥生時代前期ならびに古墳時代・奈良時代の土器が出土した。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 229 集

池島・福万寺遺跡 14

(福万寺Ⅱ期地区 09 - 1 調査区)
一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

発行年月日 / 2012 年 9 月 21 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 / 株式会社 近畿印刷センター

大阪府柏原市本郷 5 丁目 6 番 25 号